プラトン全集12

ティマイオス

種山恭子訳

クリティアス

田之頭安彦訳

岩波書店

目　次

凡例

一、本全集は底本として、バーネット版プラトン全集（J. Burnet, *Platonis Opera*, 5 vols., Oxford Classical Texts）を用い、これと異なる読みをした箇所は注によって示す。

二、訳文上欄の数字とＢＣＤＥは、ステファヌス版全集（H. Stephanus, *Platonis opera quae extant omnia*, 1578）のページ数と各ページ内のＡＢＣＤＥの段落づけとの対応――おおよその――を示す（ただしＡは省略した）。引用は、このページ数と段落により示される（例えば『パイドロス』253Ｃ）。

三、各対話篇における章分けは、一八世紀以降フィッシャー（J. F. Fischer）の校本に由来すると見られる一般に慣用のものに従う。ただし対話篇により章別の一定していないものもあり、この場合は適宜区別を設けた。

四、対話篇名につけられている副題（ないものもある）は、ローマ時代のプラトン全集（トラシュロス）以来の、あるいはさらに古い伝承によるものである。所伝によって異同のある場合は、適切と判断されるものを選んでつけた。

五、ギリシア語の片かな表記は、ΦΧΘとΠΚΤとを同じように「プ」「ク」「ト」とし、母音の長短は普通名詞においてのみ区別し（例、ソピアー）、固有名詞においては区別しない（例、ソークラテースでなく、ソクラテス）。

六、〔　〕の括弧は訳者による文意の補足を示す。

七、略記号　DK＝H. Diels u. W. Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*.　Diog. L.＝Diogenes Laertios.　古注＝*Scholia Platonica* (ed. W. C. Greene).

八、本全集における対話篇の収録順と各巻への配分は、右のトラシュロス編全集における九つの四部作集（tetralogia）の順序と括り方に従っている。

ティマイオス

――自然について――

種山恭子訳

『ティマイオス』内容目次（和数字は章番号を、洋数字は本全集のページ数を示す）

登場人物

ソクラテス
ティマイオス
ヘルモクラテス
クリティアス

一

17

ソクラテス　一人、二人、三人……おや、四人目の人は、ティマイオス、どこですか。あなた方は、昨日はわたしのお客になったから、今度は主人役にまわって、わたしに御馳走してやろうということでしたが。

ティマイオス　病気になったのですよ、ソクラテス。そうでもなければ、ことさらこの会に欠席するようなことはなかったでしょうからね。

ソクラテス　それなら、その欠席している人の分も、あなたと、いまここに見えているこの人たちとで補って下さらなくてはならないわけではありませんか。

B

ティマイオス　その通りです。それに、できるだけ、何一つ遺漏のないようにしたいと思っています。何しろ昨日は、あなたから、われわれが余所から来た者だというので、それらしいもてなしをしてもらったのですから、われわれのうち残っている者だけでも、熱意をこめてあなたに御馳走のお返しをするのでなくては、それこそけしからんことにもなるでしょうからね。

ソクラテス　それでは、わたしがあなた方に、どんなことについて話してもらいたいとお願いしたか、その全部をおぼえておいででしょうか。

ティマイオス　おぼえている分もありますよ。しかし、おぼえていない分は、当のあなたがここにおられるのだから、思い出させてもらいましょう。いや、それより、面倒でなければ、あの話をはじめから簡単に、もう一

度くり返してみてくれませんか。そうすればわれわれの側としても、記憶がもっと確かになるでしょうから。

C **ソクラテス** そのようにしましょう。昨日のわたしの話の要点は、国家について、それがどんな体制のもので、どんな成員から構成されるなら、最上のものになるだろうかという、わたしの所見をお話したものだったと思いますが。(1)

ティマイオス そうでしたね。しかも、ソクラテス、あなたの話された国家は、われわれ一同、大いに気に入ったのです。

ソクラテス それでは、その国家の中で、われわれはまず第一に、農夫だとか、その他の技術に携わる者の種族を、国家のために戦うことを任務とする者の種族から、別個のものとして区別したのではなかったでしょうか。(2)

ティマイオス ええ、そうでした。

ソクラテス そして、各個に対して、その自然の性質に従って、各々独自に相応したただ一つだけの職業を与

D えて、一人一業(技術)というようにしたのですが、そのさい、全員のために戦うことを任務とする者については、われわれはこう言いました。――かれらはとうぜん、ただひとえに、国家の守備者たる者でなくてはならず、その場合、国に害をなそうとする何者かが、国外から来ようと、国内から出ようと、問うところではない。そしてかれ

---

1 この「昨日の話」は、以下19Aまでの要約から見ると、『国家』の少なくともIIからVのあたりの内容と合致する。しかし『国家』と本篇の関係については、補注N(二一三ページ)を参照。

2 以下19B注2までは、該当する『国家』の箇所を挙げておく。農業・建築・機織その他に従事する者相互の分業については、『国家』II. 369D sqq. 戦士階級を別に区分することについては同 373E sqq. 特に 374B sqq.

18

らは、自分たちによって統治されていて、本性上〔自分たちの〕友であるような人々に対しては、裁くにしても、おだやかにしなければならないが、戦場で相まみえる敵に対しては、容赦ない態度で臨まなければならない、とね。(1)

ティマイオス　まったくその通りでした。

ソクラテス　何しろ、国を守る者の魂は、気概に富んでいるとともに、またとりわけ知を愛する（哲学的）という性質を備えていなければならないのだと、われわれは言っていたと思いますからね。それは、かれらが敵・味方のどちらにも、間違いのない仕方で、おだやかになったり、容赦しない者になったりすることができるようにということだったのですから。(2)

ティマイオス　ええ、そうでした。

ソクラテス　では、教育（養育）のほうはどうですか。かれらは、体育や音楽や、それから何でもかれらにふさわしい、あらゆる学課で、教育されたのではなかったでしょうか。(3)

ティマイオス　まったくその通りでした。

B

ソクラテス　ところで、そのようにして育てられた者については、こう言われたと思うのです。つまり、かれらは、金であれ銀であれ、その他どんな財貨であれ、これを自分たちの私有のものとみなすことは許されない。ただかれらは、守備をする助力者として、その守備の報酬を、自分たちによって安全を守ってもらっている人々から受け取るのであるが、それはただ、節度ある者にとってちょうどほどよい分量に限られるべきである。そしてこれを共同で消費し、お互いに生活を共にして生きて行かなくてはならない。しかもそのさい、他の仕事にはわずらわされないで、終始、徳のことにのみ配慮すべきである、と。(4)

ティマイオス　そのこともまた、そのように言われましたね。

C　**ソクラテス**　それからまた女についてもわれわれは言及して、次のように言ったのです。つまり、かれらの自然の性質が、男の場合とほぼ同様のものになるように、これをうまく調合しなければならない。そして戦争の面でも、その他の生活の面でも、すべての仕事を男と共通に、すべての女に課するようにしなければならないというのです(5)。

ティマイオス　そのように、このこともまた言われていましたね。

ソクラテス　では、子供をつくることについてはどうですか。いや、どうですかと言うまでもなく、このことなら、話の内容が並のものではありませんでしたから、忘れるどころではないというところでしょうか。われわれは結婚のことも子供のことも、そのすべてを、全員に共通した公共のものと定めたのです。そしてそのためには、かれらに、次のように工夫してもらうのだとしました。すなわち、かれらのうち何人(なんぴと)も、そこに生まれて来

D　た者をけっして、個人の資格で自分だけのものとして認めることなく、全員が全員をそのまま親族とみなすように——つまり、その出生が適当な一定の年齢の範囲内の者なら誰でも、これを兄弟姉妹とみなし、自分より先に生まれた者、より上の年齢層の者なら、これを父母であり祖父母であるとし、また下の年齢層の者なら、これを子や孫とみなすように——そのようにかれらに工夫してもらうのだとしたのです(6)。

1　『国家』II. 375C.
2　『国家』II. 375E.
3　『国家』II. 376E sqq.
4　『国家』III. 416D sqq.
5　『国家』V. 454D sqq.
6　『国家』V. 457C sqq.

ティマイオス　ええ、その通りでした。しかもそれは、あなたのおっしゃるように、忘れられないものです。

ソクラテス　またしかし、かれらはできるだけ、生まれて来る時に最初から、その素質において最上のものであってもらわなくてはならないのですから――ほら、次のようなことをわれわれはおぼえてはいないでしょうか、

E

――そのためには、婚姻を結ばせるに当たって、衝に当たる男女の役人たちに、何か籤のようなものを使ってこっそりと工夫してもらわなくてはならないと、われわれは主張していました。つまり、素質の善い男と悪い男とが、別途にそれぞれ、自分と同類の女を引き当ててその者と結ばれるようにし、しかも籤を引く当人たちは、どんな配偶者が当たるかは運によるのだと考えるので、この作為のためにかれらが敵意を抱くようなことには少しもならない、と、そのように役人たちは工夫してくれなくてはならなかったのです(1)。

ティマイオス　ええ、われわれはそのようにおぼえています。

19

ソクラテス　それから、われわれはこうも主張していたでしょう。その善いほうの人の子供は育てなければならないが、悪いほうの人の子供は国内の別のところへと、ひそかに分散させるべきである。しかし、その子供たちの成長して行くところを観察していて、値打のある者はいつでもこれを連れ戻し、他方、手もとに置いた者でも値打のない者は、こちらへ帰って来る者のいた場所へと、かれらの代りに移しかえなくてはならない、ということでしたが(2)。

ティマイオス　その通りでした。

ソクラテス　それでは、もうこれで、要約して復習する分には、昨日の通りにすっかりお話ししてしまったことになるでしょうか。それとも、まだ何か昨日言ったことで落ちているところがあるみたいに感じられますか、

ティマイオス。

B ティマイオス　いやけっして、そんな風には感じられません。昨日話されたことは、あなたがちょうどいま言った通りですよ、ソクラテス。

二

ソクラテス　それなら、次にはさっそく、われわれがいま話した国家について、わたしがどんな感情をそれに対して抱くようになっているかということを、聞いてもらいましょう。ところで、わたしのこの感情というのは、何か次のような場合に似ているのです。つまり、立派な動物が、絵に描かれているとか、あるいは、ほんとうに生きてはいるがじっとしているとしてもよいのですが、ともかく、どこかでそれを見た人が、その動物の動くと

C ころを見たい、何かその体格からとうぜん期待されるものを発揮して競技を競うところを見たいと切望するようになる、といった場合がそれなのでして、わたしもまた、いまわれわれが話した国家に対して、それと同じ感情を抱いているわけです。というのは、およそ国家によって競われる競技というものを、われわれのあの国家が、他の諸国を相手に競うところを、誰か詳しく話してくれる人があって、その国家が、戦争を始めるにもふさわしい仕方でそれを始めるところだとか、また戦争遂行の途上でも、その教養と育ちにふさわしい成果を、実際の戦

1 『国家』V. 460 A sqq.

2 『国家』V. 460C では、劣った人の子供は、「秘密の知られざるところに隠されるであろう」とある（なお同 461B～C参照）。しかしわれわれのいまの箇所と同様の言葉はむしろ、『国家』III. 415B～Cに見られる。

(19)

闘行為においても、各々の国家を相手とした言論の上での談判においても、見せてくれるところだとかを語ってくれるなら、わたしはそれを喜んで聞きたいと思っているからです。

D さてこの点について、クリティアスにヘルモクラテスよ、あの国家とその成員を不足なくほめたたえるだけの力が、わたしにはとてもないだろうことを、わたしは自分でよく知っているのです。そして、わたし自身に関する限り、こんなことは少しも驚くには当たりませんが、しかしこれと同じことを、わたしは、昔の作家（あるいは詩人）についても現存の作家についても、考えるようになっているわけです。[1] いや何も、作家の種族というものを軽蔑してこう言っているのではないのです。ただしかし、一般に模倣を仕事とする種族の者が、自分の育った環境のことなら、この上なく容易に、この上なく立派に、これを模倣するだろうけれども、各自にとってその育ちの範囲を越えたものとなると、これをうまく模倣するなどは、実際の動作による場合もなかなかやりにくくな E るものだし、言葉による場合はもっと厄介になるということは誰が見てもはっきりしていることです。ではソフィストの場合はどうかというと、[2] ほかのことについての数々の結構な議論にかけては、かれらはなかなかの玄人だと、わたしは思って来たのですが、しかし何と言っても、かれらは国から国へとさまよい歩くばかりで、どこにも、自分の家を持って定住したためしがありません。だから、知を愛し学問すると同時に国事にたずさわる人人のことになると、こうした人々が、戦争や個々の戦闘にさいして、実際の行動に出たり、各個との言論の上での談合に出たりする場合に、どんなことを、どれだけの範囲にわたって、行なったり語ったりするのか、その点については、ソフィストたちの言うところは的外れなのではないかと、わたしは恐れるしだいです。

そこで残るところは、あなた方の場合のような条件を身に備えている人たち、つまり生まれにおいても育ちに

20 おいてもいま言った両者ともにできる人たちだけだということになります。というのは、このティマイオスにしても、イタリア中でも最もよい政治の行なわれている国ロクリスの人で、[3]財産において、家柄において、その土地の誰にもひけをとることなく、その国の最も重要な官職・名誉ある地位に就いて、その職責を果して来た人ですが、他面また学問の領域でも、わたしの見るところでは、その全体の頂上をきわめた人なのです。クリティアスのほうも、この人がいまわれわれの言っているどれについても、けっして素人でないことは、当地の者にとってはおそらく周知のところでしょう。さらにまたヘルモクラテスの素質と育ちについても、それがいま言ったすべてに対して十分なものであることは、多数者の証言のあるところですから、これを信用しなくてはなりません。

B だからこそ昨日も、わたしとしては考えるところがあって、あなた方から国家についての話をするように求められた時、乗り気になってそれに応じたのです。その続きの話は、あなた方がその気になれば、それより満足にこれを話せる人など一人もいないはずだということを知っていたからです。——何しろ、われわれのあの国家を、

---

1 作家を「模倣を仕事とする種族」と見る点については、『国家』Xに詳論されている。なお、同II. 377B sqq. III. 392D sqq. を参照。

2 プラトンがソフィストと目していた人としては、プロタゴラス、ヒッピアス、エウエノスを挙げることができる。他都市の出身者であるこれらソフィストが「徳の教師」を僭称しながら、青年たちを真の徳へと眼を開かせる代りに、根拠薄弱な「徳らしきもの」を滔々と述べ立てて他人を説得する弁論術を青年に教えて毒する者だとして、プラトンが怒りをこめて批判しているのは、『ソクラテスの弁明』『ゴルギアス』その他いたるところに見られる。

3 「解説」(二五四ページ)参照。

しかるべき戦争に入らせた上で、すべて、この国家にふさわしいものを賦与しうるのは、いまある人々の中でも、ひとりあなた方だけでしょうから。——そこでわたしは、あなた方から求められた話をすると、今度はこちらからあなた方に、いままた言っているようなことをお願いしたわけです。するとあなた方は同意して下さって、あ
C
なた方の間でよく考えた上で、いまこれから、わたしに話の御馳走のお返しをして下さることになったのです。だからこそ、わたしはその御馳走にあずかるためにおめかしをし、それをいただこうと誰よりも意気込んで、ここにやって来ているというしだいです。

ヘルモクラテス　ええまったく、このティマイオスが言ったように、ソクラテス、われわれは御馳走のお返しをする熱意を欠くことはいささかもないでしょうし、また、それをしないでおく口実も、少しもないのです。だから昨日も、ここを辞去して、クリティアスさんのお宅の客間——そこにわたしたちは泊めてもらっているのですがね——その客間に着くとさっそく、いやその前に、まだ道の途中でも、まさにそのことについて、われわれ
D
はあれこれ考えをめぐらせていました。すると、このクリティアスが、昔聞かれた話を語って聞かせて下さったのです。それを、クリティアス、いままたこのソクラテスに話してあげてくれませんか。そうして、その話がこの人の注文に合っているものか合っていないものか、この人にもいっしょに調べてもらうことにしましょう。

クリティアス　そうしなければならないね、もし三人目の仲間のティマイオスにも、それでよいと思われるなら。

ティマイオス　いや、それで結構だと思いますよ。

クリティアス　それではさあ、聞いてくれたまえ、ソクラテス。これは何とも不思議な話ではあるが、しかし

E それでも全面的に真実の話であって、そのことは七賢人の中でも第一人者のソロン[1]が、かつて保証したところなのだ。さてあのソロンという人は、自分でも自作の詩のあちこちで言っているように、わたしの曾祖父ドロピデス[2]とは親族の間柄でもあり、また大いに仲のよい友だちでもあった。そしてわたしの祖父クリティアスに向かって──と、この老祖父がこれまたわれわれに向かって、思い出話としてよく聞かせてくれたものだが──こんなことを言ったというのだ。つまり、もう時も経ち、人々も死に絶えたので、さっぱりわからなくなってしまっているが、驚嘆すべき偉業のかずかずが、その昔、このアテナイの国によってなしとげられていたというのだ。中

21 でも一つのものは、あらゆる偉業のうちでも最たるものだったようだが、これをいま回顧して話すことによって、君にはお礼のお返しをなし、同時にまた、アテナの神様に対しても、今日この祭礼[3]に当たって、正しい本当の仕方で、賛歌をささげるがごとくにたたえまつるのが、この場にふさわしいことのように思われるのだ。

ソクラテス それは耳よりのお話だ。しかしとにかく、それはどんな偉業なのですか。語り伝えられてはいな

1 前五九四年にアテナイのアルコン(政務長官)となって内紛を調停した、かの有名なソロンのこと。政治その他についての見解を詩の形式であらわし、詩人としても有名。ミレトスのタレスらとともに、七賢人の一人に数えられた。

2 ドロピデスについては、本全集7(『カルミデス』「解説」二四一ページ)のプラトンの家系図を参照。この「祖父クリティアス」は同図クリティアスII、いまの語り手のクリティアスは、同クリティアスIIIであろう(なお「解説」二五三ページ参照)。

3 「アテナ神の祭礼」と言えば、パンアテナイアを意味する。毎年行なわれたが、四年に一度、大パンアテナイアが行なわれた。いまの言葉から、この対話は、パンアテナイアに行なわれたものとして想定されていることがわかるが、この日時の想定が『国家』と本篇の関係についての疑問を多々喚起している点については、補注N(二一三ページ)および「解説」二六〇ページ以下参照。

いが、ほんとうにこのアテナイの国が昔なしとげたものだと、ソロンから聞いて先代のクリティアスさんが話された、その偉業というのは？

三

B

クリティアス それをわたしがこれから話そうというのだが、これは昔の話だとして聞かせてくれた当の人が若くはなかったのだ。何しろあの当時、先代のクリティアスのほうは、かれこれもう九〇歳に手もとどこうという年だと言っていたからね。それに引きかえ、わたしのほうは、せいぜいのところ一〇歳くらいだったろうか。その日はちょうど、アパトゥリア祭のクレオティスに当たっていた[1]。そこでこの祭りの恒例の行事が、例年通りその時も、子供たちのために行なわれた。つまり、父親たちが賞品を出して、われわれに詩の吟誦をさせたのだ。さてそこで、沢山の詩人の沢山の詩が吟誦されたが、しかしあの当時ではソロンの詩が新しかったから、われわれ子供でこれを歌う者が多かった。すると同じ一族のある人が、ほんとうにその時そう思ったのか、あるいはまた、クリティアスに何かお世辞を言う意味ででもあったのか、とにかくこんなことを言った。自分の思うところでは、ソロンという人はほかの点でもすぐれて賢い人だったようだが、また詩作の点でも、あらゆる詩人

C

の中で一番自由人らしい不羈（ふき）の人だったように思える、と。すると老人は——いやじっさい、わたしはこんなこともよくおぼえているのだがね——大いに喜んで微笑してこう言った。「アミュナンドロスよ、かりにあの人が単なる余技に詩作したのでなく、他の詩人たちのように本気でそれに取り組んでいたなら、そして、エジプトから当地へ持ち帰った物語にしても、あの人は国内分裂だとか、その他帰国時に遭遇したいろいろの難事のため

に、これをなおざりにしないわけには行かなかったのだが、かりにそんなこともなく、その物語を仕上げたのなら、少なくともわたしの考えるところでは、ヘシオドスであろうがホメロスであろうが、他のどんな詩人であろうが、あの人以上に盛名をうたわれることは、けっしてなかっただろうに」と。「で、その物語とはどんなものだったのですか、クリティアス」と、アミュナンドロスが尋ねたのに対して、老人はこう言った。「ああそれこそは、この上もなく偉大な、そして何よりも一番有名であって至極とうぜんな偉業の物語なのだ。それはこのわれわれの国家がなしとげたものなのだが、もう時も経ち、それを遂行した人々も死に絶えたので、その話は今日まで伝わっては来なかったのだ」。で、アミュナンドロスは言った。「はじめから話して下さい。その物語とは何なのですか。またソロンは、誰からどんな風にしてそれを聞いて来て、本当のことだとして話していたのですか」と。

D

老人は言った。「エジプトの三角州(デルタ)の中に、ちょうどナイル河の分岐する頂点のあたりになるが、サイス州と呼ばれている一つの州があるのだ。そしてその州最大の都市がサイス市なのだが――アマシス王もほかならぬこの出身の人だったのだ――その土地の人々がかれらの都市を開いた守護神としているのは、エジプト語ではその名をネイトと呼ぶある神様なのであるが、これはギリシア語では、かれらの説によると、アテナだというので

E

1 アパトゥリア祭は、家を中心とする氏族(ゲノス)の、そのまた集団たるフラトリアが行なった祭礼のうちの大きなもの。ピュアノプシオン(大体いまの十月)に三日間にわたって行なわれた。その間供犠の儀式などがあったが、三日目はクレオティスと呼ばれ、過去一年以内に生まれた子供や嫁いで来た新婦の登録が行なわれたほか、成年に達した少年が長髪を切るという儀式も行なわれた(クレオティスは「断髪(クラ)」に由来するとも言われる)。

ある。(1) そして、かれらは大へんなアテナイびいきで、自分たちはアテナイ人と一種の親族関係にあると主張しているのだ。さてソロンは、そこへ渡って行って、かれらの間で非常な尊敬を受けたと言っていたが、またとりわけこんなことも言っていた。つまり、ある時昔のことを、神官のうちでもそうした事柄に特によく通じている人

22 人に尋ねているうちに、かれ自身も他のギリシア人も、およそこの種の事柄については、誰一人として何一つ知るところがないと言っても、過言ではないことがわかったというのである。そしてまたある時、かれらに古い時代のことを話してもらうように仕向けるつもりで、ギリシア側の最古の話を試みたというのだ。つまり、最初の

B 人間と言われたポロネウスとニオベ(2)のことを話し、さらにまた、あの大洪水の後、デウカリオンとピュルラ(3)とがどのようにして生きのびたかを物語り、かれらの子孫の系譜をたどり、そして、それぞれの時代を区別して思い起こしながら、話に出てきた事件からもうどれだけの年数が経ったかを計算してみようとしたそうだ。

すると、神官のうちでも大そう年とった一人が、こう言ったというのである。『おお、ソロンよ、ソロンよ、あなた方ギリシア人はいつでも子供だ。ギリシア人に老人というものはいない』と。そこでこれを聞いたソロンが『それはどういう意味ですか。何のことでしょうか』と言うと、『あなた方は皆、心が若いのだ』と、その神官は言ったそうだ。『というのは、あなた方は、古い言い伝えに基づく昔の説も、時を経て蒼古たる学知も、何

C 一つとして心にとどめてはいないからである。そしてその理由は次のようなところにあるのだ。人類の滅亡ということは、いろいろの形でこれまでにも多々あったことでもあり、今後もあるだろうが、その最大のものは火と水によって惹き起こされるのであって、ほかにも、無数の他の原因によるものもあるが、このほうはさほど大きなものではない。と、このように言うのはじっさい、これはあなた方のところでも語り伝えられているものだが、

かつて太陽(ヘリオス)の子パエトンが、父の車に馬を繋いだものの、これを父の軌道に従って駆ることができなかったために、地上のものを焼きつくし、自分も雷に撃たれて死んだという、この話は[4]、神話の形を取って語られてはいるが、その真実のところは、大地をめぐって天を運行するものの軌道の逸脱と、長期間をおいて間々起こる、大火による地上の事物の滅亡のことにほかならない。そこでこのような場合には、およそ、山地だとか高いところや乾いたところに住む者のほうが、河川や海のほとりに住む者に比し、より大きな破壊に見舞われるも

D

1　サイス市は、ナイル河口西寄りにあった都市。第二六王朝はここを首都として一時栄えた。前五六九年にファラオとなったアマシス王はギリシア人を優遇したと言われるが、彼の没後間もない前五二五年、エジプト王国はペルシアのカンビュセス王によって滅ぼされた。ネイト(太陽の母)は特にサイス市で崇められ、その祭礼はサイスを首都とした第二六王朝になって、広く行なわれるようになったらしい。この女神はアテナと同一視され、サイス州の貨幣には、アテナのように右手に梟を、左手に槍を持っているネイト像が描かれている。ネイトはまたイシスが別の形を取ったとも言われている。

2　ポロネウスは、河、もしくは河の神イナコスを父とし、海の精メリアを母として生まれた最初の人間と言われ、プロメテウスが火を盗んだ後、はじめてその使用法を発見したとか、はじめて人間に共同生活をさせたとか言われている。ニオベは、彫刻で有名なニオベとは別のニオベ。ポロネウスの妻とか娘とか言われる。

3　デウカリオンはプロメテウスの子。ゼウスが怒って大洪水で人間たちを洗い流そうとした時、父の勧めで箱をつくり、エピメテウスの子である妻のピュルラとともに箱に入って、難を免れた。水が退きはじめて箱から出た二人は、ゼウスに捧げものをし、テミスに人類が新しく生まれ変わるように祈った。テミスの命により二人が肩越しに石を投げると、各〻の投げた石がそれぞれ男と女になったという。

4　母から、自分が太陽(ヘリオス)の子であることを聞かされたパエトンは太陽を求めて東に向かって旅をし、ついに太陽の壮麗な宮殿を見つけて、父の前に名乗り出た。パエトンが父の馬車を駆ることを願い出た時父は厳重な注意を与えてようやく許可したが、パエトンには天上の馬を制する力はなく、馬は軌道を逸れ、地上の事物を凍らせたり焦がしたりして、ついにゼウスの怒りに触れて雷の一撃を受けた、という話。

のである。しかしわれわれにとっては、ナイル河という、他のどんな場合にも救済者となってくれるものが、この時にも解放されて、(1)われわれをこの危難から救ってくれるのである。他方また、神々が洪水を起こして大地を水で浄めるような場合には、山に住む牛飼いや羊飼いが助かるのに引きかえ、あなた方の地方の都市に住む人々は、河流によって海へと押し流されるが、しかしこの土地では、そのような場合も、その他の場合も、上方から平野へ水が流れ落ちることはなく、逆に、水はすべて下からあふれてくるというのが自然の構造になっているのだ。このようなことが原因となり、その所以となって、このエジプトに保存されているものが、およそ語り伝えられている最古のものという結果になってはいるが、しかし事実としては、過度の寒さや暑さが妨げとならない限りのどんな場所にも、多かれ少なかれ、いつも人間の種族が存在しているのには変りはないのである。そして、あなた方のところのことでも、この土地のことでも、あるいはまた、われわれが聞き伝えて知っている他のどんなところのことでも、何か立派なこと、壮大なこと、あるいはほかに何か目立ったことが起こったとすれば、ことごとく、昔からこの土地で神殿の中に書き留められ、保存されて来たのだ。ところが、あなた方のところや他の国の人々のところでは、いましがた、文字その他都市国家の生活に必要なものすべてが整ったかと思うと、いつもちょうどその時に、決まった年数をおいて、あたかも疫病のように、再び天上から降り来る流れが奔流をなしてそこへ襲来し、あなた方のうち、ただ文盲で無教養な者だけを生き残らせるのである。その結果、あなた方はここにまた改めて、いわば子供に帰るのであって、このエジプトのことも、あなた方の地方のことも、およそ昔にあったことは何一つ知らないという状態に戻るのだ。その証拠に、ソロンよ、少なくとも、あなた方ギリシア人についてあなたが述べられたいまの系譜の話にしても、子供の物語と大差はない。まず第一に、あなた方は

E 23 B

地上の大洪水をただ一つ記憶しているに過ぎないが、そのような大洪水は、その前に何度もあったのである。その上、およそ人類を通じて最も立派な、最もすぐれた種族が、あなた方の国土にいたのを、あなた方は知らない。しかも、あなたも、いまのあなた方の都市国家の市民全部も、その種族の胤(たね)がその昔、わずかばかり生き残ったために、その子孫になるわけなのだが、しかし、生き残った人々が何世代にもわたって、文字で表現することを知らないままに死んで行ったので、あなた方はこのことに気づかずに来たのである。というのは、おおソロンよ、かつて、水による最大の破壊に見舞われる以前に、現にアテナイ人の国であるところのあの都市国家が、戦争にかんしても最強であれば、またあらゆる面で卓抜した法秩序を持っていたことがあるのだ。そして、その国家の遂行した偉業も、その国政も、およそこの天の下でわれわれの耳に達したあらゆる事例のうちで、最も立派なものだったと言われているのである』。

そこでこれを聞いたソロンは驚いて、どうか、昔のそのアテナイ市民の話を残らず、順を追ってくわしく自分に話してくれと、この上もなく熱心に、神官たちに頼んだそうだ。

するど、例の神官はこう言ったということである。『何を言い惜しみすることがあろう、ソロンよ。お話ししよう、あなたのために。あなた方の都市のために。いや、何にもまして、かの女神のために！　この女神とは、あなた方の都市とわれわれのこの都市の守護神となり、これをはぐくみ教えたもうた方なのだが、中でも、あなた方の都市の場合のほうが千年早かったのであって、それはそもそも、この女神が地母神(ゲー)とヘパイストス

1　「解放されて」は補注A(一七九ページ)参照。

から、あなた方の種子（たね）を引き取られた時[1]に遡るのだ。われわれの都市のほうは、それより千年遅いのである。ところが、当地の都市制度が整えられてから八千年という年数の経ったことが、われわれの国の聖なる文書に記されているのだ。従って、かの市民というのは九千年前にいたことになるが、その市民たちの法律と、かれらによってなしとげられた偉業のうちでも最も立派なものを、手短にお知らせしよう。すべてについて詳細を、順を追ってお話するのは、今度また暇を見て、直接文書を持って来た上のことにしたい。

24

さてまずその法律だが、これは、われわれの都市のものを参照して、見ていただきたい。というのは、当時あなた方のところにあった法律の類例を、ここでいま、多々御覧になれるだろうからである。――まず第一に、神職の人々が一つの種族として、その他の種族から別箇に区別されていること。次には、手仕事に従事する人々の種族であるが、牧人の種族も、狩猟に携わる者の種族も、農夫の種族も、それぞれが独立して他の領域を侵すこ

B

となく、自己の職分を果していること――といったことがそれである。またとりわけ戦士の種族が、この国では、他のすべての種族から区別されていることに、あなたは多分もう気づいておられると思うが、かれらは、軍事以外のどんなことをも関心事としないよう、法律によって定められているのである[2]。なおまた、かれらの武装の様式は、楯と槍を持つものだが、このような武具で装備したのは、アジア在住の者のうちでは[3]、われわれがはじめてだったのであって、それは、かの女神がこの武装の仕方を、あちらの地方（ヨーロッパ）では最初にあなた方のところでお示しになったように、これをわれわれに示されたからである。さらにまた知恵の面でも、これはあな

C

たも御承知だろうが、この国の法律がそもそものはじめから、これにどれほどの注意を払ったか――それは、こと宇宙にかんしても、そうした神的な事柄から、人間界の諸事への応用として、占卜術だとか、健康を目的とす

る医術にいたるまで、あらゆる技術を考え出したほか、またそれに付随する他のどんな学問知識にしても、そのすべてを獲得したというところにあらわれている通りである。

さて、この制度・組織の全部を、あの昔女神は、われわれに先立ってあなた方を定住させられた時、その制度として整えられたのであった。場所としては、あなた方の生まれたところを選ばれた。その土地の気候の温和が、知力卓抜な人間を産むだろうことを見て取られたからである。じっさい女神は、尚武の神でもあり愛知の神でも D あるという方だから、そうした御自身に最も近い人間を産むはずの土地を選んで、まず最初に、そこに人間を定住させられたのであった。そこであなた方は、いま述べたような法律に従って、いやそれにもまさるよい法律の

1 エリクトニオスの神話を指しているのではないかと思われる。その神話によると、ヘパイストスがアテナとの結婚を望み、アテナが拒んで争ううちに、ヘパイストスの種子が大地に落ちて、大地つまり地母神(ゲー)が身籠った。生まれた子供の面倒はアテナが見るとして、これをエリクトニオスと名づけ、籠に入れてケクロプスの三人の娘たちに預けた。赤ん坊は半身が蛇で、これを見た三人の娘は恐怖で狂って死んだと言われるが、このエリクトニオスがアテナイの王になったというのである。

2 エジプトの階層制度は、一般にギリシア人の間で注目されていたらしく、ディオドロス、イソクラテス、ストラボンなどにもこれについての記載が見られる。因みにヘロドトスは、エジプトに七つの階層があるとして、神官、戦士、牛飼い、養豚者、商人、通訳、船乗りを挙げている(『歴史』第二巻(一六四))。

3 ここではエジプトがアジアに属するように言われている。もともとヨーロッパとは、中部ギリシアを指し、やがてまたギリシア本土を指す言葉として用いられ、これに対してイオニアの奥地や、右の意味でのヨーロッパ以外にひろがっている大きな陸地が総称してアジアと呼ばれた。しかし前五〇〇年頃、アジア、リビュア(アフリカ)、ヨーロッパが区別され、ギリシア本土を含む、ドン河以西の陸地はヨーロッパ、ドン河とスエズの間にあって東にひろがっている地域はアジア、スエズ以西はリビュアとされた。24E〜25B参照。

もとにあって生活していたのだが、また、どんな方面の力量においても、あなた方が万人にまさっていたことは、神々の生みの子にして育ての子ならばさぞかしと思われる通りのものであった。

E さて、あなた方の都市のなしとげた偉業で、当地に書きとどめられ、驚嘆の的となっているものはかずかずあるが、中でも一つのものが、壮大なこと、すぐれていることで、すべてを凌いでいるのである。すなわち文書は、どれほどにまで大きな勢力の侵入を、あなた方の都市がかつて阻止したかを語っているのだが、これは、外海アトラスの大洋(大西洋)を起点として、一挙に全ヨーロッパとアジアに向かって、暴慢にも押し渡って来ようとしていたものなのだ。何しろ、当時は、あの大洋は渡航可能だったからである。というのは、あの大洋には、あなた方の話によると、あなた方は「ヘラクレスの柱」とこれを呼んでいるらしいが、その入口(ジブラルタル海峡)の前方に、一つの島があったのだ。そして、この島はリビュアとアジアを合わせたよりもなお大きなものであったが、そこからその他の島々へと当時の航海者は渡ることができたのであり、またその島々から、あの正真正銘の大洋をめぐっている、対岸の大陸全土へと渡ることもできたのである。――じっさい、いまの話に出たあの入

25 口の、内側にある限りのこちらの部分(地中海)などは、狭い入口を持った港湾としか見えないのだが、それに対して、あの外海こそ真の大洋であり、またこれを余すところなく取り囲んでいる陸地こそ、真実、文字通りに大陸と呼びうるものであろう。

さて、このアトランティス島に、驚くべき巨大な、諸王侯の勢力が出現して、その島の全土はもとより、他の多くの島々と、大陸のいくつかの部分を支配下におさめ、なおこれに加えて、海峡内のこちら側でも、リビュア

B ではエジプトに境を接するところまで、またヨーロッパではテュレニア(1)の境界に到るまでの地域を支配していた

のである。実にこの全勢力が一団となって、あなた方の土地も、われわれの土地も、否、海峡内の全地域を、一撃のもとに隷属させようとしたことがあったのだ。さあその時に、ソロンよ、あなた方の都市の力は、その勇気においても強さにおいても、全人類の眼に歴然と映じたのであった。すなわち、あなた方の都市は、その盛んな

C 意気と戦争の技術とであらゆる都市の先頭に立ち、ある時にはギリシア側の総指揮に当たっていたが、後に他の諸都市が離反するに及んで自ら孤立を余儀なくさせられ、危険の極に陥りながらも、侵入者を制圧して勝利の記念碑を建て、未だ隷属させられていなかった者についてはその隷属を未然に防いでくれたのだし、その他の者に対しては、とにかくヘラクレスの境界内に居住する限りのわれわれ仲間すべてについて、これを、惜しむことなく自由の身にしてくれたのであった。

D しかし後に、異常な大地震と大洪水が度重なって起こった時、苛酷な日がやって来て、その一昼夜の間に、あなた方の国の戦士はすべて、一挙にして大地に呑み込まれ、またアトランティス島も同じようにして、海中に没して姿を消してしまったのであった。そのためにいまもあの外洋は、渡航も探険もできないものになってしまっているのだ。というのは、島が陥没してできた泥土が、海面のごく間近なところまで来ていて[2]、航海の妨

1 後のエトルリア。イタリア西北部にひろがる地域。

2 「海面の……」の原文は写本によって相違があり、しかもどの読みを取っても意味が判然としない。ただ前後の文脈から見て、ここに訳出したようなことが意味されているはずだという点では、解釈者の間でも大体意見が一致している。ヘラクレスの柱の彼方の外洋が航海不可能という言い伝えは、かなり古くからあったらしいが、泥土のためとしたのは、少なくともプラトン以前には、ほかに見当らないようである。アリストテレスには、ヘラクレスの柱の外側は泥土のため水深が浅くなっているというような言葉も見られるが(『気象論』第二巻(354a22))、航海不可能なほどの泥土が意味されていたかどうかは確かでない。

(25) げになっているからである』」。

四

E さて、ソクラテス、老祖父クリティアスがソロンから聞いたままに語ってくれたことは、簡潔に言えば、以上君が聞いた通りだ。ところで、君の話のあの国家とその成員のことだが、それを昨日君が話してくれていた時、わたしは、ちょうどいま言ったことを思い出して驚いていたのだ。どういう偶然のなせる業（わざ）か、何とも不思議なことに、君の話が大部分、ソロンの言ったこととぴったり一致しているのに気づいたからだ。しかしわたしは、

26 その場ですぐにそれを言う気にはならなかった。何しろ時が経っているので、十分にはおぼえていなかったからだ。そこでわたしは、まず自分だけで、全部を一通り十分におさらいした上で、それを話すようにしなければならないと考えた。だから、昨日君から頼まれたことにすぐに同意したのだ。それはつまり、およそいまのようなどんな場合にも、一番の大仕事になるのは、〔その場の〕趣向に適った何か適切な話題を提供するということだが、これがわれわれにはかなり楽にやれそうだと思ったからね。そんなわけで、このヘルモクラテスが言ったように、

B 昨日もここを辞去する道すがらさっそく、この諸君を相手に、あの話を思い出しながらおさらいして行ったのだし、家に帰ってからも、夜の間に考えに考えて、ほとんど全部を思い出したのだ。いやほんとうに、君、子供の頃に学んだことは驚くほど記憶に残るという諺の通りだねえ。何しろわたしなんか、昨日聞いたことだと、その全部を記憶に呼び戻すことが、さあできるかどうか、あやしいと思うが、ずっと以前に聞いたあの話のほうは、その一つでもわたしの記憶から落ちているとすれば、それこそまったく不思議だろうからね。とにかくあの話は、

C 当時わたしが子供の頃の非常なたのしみにして、大喜びで聞いたものだったし、また老人のほうも、わたしが何度も重ねて質問したものだから、乗気になって教えてくれた。だからそれは、まるで拭い去ることのできない焼絵のように、わたしの記憶に残るものとなってしまったのだ。その上またこの人たちにも、わたしといっしょに話をうまく進めて行けるようにと、朝からさっそくいまの話をそっくりそのまま、話して聞かせていたのだ。

さあそれでは、いままでの話はすべて、まさにこれのために話して来たわけだが、その当の本論を話す準備が、いまやわたしにはできているのだよ、ソクラテス。それも単に要約だけではなく、聞いた通りに一つ一つをなのだ。そして昨日君が話の上のものとして述べてくれたあの市民もあの都市も、いまはこの本物の世界に移して、D あの都市とはこのアテナイのことなのだとし、君の考えていたあの市民とは、神官の話に出てきた、かのわれわれの正真正銘の祖先のことなのだと、こう言うことにしよう。かれらはあらゆる点でそれにぴったりだろうし、かれらを往時の実在の人物だと言っても、そのことでわれわれの話が調子外れなものになることはあるまい。そこでわれわれは皆でいっしょに分担し合って、君から与えられた課題に、できるだけ見合ったものをお返しするようにやってみよう。とすると、さあ、ソクラテス、君は考えてみてくれなくてはならないよ。いまの話 E はわれわれの意に適ったものなのか、それとも、これの代りに何かほかの話を探さなければならないのかどうかをね。

ソクラテス とおっしゃっても、クリティアス、これの代りに取り上げたほうがよさそうな、どんな話がありうるというのでしょうかねえ。これこそわれわれの神さまにゆかりのある話ですから、その神さまの祭りの行な

われているいまのこの場合に、特にふさわしいでしょうし、またこれが作り話ではなく、本当の話だということは、これはきわめて重大な点でしょう。何しろ、いま〔あなたの話に登場した〕その人物をさしおいて、ほかの人物を見つけると言っても、どこからどのようにして見つけることができますか。できることではありませんよ。そんなことより、さあ、あなた方は幸運を祈って話して下さらなくてはなりません。わたしのほうはしかし、昨日話をしたのですから、その代りに、今日は休んで聞き役にまわらせてもらわなくてはなりません。

27 **クリティアス**　それでは、君に出す御馳走の膳立てをわれわれが取りきめておいたから、それを一つ見てくれたまえ、ソクラテス。つまり、われわれの案では、こういうことになったのだ。まずティマイオスだが、この人はわれわれの中で一番よく天文学に通じていて、万有の本性を知ることを、特に自分の仕事として来た人だから、最初にこの人に、宇宙の生成から始めて、人間のなりたち(自然の本性)のところで話を終えてもらう。そしてその次にはわたしが、ティマイオスからは、この人が話の上で出生させた人間を受け取り、他方君からは、その人間のうちで特によく教育された一部の者を受け取ったとでもいうつもりになるのだ。そして、ソロンの証言にも、B その法律にも従って、かれらを、いわばわれわれを陪審員とする法廷に出頭させ、かれらこそ、かの聖なる文書に記された伝承が、その消滅を告げている、かの往時のアテナイ人にほかならないのだとして、かれらにわがアテナイの市民権を獲得させるのだ。そしてそれから後はもう、かれらはわれわれの同市民であり、アテナイ人であると考えて、かれらの話をして行く、と、こう決まったのだ。

ソクラテス　これはまた、申し分のない、すばらしい話の御馳走を、お返しにいただけることになりそうだ。それでは、ティマイオス、次の話はあなたに引き受けていただかなくてはならないようですね。慣例に従って、

神々に呼びかけた上で。

五

C **ティマイオス** いや、ソクラテス、そのことでしたら、わずかでも思慮分別のある人なら誰でも、事の大小を問わず何事を始めるにさいしても、その都度、神に呼びかけるものでしょうが、〔とりわけ〕われわれとしては、この万有について、それがどのようにして生成したのか、あるいはまた、それはもともと生成したことのなかったものなのかどうかを、何とかして論じようとしているのですから、すっかり気が変になっているのでない限り、どうしても、神々や女神たちに呼びかけてこう祈らないわけには行かないのです。「どうかわれわれの話すところすべてが、何よりも神々のお気に召しますように。ひいてはまた、われわれの意に適った(満足すべき)ものとD なりますように」と。そして、神々に呼びかける分は以上の通りで祈願を終えたことにして、われわれの側には、こう呼びかけなければなりません。「どうか、あなた方には、できるだけ容易にわかってもらえますように。そしてわたしのほうは、いまの問題について自分がどう考えているかを、できるだけ完全に示すことができますように」と。

さて、わたしの考えでは、まず第一に次のような区別を立てなければなりません。つまり、常にあるもの、生成ということをしないものとは何なのか。また、常に生成していて、あるということのけっしてないものとは何28 なのか、ということです。すなわち、前者は、常に同一を保つものなので、これは理性(知性)の働きによって、言論の助けを借りて把握されるものであり、他方、後者はまた、生成し消滅していて、真にあるということのけ

っしてないものなので、これは思わくによって、言論ぬきの感覚の助けを借りて思いなされるものなのです。(1) さらにまた、生成するものはすべて、何か原因となるものがあって、それによって生成するのでなければなりません。何故なら、どんなものにしても、原因となるものもなしに生成することは不可能だからです。ところがさて、何を製作するにしても、その製作者が、常に同一を保つもののほうに注目し、その種のものを何かモデルに用い B て、当の製作物の形や性質を仕上げる場合には、そのようにして作り上げられるものはすべて、必然的に立派なものとなります。しかし、製作者が生成したものに注目し、そうした生み出されたものをモデルに用いる場合には、製作物は立派なものとはなりません。

さて、この全宇宙(ウゥラノス)――と言うか、コスモスと言うか、(2) あるいはその他何とでも、名づけて呼ぶ分には、この当のものが一番よく受け入れてくれるような名称で呼んでおくことにしましょう――とにかく、そのものについて、まず第一に、およそどんなものについても最初に考えなくてはならないとされていることを、考察しなければなりません。つまり、宇宙は、生成の出発点というものがまったくなくて、常にあったものなのか、それとも、ある出発点から始まって、生成したものなのかということです。〔しかしそれは〕生成したのです。何故なら、それは見られるもの、触れられるもの、身体を持ったもの(物体性を具えたもの)(3)であり、すべてこうしたも C のは、感覚されるものなのですが、この感覚されるもの、つまり、思わくによって、感覚の助けを借りて捉えられるものが、生成するもの、生み出されるものであることは、すでに明らかにされたことだからです。(4) ところがまた、生成したものは、何か原因となるものによって生成したのでなければならないと、われわれは主張しています。さて、この万有の作り主であり父である存在を見出すことは、困難な仕事でもあり、また見出したとしても、こ

29

れを皆の人に語るのは不可能なことです。しかしそれはともかくとして、もう一度先の問題に帰って、次のことを宇宙について考えなければなりません。つまり、宇宙の構築者は、モデルのうちのどちらのものに倣って、この宇宙を作り上げたのか。同一を保ち、恒常のあり方をするものに倣ったのか、それとも、生成したものに倣ったのかということです。さて、もしもこの宇宙が立派なものであり、製作者がすぐれた善きものであるなら、この製作者が永遠のものに注目したのは明らかです。しかし、もしもその逆に、口にするのも許されないようなこ

1　「さて前者は……」以下のこの箇所を、コンフォードは次のような構文のものと解釈している。「思考によって……把握されるもの(A)が、常に同一を保つもの(a)なのであり、思わくによって……思いなされるもの(B)が、生成し消滅して……あるということのけっしてないもの(b)なのである」。そして、(a)(b)は定義される対象、(A)(B)は定義なのだと解している。しかしわれわれとしては、コンフォード以外の大多数の訳者に従って、この箇所では、前の箇所の「常にあるもの」と「常に生成しているもの」がそれぞれ、思考によって把握されるものと、思わくによって思いなされるものと言えるのは何故かという、その理由が示されているのだと解した。このそれぞれの場合に、「同一を保つもの」であること、及び「生成し……あるということのけっしてない」ことが、何故理由になりうるのかという点については、「解説」二七〇ページ参照。

2　「ウゥラノス(οὐρανός)」は普通には「天」を指す語。しかしプラトンは球形の天球に囲まれた宇宙全体をしばしばウゥラノスと呼ぶ。「コスモス(κόσμος)」はもともと「秩序」を意味し、また、装身具などを指すのに用いられた。宇宙を指すのにこの語をはじめて用いたのは、ピュタゴラスであったとか、パルメニデスであったとか言われている。

3　「身体」と訳した原語 σῶμα は、「身体」「物体」「三次元のひろがりを持った立体」の意の語。ここでは、宇宙は可視的・可触的・延長体として「物体性を具えたもの」であることが確認されるが、後に(30B他)、宇宙は「魂」を具えたものと言われ、魂に対立する身体の意で σῶμα なる語が用いられる(34C他)。

4　28Aでは、感覚対象は「生成し消滅していて、真にあるということのけっしてないもの」と言われていた。これは「変化して止むところのないもの」の意に解されうる。これがいまの箇所で感覚対象たる宇宙が「生成した」ことの論拠に用いられている点は、「解説」二七八ページ参照。

と〔宇宙が劣悪なもので、製作者が悪しきものである〕としたら、その場合には、製作者は生成したものに注目したことになります。すると、製作者が永遠のものに注目したということは、誰が見てもはっきりしているわけです。というのは、宇宙は、およそ生成した事物のうちの最も立派なものであり、製作者のほうは、およそ原因となるもののうちの最善のものだからです。そこで、このようにして生成したのですから、宇宙は、言論と知性(1)(理性)によって把握され同一を保つところのものに倣って、製作されたわけなのです。ところで、以上のような B 事情があるとすれば、この宇宙が何らかのものの似像(2)であることも、これまた大いに必然的なことです。

さて、どんなことでも、その本性に適った出発点から始めるのが、何よりも肝心なことです。そこで、似像とそのモデルについて、言論というものはその説明する当の対象そのものと同族でもあるのだと考えて、次のような区別を立てなければなりません。すなわち、言論の対象が、永続性があって確固とした、そして理性を頼りにして明らかにされるものである場合には、言論自身も永続性のある不変のものですが――そして、反駁されえず征服されえないものであることが、言論にとって可能な限りにおいて、また、それが言論に適ったものである限りにおいて、その点で少しでも欠けるところがあってはならないのですが――他方、言論の対象が、前者のような対象に似せて作られてはいるが、似像でしかないというようなものである場合には、言論自身も、似た(あり C そうな、真実らしい)言論でしかないのでして、これは先の言論と比例関係にあります。すなわち、「生成(なる)」に対する「有(ある)」の関係が、「所信」〔に過ぎないもの〕に対する「真実」についても成り立つのです(3)。だから、ソクラテスよ、われわれが、神々(天体)だとか万有の生成だとかいったいろいろの事柄について、どこから見ても完全に整合的な、高度に厳密に仕上げられた言論を与えることのできない点が、多々出てくるとしても驚いて

D はなりません。いやむしろ、話し手のわたしも、審査員のあなた方も、所詮は人間の性（さが）を持つものでしかないということ、従って、こうした問題については、ただ、ありそうな物語を受け入れるにとどめ、それ以上は何も求めないのがふさわしいのだということを思い起こして、何人にも劣らず、ありそうな言論をわれわれが与えることができるなら、それでよしとしなければなりません。

ソクラテス 申し分ありません、ティマイオス。全面的に、あなたのおっしゃる通り、いまの話を受け入れなくてはなりません。とにかくあなたの前奏曲のほうは、われわれはこれを驚嘆して受け入れたのです。だからさあ、次には曲そのものをおしまいまでやりとげて下さい。

六

ティマイオス それでは、生成する事物すべてとこの宇宙万有との構築者が、いったいどのような原因によっ

E て、これを構築したのかということを話しましょう。構築者はすぐれた善きものでした。ところが、およそ善き

---

1 原則として νοῦς を「理性」、φρόνησις を「知(性)」と訳した。

2 「似像(εἰκών)」は、『国家』(VI. 509D sqq.)では、自然物や人工の事物の落とす影や映像の意で用いられているが、いまの箇所では、いわゆる実物たる自然の事物がまた、思考によって把握されるイデア的存在の「似像」とされているのである。

3 「似た〔ありそうな、真実らしい〕言論」が、厳密性や整合性を欠くものであることは、すぐ次に言われているが、その具体的な意味の解釈については、「解説」(二七九ページ)を参照。また「所信」は、28A, Cで、感覚対象すなわち「生成するもの」について思いなすものとされた「思わく」と、大体同義に解してよいであろう(『国家』VI. 511D〜Eの用語法を参照)。

ものには、何事についても、どんな場合にも、物惜しみする嫉妬心[1]は少しも起こらないものです。そこで、このような嫉妬心とは無縁でしたから、構築者は、すべてのものができるだけ、構築者自身によく似たものになることを望んだのでした。まさにこれこそ、生成界と宇宙との最も決定的な始めだとすることを、賢者たちから受け 30 入れるなら、それが一番正当な受け入れ方でしょう。すなわち、神は、すべてが善きものであることを、そして、できるだけ、劣悪なものは一つもないことを望み、こうして、可視的なもののすべてを受け取ったのですが、それはじっとしてはいないで、調子外れに無秩序に動いていましたから[2]、これを、その無秩序な状態から秩序へと導きました。それは、秩序のほうが無秩序よりも、あらゆる点でより善いと考えたからです。ところで、最も善きものには、最も立派なこと以外に他のことをするのが許されないのは、かつてもいまも変りのないことです。B だから神は、推理の結果、次のようなことを発見しました。――すなわち、本性上可視的であるような事物のうち、どんなものも、それぞれ全体として考えられる場合には、理性なきもののほうが理性あるものよりも、すぐれて立派なものとなることはないだろう。ところがまた、理性は魂を離れては、何ものにも宿ることはできない――ということです[3]。そこでこの推理の故に、神は、理性を魂のうちに、魂を身体のうちに結びつけて、この万有の造作をまとめ上げましたが、それは、本性上最も立派で最も善き作品を完成したことになるように、ということだったのです。さて、このようにして、かのありそうな言論に従えば、こう言わなくてはなりません。この C 宇宙は、神の先々への配慮によって、真実、魂を備え理性を備えた生きものとして生まれたのである、と。

ところで、以上のことが認められるとすると、今度はまた、その次の話をしなければなりません。すなわち、生きもののうちのどんなものに似せて、構築者はこの宇宙を構築したのかということです。さて、何にせよ元来

が〔全体的なものの〕部分でしかないようなものに似せたなどと考えて、宇宙を貶めないようにしたいものです。——何しろ、完結していないものに似ているようなものは何であれ、けっして立派なものとはならないでしょうからね。いやむしろ、そのもの以外の他の生きものすべてが、個別的に言っても類別に言っても、それの部分であるような、そうした〔全体的な〕ものに(4)、何ものにもまして一番よく、この宇宙は似ているのだと考えることにしましょう。というのは、じっさい、理性の対象となる生きものすべてを、かの宇宙のモデルが自己自身のうち
D に包括して持っていることは、ちょうど、この宇宙が、われわれや、その他可視的なものとして構築された限り

1 「神々は妬むもの」というのが、古くからギリシアに一般に行きわたっていた神観であることは、『オデュッセイア』(第五巻一一八—一二〇行)や、アイスキュロス『ペルシアの人々』(八二行以下)にも見られる通りであるが、ヘロドトスの場合も、クロイソスやクセルクセスの悲劇は、神の嫉妬もしくは報復によるものであった(『歴史』第一巻(三四の一)他)。プラトンのいまの言葉は、こうした神観に意識的に対立して言われたものであろう。

2 宇宙の構成者が秩序づける以前の、可視界の無秩序な動きについては、52D以下で詳細が述べられる。

3 「魂」と訳した原語 ψυχή は、元来「生命」もしくは「生命力」とでも訳してよい語。プラトンにおいて、自発的に自らを動かして他のものを動かす ψυχή こそすべての動きの始源だということは、『パイドロス』(245C～246A)や『法律』(X. 894E sqq.)にも見られるが、本篇においても、宇宙全体の、少なくとも規則正しい天球の運動や惑星の運動は、宇宙の「魂」の運動をあらわすものである(34C sqq.)。他方、『国家』(IV. 435B sqq.)で展開された「魂三分説」は本篇でも踏襲されており(69E～70A sqq. 参照)、「理性」は「魂」の部分であって、「魂」を持つもの必ずしも「理性」を具えているとは言えないが(77B参照)、「理性」は「魂」を基盤にしてはじめて成り立ちうる。

4 感覚対象としての宇宙は ψυχή を具えた生きものとして生み出されたわけであるが、この生きもののモデルとなる理性の対象つまりイデアが、他の生きもの〔のイデア〕すべてを部分(もしくは特殊)として含む全体的な生きもののイデアだとされている点については、特に『ソピステス』(253D)を参照。なお「解説」(二七九ページ)参照。

(30) のすべての生物を包括して持っているのと、同様だからです。つまり、理性によって把握されるもののうちでも、最も立派な、あらゆる点で完結しているものに、一番よくこの宇宙を似せようと神は欲したので、自分自身のうちに生来自分と同族である生きもののすべてを含んでいるような、一個の可視的な生きものとして、この宇宙を構

31 築したのです。

　さて、われわれは宇宙を一つのものとして呼んで来ましたが、それで正しかったのでしょうか。それとも、多なるものとして、また無限個のものとして(1)さえ語るほうが、正しかったのでしょうか。それは一つのものとして呼んで正しかったのです、いやしくも、それがモデルに即して製作されたことになるのだとすれば。何故なら、およそ理性の対象となる生きもののすべてを包括しているものが、いま一つの〔自分と同じような〕別のものと併存していて、それら二者のうちの一つだということはありえないでしょうからね。というのは、もしもそうだとすると、この両者を包括する生きものが、さらにまた別個にあるべきだということになり、前二者は後者の部分に過ぎないことになるでしょう。そしてこの宇宙万有は、もはや前二者にではなく、むしろ、それらを包括する側のものに似せられているのだと言われるほうが、より正しいはずだからです。だから、この万有が単一性という

B 点で、かの完全無欠の生きものに似るようにという、このことのために、宇宙の作り主は、二つの宇宙を作ったのでもなく、無限個の宇宙を作ったのでもなかったのでして、この宇宙は、ほかに同種のもののないただ一つだけのものとして生じて、現にあり、なお今後もあることでしょう(2)。

七

ところで、生じたものと言えば、これは物体的なもの、可視的・可触的なものでなくてはなりません。ところが、火を欠いては、どんなものもけっして可視的なものとはなりえないでしょうし、また、何か固体のものがなくてはどんなものも可触的なものとはなりえず、土なしには何ものも固体とはなりえないでしょう。こうしたことから、この万有を構築しはじめるに当たって、神はこれを、火と土とから作ろうとしたのです。ところが、二

C

つのものが、第三のものなしに、二つだけでうまく結び合わさることはできません。というのは、一種の絆(きずな)のようなものがその両者の中間にあって、それらを結合させるものになってくれなければならないからです。ところが、絆のうちでも最も立派なものと言えば、それは、自分が結び合わせる当のものを、さらに自分自身とも最大限に一体化させるものがそれでしょうし、またこのことを、その本性上、最も見事にやってのけるのが、比例(3)と

---

1 ここでは、宇宙を複数あるいは無限多のものとする考えが退けられて、これはあくまで一つのものだと主張されているが、宇宙を無限多のものと考えた人としては、原子論者レウキッポス、デモクリトスその他を挙げることができる。彼等によれば、無限の虚空間の中には、太陽も月もない宇宙や、動植物の存在しない宇宙など、無数の宇宙があるとされていたらしい。

2 本篇のいまの箇所では、次のようなことが意味されているのであろう。すなわち、この宇宙が、相互に内的な関連を持たない原子や粒子の偶然的な集合体ではなく、善なる製作者によって、イデアをモデルとして製作された以上、ちょうど、イデアの世界で、種が類によって、類が最高類によって包括され(30C注4参照)、全体が一つの統合体をなすのと同様、それに対応するこの宇宙の場合もまた、およそ多なるものはすべて一なる全体の部分であり、部分は全体によって包括されて位置づけられ、すべてが一つの統合体をなすのだ、ということである。

3 「比例(もしくは類比、ἀναλογία)」は、ユークリッドの定義によると、「第一の数が第二の数の何倍か、何分の一か、何分の何かという関係が、第三の数の第四の数に対するそれらの関係と同じである時、それらの数は比例関係を持つ」(『原論』第七巻、定義21)。

32 いうものなのです。というのは、三つの数のうちで、任意の立方数なり平方数なりの間に中項となるものがあって、[1]初項対中項が、中項対末項に等しく、また逆に、末項対中項が、中項対末項に等しいという関係が成り立っているとすると、その場合にはいつでも、中項は初項にも末項にもなり、また、末項と初項は、両者ともに、今度は逆に中項となるものなのでして、[2]このようにして、すべては必然的に同じものだという結果になるでしょうし、お互いとの関係で同じものになるのだとすると、そのすべては一つだということになるだろうからです。

さて、この万有の身体が、仮に面だけのもので、何の奥行きもないものとして生じるべきであったとすれば、B 中項は一つだけで十分、自分とともにある諸項と、さらに自分自身とを結び合わせることができたでしょうが、実際には、立体的なものであるのが、宇宙の当然のあり方でなくてはならなかったのですし、また、立体の場合は、けっして一つの中項がではなく、いつも二つの中項がこれらを結び合わせるのです。[3]まさにこのようなわけで、神は、火と土の中間に水と空気を置き、そして、それらが互いに、できるだけ比例するように仕上げました。つまり、火対空気が空気対水に等しく、また空気対水が水対土に等しいように仕上げたのでして、こうして可視的で可触的な宇宙を、結び合わせ、構築したのでした。そして、以上のような理由によって、また以上述べたよC うな数にして四つのものを材料にして、この宇宙の身体は、比例を通じて整合されて生み出され、またそのところから親和力[4]を得たのでして、その結果、それは、自己同一的な一体をなして結合し、これを結合させた当事者以外の何ものによっても解かれえないものとなったのでした。

ところで、これら四つのものの一つ一つどれについても、その完全な全部をこの宇宙の組織は取り入れました。

すなわち、火のすべてと水にしても空気にしても土にしても、それぞれそのすべてから、構築者は宇宙を構築したのでして、どんなもののどんな部分をも、また機能をも、外部に取り残すことはしなかったのですが、それは（D）次のような意図があったからです。つまり、まず第一に、宇宙が、完結した諸部分からなる、最大限に完結して（33）全体性を備えた生きものであるようにということ。それに加えてまた、他に同種のものが生じようにも、その材料が残っていないために宇宙がただ一つだけのものになるようにということ。なおまた、それが不老無病であるようにということです。というのは、構築者は、合成体というものについて、次のようなことを見て取っていた

1　この箇所の読みについては、いろいろと異論がある。まず「立方数」と訳したὄγκοςは、普通「嵩」「塊」「物体」などを意味し、「平方数」と訳したδύναμιςは、元来「力」「機能」「性質」を意味するほか、数学用語としては「二乗」「二乗数」「二乗根」の意に用いられる。さらにこの箇所は「三つの数なり、ὄγκοςなりδύναμιςなりにおいて」と読むこともできる。従って、たとえば「三つの整数なり、体積なり、性質なりにおいて」とする訳者テイラーもあるが、しかし、この箇所では、すぐ次に問題となる、平面と立体の比例中項のことが予想されていると考えるほうが、より妥当と思われるので、コンフォードの示唆に従って、ここに訳出したように解しておく。

2　$a:b=c:d$が成立するならば、$b:a=d:c$もまた成立するの意。

3　二つの平方数の間には一つの比例中項が、二つの立方数の間には二つの比例中項がある、というのが、ユークリッドの『原論』に見えている（第八巻、命題11, 12より）。
平方数の場合は、A、Bをそれぞれ平方数として $C^2=A, D^2=B$と置くと、$C^2:CD=CD:D^2$となって、A、Bの間には一つの中項CDが介在する。
立方数の場合は、A、Bをそれぞれ立方数として $C^3=A, D^3=B$と置くと、$C^3:C^2D=C^2D:CD^2=CD^2:D^3$となって、A、Bの間には、$C^2D, CD^2$の二つの中項が介在する。

4　「親和力」は、エンペドクレスの自然哲学で重要な役割を占めるものであるが、補注M（二一〇ページ）参照。プラトンは、異質的なもの同志を結合させる要因として、この「親和力」に当るものを「比例」に求めたと言える。

からです。すなわち、そのようなものは、熱いもの、冷たいものなど、すべて強力な機能を持ったものが、外部からこれを取り巻いて攻撃して来るようなことがあると、こうした外部のものがこれを時ならずして解体し、病気や老いを招いて衰えさせるものだということです。まさにこのような理由のために、またこのように推理したために、構築者は、どれもが完全なすべての材料から、一つの全体性を備えて完結した、不老無病のものとして、B この宇宙を造作したのでした。

形としては、作り主は、宇宙に対して、それにふさわしく、またそれと類を同じくする形を与えました。ところが、すべての生きものを自分自身のうちに包括すべき生きものにふさわしい形と言えば、それは自分自身のうちに、あらん限りのすべての形を含んでいる形でしょう。だから、構築者はこれを、中心から端までの距離がどこも等しい球形に、まるく仕上げたのですが、これこそ、すべての形のうちで、最も完結し、最も自分自身に相似した〔どの部分も相似した、つまり一様な〕形でして[1]、構築者は、相似しているもののほうが、相似していないものよりも、はるかに美しいと考えたわけです。そして、それの外側を、まわり一円に、すっかりなめらかに仕C 上げて行きましたが、これには理由が多々ありました。そのもの(宇宙)は、眼というものを少しも必要としませんでした。外部には、眼に見えるものは何一つとして残されてはいなかったからです。それは聴覚の器官をも必要としませんでした。聞こえるものもなかったからです。また、呼吸されることを要求して来る周囲の空気もなければ、またそれは、自分のうちへ入って来る食物を受け入れたり、すでに養分を吸収し去った後の食物を逆に放出したりするためのどんな器官をも持つには及びませんでした。何故なら、何一つとして、出て行くこともなければ、どこからかそこへやって来ることもなかったからです——何しろ、〔宇宙の外には〕そういうものは、あ

りもしなかったのですからね――。というのはつまり、宇宙は、自分で自分を消耗しては、それを自分の養いに供し、すべて、自分自身の内部で、自分自身によって作用を受け、また作用を及ぼすように仕組まれていたからです。というのは、構築者が、宇宙は自足のものであるほうが、他をも必要とするようなものであるよりも、より善いだろうと考えたからです。また手も、それでもって、つかんだり、あるいはまた、何ものかに対して防禦したりする必要は何もなかったのですから、そんな無駄なものをこの宇宙にくっつけるべきではないし、さらにまた、足だとか、一般に歩行に役立つものにしても同様であると、作り主は考えました。というのは、作り主は、宇宙に対して、その身体に本来ふさわしい運動を、つまり七つの運動のうちでも、理性や知力にとりわけ深い関係のある運動を割り当てたからです。それだからこそ、作り主はこの宇宙を、同じ場所で、また、それ自身の占めているひろがりの範囲内で、一様にまわるようにし、こうして円を描いて回転運動をするようにしたわけでして、他の六つの運動はすべてこれを取り除き、宇宙がこれらの運動に与って彷徨うということのないようにした

D

34

1　球が「自分自身のうちに、あらん限りのすべての形を含んでいる形」と言われている点について、プロクロスが推測しているのは、まず、表面積の等しい立体のうちでは球が最大の体積を持つということ、第二には、球にはすべての正多面体が内接しうるが、他の形にはそれらすべてが内接するのは不可能だということである(160 F, Diehl, II. p. 71)。

また「中心から端までの距離がどこも等しい球形」が「最も完結した形」だと言われている点については、エレア派のパルメニデスの議論を、参考のため挙げておく。パルメニデスの「あるもの」もまた球形をなしているが、それはこの「あるもの」は「あらぬもの」の侵入を全く許さない連続体であって、場所によって「より多くある」とか「より少なくある」とかいうことはありえず、「どの方向においても自己自身に等しく、一様の仕方でその限界内にあるから」である(Fr. 8, ll. 42–49 (DK))。

のです。[1] ところが、このような循環運動には、足の必要はまったくないのですから、構築者は、宇宙の身体を作り出した時に、これを脚や足を持たないものにしたのでした。[2]

八

B 以上はすべて、常にあるところの神が、いつかあることになるはずの神について考えた推論でして、これにもとづいて、神は、なめらかで、均質で、中心からどの方向へも距離が等しく、材料となる諸物体が完結しているために、それ自身もまた全体性を備えて完結している一つの身体を作ったのでした。そして神は、その真ん中へ魂を置き、これを全体を貫いて引きのばし、さらに外側から体の周囲を魂で覆い、[3] こうして、円を描いて回転する、まるい、ただ一つっきりしかない宇宙を据えつけたのでした。しかしこの宇宙は、すぐれた性質を備えているために、自ら自分と交わることができ、ほかには何ものをも必要とせず、自分で十分に、自分の知己たりえ友たりえたのです。こうして、まさにこれらの条件すべてによって、神はこの宇宙を、幸福な神として生み出したのでした。

C ところで、その魂ですが、順序が後まわしになってしまって、われわれはようやくいまその話をしようとしているのですが、しかし、神の工作においてもそのように、魂のほうが〔身体よりも〕生まれが新しいというわけではありませんでした——仮にもしそうだったとすれば、神は両者をいっしょにした時に、長老格のものが若輩によって支配される不都合を黙って見逃しはしなかったでしょうからね。——いや、むしろ、われわれには、偶然的で出まかせなところが多分にあるので、話の仕方もやはり何かそういう調子ですが、しかし神は、魂と身体と

では、後者が支配さるべきものであるのに対し、前者はその主人となり支配する側になるものとして、これを、生まれにおいても、力量においても、身体よりも、より先なるもの、より長老のものとして構成したのでした。そして、このように魂を構成したさいの材料と方法は、次のようなものでした。

35

不可分で常に同一を保つ「有」と、他方また諸物体の領域に生じる分割可能な「有」の中間に、その両者から、第三の種類の「有」を混ぜ合わせて作り、さらにまた「同」と「異」についても、(4)これまた同様に、それらのうちの不可分のものと、物体の領域の分割可能なものとの中間に、〔第三種の混合物を〕構成しました。そして、三

---

1 「七つの運動」のうちの一つは回転運動。「他の六つの運動」とは、上、下、左、右、前、後に向かう運動を指す(43B参照)。回転運動が「理性や知力にとりわけ深い関係のある運動」と言われている点については、理性も回転運動もともに、同じ仕方で一様に、同じものについて一つの規則に従って動くというように語られている『法律』(X. 898A)の言葉を参照。なお本篇40B参照。

なお、宇宙のこの回転運動は、宇宙の魂によるものであるが(36E参照)、魂が回転運動をするというこうした考えには、アルクマイオンの影響もあったと考えられる(K.-R. p. 235参照)。アリストテレスの伝えるところによると(『霊魂論』I. 405a29 sqq.)、アルクマイオンは、魂に不死性が具わっているのは、魂が不死なるものに似ていて、常に動いているからだとし、天体や天全体など神的なものはすべて連続運動をなし、その運動は止むことがないとしていたらしい。

2 以上、宇宙は感覚器官も、呼吸器官・消化器官も、運動器官も持たないとされているが、「生きもの」ではあっても自足で完結した存在たる宇宙が身体諸器官を要しないのに対し、有限な死すべき種族には身体諸器官が必要となる点については、44D sqq., 69D sqq. 参照。

3 「外側から体の周囲を魂で覆い」という言葉から、宇宙を越えた外部にも魂がひろがっていた、と解する必要はない。むしろ、宇宙の一番外側の天球自身もまた、魂によって円環運動をなすものだということが意味されているのであろう。

4 35A4のαὖ πέρι(A、F、P、Y各写本にあり)を、バーネットは削除しているが、これを復活する。

(35)

つあるこれらのものを取り上げると、混ぜ合わせて、そのすべてを一つのものにしました。その時「異」は混り

B にくかったのですが、これを力ずくで「同」に適合させたのです。そしてこれらを「有」といっしょに混ぜ合わせ、三つのものから一つのものを作ったのでしたが、(1)この仕事を終えると、今度は逆に、その全体を、適当な数の、しかもどれもが「同」と「異」と「有」とから混り合わさっているような部分に区分しました。ところでこの分割を、神は次のようにして始めたのです。

まず、全体から一つの部分を切り離しました。

その次には、前者の二倍の部分を、

さらに第三には、第二の部分の一倍半で、第一の部分の三倍に当る部分を、

第四には、第二の部分の二倍を、

第五には、第三の部分の三倍を、

C 第六には、第一の部分の八倍を、

第七には、第一の部分の二十七倍を、という工合に切り離して行ったのです。

36 そして次には、この二倍ずつの合間〔もしくは音程〕と、三倍ずつの合間とを、もとの混合物からなおも部分を切り取っては、それらの間に置くという仕方で埋めて行ったのですが、その場合、どの合間にも、次のような二つの中項があるようにしたのです。つまり、その一つは、両端の項それぞれに対してそのどちらにとっても等しい割合を占める分だけの差をもって初項を超過し、末項によって超過されるものであり〔調和中項〕、

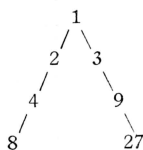



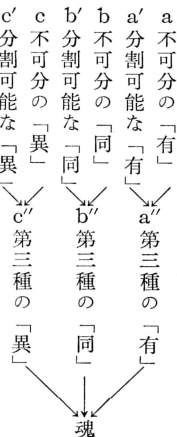
図 1

いま一つは、数的に等しい差をもって、初項を超過し、末項によって超過されるもの〔算術中項〕なのです。ところが、このような結合項を入れると、それによって、さきの合間に、三対二、四対三、九対八の合間〔両

B

端の項がこれらの比をなす合間〕が生じるので、今度は、九対八の合間で、四対三の合間を全部埋めつくして行きました。すると、これらの合間のそれぞれに一つの分数を残すことになりましたが、こうして残された分数の合間は、数の比で言って、両端の項が、二五六対二四三になるものでした(2)。そして、じっさい、もとの混合物は、これらのものを切り取って行くうちに、以上でもうすっかり使い尽くさ

1　35Aの「不可分で……」からここまでの箇所については、多々解釈が提出されているが、ここではバーネットのテキストの一部を変更し(35A注4参照)、以下のように解する。

(第一次の混合)		(第二次の混合)	
a 不可分の「有」 / a′分割可能な「有」	→	a″第三種の「有」	↘
b 不可分の「同」 / b′分割可能な「同」	→	b″第三種の「同」	→ 魂
c 不可分の「異」 / c′分割可能な「異」	→	c″第三種の「異」	↗

これら「有」「同」「異」が何を意味するかについては補注B(一八二ページ)を参照。

2　35B sqq. の叙述は次の通り。まず第一に(35B〜C)、1, 2, 3, 4, 9, 8, 27 の数列が得られる。しかし36Aでは「二倍ずつの合間、三倍ずつの合間」とあるので、すでにクラントルが試みたと言われる、図1のような形に配置づけることができる。次に中項を挿入するが、両端の項を a_1 a_2 とし、第一の中項をm, 第二の中項をm′とすると、

$$m=a_1+\frac{a_1}{n}=a_2-\frac{a_2}{n},\quad m=\frac{2a_1a_2}{a_1+a_2}$$〔調和中項〕

$$m'=a_1+r=a_2-r,\quad m=\frac{a_1+a_2}{2}$$〔算術中項〕。

この二つの中項を先の二系列の数列に挿んで行くと、たとえば1と2の間には$^4/_3$と$^3/_2$が、入る。そしてこの両者の比は$^9/_8$である。36Aの終りで「さきの合間に、三対二、四対三、九対八の合間が生じる」と言われているのはこのことを指す。最後に九対八の合間で四対三を埋めつくして行く(36A〜B)と最終的には補注C(一八六ページ)に挙げたような数列が得られる。

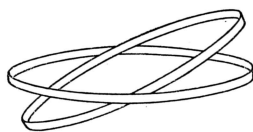
(36)

れてしまっていました。

そこで神は、この組織全体を縦に二つに裂いて、それぞれの截片の真ん中と真ん中を、C ちょうど文字Χ(ケイ)のように相互にあてがい、各自が閉じた一つの円を作るように曲げ、各〻が先の接合点の真向いで、自分自身とも、互いに相手とも結びつくようにしました。そして、同じ場所を一律に回る運動にこれらを巻き込み、そして、二つの円の一方を外側に、他方を内側にしました。さて、神は、外側の運動を「同」の運動だと呼び、内側の運動を「異」の運動だと呼びました。そこで、「同」の運動のほうは辺に沿って D 右向きに、「異」の運動のほうは対角線に沿って左向きに回転させ、「同であり一様であるもの」の回転運動のほうに主権を与えたのです(1)。つまり、この運動のほうは分割されていない一つのままにしておいたのですが、内側の運動のほうは、これを、二倍、三倍の比をなす、それぞれ三つずつある合間に従って、六箇所で裂いて、七つの不等な円に分け、それらの円が互いに逆方向に動くように、また速さでは、三つのものは似ているが、他の四つは、お互いの間でもまた先の三つとも違っているように——とは言っても、これらの運動には比率があるのですが——そのように定めたのでした(2)。

図 2

九

そして、構成者の考え通りに、魂の組織全体が出来上ってしまうと、次にはその身体となるものの全体を魂の E 内部に組み立てて行き、両者の中心と中心を合わせて、適合させて行ったのでした。そして魂は、その中心から

宇宙の果にいたるまで、あらゆるところに織り込まれ、さらに、それのまわり全体を外側から覆い、自ら自分の内部で回転しながら、休みなき知的活動の生を、時間のあらん限り続けるべく、神々しい出発点を踏み出したのです。

37

そして、宇宙の身体のほうは目に見えるものとして生み出されたのでしたが、魂のほうは、そのものとしては見えないものではありますが、数理や調和の一面を具えており、およそ理性の対象となり常にあるところのもののうちでも最もすぐれたもの(3)によって生み出されたのであり、しかも、生み出されたもののうちでも、これはも

---

1 「X」型に交差する二つの閉じた円(図2)のうち、外側のものは、いわゆる「天の赤道」に、内側のものは「黄道」に当る。「黄道帯」が傾斜していることは、前五世紀後半に活動したオイノピデスによって発見されたらしく、いまの場合の内側の円も、「黄道帯」を指すとするほうが正確かも知れない。外側の「同」の運動は天球の日周運動を、内側の「異」の運動は惑星の年周運動を指す(38C sqq. 参照)。前者が「辺に沿って」、後者が「対角線」に沿ってと言われているのは、黄道帯の傾斜を表現したものであろう。天球の日周運動は、われわれが北極の方向に向かって立つ時は右から左へ回転するように見え、事実プラトンも『法律』(VI. 760D)や『エピノミス』(987B)では、これを「左に向う」としているのに、ここでは何故「右向き」と言うのかについては、プロクロス(219F, Diehl, II. p. 258 sqq.)はじめ多々解釈が試みられているが、ここでは渾天儀でも製作しているように、宇宙の外に立つ製作者の視点から語られているのだとするのも、一つの解釈として成立するのではないかと思われる。

2 35Bの図を参照。その七つの項がいまの七つの不等な円に対応し、七つの円はまた、太陽と月を含めた七つの惑星の軌道に対応する(38C sqq.)。

3 「理性の対象となり常にあるところのものの〔うちでも〕」という言葉は、原文では「魂」にも、「数理や調和」にも、「最もすぐれたもの」にもかかりうる。ここでは「最もすぐれたもの」=「宇宙の製作者」にかけて訳したが、この場合、製作者が「理性の対象」たる「イデア」の範疇に入るものだと考える必要はないであろう。むしろ、感覚によって捉えられるような次元のものに対立して言われたのだと解したい。

っともすぐれたものだったのです。

さて、魂は、かの三つの部分たる「同」と「異」と「有」とから混ぜ合わされ、また比率に従って分割され結合され、さらに回り回っては自分で自己自身へと帰ってくるので、それが分散可能な「有」を持った何ものかに触れる場合も、また不可分の「有」を持った何ものかに触れる場合も、いつも自分自身の中を隈なく動いて語るのです——何かが、何と同じであるにしても、何から異なっているにしても、とにかくそれが、そもそも特に、

B 何との関係で、どこで、どのようにして、いつ、生成する領域の各〻のものに対して、また、常に同一を保つものに対して、そのそれぞれ〔同じ・異なる〕であったり、それぞれの状態になったりするような結果となるのかを語るのです。そして、「異なっているもの」についても、「同じであるもの」についても、変らず真として成立する言論が、自分自身によって動かされるものの中を、声も音もなく運ばれる時、一方それが感覚の対象にかかわり、「異」の円が正しく進行して、それ(宇宙)の魂全体に、これを伝える場合には、確実で真なる思わく・所信が

C 生まれ、他方また、推理計算の対象となるものにかかわり、「同」の円がなめらかに動いて、これを明らかにする場合には、必然的に、理性・知識が完成されます(1)——ところで、およそ存在するもののうちでも、これらの二者がその中に生じる当のものを、もしも魂以外のものだと言う人があるなら、その人の言うことは、とにかく真実でないことだけは確かです。

一〇

ところで、このようにして生まれて来たもの(宇宙)が生きて動いていて、永遠なる神々の神殿(2)となっているの

を認めたとき、それの生みの父は喜びました。そして上機嫌で、なおもっとよくモデルに似たものに仕上げよう
D
と考えたのです。すると、モデルそのものは、まさに、永遠なる生きものとしてあるので、そのようにまたこの万有をも、できるだけそれと同性質のものに仕上げようと努めました。ところで、かの生きものの場合は、その本性まさに永遠なるものだったのでして、そのような性質は、じっさい、生成物に完全に付与することのできないものでした。しかし、永遠を写す、何か動く似像のほうを、神は作ろうと考えたのでした。そして、宇宙を秩序づけるとともに、一のうちに静止している永遠を写して、数に即して動きながら永遠らしさを保つ、その似像をつくったのです。そして、この似像こそ、まさにわれわれが「時間」と名づけて来たところのものなのです。
E
というのは、昼も夜も、月も年も、宇宙が生じるまでは存在しなかったのですが、神は、宇宙が構成されると同

1　こうした宇宙の魂の働きとその対象との関係については、35B注1、補注B(一八二ページ)を参照。また、「同じ」「異なる」が魂の根本的な働きのように言われている点については、『ソピステス』259A sqq. を参照。なお44A参照。なお37Bの「自分自身によって動かされるもの」を「魂」とする解釈者も多いが、そうするとすぐ次の「それの魂」の「それ」の指す対象が不明になるので、コンフォードに従って、「それ」は宇宙を指し、宇宙が「生きもの」の意で、「自分自身によって動かされるもの」と言われているのだと解したい。

2　「神殿」と訳したἄγαλμαは、元来「栄光」「喜び」「〔特に神を喜ばせるものとして献げられた〕贈り物」「〔特に神をたたえて作られた、神の〕像」などの意の語。これを「像」「似像」と解し、宇宙はイデアの似像なので、「永遠なる神々」をイデアと解する人(Martin, II. pp. 50 sqq.)もあるが、プラトンがイデアを神々と呼んでいる例はほかには見当らず、テキストを疑う人(Taylor, *Comm.* p. 186)もある。確かに「永遠」という語は、ここでは、宇宙のモデルたる思考対象の生きものについてのみ言われうるとされているが、40Bでは、生成物たる恒星もまた「神的で永遠なる神々」と呼ばれ、総じて星々は「神々」と呼ばれているので(41Aほか)、コンフォードに従って、「永遠なる神々」はこれから話題となる「天体」と解し、ἄγαλμαは「神殿」と訳す。

(37) 38

時に、それらが生じるように仕組んだからです。そして、これらはすべて時間の部分なのですし(1)、また、「あった」や「あるだろう」も時間の相(種)として生じたものなのです。ところがわれわれは、知らず知らずのうちに誤って、これらの言葉を永遠の有に適用しているのです。つまりわれわれは、そうした有があったとも、あるとも、あるだろうとも言っているのですが、正しい言い方では、ただ「ある」だけがそれに該当するのでして(2)、「あった」と「あるだろう」とは、時間の中を進行する生成について言われるのがふさわしいのです。――というのは、後二者は動きにほかならないからです。しかし、不動の状態で常に同一を保っているものの場合は、時間の経過とともに年とって行くことも若くなり行くこともなければ、かつてなったことも、いまなってしまっていることも、また、今後あるだろうこともなく、総じて、生成ということが、感覚内で運動している事物に付与するどんなことも、そうした同一を保つものには該当しないのです。むしろ、それらのこと〔「あった」「あるだろう」「なり行く」など〕は、永遠を模倣し、数に即して円運動をして行くところの時間の様相として生じたものなのです――。なおまたこのほかにも、われわれは次のようなことを言っています。つまり、「生じた(もしくはなった)ものは生じたのである」とか、「生じつつあるものは生じつつあるのである」とか、さらにまた「生じる B であろうものは生じるであろうものである」とか、「あらぬものはあらぬのである」(3)とか言っているのですが、このような言い方はどれも正確ではありません。こうしたことについては、しかし、この場で詳論するのは、多分、時宜を得たものとは言えないでしょう。

二

しかしそれはともかくとして、時間が宇宙とともに生じたのは、何しろ両者はともに生み出されたのだから、またいつかそれらに解体ということが何か起こる場合にも、やはり両者がともに解体するようにということだったのですし、また、時間が「永遠」をモデルとして生じたのは、宇宙ができるだけかの〔宇宙の〕モデルに似 C たものであるようにということだったのです。というのは、モデルのほうは全永遠にわたって、あるものなのですが、宇宙のほうは、これはこれで、全時間にわたって終始、あったもの、あるもの、あるだろうものだからです。

さて、時間が生み出されるために、神が時間の生成に対して考えた、その計算と意図から、太陽と月と、その他「惑星(彷徨する星)」という呼び名を持つ五つの星々[4]が、時間の数を区分し、これを見張るものとして生じた

---

1 「時間」が天球や諸惑星の、無限に反復する連続的な円運動と不可分のもののように考えられている点については補注D(一八七ページ)を参照。少し後の箇所(38B)で「時間が宇宙とともに生じた」とあるが、それは、宇宙生成以前の、として表現されている、無限定的な素材だけの世界(30A, 52D sqq.)に、「前—後」を区切るいかなる定点も存在しえず、従って「時間」と言えるものも存在しえないという意に解される。

2 この言葉は、パルメニデスの言明「〔あるものは〕あったこともなく、あるだろうこともない」(Fr. 8, (DK))を思わせる。

3 『ソピステス』で「あらぬもの」を「異なるもの」(「……でない、別のあるもの」)としておきながら、ここでそれを知らないような言明がなされている点に注目して、本篇はプラトン自身の説を述べたものでないとする説(Taylor, *Comm.* p. 189)や、本篇は『ソピステス』以前に書かれたとする説(「解説」二七〇ページ参照)もあるが、このOwenが反駁を試みたコンフォード説(Pl. *Cosm.* p. 98)に従って、いまの「あらぬもの」は、端的な意味での「非—存在」の意に解したい。

4 七つの惑星のうち、ここに挙げられた月・太陽・金星・水星以外の三つの星は、「クロノスの星(土星)」「ゼウスの星(木星)」「アレスの星(火星)」である(『エピノミス』987C参照)。

(38) のでした。そこで神は、そのそれぞれの星の身体を作ってしまうと、それらを、「異」の循環運動がめぐっている、あの回転〔もしくは円軌道〕運動へと置きました。つまり、七つある円軌道へ、七つある身体を置いたのです D が、この場合、月は地球をめぐる第一の円軌道へ、太陽は地球の彼方の第二番目に位する軌道へ、また暁の明星(金星)と、いわゆる「ヘルメスに献げられた星」(水星)とは、速さにおいては太陽と歩調を揃えて回転しながら、しかし、太陽とは逆に向かう力[1]を賦与されている軌道に置いたのでした。だから、太陽とヘルメスの星と暁の明星とは、同じように、互いに追いついたり追いつかれたりするのです。しかし他の星々については、神がいったいそれらをどこに据えつけたのか、またそれがどんな理由によるのか、もしもそのすべてを詳述するとすれば、E そんな話は余談に過ぎないのに、その目的たる本論よりもよほど厄介な仕事になるでしょう。

だから、それらのことについては、多分また後で暇な時に、しかるべき説明が与えられることになるでしょう。しかしとにかく、共同して時間をつくり出さなければならなかった天体の一つ一つが、自分に似合った運動にたどりつき、生きた(魂を持てる)絆で体を結ばれて生きものとなり、課せられた役目を理解してしまうと、いよい 39 よ、あの「異」の運動——これは傾斜しており、「同」の運動と交叉し、これの統制を受けているものだったのですが[2]——それに従って回転し始めたのです。そのあるものは大きな円を、あるものは小さな円を、また、小さな円を行くものはそれだけ速く、大きな円を行くものはそれだけ遅く周行しながら。ところが、最も速く周行するものは、本当はそれより遅く周行するものに追いつくわけですが、しかし「同」の運動のために、逆に追いつかれるように見えました。というのは、「同」の運動が、それらの円全部を螺旋状に捩じ曲げることになり—— B 何しろそれらの円は同時に相反する方向に向かって二重の前進運動をすることになるのですから——そのために、

本当は「同」の運動から遠ざかって行く度合の最も遅いものが、逆にこの、一番速く動く「同」の運動に最も近い距離を保っているような外観を呈したからです。(3)

そして、それらの相対的な遅速の度合に何か目立った物差しが与えられるように、また八つの運動体が進行していけるように、神は地球を基準として第二番目に当たる軌道に光を点じました。(4) これが実は、いまわれわれが太陽と名づけているところのものにほかならないのですが、神がそのようにした目的は、それが宇宙を最大限に

---

1 「太陽とは逆に向かう力」については多々解釈がある。(1)これら二惑星が太陽とは逆方向に年周運動を行なうことを言っているのだとする説。(2)年周運動ではこの二惑星も、他の惑星と同様、西から東に向かうが、速さにむらのあることを意味しているのだとする説。(3)この二惑星の留（りゅう）や逆行の現象と結びつけてこの言葉を解そうとする説など。しかしこれらについては、補注E（一八八ページ）を参照。

2 バーネットのテキスト ἰούσης....κρατουμένης (39 A 1) を、コンフォードに従って ἰοῦσαν....κρατουμένην に変更する。また、「異」の運動が「同」の運動の「統制」を受けているということの具体的な意味については、次注を参照。

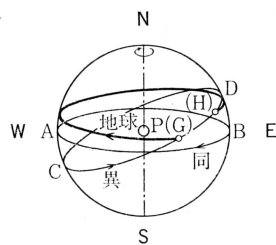
3 「螺旋状」については、図3を参照。「同」の円をAB、「異」の円をCDとし（これは七つに分かれるが、それらは半径を異にするだけなので、一つで代表させる）、CD上の一点Gに、惑星Pがあるとする。「同」の円ABが東から西へ日周運動で一回転する間に、Pが「異」の円CDの西から東への年周運動で、Hに達するとすると、Pは、年周運動と同時に日周運動をするので、ABが一回転する間に、太線で描いた螺旋状の運動をする（これは、プロクロス 263 A sqq. Diehl, III. pp. 78 sq., カルキディウス Note, CXI その他近代の解釈者もほぼ一致して取っている解釈）。「最も速く周行するものが、それより遅く周行するものに、追いつかれるように見える」というのは、同じ図で、GからHへの距離が大きければ大きいだけ、BからAに向かう速さが遅くなるの意。

N
W A 地球 P(G) (H) D B E
C 異 同
S

図 3

4 この言葉は、太陽が目立って明るいことを、比喩的に言ったものと解したい。

(39) 限なく照らし、そして、しかるべき動物すべてが、「同にして一様なもの」の回転運動から学んで、数を分有するようにというところにあったのです。

C さて、このような仕方で、またこのような理由で、夜と昼という、単一で、最も知的な円運動の周期が生じたのでした。また、月が自分の円を一巡して太陽に追いつく時には歴月が、また、太陽が自分の円を回り了える時に歴年が生じます。しかし、他の星々の周期というものには、数ある人たちのうちでも少数者は例外として、人人は気づいていないので、これに名づけてもいませんし、また、その相互関係を数で比較測定して考察するということもしていないのです。だから、それらのものの彷徨が手のつけようもないほどの数のもので、また驚くほ

D ど込み入っているとしても、やはり時間には違いないのだということを、かれらはまずは知らないのだと言っても差支えないでしょう。しかしそれでもなお、八つの循環運動の相対的な速さ(周期)が同時にその行程を完了して大団円に到達する時、時間の完全数が完全年を満たすのだということは——そしてこの場合、計算の単位となるものは「同にして一様に運動するもの」の円なのですが——このことは十分に了解できることです。(1)じっさい、このようにして、またこのような目的のために、星々のうちでも、天を通って進行するさいに回帰

E 点を持つものが生み出されたのでした。それはこの万有が、「永遠」を模倣するという点で、あの完全な理性対象の生きものに、できるだけよく似るためだったのです。

一二

そして、もうすでに、時間が誕生するに到るまで、他の点では、この宇宙も、なぞらえられた当のモデルに似

たものにつくり上げられていたのでしたが、しかしまだ、すべての生きものが自己のうちに生じていて、それを包括するには到っていなかったので、その点ではなお似ていませんでした。そこで、神は、作品のその残された部分を、モデルの本来あるがままに、その通りに象ってつくり上げようとしました。そしてその場合、「まさに生きものであるところのもの（モデルとなる、理性の対象たる生きもの）」のうちには、どのような種類（相）が、どれだけ含まれているものなのかについて、理性が展望し得る限りの種類と数に対応するものを、この万有もまた含まなければならないと神は考えました。そうすると、それは四つあることになります。一つは天の種族で、

40 これは神々（天体）から成るものです。もう一つは、翼を持ち、空中を飛翔する種族。第三は水棲族。陸棲の歩行する種族が第四番目です。さて、神的な種族の姿は、できるだけ輝やかしく美しく見えるようにと、これを主として火から作り上げ、また万有に似せてまんまるくし、そしてこれを、至高のものの知的活動(2)へと置いて、この至高のものの同伴者たらしめたのですが、そのさい、この種族を全天一面に配分し、それが天の文字通りのコス

1　「時間の完全数が完全年を満たす」というのは、ここに記されているように、八つの周期の最小公倍数が完全年の長さであることを意味する。この完全年を、『ポリティコス（政治家）』（268 E sqq.）の神話と結びつけ、その終りは何らかのカタストローフを伴うものだと解そうとする説もあるが（Adam, *The Republic of Plato*, II. p. 298）、そのようなことを示唆するものは、少なくとも本篇には見当らない。太陽暦と太陰暦のずれを調整するために「大年（μέγας ἐνιαυτός）」を導入しようとする試みは、すでに前六世紀の頃からあったらしいが、この調整をすべての惑星についても考えるという程度のことが、ここで言われているのではないかと思われる。なお、諸惑星が黄道帯を一周する期間について、プラトンの弟子エウドクソスは次のような数値を与えていたらしい。水星―一年。金星―一年。火星―二年。木星―一二年。土星―三〇年（シンプリキオス『天体論注釈』496）。

2　「同」の運動を指す。

モス(飾り)となって、全体にわたってちりばめられているようにしたのでした。そして運動としては、二種のものだけを、天の種族の各々に結びつけました。その一つは、同じ場所を一律に動く運動で、これはその種族のものが、つねに同じ事柄について、終始変らず同じことを考えるものであるのに対応します。いま一つは前進運動ですが、これは当の各々のものが、「同にして一様なもの」の回転運動によって支配されているのに対応するわけです。しかし、〔他の〕五つの運動(1)については、神はこの種族の各々を、そのような運動については不動の静止したものにしました。それはこうしたものの各々ができるだけよいものであるようにということのためだったのです。

B

このような原因から、まさに、星々のうちでも、神的で永遠なる生きものとして、同じ場所を一様に回転しながら、つねに変らずとどまっているところの恒星(彷徨することのないもの)すべてが生まれたのでした。これに対して、回帰運動をしたり、また先に言われたような意味で彷徨したりする星は、前に述べられたようにして生じたのです。

また、神は大地を、われわれの養い手であるとともに、万有を貫いて延びている軸のまわりを旋回しながら(2)、夜と昼とを作り出して、これを見張るものに仕組んだのでしたが、この大地こそ、およそこの宇宙の内部に生じた限りのすべての神々(天体)の中でも、最初のものであり、最年長者であったのです。

C

ところで、これら天体そのものの舞踊(=周行運動)と相互の並列、またそれらの円の相対的な逆行(3)と前進、さらに合においてに、神々のうちのどんなものが一直線上に並び、またどれだけのものが対蹠点に来ることになり、そして、どういうものが、どれだけの期間をおいて、お互いやわれわれの面前に立ちふさがり、そのために各々

D　のものがその後方に隠されたり、再びあらわれて、計算で予測することのできない人々に、恐怖だとか、未来に起こるであろうことの兆だとかを送ることになるのか[4]――このようなことについては、これらのものの、これまた模型となるものを見ずにお話ししても、それは徒労というものでしょう。それより、こういったことは、もう以上の通りで十分であって、目に見え、生み出される神々の本来の成り立ちについての話は、これで終ったということにしておきましょう。

一三

そこで今度は、その他の神霊のことですが、その生まれを語ったり識ったりすることは、われわれの分際では及びもつかないことですから、以前にこのことを語った人々を信用しなければなりません。何しろ、かれらは自称、神々の子孫であり、どうやら自分たちの祖先のことを詳しく知っているらしいのですからね。ともかく、か

1　上、下、左、右、後に向かう運動(34A注1参照)。

2　「旋回しながら」というのは、地球が天球の「同」の運動や、黄道の「異」の運動に引きずられないように、それらに抗して軸のまわりを回ることを意味しているのだと解したい。補注F(一九二ページ)を参照。

3　「逆行」はおそらく、火星・木星・土星の三外惑星が、太陽・金星・水星のグループからしだいに遠ざかることを意味するのであろう。補注E(一九一ページ)参照。

4　「合」と訳した原語 σύναψις(40C6)は、「結びつき」「接触」を意味するが、ここでは、地球から見て、二つの天体が同一直線上に来ることを意味するのであろう。しかもまた、「お互いやわれわれの面前に立ちふさがり……恐怖だとか、未来に……」と言われているところから見て、実際には、月蝕や日蝕時の、月・太陽の位置に言及しているものと思われる。

(40) E れらの話に、何かそれらしい証明や、必然的な証明がなくても、神々の子らに不信の念を抱くことはできません。いやむしろ、かれらが、自分たちの近親のことを報告しているのだと主張しているのだと解し、慣例に従って、その言うところを信用しなければならないのです。そこで、かれらの言をそのまま受け入れて、われわれにとっても、これらの神々についての系譜は、名実ともに次のようなものとしておきましょう。――ゲー（大地）とウゥラノス（天）とから、その子オケアノスとテテュスが生まれた。そして後二神から、ポルキュスとクロノスとレアと、ま

41 たその仲間らが生まれた。そしてクロノスとレアから、ゼウス、ヘラ、およびかれらの兄弟としてわれわれには周知の神々すべてが生まれ、なおまた、その他かれらの子孫も生まれた(1)――と。しかし、それはともかくとして、その周行の歴然たる神々も、自分の望む期間しか姿をあらわさない神々も、すべてが誕生した時、この万有を生んだ神は、かれらに向かって次のように言うのでした――

「神々よ、私がその作り主となった神々(2)、私がその父となった作物は、私によって生じたものであるから、私の

B 意志なしには解体されえない。まことに、結ばれたものはすべてまた解かれうる。しかし、見事に調和をもって組み合わされ、好調なるものを解こうとするのは悪しきものの意志である。それ故に、あなた方は生ぜしめられたものであるからには、まったくの不死なるもの・まったくの解かれえぬものではないのであるが、しかしあなた方は、解体を受けることも、死の定めに会うこともけっしてないであろう。あなた方が生まれた時に結ばれたかの絆よりも、さらに大いなる、さらに権威ある絆として、私の意志をあなた方は受けるからである。それではいま、私があなた方に、告げ語ろうとするところを解してもらいたい。死すべき定めの種族三つが、未だに生成されずに残っている。しかるに、これらのものが生じないでは、宇宙は不完全なものとなるであろう。何故ならば、そ

C のような時には、宇宙は自らのうちに、生きとし生けるものの全種族を含むことにならないであろうが、もしも宇宙が十分に全きものたろうとすれば、全種族を含まなければならないからである。しかし、私によってそれらのものが生まれ、生命に与るならば、神々にも等しきものとなるであろう。従って、あなた方は、それらの種族が死すべきものとなるよう、この万有が真に万有となるよう、あなた方の本性に従い、私があなた方を生み出した時の働きに倣いながら、かの生きものの製作に向かうがよい。かの生きものには、不死なるものと名を等しくするにふさわしい部分があり、神的と呼ばれ、[3] これは彼等のうちでも、常に、進んで正義に従い、あなた方神々

D に従おうとするものの導き手となるのであるが、その部分については、私が種を播き、手始めをなした上で、あなた方にゆずり渡そう。その余については、あなた方が、不死なる部分に死すべき部分を撚り合わせ、生きものをつくり上げて生み出し、糧を与えて生長せしめ、衰えれば、これを再びあなた方の手に受け入れるがよい」

一四

こう言って、神は、前に万有の魂を調合して混ぜ合わせるのに使ったあの杯にもう一度向かって、それへ、前

---

1 「自称、神々の子孫」とは、オルペウスやムサイオスのことを指すのであろう(『国家』II. 364E 参照)。オルペウス教のものとされる宇宙生成説には、ヘシオドスの『神統記』に由来するものが見られると言える。

2 この箇所の構文は判然とせず、「神々の神々よ」とも読めるのであって、「神々の神々」が何を意味するのかについては多々議論がある。しかし、その困難を避けるために、一応ここに訳したように読んだが、どのように読んでも不自然さが残るように思われる。

3 この神的な部分は、もちろん、魂を指す。しかしこれは、魂の一部分であって、「死すべき種類の魂」が、69 C sqq. で、天体なる神々によってつくられることになる。

回に使った材料の残りを注ぎ入れました。そしてこの時も、何か以前と同じような方法で混ぜ合わせたのですが、しかし、今度はもはや、前と同じほど純粋な仕方においてではなく、それは純度において、二段も三段も劣るものだったのです。

E　そして、全体を構成してしまうと、それを星と同じ数だけの魂に分割し(1)、それぞれの魂をそれぞれの星に割り当て、ちょうど馬車にでも乗せるようにして乗せると、この万有の本来の相(すがた)を示して、かれらに運命として定められた掟を告げたのです。——すなわち、初代の出生は、すべての魂に対してただ一種のもののみが指定されるであろうが、それはいかなる魂も神によって不利な扱いを受けることのないためである。そして、魂はそれぞれにとってしかるべき、各ゝの時間表示の機関(惑星)へと蒔かれ、生けるもののうちでも、敬神の念最も篤きもの

42　(人間)に生まれなければならない。しかし、人間の性には二通りあるが、そのすぐれたほうのものは、後にはまた「男」と呼ばれているであろうような種類のものである。かくて魂は身体の中へ必然的に植えつけられることになり、そして、その身体に、去来してつけ加わったり離れたりするものが出て来ることになるが、そのような場合には必然的に、まず第一には、すべての魂に一様な感覚が、無理強いされた受動の状態から、生まれつきのものとして生じることになり、第二には、快苦と混り合った愛欲が、さらにまたそれに加えて、恐怖や怒りや、

B　その他それらに付随するすべてのものや、また、それらとはもともと反対の性質のものすべてが生じるであろう。そして、そのようなものを克服するならば、正しい生き方をすることになるであろうが、逆に自分たちのほうが征服されるなら、不正な生き方をすることになるであろう。そして、しかるべき時間を立派に生きたものは、自分の伴侶なる星の住処に帰って、幸福な、生来の性に合った生活をすることになるであろうが、それに挫折すれ

ば、第二の誕生で女の性に変るであろう。また、そのような状況にあって、なおも悪を止めることがないなら、C その悪くなるなり方が、いかなる性格のものであるのか、その性格の成り立ちに応じて、何かちょうど、それに類した野獣の性に変化し、次のような状態にいたるまでは、変転を重ねて、苦労の絶えることがないであろう。すなわち、自分自身の内部にある、「同にして一様なるもの」の循環運動の中へ、後からそれにくっついて生じ D た、火、水、空気、土の大きな集団を巻きこみ、その騒々しい、理(ことわり)を弁えないのを、言論によって制御し、最初の、最も善い状態の姿に行きつくようになるまでは——と。

神は、かれら各々の今後の悪に対して、自分には責めのないように、以上すべてのことを掟として、かれらに申しわたしてしまうと(2)、かれらのある者は大地に、ある者は月に、またある者は、その他すべての時間表示の機関(3)

1 星に割合てられた魂は、いつも同じ数だけあることを意味しているように思えるが、魂は不滅である故に多くなることも少なくなることもなく、つねに同じ数だけあるという『国家』(X. 611A)の言葉を参照。

2 神が、地上の肉体に入る前の魂にこのような掟を告げることについては、『国家』(X. 617D〜E)の、同様の物語を参照。そこでも「神に責めなし」という言葉が語られている。

3 魂が他の惑星にも蒔かれた、というこの言葉は、地球以外のすべての惑星にも、理知を持った生きものが存在することを意味しているようにも思われる(Taylor, *Comm.* p. 258はこの説を取る)。確かにピュタゴラス派の場合は、ピロラオスを含むある人々が、月にも動植物がいたと考えていたらしいことは、アイティオス(II. 30, 1, I. 404(DK))が証言しており、カルキディウス(Note, CC)もまた、ピュタゴラス派について同様の証言をしているが、しかし、それに続けて、プラトンの場合は、魂の全部が一度に身体に入るのではなく、直ちに地上に誕生するもののほかは、他の惑星で順番を待っているのだと言っており、コンフォード(*Pl. Cosm.* p. 146)もこの説を取っている。しかしこのような推測を裏づける積極的な傍証になるようなものは、少なくとも、本篇にはどこにも見当らず、このことはテイラー説の場合も同様である。

(42)
(惑星)へと蒔きました。そして、この播種がすむと、次のような仕事は、若い世代の神々に托したのでした。
——すなわち、死すべき身体を形づくること。また、人間の魂のうちでなおもつけ加わって生じなければならな
E
かった残余の部分と、それに付随するすべてのものをつくり上げて、これを支配すること。そして、死すべき定めの生きものを、それが自分で自分の悪の原因となる場合は別として、できるだけ立派に、よく、操って行くこと——。

一五

そして神は、これらすべてを手配してしまうと、もうさっそく自分の性に合った、常の生活にもどって、そのままとどまっていたのでした[1]。しかし、神のほうはそのままとどまっていても、神の子らは、父の指令を了解してそれに従いました。そして、死すべき定めの生きものの、不死なる始原を受け取ると、自分たちをつくってく
43
れた製作者に倣って、火、土、水、空気それぞれの部分を宇宙から、いずれまた返却するという条件で借り受け、それらのものを手にとって、一つにくっつけて行きました。しかし、そのさいには、かれら自身が結び合わされた、あの解けない絆を用いたのではなく、ただ小さくて目に見えない締め釘をびっしり打って熔接して行き、どの身体も、その一つ一つを、材料のすべての種類を使ってつくり上げ、不死なる魂の循環運動(あるいは軌道)を、流れの満ち干きする身体の中へさし入れて、これに結びつけるようにしたのでした。
そして、魂の軌道のほうは、〔流れをなす〕河の中に結びつけられると、その強大な河を、自分のほうが打ち負かすというわけでもなく、かと言って、打ち負かされるのでもなく、無理やりに運ばれたり運んだりしましたか

B ら、その結果、生きものの全身が動くことにはなりましたが、しかし六つの動きの全部を得て、秩序もなく、比率もなく、出放題に進むことになったのです。つまり、それは、前に後に、また右に左に、上に下に、はてはあらゆる方向に、六通りの領域を彷徨（さまよ）いながら進んだのでした。(2)

というのは、氾濫したり退いたりして、養分をもたらしてくる濤（なみ）も大きかったのですが、それに加えて、さらにもっと大きな騒ぎを、それぞれの生きものにぶつかって来るいろいろのものの及ぼすさまざまな影響（あるいは、C ぶつかって来るいろいろなものの諸性質）がつくり出していたからです。すなわち、何かある生きものの身体が、外から来るよその火にでくわして衝突したり、あるいは、土の堅い塊や、水の湿ったすべっこい面にぶつかったり、またあるいは、空気によって運ばれて来る突風に襲われたりして、そしてそれらすべてのものが原因となって、そのいろいろの動きが身体を通りぬけて魂にぶつかるという場合がそれなのです。――そして、このような動きこそ、いま言ったような理由からして、後に一括して「感覚（アイステーシス）」と呼ばれることにな

---

1 「神は……常の生活にもどって、そのままとどまっていたのでした」という訳は、Cook-Wilson (*On the Interpretation of Plato's Timaeus*, p. 88) に従ったもの。原文を直訳すると、「……手配してしまうと、そのまま……常の生活（もしくは、いつもの習慣）に止まっていた」となる。従って、たとえばアーチャー・ハインドは神は手配を終えた後だけでなく、その前にも止まっていたのだとして、神は「自己自身を多の中に顕現しながら、やはり単一の中に止まる」という、特有の解釈を下し（*Tim.* p. 147）、コンフォードは逆に、神は、自分の活動の範囲を越える作業を、若い神々に委ねた後、自分の固有の活動をそのまま続けていたのだとして、創世記の神が七日目に休んだのと対比している（*Pl. Cosm.* p. 147）。しかし「止まっていた」という、未完了過去形は、クック・ウイルソンに従ったわれわれの訳のようにも読むことができるはずである。

2 これは嬰児の動作を言ったものであろう。

(43) ったのですし、またいまもなおそのように呼ばれているというわけなのです(1)――。

そしてとりわけ、いまお話ししているこの場合には、そのような動きは、絶え間なく流れている、かの水路(養分の流れ)といっしょになって、魂の循環運動(あるいは軌道)を激しく動かしたりゆすぶったりして、当面のと D ころではもっとも広範囲にわたる、もっとも強力な動きをもたらしたのでして、一方では「同」の軌道とは逆方向に流れることによって、これをまったくのがんじがらめに縛り上げてしまい、進行することも支配することもできないように阻止するとともに、また他方では「異」の軌道を、これもまた混乱に陥れてしまいました。その結果、それぞれ三つずつある、二倍、三倍の比をなす合間をも、またそれらを結合する鎖となる、二分の三、三分の四、八分の九の比をなす中項をも――とにかくこれらは、それを結合した当の神によるのでなければ、完全 E に解かれることはなかったのですが――これをありとあらゆる仕方で捩じ曲げ、またそれらの中に、およそ円の歪曲・破壊として可能な限りの、ありとあらゆる種類のものをつくり出したのです。従って、それらの軌道はどうにかこうにか相互にくっついて運動してはいたものの、その運動には比率というものがなく、ある時には後向きになり、ある時は横道に逸れ、ある時は逆立ちをするという始末だったのです。それはちょうど、人が逆立ちをして頭を大地の上に支え、足を上にして何かに凭せかける場合、そのような状態にあっては、逆立ちしている当人と、それを見ている人々の双方いずれにとっても、相手の右側が左側に、左側が右側に見えるようなものなのです。

いや、じっさい、魂の回転運動も、これと同じか、あるいはこれに類した他の甚大な被害を蒙っているのでし 44 て、だから、それは何か外部のもので、「同」の類に属するものや、あるいは「異」の類に属するものにでくわ

す場合には、これを何かと「同じ」だとか、何かとは「異なっている」とか呼びはしますが、それが事実とはおよそ逆なので、こうして魂の軌道は、誤ったことを言う愚かなもの(理性を失ったもの)になっているというわけなのですし、またこのような場合、それらの軌道の中では、どれ一つとして支配しているものも指導しているものもないのです。しかし何らかの感覚が外部からやって来て、それらの軌道にぶつかり、魂の容器全体までもいっしょに引っぱって行く場合には、魂の軌道は、本当は支配されているのに、まるで支配しているかのように見えるものです。そしてじっさい、このようなことすべてを受けなければならないので、魂は、死すべき身体へと

B 結びつけられた当初においても、またいまでも結びつけられるその度ごとに、まず最初は愚かな(理性を失った)ものになるわけです。

しかし、成長と養分の流れの襲来がいくらか衰え、魂の循環運動(あるいは軌道)がふたたび平静を取り戻して自分自身の道を進み、そして時とともにしだいに安定して来る時、その時にはやがてそれらの軌道は、それぞれの円が自然に動く時に描く形をとるように正され、「異」をも「同」をも正確に呼ぶことになって、こうして、魂の所有者をして思慮あるものとなるようにするのです。

そこで、もしもまた、何らかの正しい養いが教育に寄与してくれるような場合には、人は最大の病[2]を逃れて一

C 点非の打ちどころのない、完全に健全な者となります。しかしそれをなおざりにすれば、終始、跛の生涯を送っ

---

1 多分、「感覚(αἴσθησις)」がἀΐσσω(突進する、急速に動く)という動詞と関係づけられているのであろう。

2 「最大の病」が「理性を失った状態」すなわち「愚かであること」を意味するものであることは、いままでの分脈からも明らかであろう(なお86B、『法律』III. 691D参照)。

(44) た挙句、不完全(あるいは秘儀を受けないまま)で、また愚かな(理性を失った)ままで、いま一度冥府(ハデス)へと戻って行くことになるのです。

しかしこんなことは、またいつか後に起こる話なのです。われわれは、当面問題となっている事柄のほうをもっとくわしく話さなければなりません。そしてその話をするための予備事項、すなわち身体の各部分ごとの成り立ちについて、また魂についても同様、それらが生じたのは、どんな原因によってなのか、また神々のどんな先 D 先への配慮によってなのかを、最大限にありそうな言論に縋るようにして、その方針をたどりながら詳述して行かなくてはなりません。

一六

さて、神々は、二つあるこの神的な循環運動を、万有の形がまるいのに倣って、球形をした身体に結びつけました。これこそわれわれがいま「頭」と名づけているところのものでして、最も神的なものであり、またわれわれのうちのいっさいのものに君臨するところのものなのです。そして神々は、その頭に奉仕するものとしてまた、身体の全体をひとまとめにして与えました[1]。頭というものが、将来あるはずのすべての運動に関与することになると気づいたからです。そこで頭が地面の上を転がって行って、──何しろ地面と言えば、これはありとあらゆ E る山あり谷ありのものなのですから──その高いところを乗り越えたり、凹んだところから抜け出したりするのに困ることのないよう、それに乗り物として身体を与えて、動きやすいようにしてやったわけなのです。だから身体は縦に長くなっているのですし、またそれは屈伸できる四肢を生やしましたが、これも行進できるようにと

の神の工夫によるものなのです。つまり、そういう四肢を使って、摑んだり、自分を支えたりしながら、それは、45 最も神的な、最も聖なるものの住居をわれわれの天辺にいただいて運びつつ、あらゆる場所を通って進んで行けるようになったのです。

さて、このようにして、また以上のようなわけで、誰にも脚と手がつけ加わって生えたのです。ところが神々は、後方よりも前方の方がいっそう尊く、また指導役として、よりふさわしいと考えましたから、われわれの進行を、おおむねその方向に向かうようにしました。そこで人間は、その身体の前部が〔後部とは〕区別され、違っていなければならないことになりました。だから神々はまず、頭の鉢ではそちらの側に顔を取り付け、魂がどんな先々への配慮でもできるように、いろいろな器官をその中に固着し、そして、指導の任にあずかるのは、この B 本来的に前である側だと定めました。ところで神々は、いろいろな器官の中でも、一番はじめに、光をもたらすものとして眼を造作してまとめ、これを固着しましたが、それには次のような原因を用いたのでした。(2) すなわち、火のうちには、焼く力は持っていないけれども、穏やかな(ヘーメロン)光――つまり、日ごとの昼間(ヘーメラー)に固有の光――をもたらすという性質のものがあるので、神々は、およそそういったものが一つの身体にな

1 身体が頭に奉仕するものとして、神々の配慮によって与えられたとする、この言葉を、身体の諸部分が偶然に結合して生物の形態が生じたとするエンペドクレスの次のような言葉と比較されたい。
「頸なき頭、生え出でぬ、
肩なき腕、ただひとりさまよいぬ、
額なき眼のみ、さすらいてあり」(Fr. 57 (DK))

2 「原因(αἰτία)」に二種のものがある点については46C以下を参照。ここの「原因」は、神の技術の手段として用いられる「補助原因」を意味する。

るように仕組んだわけなのです。(1) というのは、われわれの内部にもそれと兄弟分の純粋な火があるので、神々はそれが眼を通って流れるようにしたのでして、そのさい、眼の全体もそうですが、特にその中心部を圧縮して、

C これを目のつんだ、なめらかなものにし、それが他の、自分より粗大なものはすべて堰止め、先に言ったような純粋なものだけを、自分が純粋であることによって濾過するようにしたのです。(2) そうすると、視線の流れの周囲に昼間の光がある時には、「似たものが似たものに向かって」出て行って合一し、眼から一直線上に、どの方向にせよ、内から出て行くものが外界で出くわすものと衝突してこれに抵抗を与える、その方向に向かって、一つに馴染み合った身体が形成されました。すると、その身体全体は、等質なものですから、作用の受け方も一様だ

D ということになり、自分自身が何に接しようと、また他の何ものがそれに接しようと、それらのものの動きを、全身を通って魂にまで伝達し、われわれが、それによって見ると言っているところの感覚(視覚)をもたらしたのでした。しかしそれ(視覚の流れ)は、夜が近づいて来て自分と同種の火が退いて行ってしまうと切られてしまうのです。何故ならそれは異質的なものに向かって出て行くことになり、自分のほうが異質化されて消えるからです。何しろ、近所の空気は火を持っていないのですから、それと一体をなして融合したものになることは、もはやないのですからね。だから、それは見るのを止め、さらに眠りを誘うものとなります。というのは、視覚のために神々が考案してくれた保護器官の眼瞼(まぶた)が閉じると、そのような時にはいつでも眼瞼は内部の火の力を閉じ込

E めることになり、その閉じ込められた火の力が、内部の動きを散らばらせて均らし、そしてその動きが均らされると平静が生じ、そこに生じた平静の度が大であれば、ほとんど夢を見ない眠りが襲って来ます。しかし何らかの比較的大きな動きが残っていると、それがどんな種類のものであり、またどこに残っているかに応じて、それ

46 に対応する性質と量の幻像をもたらすのですが、この幻像は、内部で似像として象られるのに、醒めてからは外にあったように思い起こされるものなのです。

ところで、鏡が映像をつくるということや、すべて、そこにものが映って見えるなめらかなものについても、これを理解するのは、もはや少しも難かしいことではありません。すなわち、内外の火の双方が互いに交わるということと、さらにまた、一体化した火が、その都度、なめらかな面のところで形成され、それが幾通りにも姿

B を変えるということがあると、そうしたことから必然的に、先に言ったような映像すべてがそこにあらわれるこ[3]

1 まず「火のうちには……」については、58Cで、火にも幾種類もあるとされている箇所を参照。

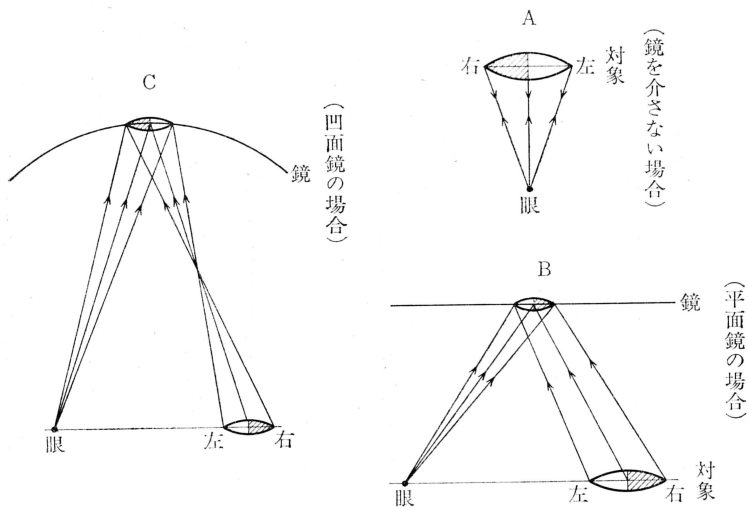
ところで「火のうちには」から「仕組んだわけなのです」までの箇所は、二通りに読むことができる。(1)火のうちでも……穏やかな光をもたらすものを、日ごとの昼間に特有な身体(もしくは物体)になるように仕組んだ。(2)火のうちでも……穏やかな光、つまり日ごとの昼間に固有な光をもたらす火を、一つの身体(もしくは物体)になるように仕組んだ。われわれは(2)を取ったが、この点については補注G(一九五ページ)を参照。なお「物体」とも「身体」とも訳しうる σῶμα を「身体」と訳した点についても同補注参照。

2 こうしたプラトンの説の源として、エンペドクレスの、次のような一節が考えられる。

「……かの時(眼の製作の時)、原初なる火は、薄き布地のごとき膜のうちに閉じこめられ、円(つぶら)なる眼の少女(＝瞳、クーレー)の後にひそみたりき。そが膜は、神業のごときもろもろの孔にて貫かれてあり。かくてそは、瞳のまわりに流るる深き水を堰止め、されど火は、より微細なる故に、外へと貫き出たり」(Fr. 84(DK))。

3 なお、「それが幾通りにも姿を変える」という言葉を、曲った鏡面に見られる像の歪みを意味するのであろうとか(Taylor, *Comm.* p. 287)、また鏡を通じて見られる対象が左右逆になっていることや、彎曲した鏡面上の像の歪みを指すのだろうとか(Cornford, *Pl. Cosm.* p. 155)、いろいろ推測されているが、この言葉は、一般に鏡に映像が見られる理由として言われており、また「幾通りにも姿を変える」と言われているので、これは光の入射角の変化に応じて、その都度それに応じた映像が生じるという意味に解したほうがよいように思われる(Archer-Hind, *Tim.* p. 159)。

とになるのです。つまり、〔見られるものとしての〕顔の火が、なめらかな、光ったもののところで、視覚の火と結び合う場合に、そのような結果が生じるわけです。また、左側が右側に見えるのは、衝突の常則〔鏡を介さないで、対象を直視する場合の、内外の火の衝突の常則〕に反して、視覚の、いつもとは反対の部分に、〔見られる対象の〕反対の部分との接触が起こるからです。しかし、これに反して、右側が右に、左側が左に見えることもありますが、それは視覚の光が、結合する相手のものと結びつく過程で、位置を変える場合に起こるのです。そして c またこのようなことは、鏡のなめらかな面が、左右どちらも高くなっていて、視覚の右の部分を左へ、左の部分を右へ押しやる場合に起こります。しかしこの同じものが顔に対して縦向きの方向に向きかえられる〔上下に彎曲しているようにする〕場合には、それは映像全体を上下あべこべに見えさせます。というのは、これが視覚の光の下側を上側に、上側を下側に押しやるからです。(1)

図 4

さて、以上のものはすべて、神が、できるだけ善いものを完成して行くにさいして、これに役立ってくれるものとして用いる「補助原因者」の一部に過ぎません。ところが大多数の人々は、これを「補助原因者」とは見なさないで、あらゆるものの「原因者〔そのもの〕」と見なしているのです。つまり、ただ冷やしたり、熱したり、凝固させたり、融解させたり、あるいはまた、すべてそれに類した結果を生むだけのものを、すべてのものの「原因者」だなどと考えているのです。しかしこのような事物は、どんなことに対しても、何らの推理作用も理性も持つことのできないものなのです。というのは、およそあるもののうち、理性を持つにふさわしい唯一のものはと言えば、これは魂だと言わなければならないからです。――それに、この魂のほうは不可視のものなのですが、これに対して、火や水や土や空気のほうはすべて、可視的な物体として生じたのですからね。――そして、理性と知識を愛し求める者は、どうしても、知力あるものに属する原因をこそ、第一に追究すべきものなのでして、他のものによって動かされて、また必然的に別のものを動かすというような次元のものに属する原因のほうは、これを二の次にしなければならないのです。(2) そこでわれわれもこの方針で行かなくてはなりません。もちろ

1 以上、鏡に映る像の叙述は、図示すれば図4のようになると思われる。幾何光学がはじめて系統的に扱われたのは、ユークリッドの「光学」のようであるが、しかし、光の入射角と反射角の等しいことは、それまでにも知られていたらしく、プラトンの場合も、少なくともその程度のことは知られていたと思われる。

2 すでに話題に上った「火」(45B sqq.)や、その他「冷やしたり熱したり……」(46D)と言われている物体的な次元の事物が「補助原因者」と言われ、理性を持って目的的に働く「原因者」と区別されている点については、『パイドン』(97B sqq.)を参照。また、物体的なものが「他のものによって動かされて……」と言われて、自己自身のうちに動きの始原を持つ「魂」と区別されている点については、『パイドロス』(245C)、『法律』(IX. 894E sqq.)を参照。

(46) んわれわれは、原因のどちらの種類をも話さなければなりませんが、しかし、理性の助けを借りて、立派なもの善いものを製作する原因と、思考を欠いてただ出まかせのものを無秩序に、その時その時に作り出す原因とは区別しなければならないのです。そこで、眼が、現に賦与されているような機能を持つのに役立った、補助協力的な原因者の話は、これで終ったことにしておきましょう。そして、眼がわれわれに裨益してくれるその最大の働きを——つまり、まさにその故にこそ、神が眼をわれわれに贈り給うた、眼のその働きを——次に話さなければなりません。

47 そこで、わたしに言わせてもらうなら、視覚こそまさに、われわれに最大の裨益をなす原因となっているものなのです。というのは、何しろ、万有を話題としているいまの話にしてみても、仮にわれわれが星も太陽も天も見たことがなかったとしたら、一つも話されはしなかったでしょうからね。しかしじっさいには、昼と夜が見られ、月や年の循環だとか、春分・秋分、夏至・冬至が見られたからこそ、それによって数が案じ出され、また時間の観念と、万有の本性についての探究がわれわれに与えられたのです。そしてこれらのものから、われわれはすべて哲学と名のつくものを手に入れたのですが、これよりも大きな善いものが、死すべき種族に対して神々か

B ら贈られて来ることは、かつてもなかったことですし、また未来においてもけっしてないことでしょう。そこでわたしの言いたいことは、これが眼のもたらす最大の善いものだということなのです。その他のもっと小さな利点は、知を愛し求めることを知らない者(哲学者ならざる者)なら、盲目になった時に「それがために悲しみ、徒(いたずら)に嘆く」(1)のでしょうが、そんな些細なものを、どうしてわれわれが喋々することがあるでしょうか。いやむしろ、われわれとしては、このこと「われわれに視覚が備わっていること」の原因は、次のようなことを目的とした、次

のようなものなのだと言うことにしましょう。――すなわち、その原因は、神がわれわれのために視覚を考案してこれを贈り給うたということである。そしてその目的は、われわれが、天にある理性の循環運動を観察して、

C この乱れなき天の循環運動を、それとは同族であるが乱れた状態にある、われわれの思考の回転運動のために役立てるようにということであり、そして、天の循環運動を十分に学んで、自然本来に即した正しい推理計算の仕方をわれわれが身につけ、こうして、どのようにしても彷徨することのない神の循環運動を模倣することによって、われわれのうちの彷徨した状態にある回転運動を、正常なものに立て直すようにということなのである――と。

そして、音声や聴覚についてもこれまた、同じことを意図して同じ目的のために神々から贈られたのだという、同じ説明が成り立ちます。というのはつまり、言葉にしても、これまたいま言ったまさにその目的に充(あ)てられて

D いて、それに最大の寄与をなしているのですし、文芸(ムゥシケー)のうち、すべて、音声を聞かせる用をなす[2]分野のものにしても、これまた、諧調(ハルモニアー)[3]のために与えられているのです。そして、この諧調というものは、われわれのうちにある魂の循環運動と同族の運動を持っているものなのでして、いやしくも理性に与(あずか)り、

---

1 エウリピデス『フェニキアの女たち』一七六二行を引用したものであろう。

2 バーネットのテキストの φωνῇ (47D1) を φωνῆς (Y写本、コンフォード)に変更し ἀκοὴν にかける。

3 「ハルモニアー(ἁρμονία)」は、二つ以上の音が協和音をなして同時に発せられる「和声」を意味するのではなく、むしろ「楽器の絃の調子を整えること」を意味し、また「調子の整え方」「音階」を意味するが、しかしまた比喩的に「調和」の意にも用いられる語。

(47) その上で詩神たち（ムゥサイ）と交際を持つほどの人にとっては、それは、現在有用な点と思われているような、理屈ぬきの快楽のために与えられているのではなく、むしろ、われわれのうちにあって、調子外れになってしまっている魂の循環運動のために、これを秩序と自己協和へ導く友軍として、詩神たちから与えられたものなのでE す。なおまた律動（リュトモス）も、われわれの内部が、大多数の者にあっては、尺度のない、優雅さを欠く状態にあるために、やはり同じことを意図して、同じ神々から援軍として与えられたのでした。

一七

さて、これまで話して来たことは、少しばかり例外はありますが(1)、ほかは「理性」を通じて製作されたものを示して来たのです。しかしそれとともに「必然」(2)を通じて生じるもののことも合わせて話さなければなりません。48 何故なら、この宇宙の生成は、「必然」と「理性」との結合から、〔両方の要素の〕混成体として生み出されたからです。このさいにはしかし、「理性」のほうが、「必然」を説き伏せて、生成するものの大部分を最善へ導くようにさせたということで、「必然」を指導する役割を演じたのでして、このようにして、このような仕方で、「必然」が思慮ある説得に伏することによって、最初に、この万有は構成されたわけなのです。ですから、もしも、万有がいま言ったような仕方で生成して来たその模様を、真実ありのままに語ろうとするなら、彷徨する種類の原因(3)をも以上の話に混ぜて、それが元来どのようにして運動を惹き起こすようになっているのかを、話さなければなB りません。だから、次のようにして、もう一度後戻りしなければならないのです。そして、まさにこの話題に恰好な、もう一つ別の出発点を、ここにまた改めて取り上げ、前の話の場合と同様、いまのこの話題についてもう

一度、はじめから出直さなければなりません。

そこで、宇宙が生成する前には、火、水、空気、土の本性は、そのもの自体としては何であったのか、また宇宙生成以前にはそれらのものはどういう状態にあったのかを見なければなりません。というのは、いまのところでは、まだ誰一人として、それらのものの生成を明らかにした人はないのでして、われわれは、火やその他いま挙げた各〻のものが、いったい何なのかを、まるで聞き手が知ってでもいるかのように、これらを万有の構成要素(ストイケイア、字母[4])として、諸始原(アルカイ)などと言っているのです。

C　しかしじっさいには、それは、わずかでも思慮のある人なら、とうぜんこれを、ほんの音節の部類に属するものになぞらえても、すでに適当でないというほどの〔複合した〕ものなのです。しかし、いまはとにかく、われわ

1　45B～46C.

2　「必然(ἀνάγκη)」は「理性」に対立するものとして導入されるが、ここから69Aまでの箇所で扱われる、「『必然』を通じて生じるもの〔もしくは、必然的に生起する事物〕」とは、事実上、火・空気・水・土といった素材の世界のことを意味する。46Eで「補助原因者」——火・空気など——が、「他のものによって動かされて、また必然的に別のものを動かす」ものとされている点に注意。なお、補注H(一九六ページ)を参照。

3　もちろん「必然」を指す。これは「理性」によって説得されない限り、それ自体としては盲目的で、秩序を欠いた働きをする(46E参照)ことを意味しているのであろう。なお、天球の恒常で単一な運動にたいして、多様な運動をする惑星が「彷徨する星」(38C)と言われていた点を参照。

4　字母、厳密には音節を構成する不可分の単純要素を意味するストイケイア(στοιχεῖα)がまた、事物の構成要素の意味で用いられている例は、『テアイテトス』(201E～204B)にも見られる。この『ティマイオス』が、レウキッポス、デモクリトスの原子論を意識して書かれたかどうかについては、多々疑問が提出されているが、原子論者もまた、字母の比喩で原子を語ったという形跡はある(アリストテレス『形而上学』第一巻(985^b5))。

れの側からは、次のように言わせてもらうことにしておきましょう。すなわち、すべてのものの始原（アルケー）と言うか、諸始原（アルカイ）と言うか、あるいはまた、好きなように呼んでもらっていいわけですが、ともかくそうしたものについては、いまは語るべきではないということです。それはほかでもない、ただ、いまの叙述の仕方では、われわれの見解を明らかにするのが難かしいからです。だから、あなた方もわたしに是非その話をさ

D せようなどとは考えないでもらいたいものですし、また、わたし自身にしてみても、それほどの大仕事を企てて、それが正しい試みであるなどとは、とても自分自身に言い聞かせることもできそうにありません。むしろわたしは、最初に言われたこと、つまり「ありそうな言論」の働きをあくまで守りぬき、何人（なんぴと）にも劣らず――いやそれどころか、よりいっそうすぐれて――「ありそうな」話を、以前にそうしたのと同様に[1]、始めから、一つ一つについても、またひっくるめた全体についてもお話するように努めましょう。

ではいまもまた、話の始めに当たって、神さまに御加護をお願いし、途中では滅多にないような珍しい話を述べなければならないにしても、そこから無事、ありそうな結論に漕ぎつけることができますようにとお祈りした

E 上で、再び話を始めることにしましょう。

一八

さてそれでは本論に帰って、万有についての今度の出発点は、前のよりももっと分類の規模を拡げたものにしましょう。すなわち、あの時は、われわれはただ二種のものだけを区別したのですが、いまはそのほかに第三の種族を明らかにしなければならないのです。というのは、前の話題では、あの二つのもの、――つまり、一つは

49 モデルとして仮定されたもの・理性の対象となるもの・つねに同一を保つものであり、第二は、モデルの模写に当たるところのもの・生成するもの・可視的なものだったのですが――この二つだけで十分間に合っていました。そしてその時は、第三のものをわれわれは区別しなかったのですが、それは、この二つだけで十分だろうと考えたからです。しかしいまは、議論のほうがわれわれに、捉えどころのない厄介な種類のものを、言論によって明るみに出すように努めろと迫っているらしく思われます。それでは、このものは、どんな機能と本性を持つものと考えなければならないのでしょうか。それは何よりも次のようなものと考えなければなりません――つまりそれは、あらゆる生成の、いわば養い親のような受容者だというのです。これで真実を言ってしまったことになるわけですが、しかし、これについてはもっとはっきり言わなければなりません。ところがそれが厄介なのでして、

B それというのは、他にも理由はありますが、とりわけ、そのためには、予め、火や、火の仲間のものについて難問を提起しておく必要があるからです。つまり、それらのどれについても言えることですが、いったい、どのようなものを、火よりもむしろほんとうには水だと言わなければならないのか、また、どのようなものを、何にせよある一定のもの――つまりそれを(同時に)全部のものとして言うのでもなく、順番に個々それぞれのものとして言うのでもなく、それよりもむしろある一定のもの――だと言えば、何らかの信用のおける確実な言葉を使ったことになるのか、これは厄介な問題なのです。それでは、この問題そのものを、どんな具合にどのように言え

---

1 バーネットのテキストの καὶ ἔμπροσθεν (48 D 3) では意味が判然としないので、コンフォードに従って ⟨ῇ⟩ καὶ ἔμπρ. とする。

ばよいのでしょうか。またそれらについて、何を問題とすれば、妥当な仕方で問題を提起して言ったことになるのでしょうか。まず第一に、われわれがいま「水」と名づけているものも、――とにかくわれわれの思っているC ところでは――凝固すれば石や土になり、融解したり分解したりすると、この同じものが今度は風や空気になり、空気が燃え上ると火になる、といったことが見られ、また逆に、火が凝集して消えて再び空気の形へと帰って行くのが見られ、空気がもう一度集まって濃密になると雲や霧になり、後者がなおもっと圧縮されると、そこから流れる水が生じ、水から再び土や石が生じて、こうして――とにかく外見では――それらが互いにまわりまわっD て生成を与え合っているのが見られます。[1] こうして、[2] これらのものは、個々それぞれの同じものとしてあらわれているようなことは片時もないのですから、そのうちのどんなものであれば、それを、ある一定のものだとし、他のものではないのだとして、頑強に主張し続けても、恥かしい思いをせずにすむのでしょうか。それはできることではないのでして、むしろ、こうしたものについては、次のように定めて言うほうが、何よりもずっと安全なのです。――つまり、その時その時に違った場所で生じるのをその都度われわれが見るところのもの、たとえば火なら火について、それ〔いまここにあらわれている現象そのもの〕を火と呼ぶのではなく、その都度これこれであるもの〔一定の様態もしくは特性〕を火と呼ぶこと、[3] 水にしても、それを水と呼ぶのではなく、いつもこれこE れであるものを水と呼ぶこと、またその他、およそわれわれが「これ」とか「それ」とかいう言葉を使って指し示しながら、一定の何かとして指示しているつもりのどんなものにしても、〔それ、つまりいまここであらわれている現象そのものを〕これがまるで何か確固たる不動性を持ってでもいるかのように、そうした一定の何かとしてはけっして呼ばないことです。というのは、そのようなものは、「これ」とか「それ」とか、また「それ

に」とか、すべてそれらを永続性のあるものとして示すような宣告に、おとなしく服していることなく、逃亡して行くからなのです。むしろそのようなものについては、これらを、個々別々のそれぞれのものとは言わないこと。それに対して、個々の場合においても、全部をいっしょにした場合においても、どこにでも、あらわれる度に、いつも同じようなものとしてあらわれるところの、これこれのもの〔一定の特性〕を、いま言ったように〔個個別別のそれぞれのものとして〕呼ぶこと。たとえば、いつもこれこれであるものを火と呼び、およそ生成する限りのすべてのもの(空気、水など)についても同様に〔いつもしかじかであるものを、空気、水などそれぞれの

50

名で〕呼ぶこと、他方しかし、こうしたこれこれのものの各々が、その中にその都度生じてあらわれ、また再びそこから滅び去って行くところの当のものだけを、今度は、「それ」とか「これ」とかいう語を使って呼ぶこと。

1　稀薄化、濃縮化によって、火⇅空気⇅水⇅土と変化するという考えは、すでにアナクシメネスに見られる。また、「雲から水が、水から土が分離し、土から石が冷によって凝固し……」という言葉が、アナクサゴラスにも(Fr. 15, 16(DK))見られる。こうした人々の説の概略については、補注M(二〇六、二一〇ページ)を参照。

2　以下、50Bの「……それで満足しておくこと——これが一番安全なのです」までの読みについては、大体チャーニス(*American Journal of Philology*, LXXV. 2. pp. 113 sqq.)に従った(全体としては、マルタンの説もこれに近い)。50B注2はいずれもチャーニスの解釈に準拠したもの。

3　従来の多くの訳は、この箇所を「いつでも、火をそれとして呼ぶのではなく、これこれのとして呼ぶこと……」と読んでいる。つまり、生成変化して止まない火、水その他については、これを何か固定的な実体をあらわす名称(名詞的な語)で呼ぶべきではなく、むしろ、火的とか、火のようなとかいった形容詞的な語で呼ぶべきだという意味に解している。しかしこの点については、補注I(一九七ページ)を参照。なお、「その他、およそわれわれが『これ』とか『それ』とか……」(49E)の箇所の読みについても、補注I(b)(一九七ページ)を参照。

(50)

しかし、この当のものについては、これまたそれを、何にせよこれこれのもの（特性）として、つまり、熱いとか、白いとか、あるいは一般に、互いに相反する対をなす[1]どれかだとか、またすべて、そうした対をなすものから成り立っているものだとかいった、こうした類のどんなものとしても呼ばないこと――これが一番安全な言い方なのです。

しかしこれについては、もう一度、もっとはっきりお話するように努めなくてはなりません。すなわち、いまある人が、黄金を材料にして、ありとあらゆる形をつくり上げた後、その各〻の形をまたありとあらゆる形につくり変えながら、それを少しも止めないとして、そこで誰かが、そうした形の一つを指して、それはいったい何であるのか、と尋ねるとすると、そのような場合に、真実という点で、何よりもはるかにすぐれて一番安全な答えは、それは黄金である、ということなのです。これに対して、三角形だとか、その他黄金の中に生じた限りの

B

すべての形については、[2]それら〔何であるか、として指摘されている問題のもの〕を、こうしたもの〔黄金の中にその都度あらわれる三角形など〕だとして言うようなことはけっしてしないで、――何しろ問題のものは、それと定言されるその間にも変化しているからですが――むしろ、これこれのもの（一定の規定を持つ、様態、形態）がそれ〔三角形などすべての形〕なのだということを、問い手がいくらかでも安心感をもって受け入れてくれる気になりさえすれば、それで満足しておくこと――これが一番安全なのです。

さて、以上と同じことが、すべての物体を受け入れるものについても言えます。そのものは、いつでも同じものとして呼ばれなければなりません。何故なら、そのものは、自分自身の特性（もしくは機能）から離れることがまったくないからです。――何しろ、そのものは、いつでも、ありとあらゆるものを受け入れながら、また、そこ

C へ入ってくるどんなものに似た姿をも、どのようにしてもけっして帯びていることはないからです。というのは、そのものは元来、すべてのものの印影の刻まれる地（じ）の台をなし、入ってくるものによって、動かされたり、さまざまの形を取ったりしているものなのでして、このようにして入ってくるもののために、時によっていろいろと違った外観を呈しているというわけだからです。——しかし、そこへ入って来たり、そこから出て行ったりするもののほうは、これは「常にあるもの」(=理性対象)の模像なのでして、後者から、一種の、表現しにくい、驚くべき仕方で写し取られたものなのです。しかし、それがどういう仕方でかという点については、またの機会に追究(3)

1　互いに相反するものの、いくつかの対を基本に置くという考えは、アナクシマンドロスに溯って跡づけられる。彼の場合は「熱—冷」の対が大きな位置を占めていたが、ヘラクレイトスには「熱—冷」「乾—湿」を挙げている言葉が見られ(Fr. 126(DK))、エンペドクレスでは熱・冷・乾・湿の代りに、火・空気・水・土という四根が並列されている。

2　以下の箇所についても、従来の多くの解釈者は、ほぼ次のように訳している——(三角形だとか……すべての形については)、こうした形を、まるで存在しているものででもあるかのような言い方は、決してしないで……むしろ、それ(そうした形)が、これこれのという表現を受け入れようとしてくれさえすれば、それで満足しておくこと……。こうした訳は、すぐ前の箇所(49D~50A)に対する、このような解釈者の読みと首尾一貫しているわけで、先に、生成変化する火については、「それ」と呼んではならない、と言われたのに対応して、ここでは絶え間なく変化する形を「存在しているもの」と呼んではならない、と言われているのだと解しているのである。

しかし、われわれの訳も、先の箇所に対する、われわれの解釈と首尾一貫しているのであって、右のような解釈と、われわれの解釈の違いについては、49D注3を参照。

3　これがこの章の結論の部分52Cを指すとする説や(アーチャー・ハインド)、53C sqq. で述べられる、構成要素としての三角形の説に言及しているものだとする説アペルトもあるが、いずれも、イデアからその模写が写し取られる仕方を語っているものとは言えないであろう。結局本篇においては、その探究はなされていないと考えるべきではないだろうか。

(50) することにしましょう。

それはともかくとして、差し当たってのところでは、われわれは三つの種族を念頭に置かなければなりません。D すなわち、「生成するもの」と、「生成するものが、それの中で生成するところの、当のもの」と、「生成するものが、それに似せられて生じる、そのもとのもの(モデル)」の三つがそれです。なおまた、受け容れるものを母に、似せられるもとのものを父に、前二者の間のものを子になぞらえるのが適当でしょうし、さらに注意しなければならないのは、この場合、象られてつくられる像が見た目にありとあらゆる多様性を呈しなければならないことになっているのだとすると、そういう像がその中で象られて成立するところの、その当のもの(受容者)自身は、およそ自分がどこかから受け入れるはずのどんな姿とも無縁だというのでなければ、受け入れるものとしてE の準備がよく整っていることにはならない、ということです。というのは、それがもしも、入ってくるもののどれかに似ているとすると、それとは反対の、あるいは、まったく違った性のものがやってくるような場合には、それを受け容れる場合に自分自身の外観をもいっしょにあらわすことになり、そのために外から来たものを写すのがうまく行かなくなるからです。ですから、あらゆる種類のものを自分自身のうちに受け容れようとするものは、どんな形をも持たないものでなければなりません。これはちょうど、よい香りのする軟膏をつくる場合のようなものなのでして、その場合に、工程に入る前に、あらかじめまず技術上の工夫がこらされるのも、まさにいま言ったような条件をつくるという点にあるのです。つまり、そのような場合には、匂いを受け入れなければならない液体は、できるだけ無臭のものとされるわけです。また、何か柔らかい材料にいろいろの形を押捺しようとする人々も、あらかじめどんな形が見えていてもいっさいそれを見逃すことなく、まずそれを均して、できる

51 だけなめらかに仕上げるものです。

だから、思考によって捉えられ常にあるところのものの模像のすべてを、[1]自分自身の全体にわたって何度もうまく受け入れなければならない、当のもの（受容者）もまた、それ自身は本来、どんな姿も持たないのが適しているわけです。ですから、可視的な、あるいは一般に感覚的なものたる生成物の、母であり受容者であるものを、われわれは、土とも空気とも、火とも水とも、あるいはこれらから成るどんな合成物とも、また、これらを成立せしめている組成要素とも呼ばずにおきましょう。むしろこれを、何か、目に見えないもの・形のないもの・何

B でも受け入れるもの・何かこうはなはだ厄介な仕方で、理性対象の性格の一面を備えていて、[2]きわめて捉え難いものだと言えば、間違っていることにはならないでしょう。しかし、それが本性どういうものであるかについて、いままでに言われて来たことから到達されうる限りのところでは、これを次のように言えば、一番正しいことになるでしょう。――つまり、そのものの火化された部分が、いつでも火としてあらわれ、液化された部分が水としてあらわれ、土、空気の場合も、例のそのものが、そうした土や空気の模像を受け入れる限りにおいて、それぞれとしてあらわれるのである――と。

しかし、それらについての考察を徹底させるために、次のようなことを、むしろ言論によって決めなければなりません――果して、「それ自身だけである火」というようなものが何かあるのだろうか、また一般に、われわ

---

1 τῷ τὰ τῶν πάντων ἀεί τε ὄντων . . . . ἀφομοιώματα（51 A 1-2）の下線を付した部分は、そのままでは読みづらい。コンフォードに従って τῷ ⟨τὰ πάν⟩ τα τῶν νοητῶν ἀεί τε ὄντων . . . . と読む。

2 52 B を参照。

(51)

C　れが、それについてこのように、「それ自体でそれぞれのものとして独立にある」(1)というように言っているところのものが、果して存在するのだろうか、それとも、われわれがちょうどまた目で見ているもの、あるいはその他一般に、身体を通して感覚しているものだけが、いま言ったような直実性(2)を持っているのであって、それ以外には、どんな他のものも、どのような仕方においてもけっしてあることはなく、それぞれのものには、理性の対象となるところの何らかの形相があるなどとわれわれが言うのも、これはどんな場合においても謂われのないことであって、じっさいには、どうやらそれは単なる言葉に過ぎなかったということになるのだろうか――。さて、いまここに出された問題を、裁判にかけて評決を下すこともしないでほうっておいて、ただ一方的に「これこれである」という主張を固執するのも不都合なことですが、さりとて、すでに長い話になっているのに、その上にま

D　た脇道の長話をもう一つ割り込ませるなども避けなければなりません。しかし、何か決め手となるもので、そう手間を取らずに、大事な一線を画することのできるものが出てくれば、このさい大いに都合がよいわけでしょう。

　そこで、私自身としては、次のように、私の一票を投じます。――もしも理性(真に知る思考)と、正しい思わく(臆測でたまたま真実を射当てたという場合の思わく)とが、種類を異にする二つのものであれば、われわれによっては感覚されえず、ただ理性によってのみ把握されるところの形相は、完全に、それ自体として独立に存在する。しかし、これに対して、一部の人たちの見るように、正しい思わくと理性とが少しも違わない(思わくでも当たっていれば、知るということと少しも変らない)のであれば(3)、今度は、われわれが身体を通して感覚する限りのすべてのものが、この上もなく確かなものだとされなければならないと――。しかるにこの両者は、互いに

E　異なる二つのものと言わなければなりません。生まれたのも互いに別々であれば、またあり方も似ていないから

です。――すなわち、それらのうちの一方は教えられるということによってわれわれの中に生まれるが、他方は説得されるということによって生まれる。また一方はいつも真なる説明を伴っているが、他方は説明を伴わないものである。また一方は説得によって動揺させられるようなことはないが、他方は説得によって左右される。また、一方は人間誰もがそれに与(あずか)っているのだと言わなければならないのに対して、理性に与るのは、ただ神々と、人間ではほんの少数者に過ぎないと言わなければならない――。

52

そこで、事情が以上のようだとすると、次のことに同意しなければなりません。すなわち、まず一つには、同一を保っている形相というものがあるのですが、これは、生じることも滅びることもなく、自分自身の中へよそから他のものを受け入れることもなければ、自分のほうがどこか他のものの中へ入って行くこともなく、見えもしなければ、その他一般に感覚されることもないものなのでして、じっさいこれは、理性の働きがその考察の対象として担当しているところのものなのです。そして、以上のものと同じ名で呼ばれ、また以上のものに似てい

1　「それ自体として独立にある（αὐτὸ καθ' αὑτό）」という言い方は、理性対象すなわちイデアについて、プラトンがしばしば用いている言い方（『パイドン』66 A, 100 B,『国家』V. 476 B などを参照）。51 B の「それ自身だけである（αὐτὸ ἐφ' ἑαυτοῦ）」は、イデアを指す言い方としては珍しい例であるが、「自分だけで」を表わす句としては、慣用的に用いられている。ここでは明らかに、αὐτὸ καθ' αὑτό と同義のものであろう。

2　理性対象について言えるような真実性を意味するものと解すべきであろう。

3　「真なる思わく」がそのまま「知識（ἐπιστήμη）」だとする考えに対して、プラトンがこれを吟味し反駁している詳細な議論については、『テアイテトス』（187 B～201 C）を参照。また、この両者がどう相違するのかという点については、『メノン』（97 B～98 A）を参照。

るものが、二つ目です。これは、感覚され、生み出され、いつでも動いており、ある場所に生じては、再びそこから滅び去って行くものなのでして、思わくによって、感覚の助けを借りて捉えられるものなのです。そして、さらにまた三つ目に、いつも存在している「場」[1]の種族があります。これは滅亡を受け入れることなく、およそ B 生成する限りのすべてのものにその座を提供し、しかし自分自身は、一種の擬い（まがい）の推理とでもいうようなものによって、感覚には頼らずに捉えられるものなのでして、ほとんど所信の対象にもならないものなのです。そして、この最後のものこそ、われわれがこれに注目する時、われわれをして、「およそあるものはすべて、どこか一定の場所に、一定の空間を占めてあるのでなければならない、地にもなければ、天のどこかにもないようなものは所詮何もないのでなければならない」などと、寝とぼけて主張させる、まさに当のものにほかなりません。じっさい、われわれはこうした夢見心地の状態にわざわいされるために、寝とぼけていては把握できないような、真に存在しているものについても、眼を醒まして、いま挙げたような区別のすべてや、その他これに類した区別を立 C てて、真実を語ることができなくなるのです。そしてその真実というのは次のことにほかなりません。つまり、似像のほうは、とにかく、その拠って基づいて生じたところのまさに当のもの〔自己自身の成立条件・原理〕が似像自身のものではなく、[2]何か他者の影像としていつも動いているのだから、従って、何か他者の中に生じて、どうにかこうにか「ある」にしがみつき、さもなければ、それはまったくありもしないのだ、というのが、これに似合ったあり方である。しかし他方、真にあるものには、厳密な意味で真なる言論が味方について、こう主張する。すなわち、何か一つのものと他のものが、それぞれ別のものである限り、そのどちらもも一方の中に生じ D て、同じものが同時に一でもあれば二でもあるということにはけっしてならない、というのです。

一九

さて、以下のことが、私の投票から推論される議論の概要として与えられているのだとしましょう。すなわち、「あるもの」と「場」と「生成」とが、三者三様に、宇宙の生成する以前にもすでに存在していたのです。そこで生成の養い親は、液化され、火化され、土や空気の形状を受け入れるとともに、他にもそれらに伴うすべての状態を身に受けて、見た眼にありとあらゆる外観を呈しましたが、何分、似てもいなければ、均衡もとれていない諸力(機能、性質)によって満たされたために、そのどの部分も均衡がとれないで、自分自身がそれらによって、不規則にあらゆる方向へと動揺させられて、ゆすぶられながら、また自分のほうも動かされ動くことによって、

E

1　49 A sqq. で「受容者」と呼ばれて来たものは、ここではじめて「場(χώρα)」と名づけられる。χώρα はもともと「その中に何かがあるところの、空間、場所」を意味する。因みに、後にストア派のゼノンは、これを「部分的に占有されている空間」として、「虚(空間)(κενόν)」とも「場所(τόπος)」とも区別している(I. 26)。

2　この箇所の読みについては多々議論がある。他に提出されている訳だけ列挙すると左の通り。
「似像は、それがそこで生じた当のものすら自分自身のものではない」(マルタン)。「似像は自分自身のモデルですらない」(アーチャー・ハインド)。「似像は自分自身の似像ですらない」(テイラー)。「似像は、自分自身が表わしているものですら自分自身のものではない」(リヴォー、チャーニス)。「似像は、それがそのために生じた当の目的すら、自分自身(を表象することでなく……)」(Hackforth, C. Q. XXXVIII. pp. 37–38)。われわれの訳はコンフォード、アーペルトに準じたもの。
プラトンの「場」を鏡になぞらえるのは、プロティノス(『エネアデス』第三巻、六、七、九)にも見られるが、鏡の映像を成立せしめる実物と鏡とが、いまの箇所ではモデルになる理性対象と「場」に該当し、これらのものが「似像」を成立せしめる条件なのだと解し、「自己自身の成立条件すら自己自身のものでない」とは、イデアについて言われる「それ自体としてある」に対立するものと考えたい。

逆にかのものをゆすぶり返しました。そして、後者は動かされることによって、絶え間なく、選り分けられてそれぞれが違った場所へと運ばれて行きました。それはちょうど、箕[1]だとか、その他穀物の不純物を取り除く道具 53 によって、ゆすぶられ、簸(ひ)られるものの場合にも、実の充実した重いものはここに、実の入り工合が薄くて軽いものはかしこにというように、それぞれ違った場所に運ばれて落ち着くようなものなのです。いまの場合もそんなふうに、四つの種類のものがその容器によってゆすぶられていたのですが、容器そのものは、ちょうど、震動を与える道具のように動いて、相互に最も似ていないものをお互いから最も大きく引き離し、また最もよく似ているもの同士を最大限に同じところに集まるように押しやりましたから、まさにそのことのために、宇宙がこれらのものから秩序づけられて生ぜしめられた時の前にも、すでに、それらのものは、それぞれが違った場所を占めていたのです[2]。じっさい、宇宙の生まれる前には、これらすべてのものはまだ比率も尺度もない状態にあった B のです。そして、万有の秩序づけが試みられた時、最初は、火、水、土、空気は、なるほど何かそれ自身の、一種の痕跡を持ってはいましたが、しかしまったくのところ、何ものたりとも神不在の場合にはさぞやかくあらんというようなありさまだったのでして、その頃はこれらのものはもともと、まさにいま述べたような状態にあったわけですが、これを神がはじめて、形と数を用いて形づくったというしだいなのです。そして神がそれらのものを、もとは立派でもなければ善くもなかった状態から、およそ可能な限り立派な善いものに構築したという、このことだけは、何はさておいても、いつでも言われるものとして、われわれは前提しておきましょう。しかしそれはともかくとして、いまは、以上に挙げたそれぞれのものの配置と成り立ちをあなた方に明らかにするよう C に試みなければなりません。ところがこの場合に使う議論は、けっしておなじみのものではないのです。しかし

まあ大丈夫、あなた方は、これからの話を説明するのに必要な教養部門は身につけている人たちですから、この話にいっしょにつき合ってもらえるでしょう。

二〇

まず第一に、火、土、水、空気が物体[3]であることは、多分、誰にも明白なことでしょう。そして、物体というものはすべてまた奥行きを持っているものです。そしてまた奥行きは、これを面が取り囲んでいるというのが、絶対の必然ですし、さらに面のうちでも、平面は、三角形を要素として成り立っています[4]。

1　「箕」と訳した πλόκανον はまた「篩」とも訳される語。いまの箇所に対しても多くの訳者は「篩」の訳語をあてていた。「篩」とする場合、デモクリトスにも、原子の世界で似たものが似たものと集まる傾向のあることを説明するのに、海岸の小石の例に併せて、篩(κόσκινον)でふるい分けられる穀粒の例を挙げている言葉が見られる(Fr. 164 (DK))。しかしコンフォード(*Pl. Cosm.* pp. 200 sqq.)は、それぞれサイズの違った目から、大きさを異にする固形粒子をふるい分ける図を思わせる「篩」の比喩をプラトンに読み込むのを嫌って、いまの πλόκανον を「箕」と訳すのに固執している。われわれも一応「箕」と訳したが、簸られる内容物が穀粒とされているのには変りなく、じっさい本篇には、読者が原子論の説を知っているのを意識して、それに批判を加えながらまた、その図を借用しているように見える箇所が多々あるが、これについては「解説」(二七二、二八九、二九三ページ)を参照。

2　この図は、エンペドクレスの場合に、四つ根それぞれを分離する働きを持つ「争い」が宇宙全体を支配している時の状況に似ている(Fr. 17 (DK) ll. 8, 11–13)。

3　28B注3参照。ここでは σῶμα は、三次元の延長体の意味。

4　平面は三つの点によって決定されるから、一つの平面は、同一平面上の三点によって決まる三角形にまでは、これを「平面の部分」として分割できるが、もはやそれ以下の単純な要素には分割できないという意味に解される。

ところで、三角形というものはすべて、二種の三角形をもとにして、そこから派生しているものなのでして、この二種のものとは、どちらも、一つの角を直角とし、他の角を鋭角とするものなのですが、そのうち一方の三角形は、相等しい二辺のどちらの上にも、直角が二等分されたものを持って居り、もう一方の三角形は不等な二辺上に、直角が不等に配分されたものを持っているのです。そこでわれわれは、――必然性を伴ったありそうな言論の方針を辿りながら――これを火やその他の物体の始原（アルケー）だと仮定します。しかしそれよりもさらにさかのぼった諸始原（アルカイ）のことは神ぞ知る、あるいは人間で言えば神の愛（いと）しみ給う人ぞ知る、というところでしょう。

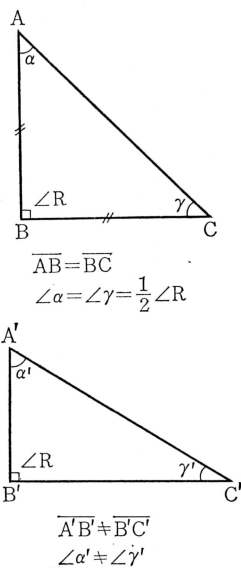
D

E

そこで、お互いに似てはいないけれども、その任意のものが、解体によってお互いから生じうるような、もっとも立派な四つの物体とは、いったいどんなものかということをお話ししなければなりません。何故かと言えば、その答をうまく言い当てるなら、われわれは、土、火、及びそれらの中間に比をなして介在するものの成立についての真相を得ることになるからです。何しろ、われわれは、何人に対してもこの点は――つまり、これらのものよりももっと立派な、いくつかの可視的な物体が、それぞれ一つの種をなしてどこかに存在する、などと言っては、――けっして譲歩することはないでしょうからね。だから、立派さにおいて際立っている四種類の物体を組み立てることと、そして、それら物体の本性をわれわれは十分に把握しているのだと主張することに、力を尽

$\overline{AB}=\overline{BC}$
$\angle\alpha=\angle\gamma=\frac{1}{2}\angle R$

$\overline{A'B'}\neq\overline{B'C'}$
$\angle\alpha'\neq\angle\gamma'$

図 5

くさなくてはなりません。

54 さて、先の二種の三角形のうち、二等辺三角形のほうは、ただ一通りの型があるだけですが、不等辺のほうには無際限の型があります。そこでわれわれは、適切な仕方で始めるべきなら、この無際限のものの中から、最も立派なものを選ばなければなりません。だから、これら物体の構成のために、なおもっと立派なものを選んで言うことのできる人があるとすれば、勝利はその人のものですが、しかしそれはわれわれの敵としてではなく、あくまで味方として勝ってくれたことになるのです。しかし、それはともかくとして、われわれとしては、多くの三角形のうち、他のものは不問に付し、ただ、二つ集まれば正三角形が出来上るところの、その一種のものを[1]、B その他のすべてにまさる、最も立派なものと仮定します。それが何故なのかということになると、話は長くなりますが、それを反駁して、そうではない[2]ということを発見する人があれば、われわれは喜んで賞をその人に進呈します。そこで、火やその他のものの身体(物体)が工夫してこしらえられた場合にその材料となった、二種の三角形が選ばれたことにしましょう。つまり、一つは二等辺三角形で、もう一つは、その長辺と短辺をそれぞれ二乗した場合に、いつでも前者が後者の三倍になるというような三角形なのです[3]。

さて、以前に、不明瞭な言い難い言い方で語られたことを、いまやもっとはっきりと区別して述べなければなりません。すなわち、四つの種類のものがすべて、お互いを通じて、お互いに相手のものへと生成するように見

1　53D図5の、三角形A′B′C′において、$\overline{A'C'}=2\overline{A'B'}$が成立している場合。

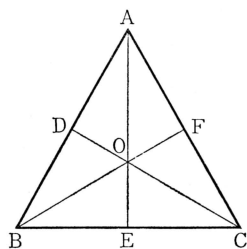
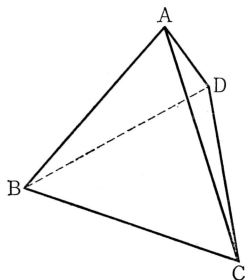
2　バーネットのテクストのδή(54B2)をμή(Hermann)に変更。

3　53D図5、54A注1を参照。「長辺」は$\overline{B'C'}$を、「短辺」は$\overline{A'B'}$を指す。

(54) えたのでしたが、[1]そのような見かけは真相を伝えるものではなかったのです。というのは、なるほど、われわれ C の選んだあの三角形から四種類のものが生じるには違いないのですが、その場合、三種のものは不等な辺を持った三角形一種類から成り立っているのに対し、第四のもの一つだけは、二等辺三角形から組み立てられているからです。だから全部が全部、解体によって、お互いに相手のものへと——つまり、小さなものが多数集まって、そこから少数の大きなものになったり、あるいはその逆の過程を取ったりして——生成することができるわけではなく、ただ三種のものにおいてのみ、そのことが成り立つのです。というのは、これら三種のものはすべて、もともと一種類の三角形から成り立っているのですから、大きいほうのものが解体する場合には、この同じものから、多数の小さいものが自分に適した形を取って構成されるでしょうし、また逆に、多数の小さいものが、〔構成 D 要素たる〕三角形に従って分散するような場合には、それらが一つの塊をなして、数は一となり、別の大きい一つの形を作り上げることになるだろうからです。

　そこで、お互いへの生成についての話はこれだけにして、次にお話ししなければならないのは、それらのもののそれぞれが、どんな形のものとして出来上っているのかということと、どれだけの数が合わさって出来ているのかということでしょう。そこでまず最初に来るのは、最も原初的で、最も小さい構成体をなすような形

図 6

図 7

だということになるでしょうが、それの構成要素（ストイケイオン）となるものは、斜辺が短辺の二倍の長さを持 E っている三角形です。そこで、このような三角形の一対（つい）が対角線に沿って結び合わされ、そして、この一対ずつの組み合わせが、〔それぞれの三角形の〕斜辺と短辺とを、同一点を中心としてそこへよりかからせるような形で、三度繰り返されると、数にして六つの先の三角形から、一つの正三角形が生じたのです。そして、この正三角形 55 が四つ結びつくと、平面角が三つずついっしょになるそれぞれのところに、一つの立体角を作るのですが、この立体角は、平面角のうちのもっとも大きな鈍角の次に位する大きさのものです。そして、このような角が四つ完成されると、最も原初的な立体の形が構成されるわけですが、この立体は、自分に外接する球全体を、互いに面積が等しく、かつ互いに相似した諸部分に配分するという性質を持っているものです。(2)

1　53Eの「任意のものが、解体によってお互いから生じうる……」という言葉を指すのであろう。それが真実でないというのは、すぐ次に述べられるように、土だけは他のものと互換不可能だからである。従ってまた、49B sqq. で「われわれがいま『水』と名づけているものも……石や土になり……」という言葉も正確でなかったことになる。

2　この「もっとも原初的な形」は、正四面体。要素三角形からの構成法は図6、図7の通り。「対角線に沿って」とは、四辺形CFOEの対角線だとか、(Cornford, *Pl. Cosm.* p. 217)、また、四辺形ACEDを想定した時の対角線だとか (Taylor, *Comm.* pp. 374–375) 考える解釈もあるが、事実上、「斜辺に沿って」くらいの意であろう。「立体角」は、ユークリッドの定義によると「立体角とは、相会し、かつ同一平面上になり二つより多くの線分のすべてが互いになす傾きである。あるいは立体角とは、一点において作られ、同一平面上にない二つより多くの平面角によって囲まれる角である」(『原論』第一一巻、定義一一)。そしてこの第二の部分が、本篇でのプラトンの立体角に対する考えと同じだと、Heath (*The therteen boozs of Euclid's Elementes*; III. p. 267) は指摘している。いまの場合は、正三角形の一つの角＝三分の二直角が三つ集まって二直角になるが、これを「平面角のうちの最も大きな鈍角の次に位する大きさ」としているのは、一般に角が「線分の折れ」と考えられていたために、二直角は平面角には入らなかったのであろう。

ところで、第二番目の形は、やはりいまのと同じ三角形から成り立っていますが、しかしこのほうは、正三角形が八つずつ結びついて、四つの平面角から一つの立体角を作り上げる場合に構成されます。そして、このような角が六つ生じると、こうして、ここに今度はまた、第二番目の物体が完成されたわけです。(1)

また、第三の形は、百二〇の構成要素(ストイケイア)がくっつき、そして、それぞれ、正三角形に属する五つの平面角によって囲まれているところの一二の立体角が出来る場合に、それらのものから成り立ったのでして、この形は、底面として正三角形を二〇持っています。(2)

B

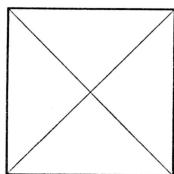
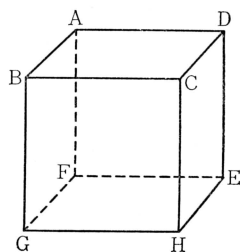
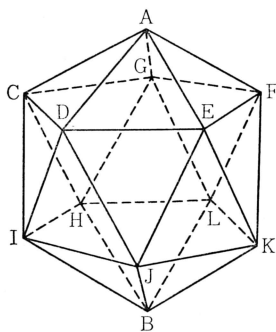
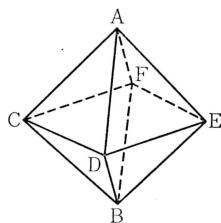
そして、例の構成要素のうちの一方は、以上のものを生み出してしまうと、そこで放免されましたが、もう一つの、二等辺三角形のほうは、第四のものを生み出しにかかりました。つまりこの三角形は、四つずつが、直角のところを中心へ集めるような工合に結びつき、こうして一つの正方形をつくり上げたのです。そして、このような正方形が六つくっついて、八つの立体角をつくり上げたのですが、その立体角はどれも、平面直角三つずつが組み合わさって出来ているようなものだった

C

図 8

図 9

図 10

図 11

のです。こうして構成された立体の形は立方体、つまり六つの正方形の面を底面として持っているものでした。(3) なおまたもう一つ、第五の構成体がありますが、神はこれを、万有のために、そこにいろいろの絵を描くにさいして用いたのでした。(4)

二一

ところで、宇宙は無限箇のものだと言わなければならないのか、それとも有限箇のものだと言わなければならないのかを問題にするのに、以上に言ったことすべてを勘定に入れるとすれば、それはこのさい当を得たことなD のですが、その場合には、宇宙を無限箇（アペイロイ）のものだなどというのは、とうぜん心得ていなければなら

1 正八面体。
2 正二十面体。
3 正六面体。
4 可能な正多面体として残るのは正十二面体であるが、これは各面が正五角形で出来ているために、もとのどちらの要素三角形からも構成されえない。大地が色分けされた一二片の革を縫い合わせた鞠のようなものとする叙述が『パイドン』(110B)に見られる。ここではこの形が宇宙全体に適用されたのであろうが、「絵を描くために」というのが具体的に何を意味するのか、いろいろ解釈の試みはあるが、いずれも説得力がない。

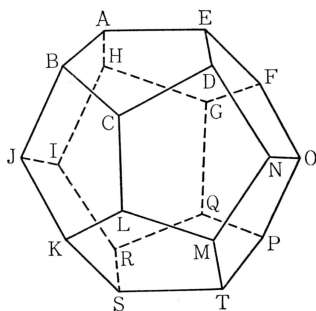



図 12

ないことを、文字通り、心得ていない者(アペイロス)の説だと思われることになるでしょう。しかしこれに対して、いったい、宇宙は本当には、もともと一つのものと言われるのがふさわしいのか、それとも五つのものと言われるのがふさわしいのかという、[1]この点に立ち止まって問題を提起するほうが、むしろ当を得ているでしょう。さて、とにかくわれわれの側の見解が明らかにするところは、「ありそうな言論」に従えば、宇宙は一つの神であるのが本来のあり方だということなのです。しかしまた、他の人は他の人で、どこか別の点に注目して、違った見解を抱くのでしょう。

そして、まあ、そういう人のことは、かまわないことにして、われわれは、いま言論によって生成させられた、いくつかの種類のものを、火、土、水、空気へと配分することにしましょう。

E

そこで、土には、立方体の形を与えることにしましょう。何故かと言えば、四種類のもののうちで、土が最も動きにくく、またこれは、およそ物体のうちで、最も可塑性に富んでいるわけですが、他方、最もよく、このような性質を備えているものと言えば、最も安定した底面を持っているものがそれであるのは必然です。ところが、底面で言うと、最初に仮定された三角形のうちでは、二等辺三角形の底面のほうが、不等辺三角形のそれよりも、本性上、一そう安定したものであり、また、この二種の三角形のそれぞれから合成されている面で言えば、同じ等辺でも、四辺形の面の方が、三角形のそれよりも、部分的にも全体的にも、一そう坐りがよいのは必然です。

56

従って、土にその形を割り当てれば、「ありそうな言論」を無事まっとうすることになり、また、水には、今度は残りのもののうちの最も動きにくい形を与え、火には最も動きやすい形を、そして空気にはその中間の形を与えれば、同じく「ありそうな言論」をまっとうすることになるわけです。そしてまた、最も小さい立体を火に、

また最大のものを水に、中間のものを空気に割り当てても同様ですし、さらに、最も尖ったものを火に、第二番目のものを空気に、第三番目のものを水に割り当てる場合も同じことが言えます。そこでこれら全部を綜合すると、底面の数の最も少ない形は、どの方向にも切れ味がよくて鋭く尖っている点では、すべての中でも一番なのですから、これが元来、最も動きやすいのは必然ですし、なおまたこれは、〔他のものの場合と〕同じ部分から成り立っていながら、その部分の数が最も少ないのですから、この形が一番軽いのも必然です。そして第二番目のものが、いま挙げた同じ諸性質を備えている点で第二位に立ち、第三番目のものが第三位に立つのも必然のことです。

B

そこで、正しい言論に従うとともに、「ありそうな言論」の線を守るとすると、立体として生成させられたもので、正四面体の形をなすものが、火の構成要素(ストイケイオン)であり種子だということになります。そして生成の順序が第二番目のものを空気のそれだとし、第三番目のものを水のそれだと言うことにしましょう(2)。

C

さて、これらすべては、非常に小さくて、どの種類に属するものも、個々一つ一つでは、小ささのために、われわれの眼には少しも見えないほどのものではあるが、ただ沢山のものが集まると、その塊が見られるのだと考えなければなりません。

1　ここで何故特に、宇宙の数について「五」という数字が挙げられたのかという問題は、従来から解釈者を悩ませて来たが、この点については、補注J(一九八ページ)を参照。

2　以上、四種の物体と四種の正多面体の対応関係は左の通り。

土―正六面体。　火―正四面体。
空気―正八面体。　水―正二十面体。

なおまた、それらのものの数量や、運動その他の諸性質に関する釣り合いについては、どんな面においても、とにかく「必然」が説き伏せられて、自分から進んで譲歩した限り、神が最大限に厳密にそれらのものを仕上げた上で、これを比率に従って調和させたのだと考えなければなりません。

二三

さて、以上のような種類のものについて、[1]われわれが先に言っておいたことのすべてを綜合すると、次のようなのが、一番ありそうなことだと言えるでしょう。

D すなわち、土が火に出くわして、火の鋭さによって分解されると、そのように分解されるのが、たまたま火そのものの中であっても、あるいは空気の、あるいは水の塊の中であっても、とにかく土は、それの諸部分が互いに出くわして、自分たち同士で再び組み合わさってもとの土になるまで、移動を続けて行くでしょう――何しろ、それは他の形になることはけっしてないはずだからです。しかし、水が火によって、あるいはまた空気によって、ばらばらにされると、〔水の部分が〕結合して火の粒子(立体)一箇と、空気の粒子二箇を生ぜしめることができます。また、空気の切片は、一粒子分が解体すると、そこから、火の粒子二箇が生じることができます。そしてま

E た逆に、火のほうが、空気や水や、あるいは土のあるものによって包囲され、しかも囲む側が多勢で、囲まれる側が無勢だとすると、火は運動している周囲のものの中で動かされ、それらのものと戦い、敗北して粉砕されるでしょうが、そのような場合にはいつでも、火の粒子二箇が結び合わさって、一箇の空気の形を取ることになります。また、空気が征服されて、切り刻まれると、まるごとの粒子二箇と半箇から、水の完全な形一つが構成さ

れることになります。(2)

57　いや、このことを、もう一度、次のようにして推理してみましょう。火の中に、その他の種類のどれかが捉えられて、火の角や稜の鋭さによって切られる場合には、切られたものが組み合わさって、火の形を取ることになると、もはや、切られる過程は終ったわけなのです――各々どの種類のものにしても、自分自身と同様であり、同じであるものは、内部にどんな変化を生み出すこともできなければ、また、〔自分と〕同じあり方をし、同様な状態にあるものからは、どんな作用を受けることもできないのですからね――。しかし、それが、〔火ではなく、〕何か他のものになって行って、劣勢に立ちながら、優勢を占めるものと戦っている間は、解体の過程は終りません。

なお、これらの計算はすべて「面」を単位としているが（固形の粒子なら、正八面体が切断されても、二個の正四面体にはならない）、このように「面」から「立体」を構成するという考えについては、アリストテレスが繰り返し批判している（『天体論』第一巻（299^a2 sqq., 299^b24 sqq.）、『生成消滅論』第一巻（315^b30 sqq.）他）。近年でもマルタン、アーチャー・ハインド他、「面」から「立体」を構成する意味について多々解釈しているが、この点については「解説」（二九〇ページ）で若干触れた。なお、原語で立体（σῶμα）も粒子（ただし、不可分体＝原子ではない）と訳す。

1　バーネットのテクスト ὧνπερ（56C8）（A写本）を ὧν περὶ（F、Y写本）に変更する。

2　以上、相互変換の式は左の通り（ここに、火をF、空気をA、水をW、土をEであらわす）。

（a）大きい粒子から小さい粒子への解体

1.　$1W \rightarrow 1F + 2A$　$(20 = 4 + 2 \times 8)$

2.　$1A \rightarrow 2F$　$(8 = 2 \times 4)$

（b）小さい粒子から大きい粒子への結合

3.　$2F \rightarrow 1A$　$(2 \times 4 = 8)$

4.　$2A + \frac{1}{2}A \rightarrow 1W$　$(2 \times 8 + \frac{8}{2} = 20)$

(57)
B　そして、今度はまた、小型の粒子が、大型の粒子多数の中に、少数で包囲され、粉みじんに砕かれて鎮められる場合には、それが優勢を占めているものの形を取って結合しようとするなら、鎮められる過程は終って、火から空気が、空気から水が生じます。しかし、小型の粒子が、これらのもの〔空気か水〕[1]になって行く途上にあって、そこへまたその他の種類の何かが戦に参加するようなことになると、解体の過程は終らず、結局は、全面的に圧迫されて、ばらばらに解体された挙句、自分と同種のもののところへ逃亡するか、さもなければ、屈伏し、多数者が一つに集まって、征服者と同じようなものになり、彼らの同居者になって残留するか、どちらかになるでしょう。

C　そしてまた、とりわけ、以上のような作用を受けるにさいして、すべてのものが場所を交代するのです。というのは、それぞれの種類に属する大部分のものは、かの「受容者」の動きのために、それぞれが別れて自分の固有の場所に落着いていますが、その都度自分の仲間と似たものではなくなって、他のものと似るようになるものが出てくると、そうしたものは、例の震動によって、自分が似ることになった当のものの場所へと、運ばれて行くからです。

さて、まじりけのない、最初の物体はすべて、以上のような原因によって生じたのでしたが、それらのものの種〔火・空気・水・土の四種〕の内部に、また違ったいくつかの種類が生じていることの原因としては、構成要素〔ストイケイア〕〔となった三角形〕双方が組み合わされたその構成法を挙げなければなりません。つまり、どちら

D　の構成法も、最初に、ただ一通りの大きさを持った三角形を生み出したわけではなく、小さいもの、大きいものをいろいろ生み出したのでして[2]、その種類は、あの〔四つの〕種の内部にある種類と同じ数だけあったのです。だから、それらが同種のもの同士で混り合ったり、また、異種のもの同士で混り合ったりして、その多様さは無限

のものとなっているのです。じっさい、「自然」について、「ありそうな言論」を語ろうとするなら、人は、この多様さを観察しなければなりません。

二三

さて、「動」と「静」について、それらがどういう仕方で、またどのような条件で起るのかということに同意してもらえないでは、後の推論に支障を来たす点が多々出て来ることでしょう。それらについては、すでに幾分（E）かは語られたのですが、その上に、なお次の点をつけ加えておきましょう。——つまり、均等性の中には、動はけっしてあろうとはしないということです。何故なら、動かされるはずのものが、動かすはずのものもなしにあるとか、あるいは、動かすはずのものが、動かされるはずのものもなしにあるというのは、困難というよりも、むしろ、不可能なのですが、動はこの両者を欠いては存在せず、また、この両者が均等の関係にあるなどはおよ

---

1 バーネットのテキストの ταὐτά(57B4)を ταῦτα(Y写本)に変更。

2 「構成法」と訳した σύστασις は「構造」とも訳されうる。従来は大体この箇所は「要素三角形の構造が一通りのものでなく、大きいもの、小さいものがある……」の意に解されていた。しかしそれでは「三角形の構造が、大きいとか小さいとかいう〔構造の〕三角形を生み出した」となるので、これを不都合として、コンフォード(*Pl. Cosm.* pp. 230 sqq.)は、σύστασις を「構成法」として、次のように解釈している。元来、正四面体などの面をなす正三角形も、正六面体の面をなす正方形も、要素三角形二箇で十分構成されうるが、それをプラトンが六箇、四箇という数を用いているのは(54D sqq.)、ことさら「中間の大きさ」を示したのだとする。実際にプラトンが「大きさの異なる三角形」で、二箇、六箇、八箇などの要素三角形を持ったものを考えていたかどうかを保証する証拠はないが、文法上、σύστασις は、受動の「構造」より、能動の「構成法」とするほうが妥当と思われる。

(57) そ不可能だというわけだからです。従って、われわれはいつでも、「静」を均等性の中に、「動」を不均等性の中58に置くことにしましょう。そしてまた、不均等性の原因となるものは、不等性なのです(1)。

ところで、不等性の成立のほうについてはわれわれは詳述して来たわけですが、しかし、いったいどういうわけで、それぞれのものが、種類別に分離してしまい、お互いを通じての動きや移行を止めてしまうようなことにならないのか、という点は、話しませんでした。そこで、われわれは、もう一度次のように言うことにしましょう。すなわち、この万有の循環運動は、いったん、先に挙げたいろいろの種類のものを包括してしまうと、何しろ、自分がまるくて、もともと、自分自身へと立ち帰ろうとする傾向のあるものなのですから(2)、すべてを束ねて B 縛りつけ、一つの空虚な場所が残るのも、そのままにしてはおきません。従って、火が一番よく、あらゆるものの中へと滲透したのであり、空気が第二番目で——これは繊細さで第二番目に位するように出来ていたのですから——、またその他のものも以下同様だったのでした。というのは、最も大きい粒子から出来ているものが、その組織の中に、一番大きい空隙を残し、最も小さい部分から出来ているものが一番小さい空隙を残しているからです。そこで、圧縮されて粒子がひしめき合うと、このひしめき合いが、小さい粒子を大きい粒子の隙間へ、いっしょに押し込めるのです。従って、小型の粒子が大型の粒子の傍に置かれることになり、そして、小型のものは大型のものを分解し、大型のものはまた前者を結合させ、こうして、すべてのものが、自分自身の場所を目指 C して、上を下へと移動することになります。何しろ、それぞれのものは、大きさを変えると、その場所の位置をも変えるからです。じっさい、このようにして、また、以上のような理由によって、不均等性の生成は絶えず維持され、このことが、それら物体の、現在においても未来においても尽きることのない、絶えざる動きをもたら

すのです。

二四

そこで次に、火にも多くの種類があるということを考えなければなりません。たとえば、焔と、焔から出るもので、燃やすことはないが、眼に光をもたらすところのものと、焔が消えた時に、燼(もえさし)の中に残る、火の残りがそれです。

D また、空気の場合も同じで、「アイテール」の名で呼ばれているところの、最も澄み切ったものと、「霧」とか「暗さ」とかいう、最も濁ったものとがあり、またその他、三角形が不等なために生じた、名もないいくつかの種類があります。

水の場合は、まず、液状のものと、可融解性のものとの二通りの種類に分れます。液状のものは、それに含まれている分の水の粒子が小さい種類で、しかも不揃いなために、この不均等性と〔粒子の〕形の恰好の故に、それ

E 自身だけでも動きやすく、また他のものによっても動かされやすいものになっています。他方、もっと大きくて

---

1 因みに、デモクリトスについての、アリストテレスの証言に、次のような言葉が見られる――「(原子は、……原子同士の)非類似性と、他の……いろいろの相違の故に、相争い、空虚の中を運動する」(「デモクリトスについて」ap. Simplic. *De Caelo* 295, 9)。

2 この箇所はまた、「この万有の周囲(περίοδος)は……自分自身へと集約する……」とも読める。しかし、περίοδος は、天球や惑星の円運動を表わすのに用いられたのと(39 C～D 他)同じ語なので、われわれはここでも同様に「循環運動」を指すものと解した。

(58) 均等な粒子から成り立っているものは、その均等性によって、前者よりも安定しており、固まって重いものですが、しかし、火が入り込んで来て、これを分解して行くと、均等性を失い、均等性を失うと、以前よりも動きやすくなります。そして動きやすくなると、近辺の空気に押されて地面の上にひろがりますが、このどちらの状態に対しても名がつけられたのでして、「塊が崩壊すること」[1]は「融解する」と呼ばれ、「地面の上にひろがること」は「流れる」と呼ばれました。59 逆にまた、火がそこから追い出される場合には、これは空虚の中へ出て行くわけではないのですから、近辺の空気が押されることになり、この空気は、まだ動きやすい状態にある液状の塊を、火が占めていた場所へといっしょに押し込めて、この液状の塊が〔異質物を混えない〕自分だけの結合体になるようにします。そして後者は、このようにして押しつけられるとともに、何しろ不均等性をつくり出していた火が出て行くのですから、再び均等性を取り戻して、自分のもとの状態へと落ち着くのです。そして、火の脱出は「冷却」と呼ばれ、火が出て行くことによる凝縮の状態は「凝固態」と呼ばれました。

B さて、われわれが、「可融解性の水」と呼んだもののすべてのうち、最も微細で最も均等な粒子から、最も緻密に出来ているところのもので、ただ一通りの種類しかなく、光沢があって黄色を帯びたところのもの――それは、最も貴重な財貨、「黄金」でして、岩を通って漉されて固まったものなのです。また、黄金の芽で、その緻密さの故に最も硬くて、また黒色を帯びたものは「アダマス」[2]と呼ばれました。さらにまた、黄金に近い部分から成り立ってはいるが、種類は一つより多く、また、緻密さの点では、ある意味では黄金よりもいっそう密であるとC ともに、また、わずかばかりの微細な土の部分を含んでいるためにいっそう硬くなっているが、[3]しかし内部に大きな間隙があるので、黄金よりは軽い、というように構成されて生じているものは、「銅」でして、これは輝き

のある凝固した水の一種なのです。そしてそれに混っている土の部分は、混り合っている両者が古びて、再びお互いから分離してくると、単独で見られるようになり、これが「緑青」と呼ばれているわけです。

ところで、こうした類(たぐい)の、いま挙げたもの以外の分まで、なおもすっかり数え上げるということも、「ありそうな話」を追い求める限りは、いっこうにこみ入った仕事にはならないのです。いま人が、寛(くつろ)ぎのために、永遠存在についての言論をしばらくお預けにし、生成にかんする、この「ありそうな話」を検討することで、後味の

D

悪くない快楽を得るような場合には、生活のうちに、節度ある知的な遊戯ができることになるわけでしょう。だ

1　この箇所を「嵩が減少する」と読む訳もあるが、何故融解すると嵩が減ると言われるのか(氷の場合は別として)不明と言わなければならない。もっともこの点について、火の作用で幾らかの粒子が切られてしまうのだから、とか(Taylor, *Comm.* p. 414)、大型の粒子が小型の粒子になるのだから(Cornford, *Pl. Cosm.* p. 250 なお57D注2を参照)、などの解釈も提出されているが、「地面の上にひろがる」に並列して言われているくらいの言葉に、このようにこみ入った(しかも原典には何も示唆されていない)意味を読み込む解釈は承服し難い。なお「粒子の(均等性が)崩れる」とする訳(リー)もあるが、われわれのような訳を取っている人としてはアーチャー・ハインド、アーペルトを挙げることができる。

2　「アダマス(ἀδάμας)」は元来「征服できないもの」を意味し、ヘシオドス(『神統記』一六一行)では「鋼鉄」を意味していると考えられる。しかしまた、後世のプリニウス(*Historia Naturalis*, XXXVII, 15)では、adamasは、黄金坑の中でしか見られない稀な宝石で、「黄金の結節(auri nodus)」と呼ばれていると言われており、この場合はダイヤモンドを意味すると思われる。しかし、この箇所では「アダマス」は黒いと言われているなどの理由で、「赤鉄鉱」だろうとか(アーチャー・ハインド)、「プラチナ」の可能性もあるとか(リヴォー)言われたり、プラトンはダイヤモンドを見たことがなかったから記述を誤ったのだろうとか(コンフォード)言われているが、いずれも推測の域を出ない。なお『ポリティコス(政治家)』(303E)を参照。

なお「黄金の芽」についても、これが何を意味するかは、「アダマス」の意味が不明だからこれも不明。

3　硬さについては62Bを参照。

(59) から、いまのわれわれも、手綱をゆるめて、以下、同じ話題について、引き続き「ありそうな話」を、次のように述べて行くことにしましょう。

火と混り合っている水でも、繊細で液状をなしており——液状（ヒュグロン）という言い方は、その動きと、地面を転がるという運動の仕方に由来するのです(1)——、さらにまた、その底面が、安定度において土の底面より劣っているために、外力に屈しやすく、そのことの故に、また柔軟なものとなっているという、とにかくこのよう E な水が、火と空気とから分離されて、単独になると、以前よりも、より均等なものとなり、また他方では、そこから出て行くものによって、自分のほうに向かって圧縮する作用を受け、こうして凝固するのですが、そのさい、このような作用を受けた程度がきわめて大きくて、しかも作用を受けたのが大地の上方においてである場合は「霰（雹）」、地面における場合は「氷」と呼ばれ、また、作用の受け方がさほどでもなく、まだ半ば凝固したに過ぎない場合は、これまた、大地の上方のものであれば「雪」、地面で露から凝固して生じるものであれば「霜」と呼ばれます。

60 ところで、互いに混り合っているような、大部分の種類の水は——この種族は全体としては、とにかく、大地から生えている植物を通して漉されたものなので「〔植物〕液」と総称されてはいますが——混淆のせいで、それぞれがどれも違っているのでして、そこに生み出された、他の大部分の種類は、名のないものなのですが、火を含んでいる四種のものは、特に目立っているので、それには名前がつけられたのでした。すなわち、身体とともに魂をも温めるものは「酒」。なめらかで、視線を拡張する性質(2)を持ち、そのために、見た眼に輝かしく、光って、ぎらぎら見えるのは「油（エライオン）」の類で、これには、ピッチ、蓖麻子油（ひまし）、本来の意味での油（エライ

B オン、オリーヴ油)、および、それと同じ性質を持った他のすべてのものがあります。また、口腔の諸孔が収縮している時に、それを弛めて自然な状態に到らしめる性質を持ち、そのような性質によって、甘さをもたらすものには、最も一般的な名称として「蜜」という名が与えられ、さらに、焼くことによって肉を分解する作用を持った、泡立つ種類のものは(3)、すべての植物液から区別されて「オポス」(4)と名付けられました。

---

1 この箇所については、テクストの健全性を疑う向きもあるが(シュタルバウム、コンフォード)、とにかくこのまま読むと、ここでは「液状(ヒュグロン、ὑγρόν)」なる名称の由来が言われているのだとも考えられ、従って「液状(ヒュグロン)」はおそらく「地面の上を流れる」(ヒュペル・ゲース・レオン ὑπὲρ γῆς ῥέον)に関係させられているのだろうとする説(アーチャー・ハインド、テイラーはこれを採用)もある。しかしこれはもちろん、推測に過ぎない。

2 視線の拡張・収縮で「色」の説明がされている点については、67C sqq. を、特に光って見える色の説明については同E sqq. を参照。

3 「味」の説明については、65C sqq. を参照。「甘さ」については66Cを、また味覚の器官を焼いたり、泡立てたりするような味については65E sqq. を参照。

4 「オポス」は一般に、植物の根や茎の切口から流出する乳状の液を意味し、特に無花果の樹液を指して、これが乳汁を凝固させるのに用いられたものであることは、エンペドクレス(Fr. 33)やヒポクラテス(『疾病について』4. 52)にも見られるが、またアリストテレスにも「無花果のオポスと、動物の胃の中の凝乳とか、乳を凝固させる」(『動物誌』第二巻(522^b2))という言葉がある。しかしまた、シルピオンと呼ばれる植物(せり科おおういきょう属の植物で、食用や薬用に供されたらしい)のオポスについても、ヒポクラテス(「急性疾患の養生法」23他)に言及が見られるので、「オポス」は一般に、無花果やシルピオンなどから採出される液で、われわれのいまの箇所の記述にあるような刺戟的な味のものだと解される。しかし、これが何故「すべての植物液から区別され」なければならないのか理由不可解として、「区別する」と普通には訳される語を「分泌する」と読む解釈者(Taylor, *Comm.* pp. 421–422)もある。

二五

C　また、土の種類では、水を通って漉されたものは、次のようにして、石の類の物体になります。すなわち、そこに混っている水は、混合するさいに打ち砕かれると、姿を変えて空気になります。そして、空気になると、自分の場所へと上昇します。ところが、その上には、空虚というものが少しもないので、従って近辺の空気を押すことになります。ところが、その空気は、何分にも重いものなので、これが押されて、土塊（つちくれ）の上に、周囲一帯に降り注ぐと、この土塊をひどく圧縮して、新しく出来た空気がそこから上昇して行った、その跡の場所へと、これを押し込めます。そこで、土が、空気の作用で、水によっては溶かされないまでに圧縮されると、これが「岩」を構成することになるのですが、その場合、大きさの等しい、均等な粒子から成る透明なものは、それだけ美しく、その逆のものは、それだけ醜いものなのです。

D　また、火の急速な作用によって、水分という水分をことごとく奪い取られ、先のものよりも毀れ易く出来ているものは、われわれが「陶器」と名づけている種類のものになったのでした。しかし、往々にして、水分が残り、土が火の作用で溶け、それが冷える時に、黒色をした石が生じたりすることもあります。(1)

さらにまた、これと同じように、混合体の中から水が多量に排除された後に残されたもので、しかし、もっと微細な土の粒子から成り立っており、塩っぱく、半凝固体で、いま一度、水によって溶けうるような二つの種類のものがあります。そのうち、油や土を洗いおとしてきよめる性質を持ったものは「ソーダ」になり、また

E　口の感覚と結びつく場合によく調和するものは、神々の愛用品とも言いつたえられている「塩」になったのでし

た。

また、この両者(土と水)がいっしょになって出来ているもので、水によっては解体されることはないけれども、火によっては解体される、といったものは、次のような原因によって、そのように凝固しているのです。すなわち、火と空気は土の塊を溶かすことはありませんが、それは、火と空気の粒子が、元来、土の組織中にある間隙よりも小さく出来ているために、べつだん無理をしなくても、十分な余地をもって進んで行けるので、従って土を解体しないままにしておくことになり、こうしてこれを溶けないものにするわけなのです。しかし水の粒子は、元来、火や空気の粒子よりも大きいのですから、無理に通路を開くことになり、従って、土を解体させて溶かすことになります。つまり、土が無理に固められているのでない場合には、以上のようなわけで、ただ水によってのみ解体されるのです。しかし、無理に固められている場合には、火以外の何ものも、これを解体させることはありません。というのは何しろ、火以外のどんなものに対しても、入口が残されてはいないからです。そして今度はまた、水があらん限りの無理強いで凝縮させられている場合には、火だけがこれを融解させますが、無理強いの度合がいくらか弱ければ、両者、つまり火と空気の双方が、これを融解させることになります。ただし、空

61

1 バーネットのテキスト(F、Y写本を採用)では、「黒色をした石が生じる」というよりもむしろ「黒色をしたものが石になる」と読める。したがって改訂の試みもいろいろあるが、いずれも問題なしとは言えない(Taylor, *Comm.* pp. 424–425 参照)。しかしいずれにしても、この箇所の言わんとするところは、ここに訳出したようなことと思われる。この「黒色をした石」とは、「熔岩」とか「珪石」の一種だとか推測されている。

気のほうは水の粒子間の間隙に沿って解体させますが、火のほうはもとの三角形にまで解体させます。また、空気が無理に凝縮させられている場合には、どんなものがこれを解体するにしても、構成要素(ストイケイオン)にまで解体する以外にはないのですが、しかし、無理に凝縮されてはいない場合には、火だけがこれを溶かすのです。

B

そこで、土と水が混合して出来ている物体の場合は、その物体内の土の隙間を——無理に圧縮されているものであっても、とにかくその隙間を——、水が占めている限り、外部から攻撃してくる水の粒子も、入口がないために、ただ塊全体のまわりを流れるだけで、これを溶かさないままにしておくのです。しかし、火の粒子が水の粒子の隙間に入り込んでくると、水が土に及ぼすのとまさに同じ作用を、火が〔水に〕[1]及ぼすことになり、こうして、火の粒子だけが、この合成体を、溶けて流れるようにさせる唯一の原因となっているわけなのです。そして、こうした合成体のあるものは、たまたま、その含んでいる水分が土の分よりも少なくなっているのでして、ガラスの類だとか、一般に「可融解性の」と呼ばれている種類の石はすべて、ちょうどこうしたものなのですが、また

C

あるものは、水分のほうを余計に含んでおり、蠟の類や薫香といった物体をなしている凝固体がこれに当たります。

二六

そして、じっさい、いろいろの形態だとか結合だとか、相互への変化だとかに由来する、多種多様な種類のものは、以上で大体示されたことになります。そこで今度は、それらのものの〔感覚的〕諸性質が、いったいどのよ

うな原因によって備わったのかということを、明らかにするように努めなければなりません。

さてまず第一に、これからの話には、「感覚」ということが、いつでも前提になっていなくてはならないのですが、しかしわれわれは、肉および肉に付随するものの成り立ちだとか、魂のうちでも死すべき部分の成り立ちについては、まだ述べて来てはいないのです。ところが、こうしたものは、感覚的性質と切り離しては、十分に話のできるものではなく、後者を前者なしに話す場合も同様という工合になっているのですが、さりとて、両者を同時に述べるなどは不可能と言ってもよいでしょう。そこで、われわれは、この両者のどちらかを先に前提することにして、後でまた、その前提された事柄に帰って来ることにしましょう。従って、物体の種類の話に引き続いて、その性質の話に移れるように、身体と魂のことのほうは、先に前提としておくことにしたいと思います。

D

そこで、まず第一に、どのようにして、火が「熱い」と言われているのかということを、つぎのような考察によって検討することにしましょう。つまり、火がわれわれの身体におよぼす、分離・切断の作用に注目するのです。すなわち、火の感じが、何かするどいものであることは、われわれのほとんどすべてが感覚していることです。

E

そこで、稜の薄さ、角の鋭さ、粒子の小ささ、運動の速さなどこそ——何しろ、こうした性質すべてのために、

1 F、W、Y諸写本によると、「(火が)空気に……」となるが、これでは前に言われたことと合わなくなる。従ってバーネットは「空気に」を削除し、そのほかにも改訂の試みがあるが、われわれはクック・ウィルソン(*ibid.*, pp. 105-106)、テイラー、コンフォードに従って「(火が)水に」と読む。

火は激烈で切断力のあるものになって、出会うものをいつでも鋭く切るのですから――とにかく、われわれが、火の形の成り立ちを思い起こすなら、他の特性ではなく、まさにこの特性こそわれわれの身体を断ち切り、こまかく細分化(ケルマティゼイン)して、現に「熱い(テルモン)」と呼ばれている性質と、その名称とを、当然の結果としてもたらすことになったのだと、推理しなければなりません。

ところで、それと逆な事態は、明々白々ではありますが、しかし説明に欠けるところは少しもないようにしなければなりません。すなわち、身体の周囲にある水分のうちでも、大型の粒子のものが、身体に入り込んでくると、それは、自分よりも小さい粒子[1]を押し出し、しかし、自分は出て行ったものの占めていた場所に入り込むこ B とができないで、われわれの内部にある水分を圧縮します。内部の水分というものは、もとは、不均等で動いていたのですが、外部の水分は、以上のようにして、これを均等にし、圧縮することによってそれを不動のものにして凝固させることになるのです。ところが、不自然に凝集させられたものは、自然に、自分で自分を逆の方向に反撥して戦うことになります。そこで、この戦いと震動には、「震え」とか「寒気(さむけ)」とかいう名が与えられ、また、この感じ全体と、それを生み出す作用者は「冷」と名づけられたのでした。

また、「硬い」というのは、すべてわれわれの肉のほうが屈する、当の相手について言われる名称であり、「軟い」は、すべて肉に屈する側について言われる名称です。そしてこうした言い方は、事物相互の関係においても同様です。ところが、小さな底面に立つものが屈するわけでして、これに対して、正方形の底面から成り立って C いるものは、非常に坐りがよいので、きわめて抵抗力の大きなものであり、また何にせよ、きわめて密に凝集していて、そのために特に強靱なものの場合も同様です。

また、「重い」「軽い」は、「上」「下」と言われているものといっしょに、詳しく検討すれば、一番はっきりと説明できるでしょう。というのは、何かこう、宇宙を二分する二つの場所、つまり、その一つは「下」で、それは、すべて、何らかの物体的な塊を持ったものが動いて行くその先であり、いま一つは「上」で、これはどんなものでも強制されてはじめて向かうところの場所だというような、そんな二つの相反する場所が本来的に存在するなどと見なすのは、どのようにしても正しくないのです。何故なら、何しろ宇宙全体は球形なのですから、中心から等距離にあって、端となっているものはすべて、元来、どれもが同じような仕方で、まさに「端」となっているのでなければなりませんし、また、中心は中心で、端から同じ尺度だけ隔たっているのですから、これは、すべての端の「向い側」にあるのだと見なさなければならないからです。そこで、宇宙の本来のあり方が以上のようだとすると、いま言われたもののうちの何を取って、これを「上」あるいは「下」とすれば、少しも適していない名称を言っていると——正当にも——思われずにすむでしょうか。というのは、宇宙の中にあって中心に

D

1 「自分よりも小さい粒子」とは、身体内にある小型の水の粒子とも解しうる(Archer-Hind; Taylor, *Comm.* p. 432)。これに対してコンフォード(*Pl. Cosm.* p. 264)は、人は寒気を覚える時には汗はかかないという点も一つの理由として、「小さい粒子」とは空気と火を意味するものとしている。74Cで、発汗現象にも言及しながら、肉の組成が語られているところでは、肉は火と水と土の混合物とされているから、いまの箇所も、外部の水の粒子によって身体内の少なくとも火の粒子が押し出されて冷える状態(59A参照)が言われていると解することもできる。ただし、寒気を引き起こす外部の水分について、ことさら「大型の粒子」と言われているから(コンフォードはこれを訳していない)、それよりも小さい粒子の中には、火のほかに、身体内の水分のうちでも小型のものが含まれてないとは言えないであろう。

位する場所は、もともと「下」とも「上」とも呼ばれてよいものではなく、まさに中心にあるのですし、また周辺は周辺で、それが中心でないのはもちろんのこと、そのどの部分を取っても、一つの部分が他の部分とくらべて、中心との関係で違っていないことは向い側の任意の部分の場合に比しても、少しも変るところがないのです。ところで、何かあるものが、もともと、どこも同じような状態にある場合、ひとは、それに対して、どんな反対名辞を、どのようにして付与すれば、それで適切な言い方をしていると考えることができるのでしょうか。というのは、また、もしも宇宙の中心に、何か均衡の取れた固体があるとすると、それは、何しろ宇宙の端がどこも同じようなので、そのどの部分に向かって動くこともないでしょう。それどころか、また、もし誰かが、その中心の固体のまわりをぐるぐる歩くとすれば、そのひとは、何度も自分自身の対蹠点に立って、宇宙の同じ部分を、

63

「下」と呼んだり「上」と呼んだりするでしょう。つまり、宇宙の全体は、いま言われたように、球形なのですから、そのある場所を下と言い、ある場所を上と言うのは、分別ある者に出来ることではないのです。しかし、いったいどういうところから、このような名称が与えられることになったのか、また、じっさいには、どういうところにそれらの名称が成立していて、それがために、われわれが、ひいては全宇宙をも、そのように区分して言う慣わしとなっているのか――このような事柄については、われわれは以下のことを仮定することによって、

B

意見を一致させなければなりません。いま誰かが、宇宙のうちでもとくに火に割り当てられている場所――そこはまた、火の大部分が集団をなしているところでして、それに向かって〔個々の〕火が動いて行くわけですが――その場所で、この火の集団の上に立ち、そして、そうする能力を持ち合わせていて、火の部分を切り取り、これを秤皿に乗せて計るとしましょう。そして、その人が棹を持ち上げて、火を、それとは異質的な空気の中へと、

C 無理に引っ張って行くとすると、その場合に、大きいものよりも小さいもののほうが、強制に従わせやすいものであろうことは明らかです。何故なら、一つの力で二つのものが同時に引き上げられる場合には、小さいもののほうがよりよくこの強制に従い、それに対して、大きいもののほうは、何らかの抵抗を示すために、この強制に従う度合も少ないというのが必然だからです。そして、大きいものは「重い」と呼ばれ、また「下」に向かうと呼ばれるでしょうし、小さいものは「軽い」と呼ばれ、「上」に向かうと呼ばれることになるでしょう。さてそこで、この同じことを、われわれが、ここのこの場所でしているという、まさにその現場を見つけて押えなくてはなりません。というのは、われわれは大地の上に立っており、土の類のものや、いや、時には土そのものを、〔互いに重さを比較するために〕分けて、これらを、その自然に反して無理に、異質的な空気の中へと引っ張って

D 行く、ということをしているのでして、この場合、〔比較される〕両者はどちらも、自分と同族のものにしがみついていようとするのですが、しかし、大きいものよりも小さいもののほうが容易に、われわれの強制に従って、異質的なものの中へと、先についてくるものです。そこで、このものを、われわれは「軽い」と呼び、これをわれわれが強制して向かわせる、その先の場所を「上」と呼び、また、それとは逆の状態を「重い」と呼び、「下」と呼ぶに到っている、というわけなのです。だから、じっさい、これらのもの(重いもの・軽いものなど)は、何しろ、それぞれの種類の大部分のものの占めている場所が、互いに相反しているのですから、どうしても、お互

E いとの関係で変って来ないわけには行かないのです——つまり、ある場所での「軽いもの」と、反対側の場所での「軽いもの」とでは、また、ある場所での「重いもの」「上」「下」と、反対側の場所の「重いもの」「上」「下」とでは、すべてが逆になったり、斜めになったり、互いに対してありとあらゆる仕方で相違するようになったり、

あるいはまた、現にそうであったりするのが見出されるはずなのです。(1) ——しかしとにかく、こうしたすべての場合について、次の一つのことに注意しなければなりません。すなわち、それぞれのものが自分と同族のものに向かって行くという、そのことが、動いて行く当のものを「重い」〔と呼ばれる〕ものにし、またそのようなものの動いて行く先の場所を「下」〔と呼ばれるもの〕にしているということ、そしてまた他方、これとは逆の状態のものをして、もう一方の組の名称で呼ばれるものにしているのだ、ということです。それでは、こうした性質について、その原因の話は、以上の通りで終ったことにしておきましょう。

64

ところで、今度は「滑(なめ)らか」と「粗(あら)い」という性質ですが、その原因は、たぶん、誰でも理解できて、他の人にも説明できることでしょう。——つまり、「硬さ」が「不均等性」と混ると後者をもたらし、「均等性」が「緻密さ」と混ると前者をもたらすのです。

二七

ところで、身体全体が共通して受け取る感覚的諸性質についてのきわめて重要な問題で、まだ話題に上っていなかったものがあります。それは、われわれがいま述べて来た諸性質のうちにあって、これらを「快い」ものや「苦しい」ものにする原因をなしている要素は何かという問題です。そしてまた、すべて身体諸部分を通して感覚されるようになる性質で、その場合に同時にまた「快」と「苦」をそれ自身のうちに伴っているものには、どれだけのものがあるのかという問題があります。(2) さて、〔じっさいに〕感覚されるにせよ、感覚されないにせよ、とにかくすべての感覚的性質〔もしくは感覚的印象〕について、われわれはその原因を次のようにして把握するこ

B とにしましょう。すなわち、以前にわれわれが区別した、あの「動きやすいもの―動きにくいもの」を思い起こすのです。――われわれが手に入れようとするものはすべて、この方法で追跡しなければならないのですからね。つまり、本性上動きやすいもののほうは、ほんのわずかでもそこへ影響が及ぼされると、その諸部分(粒子)[3]が一から他へと同じ影響を生み出すことによって、これを順ぐりにまわり伝え、ついに「知性」のところに達して、作用を及ぼした当のものの機能を報告するのです。しかしその逆のもののほうは安定しているので、ぐるぐるま

C わりの進行をすることはいっさいなく、ただ作用を受けているばかりで、隣接する他のものを動かすことはありません。従って、こうした粒子は一から他へと伝えることがないのですから、最初の影響は、これらの粒子のと

1 「逆」、「斜め」、「ありとあらゆる仕方」については、球形の宇宙の周辺に火の領域があり、その中心に球形の地球があるという図を考えれば、土が地球に向かう方向(土にとっての下)と、火が周辺に向かう方向(火にとっての下)は互いに逆方向に向かうが、これらの方向はまた、宇宙の中心から四方八方に向かう線上にあるので、場所が異なれば、それぞれの物体にとっての「上―下」は、あらゆる角度をなして互いに傾斜する、という意味であろう。

2 「(身体全体が……)受け取る感覚的諸性質」と訳した πάθημα は「(人が)受けるもの＝印象、感じ」、「(事物が)受けている状態＝偶有的性質」などを意味する。61C で「(感覚的)諸性質」と訳したのも同じ語。61C sqq. からもわかるように、「熱い」「冷たい」などはすべて、感覚する側との相関関係で考えられており、「火が熱い」と言われる場合、「熱い」は、人が受ける印象・感じであると同時に、それと不可分の表裏をなして、それは火の感覚的性質でもある。これまでの箇所では、事物の感覚的性質が、身体への作用との相関関係で論じられたが、以下「快―苦」を扱うに及んで、感覚的性質はむしろ、身体に及ぼされた影響の面で考察される。テキストでは πάθος という語も用いられているが、因みに近年の訳者は、この双方の語に "affection,"(コンフォード)、"Eindruck,"(アーペルト)、"impressim,"(リヴォー)、などの語をあてており、われわれも文脈に応じて「影響」「印象」などとも訳す。

3 原語では諸部分(μέρη)とあるが以下「粒子」と訳す。56E注2参照。

ころに止まったままで、全体としての生きものへと動いて行くことができなくなるのでして、こうして、影響を受けた当事者〔全体としての生きもの〕は、無感覚状態に置かれることになります。(1) そして、このようなことは、骨とか髪とか、その他すべて、われわれの中の、主として土で出来ている部分の場合に起こることなのです。これに対して、前に言われたこと〔部分が相互に影響を伝える場合〕は、視覚と聴覚の場合に、一番よく成り立ちます。これらの中では、火と空気が最大の働きをしているからです。

D

そこで、「快—苦」は、次のように考えなければなりません。つまり、われわれのところで、自然に反した、無理な影響が、それも一気に起こる場合には、このような影響は「苦しい」ものなのであり、逆に、自然の状態へと一気に戻る影響は、「快い」ものだということ。そして、静かに、また徐々に起こる影響は、感覚されないけれども、それと逆の影響は、逆のあり方をするのだということです。しかし、容易に起こる影響はすべて、最高度に感覚されはしますが、快—苦を伴うことはありません。たとえば、視線(視覚の流れ)——これは、以前に、昼になる度に、われわれと自然に融合した身体になると言われたのですが(2)——この視線そのものに起こるいろいろの影響の場合がそれです。何しろ、切られることも、焼かれることも、その他、視線の受けるどんなことも、

E

視線の中に苦痛を生み出すこともなければ、また、視線がもとの形に戻るときに、そこに快楽が生み出されるわけでもないのです。しかし、それでも、視線には、それがどんな作用を受けようと、また、自分のほうがどこでどんなものに衝突して触れようと、それに応じて、きわめて強い、きわめて明確な感覚があるのです。——というのは、視線の拡張にも収縮にも、まったく無理強いということがないからなのです。しかし、これに反して、もっと大きな粒子から出来ていて、作用者にもなかなか屈することがなく、しかも、運動を全体に伝えるという

65 ような、こうした身体器官は、快と苦を持つわけでして、この場合、自然の状態から疎外させられる場合には苦痛を、再びもとの状態に立ちなおる場合には快楽を得るのです。また、自分の自然の状態から疎外され、内部が空(から)になって行く過程のほうは、少しずつであるのに、満たされるほうは、一気で、しかもその都度、多量に満たされるのだとすると、そのようなことを受けるものはすべて、空になるほうには無感覚で、満たされるほうだけを感覚することになり、こうして、魂の死すべき部分には、苦痛をもたらさないで、きわめて大きな快楽をもたらすことになります。そしてこのことは、芳香の場合に顕著に見られます。しかし、自然の状態から一気に疎外 B され、少しずつやっとのことで、自分のもとの状態に立ちなおるものは、先の場合とはまったく正反対の結果をもたらします。そしてこのことはまた、身体の火傷や切り傷の場合に明瞭です。

二八

そして、身体全体が共通して受ける影響と、それを生み出す作用者に与えられた名称のことは、これで大体話してしまったわけですが、われわれの個々特殊な部分(器官)のうちに起こる事柄、つまり、それらの受ける影響のことと、また、作用者がどのようにしてそれを惹き起こすのかという、その原因のことを、できることなら、

---

1 動きにくい粒子で出来ている、身体の部分として、すぐ次に挙げられている「髪」を例にとると、たとえば私は、髪を切られてもいっこうに痛みを感じない。「全体としての生きもの」とは——髪や骨でなく——「私」なら「私」を指し、「影響を受けた当事者」とは、「髪を切られている私」を意味する。

2 45B以下。

(65)
C　話すようにしなければなりません。さてまず第一に、「〔植物〕液」〔味〕[1]について前に話していた時に言い残したことがあります。それは、舌が受ける固有の感覚的性質(影響)のことですが、それをできるだけ明らかにしなければならないのです。ところで、これもまた――他の大多数のものもその通りであるように――これも、一種の収縮と拡張に由来するように見えますが、またそれに加えて、他のどんな影響にもまして、これは粗さと、滑らかさに依存している度合が大きいように見えます。すなわち、舌の試験器官とも言うべきもので、心臓にまで延びているところの小管がありますが、そこへ土の粒子が入り込んで来て、肉の湿った柔かい部分に出会うと、土の粒子は溶かされ、こうしてこれがかの小管を収縮させ、乾燥させることになります。そしてこの場合、その粗さの度が大きければ、それは「収斂性のある」ものに感じられ、粗さの度がさほどでもなければ、「乾いてざらざらした(渋い?)」ものに感じられます。また、かの小管を清め、さらに舌のあたりの全体を洗浄する働きをするものが、度を過ぎてその作用を及ぼし、この器官の実質の一部を溶かすほどにまで侵す時には――たとえば、ソ

D

E　ーダがこのような働きをしますが――そのようなものはすべて「刺戟的な」というように名づけられています。また、ソーダの場合よりも性質が穏やかで、適度の洗浄作用を持つものは、粗い刺戟性のない、「塩辛い」ものでして、これはわれわれにはむしろ好ましく感じられます。

そしてまた、口の熱といっしょになって、その作用で滑らかにされるものがあります。これは自分もいっしょに燃え上り、そして、自分を灼熱させた当のものを、逆に自分のほうから焼き返し、軽さのために頭の感覚器官

66　のほうへ上り、自分の出会うすべてのものを切るのですが、この働きのために、こうしたものはすべて「しみるような(辛い?)」と呼ばれました。

しかし、今度はまた、腐敗のために、粒子が予め微細化された上で、狭い管の中へ入り込んでくるものがありますが、これは管の中にある土の類の粒子とも、空気の粒子とも度の合っているものなのでして、従って、こうした空気や土の粒子を動かし、動かされた双方の種類の粒子が互いに相手のまわりをぐるぐる掻きまわされる、という結果を生じます。そしてこの双方の粒子は掻きまわされて、〔互いに相手のまわりを〕取り巻く恰好になり、一方が他方の中へ入り込んでくるというしだいで、この入り込んでくるものの周囲に、中の空ろな膜が出来て、B そのまわりに張ることになります。——ところでこの場合、中の空ろな湿った膜というのは、土を含んでいる場合もあり、混り気のない純粋なものである場合もありますが、とにかくこれが空気のまわりに張ると、空気を入れた湿った容器、つまり、中が空ろなまるい水玉が生じることになるのでして、中でも純粋な水分から出来ているものは、透明な被膜をなして、「泡」の名で呼ばれ、他方、土を含んでいて、全体がいっしょに動揺して膨れ上ってくるような水分から出来ているものは、「湧き立ち」とか「醱酵」とかの名称で呼ばれるのです。——しかしとにかく、こういう影響を及ぼす原因となるものは、「鋭い(酸っぱい?)」と呼ばれるのです。

C ところで、以上のものについて言われたことのすべてと相反する影響は、それらの場合とは逆の原因からももたらされます。すなわち、入って来るものが液状をなす場合の構造が、もともと舌の性状に適していて、そのざらざら粗くなっている部分に対しては、塗りつぶしてこれを滑らかにし、自然に反して収縮しているものや弛緩し

---

1 60Aで「〔植物〕液」と訳した原語 χυμοί はまた、「風味」や「オポス」については、その味のことが語られていた。「味」をも意味する語である。そしてその箇所でも、「蜜」

ているものに対しては、後者を引き締め、前者を緩め、すべてをできるだけ自然な状態に落ち着かせるような場合には、このようなものはすべて、無理な影響に対する医薬となるものなので、誰にとっても快く、好ましく、こうして「甘い」と名づけられたのです。(1)

二九

D

そして、このような話題については、以上の通りですが、鼻孔の機能になると、そこには、〔はっきりした〕種類というものが存在しないのです。というのは、「匂い」というものはすべて、中途半端なものなのですが、これに対して、何かの〔はっきりした〕種類(2)のものの場合は、そのどれも、何らかの匂いを持つのに必要なだけの度合いのものとなってはいないのです。いやむしろこの方面でのわれわれの管は、土や水の類に対しては狭過ぎ、火や空気の類に対しては広過ぎるように出来ているのでして、従って、これらのもののどれ一つとして、誰も未だかつて、その匂いを感覚したことがないわけなのです。ただしかし、ある種のものが、湿ったり、腐ったり、溶けたり、煙ったりする場合にだけ、匂いが生じます。何故なら、水が空気に、空気が水に変化する時、その中間の段階で匂いが生じたわけで、匂いとはすべて、煙か霧かであり、この場合霧とは空気から水に行くもののことであり、煙とは水から空気に行くもののことなのです。というわけで、匂いはすべて、水よりは微細で、空気よりは粗大なものとなっています。そしてこのことは、呼吸器官を何かで塞いだ上で、無理に息を吸い込んでみれば、いつでも明らかに示されるのです。そのような場合には、どんな匂いも、〔息と〕いっしょに濾過されて出て来ることはなく、ただ匂いを奪われた息そのものだけがやって来るからです。

E

さて、匂いにも多種多様のものがありますが、それらは二通りに分れます。そしてこの二種のものは、一定数の型〔の粒子〕から成り立っているのでもなければ、単一な型から成り立っているのでもないのでして、べつだん、名前とてないものなのですが、しかしただ「快いもの」「不快なもの」というように——何しろ、そこでは、この二つのことだけが顕著なので——二つに分けて呼ばれているわけです。そして、その場合、後者は、われわれの頭の天辺と臍の間にわたってある腔所全体をざらざらに粗くし、これに無理な作用を及ぼすものであり、前者は、その同じものをやわらげ、もとの自然の状態へかえすというけっこうな作用を及ぼしてくれるものなのです。

B

ところで、われわれのうちの、第三の感覚器官、すなわち、「聴覚」の場合を考察し、いったいどんな原因のために、そこに見られるような影響が起こるのかということを話さなければなりません。

1　以上、「塩辛い(ἁλυκός)」と「甘い(γλυκύς)」以外の味の名称について。

「収斂性のある」と訳したστρυφνόςも、「乾いてざらざらした」と訳したαὐστηρόςも、ともに収斂性があるが、前者のほうが後者よりも、より収斂性がある(στῦφον)とする言葉がガレノスに見られ、また特にαὐστηρόςのほうが、いわゆる辛口の(dry)酒について用いられた例が見られる。

「刺戟的な」と訳したπικρόςは、一般に「尖った」「鋭い」の意の語。草の根や塩水の味に用いられている例がホメロスにも見られる。

「しみるような」と訳したδριμύςは、矢の鋭さをも表わすが、眼にしみる煙についても用いられ、味では大根類の場合にも用いられる語。

「鋭い」と訳したὀξύςは、武器の切っ先や刃の鋭さのほか、眼をくらませるような光だとか、つんざくような音ないし高音や、素早い運動の場合にも用いられるが、ここでは明らかに「酸味」を意味しているのであろう。

2　この場合の「種類(εἴδη)」は明らかに、火、水などの粒子の持つ、正多面体の「種類」のことであろう。

さて、総じて、「音」とは、「耳を通じ、空気の作用によって、脳と血液に及ぼされ、魂にまで伝えられるところの打撃」であると規定し、また、「その打撃によって惹き起され、頭に始まり、肝臓の座のあたりに終る動き」を、「聴覚」だと規定することにしましょう。そしてまたここに次のようなことが成り立つものとしましょう――動きが速ければ、音は高く、また動きが遅ければ遅いだけ、それだけ音は低い。また、動きが均等であれば、音も均等で滑らかであるが、その逆の場合には、音はざらざらしたものになる。そして動きが強大であれば、音も大きいが、逆の場合には、音は小さい――と。しかし、音の協和のことは、後にお話することになっている話題[1]の中で述べなければなりません。

C

三〇

そこで、感覚される第四の種類のものが、われわれにはまだ残されていることになります。それは、内部にいろいろ違った種類のものを沢山含んでいるので、分類を必要とするものなのですが、そのいろいろな種類のものというのは、総称すれば、「色」と呼ばれているものなのです。つまり、個々の物体から流出し、その構成粒子が、ちょうど感覚を惹起し得るように視線と度が合っているという、そうした焔がそれです。ところが、視線について、それがどのような原因から成立するのかという点そのものだけなら、これは前に話しました。[2]だから、当を得た話をするには、今度は、色について、次のように述べるのが、一番妥当でふさわしいことと言えるでしょう。――すなわち、他のものから運動して来て、視線にぶつかる粒子のうちには、その大きさが、視線そのものの粒子と較べて、より小さいものもあれば、より大きいものもあり、また等しいものもある。そこで、等しい

D

ものは、感覚されることがなく、これをじじつまたわれわれは、「透明」と呼んでいるのである。しかし、より大きいものと、より小さいものの場合は、前者は視線を収縮させ、後者は視線を拡張させるのであって、この両者 E は、肉の場合の熱いものと冷たいものや、舌の場合の収斂性のあるものと、しみる(辛い?)とわれわれが呼んだ熱する作用のあるものとは[3]、兄弟分の関係にある。つまり、〔色の場合の〕この両者とは、「白い」ものと「黒い」ものであるが、これらは、前者(熱いものと冷たいものなど)のもたらす同じ影響が、他の種類のものの中で起こったのであって、その理由で違ったもののように見えているのである――というのです。そこで、これらのものを次のように名づけなければなりません。すなわち、視線を拡張させるものを「白い」と呼び、その逆のものを「黒い」と名づけるのです。

また、別の種類の火の、もっと急速な運動が視線にぶつかって、これを分離拡張させながら眼までさかのぼり、68 さらに、眼の通路そのものを無理に押し開いて溶かす場合には、この作用者は、一方では眼の通路から、火と水をいっしょに――これが「涙」と呼ばれているものなのです――流れ出させることになり、他方では、自分自身が火にほかならないこの作用者が、反対側から来る火(眼から出る火)と出会うことになります。そして、この場合、後者はちょうど稲妻から発するように跳び出し、前者は入って行って、湿気のところで消えるというわけで、この攪乱状態の中でありとあらゆる色が生じるのですが、この状態を、われわれは「眩(まばゆ)い〔状態、あるいは感じ〕」

1　80A～B.
2　45B以下。
3　65D～66Aを参照。

と名づけ、また、こうした状態を生み出す当の作用者を「輝く〔色〕」だとか「光った〔色〕」だとか名づけたわけなのです。[1]

B

さらにまた、この両者の中間に、[2]火の一種類があって、これもやはり、眼の水分のところにやって来て、それと混りはしますが、光ることはありません。ただし、この火が〔湿気に〕混ると、その湿気を通した火の光は、血の色を呈するのでして、われわれはその光に「赤」という名を付しています。[3]

また、輝く色が、赤および白と混ると、「黄金色」が生じます。しかし、どれだけの割合いでお互いに混り合うのかということは、仮に誰かそれを知っている人があるとしても、これを言うのは賢明なことではありません、――そうしたことについては、そのどんな必然性も、それらしい説明も、ただほどほどに言うことすら、出来ることではないでしょうからね。

C

また、赤が、黒および白に混ると「深紅色〔?〕」になり、この混合物がもっと焼かれ、その上になおも黒が混じると、「暗紫色」になります。「火色〔橙色または黄褐色?〕」は、黄金色と灰色の混合から生じ、「灰色」は、白と黒の混合から生じ、また「淡黄色」は、白が黄金色に混じると生じます。そしてまた、白が輝く色といっしょになって、濃黒色の中へ落込むと「濃藍色」をつくり上げ、濃藍色が白と混じると「青緑色」が、また火色が黒に混じると「韮色〔緑?〕」[4]が出来上ります。

D

そこで他の色についても、それらが、いったいどのような混合になぞらえられれば、とにかくありそうな話をまっとうできるか、それは以上言ったことからほぼ明らかです。しかし、もしも、この考察を実地に試してみようとする人があるなら、それは、その人が、人間と神の本性の相違に無知なためだということになるでしょう。

つまり神のほうは、多くのものを一つに混ぜ合わせたり、また逆に一つのものから多くのものへと分解したりすることに、十分通暁してもいれば、またそれをする能力もあるのですが、人間のほうは、誰一人として、そのどちらをも、現在においてもできるものではなく、今後もけっしてできはしないでしょうからね。

E

さて、生成するもののうちに、最もすぐれた、最も立派なものを作り出す製作者たる神が、かの自足した神、最高度に完結した神を生み出そうとした時に受け取ったのが、まさに以上のすべてのものだったのでして、それらはその時、「必然」からして、いま述べたような状態にありましたが、神は、それらのもののところに見られ

1　「明るい」とか「光った」とかは、明らかに色の一種に数えられている(すぐ次の68B～Cを参照)。
　「輝く」と訳したλαμπρόςは、太陽、月、星についても言われるが、また白い布などの場合にも用いられ、さらに、水の清澄さを表わすのにも用いられている語。
　「光った」と訳した場合の、「光る」に当る原語στίλβωは、磨き上げられた金属の表面などの場合によく用いられる。

2　「白」と「輝く色」の中間であろう。

3　アリストテレス(『気象論』第三巻(374^a3 sqq.))は、輝くものも、暗いものを通して見ると赤く見え、太陽もまた、霧や煙を通して見ると赤く見えるとしているが、いまの箇所も、「赤」は、輝く色と白色の中間に位するものが、眼の湿気を通って生じた色としているのであろう。

4　「深紅色」以下の若干の色について。「深紅色」と訳したἁλουργόςは、普通purpleと訳されている語。「暗紫色」と訳したὄρφνινοςは、ここに述べられている記述から、"brownish grey," "dark violet," "Dunkelpurpur," "brun foncé," などと訳されているが、いずれにしても、purpleの黒みがかったものであろう。
　「濃藍色」と訳したκυανοῦςは、濃藍色のエナメル(κύανος)に由来する語。
　「青緑色」と訳したγλαυκόςは、元来は「輝く」という意の語であるが、後に、オリーヴなどの色を表わす場合にも用いられた。
　「韮色」と訳したπράσιοςは「韮(πράσον)」の緑色を表わすπράσινοςと同義に解されている。しかしその色が何故、火色と黒の混合で生じるのか、この箇所は以前から解釈者たちを不思議がらせている箇所である。しかしまた83B注1を参照。

るような種類の「原因」を補助手段として役立て、自分のほうは、生成するものすべての中に、「善さ」をつくり出すのを仕事としたのでした。だから、われわれは、「原因」の二つの種類を区別しなければならないのです。つまり、「必然的なもの」と「神的なもの」とがそれです。そして、「神的なもの」のほうは、およそわれわれの本性が許容する限りの幸福な生を獲得するために、あらゆるものの中にこれを探究しなければならないのです。そしてまた他方、「必然的なもの」は、とにかくそれなくしては、われわれが真剣に考える当の対象そのものも、それだけでは感知することも、捉えることも、その他どんな仕方でもそれに与る(あずか)ことができないのだと勘考して、まさにかの神的なもののために、探究しなければならないものなのです。

三一

さて、ちょうど大工の手もとに材木が準備されているように、われわれの手もとにも、あの幾種類もの「原因」が材料として、選り分けられて準備されており、それを素材として、話の残りが織り上げられなければならないいま、われわれは手短に最初の出発点へともう一度引き返し、そして、いまここまで到達したわれわれの話の、そもそもの出発点となった、その同じ元のところまで急行し、それからすぐに、前に言われたことにぴったりした、締めくくりともなり総決算ともなるものを、この物語の仕上げとしてつけ加えるように努めましょう。(1)

すなわち、最初にも言われたように、先に挙げたいろいろなものは、無秩序な状態にあったのですが、神はそこに、とにかくそうした事物が、比率のある、釣り合いのとれたものになり得た限り、最大限に、またあらゆる仕方で、釣り合いを作り出して、これが、個々の事物の自分自身との関係においても、お互い同士の相互関係に

おいても成り立つようにしたのでした。というのは、当時は、このような事物は、偶然にそうなった場合を除けば、[2]比率や釣り合いに与っていたこともまったくなければ、また、「火」とか「水」とか言った名称や、その他何でも、現在呼ばれているような名称で名づけられるに価するものは、皆無という状態だったからです。しかし、

C 神は、これらすべてを、まず秩序づけ、次いで、それらのものを材料にして、この万有を——すなわち、死すべきもの、不死なるもの、すべての生きものを、自己自身のうちに蔵するところの一個の生きものを——構成したわけなのです。そして、神的なものについては、神自身が、その製作者となったのですが、死すべきものの誕生のほうは、その製作を、自分が生み出した子供たち(神々=天体)に命じたのでした。そこで神の子らは、父に倣って、魂の不死なる始原を受け取ると、次には、そのまわりに死すべき身体をまるくつくり(=頭)、それに乗りものとして身体全体を与えたのですが、またその身体の中に、魂の別の種類のもの、つまり死すべき種類のものを、もう一つつけ加えて組み立てようとしました。ところがこの種の魂は、自分のうちに恐ろしい諸情態[3]を、必

D 然的に蔵しているものなのです。——まず第一には、「快」という、悪へと唆かす最大の餌。次には「苦」、すなわちわれわれをして善を回避させるもの。なおまた「逸り気」とか「怖れ」とかいう、思慮のない助言者たち。

1　第二部(第一七—三〇章)では、もっぱら、神の技術の「補助手段」が論題とされて来たが、それは、もともと、第一部の終り(第一六章)で、神々による人体形成の話が論題となった時の一環たる「視覚」の話から始まったのであった。

2　53Aを参照。

3　「情態」と訳したπάθημαは64Aで「(身体全体が……)受け取る感覚的諸性質」と訳したのと同じ語。64A注2を参照。いまの場合は魂の受ける影響を意味する。英語には"affection,"という便利な訳語があるが、ここでは「情態」と訳した。"passion," "Erregung,"などとも訳されている。邦訳ではよく「情念」と訳されている。

宥め難い「怒り」。迷わされやすい「期待」——と言ったものがそれです。しかし神々は、これらのものを、理をわきまえない感覚と、敢て何にでも手を出したがる情欲と混ぜ合わせて、魂の死すべき種族を構成したのですが、これは止むをえない必然によるものだったのです。

そして、まさにこれらの諸情念によって、かの神的なもの（理性）を——万止むを得ない場合は別として、さもない限り——穢すことになっては、と、神々は憚って、この、〔魂の〕死すべき種族を、神的なものから離して、身

E

体内の別の住居に住まわせたのです。そして、その隔離のためには、頭と胸の間に「頸」を介在させることによって、この両者を仕切る境界となる峡部をつくったのでした。こうして、神々は、胸、あるいは、いわゆる「胸郭（トラクス）(1)」の中に、魂の死すべき種族を縛りつけようとしたのです。そして、この種の魂の中にも、本来的にすぐれたものと、劣ったものとがあるので、ちょうど女の住居と男の住居を区別するように、この胸郭の腔所

70

にも改めて、その真ん中に隔壁として「横隔膜」を置き、そうすることで、これに仕切りを入れたのでした。さて、魂のうち、勇気と血気をそなえた、負けず嫌いの部分は、これを、頭に近く、横隔膜と頸の間に住まわせました。魂のこの部分が、理性の言葉のよく聴ける位置にいてくれて、〔もう一つの〕欲望の種族の方が、城砦（アクロポリス）から指令されたことや言われたことに、どうしても自発的に従おうとしない時、前者が、かの理性の側に与して、ともに、この欲望の種族を力ずくで抑えることができるようにというわけなのです。

B

また、血管の結節をなし、身体四肢を余すところなく激しくめぐっている血液の源泉をなしている所の「心臓」は、これを、番兵詰所へ配置しました。それは、外部から——あるいは、内部の欲望からでも——何らかの不正な行為が、身体諸部分のところでなされているぞという「理性」の通告に、かの「怒り」が激してたぎるよう

な時、身体内のおよそ感覚能力を持ったものがどれも、あらゆる狭い通路(血管?)を通って、敏速に、その勧告や威嚇を感知してその言うことを聴き、全面的に従うように、そしてこのようにして、それらが、かの最もすぐれた部分をして、かれらすべての間で無事に最後まで主導権を行使させるようにということのためだったのです。

C

ところで、恐ろしいことを予期したり、怒りが目覚めたりする際に起こる心臓の動悸に対しては、神々は、激昂する部分のこのような昂り(たかぶり)が、すべて、火を通じて起こるだろうことを見越していましたから、そのために救援策を講じて、「肺」という種類のものを植えつけました。それはまず第一に、柔らかくて血の気のないものであり、次いでは、まるで海綿のように、内部にいくつもの孔が穿たれているものなのでして、こうして、息や飲物を受け入れて(2)、心臓を冷やし、灼熱状態にあるそれに、元気を回復させ、寛ろ(くつろ)がせることができるようになっているのです。

D

実際、そのために、神々は、「気管」なる導管を、肺のところまで切り開き、肺そのものは、これを心臓のまわ

---

1 「胸郭」と訳した θώραξ は、もともと、鎧の胴を指し、そこからまた、鎧の胴で覆われた身体の部分を指した語であるが、具体的に身体のどの部分を指したかについては、いくらか問題がある。この語が、ひろく、頸の下から陰部までの腔所全体を指す意味に用いられている例(たとえば、アリストテレス『動物誌』第一巻(491ª29))もあるが、ヒポクラテス全書の中には、やはり、われわれのいまの箇所と同様、「いわゆる」と注釈つきの θώραξ の語が見えており、この場合は「その中に肝臓が覆われているところの……θώραξ」と言われている(『技術について』X)。そして、ヒポクラテスのこの場合の θώραξ は「骨で覆われた胸郭を指し、そこにはまた肝臓も保護されているのだ」として θώραξ を Brustkorb と訳している訳者(Kapferer)もある。

2 肺が飲物を受け入れるというのは奇妙な説であるが、ヒポクラテス全書にも、液体は少量ではあるが肺にも入り込み、空気とともに再び肺から出て行くというような言葉が見られる(『心臓について』§2)。しかしまた、同じヒポクラテス全書には、飲物が肺に行くという説を批判している言葉も見られる(『疾病について』IV. §25)。

(70)

りに、ちょうど柔らかい詰め物のようにめぐらしたのでした。それは、「怒り」が心臓の中で頂点に達する時にも、心臓が、ふかふかした抵抗のないものに向かって弾み、また、冷やされることになり、それだけ労苦も軽減され、こうして、その分だけ余計に、「怒り」に与して、「理性」に仕えることができることを目的としているのです。

三二

また魂のうち、食物や飲物や、すべて、身体というものの本来の性質のために必要となっているところのもの E を、欲求するような部分は、これを、横隔膜と、臍に面した境界との間に位するところに住まわせ、そのさい、この場所いっぱいに、身体の糧を入れるためのいわば秣桶[1]とでも言うようなものをつくり上げたのです。そして、魂のこの種の部分を、野性の——とは言え、とにかく、死すべき種族というものが存在しなければならないとすれば、どうしても〔他のものと〕いっしょに養わないわけには行かない——獣のつもりで、そこに繋ぎ止めたのでした。だから、それがいつも秣桶のところで食っていて、熟慮する部分からは可能な限り遠く離れて住み、こうして、ざわめきや叫びはできるだけもたらさないで、最上の部分が静かに、公的にも私的にも、すべてのものに 71 有益なことがらについて熟慮するのを、そのままそっとしておくように——ということのために、神々は、魂のこの部分に、こんな位置をあてがったわけなのです。

ところで、神々は、この部分が「理性」の言葉を解することはないだろうし、また、仮に、何らかの仕方で、そのような言葉をいくらか感知するにしても、とにかく、何にせよ、言葉を気にかけるなどということは、この部分の性分ではないだろうということと、しかしその半面、これは、夜昼を問わず、影像や幻によって一番よく

誑かされるだろうということを知っていましたから、そこで、神は(2)、まさにこの弱点をねらって、「肝臓」なるものを構成して、これをかの獣の住処へと置きました。そしてそれを、緻密で、滑らかで、光沢があり、甘さとともに苦さをも備えたものに仕組んだのですが、それは、「理性」からやってくるいろいろの考えの力が、ちょうど、印影を受け入れては眼に見える映像を映し出す鏡の中でのように、肝臓の中で〔映し出されて〕、次のような働きをするように、ということだったのです。——かの獣を恐怖させるということも、その目的でした。つまり、考えの力が〔肝臓に〕内在する苦さの部分を利用して、厳しく、威嚇する態度で近づき、その苦さを肝臓全体に急速に滲透させて、そこに胆汁色を映し出し、また、全体を収縮させて、これを皺の寄ったざらざらしたものにし、そして、肝葉を正常な形から曲げて縮め、胆囊と肝門とは、これを塞いだり閉じたりして、苦痛や吐気を与えるという、こうした場合には、いつでもかの獣を恐怖させることができるでしょう。そしてまた、今度は、思考から来るある穏やかさの息吹きが、いまのとは反対の幻像を描き出す場合には、この息吹きは、一方では、自分自身とは反対の性質をかき立てることもしなければ、またそれに余計な手出しをすることも敢てしないということによって、苦さを鎮めるとともに、他方では、肝臓に生来備わっているところの甘さを、その器官のために利用して、そのすべての部分を、正常な状態へと戻して、真っ直ぐで、滑らかで、自由なものになるようにし、こうして、肝臓のあたりに居住する魂の部分を、やさしい、仕合わせなものにするでしょうし、また夜には、それが

1 明らかに「胃」を意味する。

2 ここでは「神」は単数形。しかしすぐ前の「神々」と、事実上同じものを指しているのは明らかである。

(71) 夢で〔霊感を受けて〕予見の力を働かせながら、節度ある時を過すようにさせるでしょう。――何しろ、魂のその部分は、言論や知力とは無縁のものでしたからね。というのは、われわれを構成してくれた神々は、死すべき種族をできるだけすぐれたものにするようにと命じた、あの時の父の言いつけを覚えていたのでして、そこでその通りに、われわれの卑しい部分をも匡正しようとして、そんな部分でも何らかの仕方で真実に触れるようにと、(E) その中に予見の器官を置いたからです。

ところで、神が予見の働きを、人間の、知力を欠いた状態に対して与えたということについては、十分な証拠があります。というのは、人間誰にしても、正気の状態では、霊感に満ちた真実の予見をなすには到りえないものなのでして、それができるのは、ただ、眠っている時とか病気のためとかで、知力が束縛されているような場合や、あるいは、何か神憑りのために異常を来たしているような場合に限られるからです。いやむしろ、「予見」だとか「神憑り」だとかによって夢でか現でか言われたことを、思い起こして理解したり、また、幻像として見ら(72)れた限りのすべてのものについても、それがいったいどんな仕方で、誰に対して、未来や過去や現在の凶事なり吉事なりの何かを合図しているのかということを、勘考によって判別するのが、正気の者のなすべきことなのです。これに対して、狂気に陥り、なおもその状態から脱していない者の場合は、自分に見えたものや、自分が口に発したことを、とやかく判断するのがその仕事ではないのでして、むしろ「己が事を為し、己を識るは、これ独り節度ある者（精神の健全な者）にのみ適うことなり[1]」という、昔からの諺がありますが、これは至言です。だから(B)こそまた、神憑りの予見には、これに判断を下す者として、「解釈者（プロペテス）」の種族を設けるのが習慣となっています。彼らのことを「予見者（マンティス）」と名づけている人々もあります。しかし、こうした人々は、

その種族が、謎の形で言われたお告げの言葉だとか幻像だとかの解釈者なのであって、予見者では毫もなく、むしろ、予見する人々の解釈者と名づけられるのが、一番正しいのだということをまったく知らないのです。

さて、「肝臓」が、もともと、ここに言っているような性質のものであり、また、その場所にあるのは、いま言ったこと、つまり予見のためにほかなりません。そして、個々の動物がまだ生きている間は、この種の器官は、比較的明瞭な徴を見せますが、生命が奪われると、盲目になってしまい、それの与える予見も、何らかの明確な

C

ものを合図できるにしては、あまりにも漠然とし過ぎているものです。

ところで、今度はまた、肝臓に隣り合っている内臓の構造と場所ですが、これは、肝臓の左側に、肝臓のためにあるものなのです。つまり、それは、肝臓を、いつでも、ぴかぴかに、きれいにしておくためにあるものなのでして、まあ言ってみれば、鏡の傍に、いつでも使えるように用意して置いてある、布巾とでも言ったところでしょうか。だからこそまた、身体の病気のせいで、肝臓のところに何らかの汚れが生じる場合には、この「脾臓」の、目の疎い組織が、その汚れを全部受け入れることによって、これを肝臓からきれいに落としてしまうのです。

D

——何しろ「脾臓」は、内部が空で血の気のないものに織られているのですからね。だから、脾臓は、除去された汚れでいっぱいになると、膿んで大きく腫れ上り、また、身体が浄化されてしまうと、腫れが退いて、再びもと通りに小さく凋んでしまうものなのです。

---

1 「節度」が「自分自身を識ること」と関係づけられ、さらに後者が、デルポイの神殿に記されている「汝自身を知れ」とか「分を越えるなかれ」と関連づけられている議論については「カルミデス」(161B, 164D～165A)を参照。

三三

さて、魂についてそのどれだけの部分が死すべき定めのものであり、どれだけの部分が、神的なものであるのか、また、どこに、何といっしょに、どんな理由で、それらのものが、別々に離れて住まわされることになったのか――その「真相」が語られた、とは、ただひとえに、神の同意を待ってのみ、その時にはじめて断言しうることでしょう。しかし、われわれの語ったことが、少なくとも「ありそうな」ものであるということは、これはいまでも、はばかることなく敢てその主張をなすべきですし、また、もっと考察を加えて、いっそう勇気をもって、主張しなければなりません。そしてまた、このような主張は、もう一応なされたものとしておきましょう。

E そして、この次の問題を、これもやはり同じ方針で追究しなければならないのですが、その問題というのは、身体の残余の部分が、いったいどのようにして生じたのかというものだったのです。そこで、それが構成されたのは、次のような推理計算に基づくものだとすれば、何よりも一番適切だということになるでしょう。――

われわれの種族を構成した神々は、われわれの内部に、飲物や食物に対する不節制が起こるだろうということを、ちゃんと知っていましたし、また、われわれが、飽くことを知らない貪欲な食いしん坊であるところから、必要とされる適量よりも、はるかに上まわる分量を消費するだろうことも知っていたのです。だから、病気のために急速に衰えて、死すべき定めの種族が、完成に達しないままで、たちまち死ぬということにはならないように、

73 このことに備えて、余分になるはずの飲食物を収容する容器として、「体腔下部(腹部)」と言われているものを作り、「腸」をぐるぐると巻きました。それは、食物が、素早く通過してしまって、あっという間にまた次の食物を要

求するように身体に強いることになり、そして果しのない貪欲を起こさせて、われわれの種族全体をして、食気(くいけ)のために、およそわれわれのうちにある最も神的なものの言うことにはとんと耳を藉さないという、非哲学的で(知を愛し求めることを知らない)、無教養なものにしてしまうことにはならないように、というためだったのです。

ところで、「骨」や「肉」や、またそれに類したすべてのものについては、次の通りでした。――

B まず、それら全部の出発点は「髄」の生成です。というのは、魂が身体に結びつけられている場合には、その生命の絆となるものが、この髄の中に固く縛られていて、死すべき種族をして、ここに根ざすようにさせているからです。しかし「髄」そのものは、また別のものから成り立っています。

すなわち、例の三角形のうちでも歪みがなく、滑らかで、火・水・空気・土を、最高度に正確に生み出すことのできた第一のものを、C 神は、それぞれ、その同種のものの中から、区別して選び出し、相互に均衡がとれるように混ぜ合わせて、死すべき種族全部のための、「すべての種子の混合体(パン・スペルミアー)(1)」を考案し、これ

---

1 「すべての種子の混合体(πανσπερμία)」の意味については、いくらかの議論がある。(1)「種子(σπέρμα)」は人間の生殖細胞の意味にも用いられるので(91A 参照)、その意味に解すると、90E 以下では、男から女や他の動物が生まれ変るとされているから、こうした全種族のための種子の混合体がまず作り出され、「髄」はこの混合体から成るのだとされていると解される。コンフォード(*Pl. Cosm.* pp. 294–295)は以上の説を取る。(2)しかし、「種子」はまた、「三角形」を意味しているとも解され、選び出された各種三角形の混合体がそのまま πανσπερμία と呼ばれているとも取れる。因みに、アリストテレスが、デモクリトスの原子の集団や、また、アナクサゴラス一派の火、水などが単純体でなく多様な要素から成るのに対して、同じ πανσπερμία なる語を用いている例がある(『霊魂論』第一巻 404^a4 sqq.;『生成消滅論』第一巻 314^a26 sqq.)。

で髄をつくり上げたのでした。そして次には、その中に先に挙げたようないく種類かの魂を植えつけて、そこに縛りつけて行くとともに、また、〔魂の〕それらの種類のものがそれぞれ取るはずの形は、数も性質も、これまた決まっていましたから、それに対応させて、髄そのものをも、一番最初に配分する時に、もうさっそく、それだけの数の、そのような性質の形に区分しようとしたのです。そしてまず、神的な種子を自分の中に包蔵することあたかもその種子に対して耕地のような役割を果すべき部分については、これをどこから見てもまんまるい形に

D 作って、髄のこの部分を「脳(エンケパロス、頭内)」と名づけました。それは、個々の生きものが完成した時には、この部分を入れる容器が「頭(ケパレ)」になるはずだと考えたからです。他方また、魂の残余の部分、つまり死すべき部分を抑えておくことになる、髄の部分については、これを、いくつものまるくて同時に長い形(円筒形)に区分し、[1] そのすべてを「髄」と名づけ、そして、それらのものから、碇綱よろしく、魂全体を繋ぎ留めておく索を投げると、もう、それ〔脳や髄〕のまわりに、われわれの全身をつくり上げにかかったのですが、そのさい、

E まず第一に、その〔脳や髄の〕全部のまわりに、骨の覆いを固めてつくったのでした。

ところで「骨」は、次のようにして構成しました。すなわち、純粋で滑らかな土を、篩い分けて取ると、これを捏ねて髄に浸し、そしてそれから、これを火の中へ投じ、その次に水に潜らせ、またもう一度火へ、さらにまた水へと移し、そして、このようにして、何度も、これからあれへ、あれからこれへと移しかえることによって、これを〔火と水の〕両者どちらによっても溶かされることのないものに仕上げたのでした。そこで、これを使って、生きものの脳のまわりに、骨の球をぐるっとめぐらせましたが、しかしただ、それには、狭い出口だけは残して

74 おいてやりました。そして、頸と背中双方のところの髄のまわりに、やはり同じ材料で「脊椎」を形づくり、こ

れを頭から始めて全体腔を貫き、ちょうど蝶番の軸のように下へ下へと延ばして行きました。そして、このようにして種子全体の安全を守るのに、石のような城壁でこれを取り囲んでやったわけなのですが、そのさい、この脊椎が動いたり、曲ったりできるように、その部分部分の間に「異」の性質を、[2]介在者としてこれまた利用することによって、脊椎の中に「関節」をつくったのでした。

B　さらにまた、神は、骨というものの性状が、必要以上に砕けやすく、また、撓め難いものであるということと、また、それが、灼熱し、再び冷えるようなことになると、壊疽にかかって、すぐに、自分の中の種子を台なしにし

1　「円筒形」の髄は74Aからもわかるように「脊髄」を指していると考えられる。しかし、この円筒形の髄は複数形で語られているので、脊髄以外の他の骨に含まれている髄をも指しているとする解釈(コンフォード)や脊椎の一つ一つに含まれている部分を単位としているのだとする解釈(リヴォー)もある。さらに「円筒形」は、神経の解剖学的記述であろうとして、脊髄中を幾本もの神経が通っている図を考える人(カッペラー)もあるが、プラトンの当時に「神経」が知られていたかどうかは不明。アルクマイオンは眼に通路を発見したと言われており、これを視神経ではないかと推測する向きもあり、アリストテレスも同様に「眼の通路」に言及しているが(『動物部分論』第二巻656^{b}16 sqq. 他)これらが果して神経を意味したかどうか確定はない。

2　関節の場合に、何故、どういう意味で「異」という語が用いられているのかについては多々推測が試みられているが、たとえばテイラー(*Comm.* pp. 527 sqq.)は、骨の関節についてのアリストテレスの若干の箇所(『霊魂論』第三巻433^{b}21 sqq. 他)を援用して、凹形の受け口に凸形の部分がぴったりはめ込まれた形で接続している骨は、一本の骨とも言えるがまた、それぞれ異なった二本の骨とも言えるという意味をここに読み込もうとしている。アリストテレスの箇所がいまの箇所にどこまで妥当するかはさておき、37C sqq.で、元来一であった円がそれぞれ異なった運動を持つ多なる円に分割されたものとされた惑星の軌道もまた、「異」と呼ばれていた点に注意。

なお、エンペドクレスは、脊椎が多くの小片から成るのは、動物が生まれる過程で、胎児が身体を曲げるので脊椎が砕けたためだと考えていたらしい(Fr. 97(DK))。

てしまうであろうと考え、そのことのために、「腱」および「肉」の種類を考案して、次のような工合になるようにしたのです。——すなわち、まず腱で四肢をすべて結び合わせ、この腱が軸のまわりで、緊張したり弛緩したりするに応じて、身体が曲がったり、伸びたりできるようにしました。また、肉のほうは、炎熱を妨げ、寒さ C を防ぐものとなり、なお、〔生きものが〕転ぶような場合にも、物体〔の衝撃〕に対して、柔軟に、おだやかに撓んで、ちょうど、フェルト製品のような役割を果す掩護物になるように、そしてまた、それが、自分のうちに温い水分を含んでいて、夏には発汗して、外側が湿り、こうして、身体全体に、内発的な冷たさをもたらし、また、冬には、逆に、外から押し寄せて来て、まわりを包囲するところの凍てつく冷気を、この火によって(1)、適度に防ぎ止めてくれるようにというのです——。このようなことを考えて、われわれをまるで蠟人形のように形づくった、かの細工師は、水と火と土とで混合物を調合してつくり、酸っぱいものと塩辛いものから、醱酵体を合成し D て、先の混合物に混入し、こうして、汁気の多い、柔らかな「肉」を構成したのです。また「腱」は、骨と、醱酵素の入っていない肉とを混和させることによって、この両者を一体としたような一つの中間的性質のものとして、これをつくり上げ、なお、その上に、黄金色をつけたのでした。だから、腱は、肉よりも、張力や粘着力においてまさり、骨よりも、柔らかさや、しなやかさの点でまさる性質を得ることとなったのです。そして、これらのもの(肉と腱)で、神は骨および髄を包んで行きましたが、そのさい、まず、腱で骨を相互に結び合わせ、その E 後に、肉でその全部を上から覆ったのでした。

さて〔神は〕、骨のうちでも、一番よく、魂を含んでいた(最も生気に満ちていた)部分は、これを囲うのに、最もわずかな肉をもってし、それに対して、内部に、最もわずかしか魂を含んでいない(最も生気の乏しい)部分は、

これを、最も多量な最も緻密な肉で囲い、なおまた、骨と骨の接合部のところでは、理論上、どうしても、そこに肉がなくてはならないというような必然性が明らかにされない限り、少しの肉しか生じさせませんでした。それはつまり、肉が屈折の邪魔になって、身体を動きにくくし、そのために、これを鈍重なものにしてしまったり、また、多量の緻密な、互いに押し合いへし合いしてぎっしり詰まっている肉が、その堅固さのために内部を無感覚にし、思考の座を、かえって、物覚えの悪い、鈍いものにしたりすることのないようにというわけだったので 75 す。だからこそ、大腿・下腿部、腰部、上膊・前膊の骨、あるいはその他、われわれの身体のうち、関節のない部分や、また、内部の髄の中に、魂がわずかしかなく、そのために、知的な働きの欠けているような骨だとかいった、こうしたものはすべて、十分な肉で埋められているのです。しかし、知力を蔵している部分のほうは、もっとわずかな肉しかつけていません。——とは言っても、たとえば「舌」の類のように、神が、肉そのものをそれだけで、感覚のために構成したというような場合は別ですが、とにかく、大部分は、いま言った通りなのです。B というのは、「必然」から生まれ、それとともに育くまれる「自然」の本性は、緻密な骨、多量の肉といっしょに、鋭敏な感覚が共存するのを許さないからです。何故なら、仮に、その両者が折り合う気になってくれたとすれば、何よりもまず頭の組織がそれを持ったでしょうし、人間の種族は、肉の厚い、腱の多い、丈夫な頭をいただくことになり、いまの二倍も、いや何倍も長命で、もっと健康で、もっと苦痛のない生命を、首尾よく獲得できたは

1 「この火」というのは、すぐ前に「温い水分」と言われたものであろう。場合に、当然、そうした水分の要素として前提されていた

(75) ずだからです。しかし、じっさいには、われわれを生み出した製作者たちは、長命だけれども劣った種族をつくC り上げたものか、短命ではあるがすぐれた種族をつくり上げたものかを考量した時、長くても劣悪な生涯よりは、短くても善い生涯をこそ、誰もが、どんなにしてでも選ぶべきであるということに、意見が一致したのでした。だから、かれらは、頭を、疎(あら)い骨でぐるっと覆っただけで、肉も用いませんでしたし、また、——とにかく頭というものは、屈折するということがありませんから、——腱も用いませんでした。そこで、すべてこのようなわけで、人間誰の身体につけ加えられた頭も、敏感さや知的活動においてはたしかにまさっているけれども、強固という点では、ひどく劣っているものなのです。

D また「腱」のほうも、やはり同じ理由から同様に、神はこれを、ただ頭の最下端までの下の範囲だけに、頸をまるく取り囲むように配置して、そのまわりに、均等性をもって[1](=均等に?)膠着させ、そして、この腱で、顎骨の尖端を、「顔」の下のところへ結びつけ、腱の他の部分は、四肢全部に分散させて、関節と関節を接合して行きました。

E ところで、われわれの「口」は、秩序づけをなす神々が、歯と、舌と、唇とで、これを、必要なものと、最善のものの両者のために、現在配置されているように秩序づけたのでした。つまり、これを、必要なもののためには、その入口となり、最善のものにとっては、その出口となるものとして工夫したわけなのです。——何しろ、身体に養分を与えに入って来るものは、すべて、必要なものであり、これに対して、知的活動に奉仕するところの、外へ流れ出る言葉の流れこそ、あらゆる流れのうちでも最も立派な、最も善いものだからです。

しかしまた、「頭」というものは、何分にも、季節に、寒さ・暑さの両極端があることを思えば、これを単にむ

き出しの骨のまま放っておくことも出来ず、さりとて、これが完全に覆い尽くされて、多量の肉のために、鈍い、無感覚なものになるのを、そのまま見過すわけにも行きませんでした。すると、肉の類がまだ乾き切らない間に、

76

余分に大きな外皮が出来て、肉から分離して行きました。つまり現在、「皮膚」と呼ばれているものがそれです。そして、これは、脳のところの湿気によって、自分たちだけで一つに集まって行って、生長を続け、頭をぐるっと包んで行きました。そして、湿気が「縫合」の下に上って来て、これを潤し、顱頂で、これを、ちょうど、引きまとめて結び目をつくるような工合にして、閉じたのでした。——ところで、この縫合には、かの〔魂の〕循環運動と養分との作用のために、ありとあらゆる型が生じているのです。つまり、この両者がお互いに争えば争

B

うだけ、それだけ縫合の数も多く、争いの度合がさほどでもなければ、それだけ、縫合の数も少ないものなのです。さて、この皮膚全体は、「神的なもの(2)」が、そのまわり一面を、火で刺し貫く結果になりました。ところが、そのようにして孔が穿たれ、そこを通って、湿気が外に向かって行く場合、純粋な温かい水分は出て行きますが、皮膚を構成したのと同じ成分の混合物のほうは、この運動によって、いったんは引き上げられて、刺し孔と同じ繊さで、外へ長く延びて行きましたが、出て行き方がのろのろしていましたので、まわりを取り巻いている外気

---

1 「均等性をもって(ὁμοιότητι)」が「均等に」の意味で用いられている例はほかになく、Oxford の希英大辞典では、これが equally の意味に用いられている例として、この箇所を一つだけ挙げているが、しかし本篇の解釈者・訳者の間ではいろいろ議論がある。「均等に」と訳せないとすると、せいぜい「均等性によって」＝「均等性を手段として」と考えるしかないが、「均等性」を手段にするとはどういうことなのか不明としか言いようがない。

2 この「神的なもの」を「神」と解している訳者もあるが、むしろ「神的な種子」——これは火をも含む——を包蔵する「脳」を指すのであろう(73C～D参照)。

によって押し戻されて、もう一度皮下にぐるぐる巻きに捩じ込められ、こうして根を下ろすことになりました。C そして、このような過程で、皮膚に「毛髪」の類が生じたわけなのです。つまり、それは、皮膚と同種のものが、ただ繊維状を呈しているだけのものなのですが、しかし、個々の毛髪は、皮膚から分れて出る時に、冷やされ、そのために圧縮されましたから、そのような、冷却による縮絨の故に、このほうが、皮膚よりも堅くて緻密なものなのです。じっさい、この種のものでもって、製作者の神は[1]、われわれの頭を、もじゃもじゃ覆われたようなものに仕上げたのでして、そのさい、もちろん、上述のようないろいろの「原因」を用いたわけですが、しかし、それとともにまた、その場合に意図されたところのものは別にあったのです。――すなわち、それは、肉の代り D にこのものが、脳の安全を守るための覆いとなり、それも、軽くてまた同時に、夏には影を提供し冬には庇護してくれることが十分に出来るような、しかも感覚の鋭敏さを妨げる障害には、些かもならないというような、そんな覆いにならなければならないということだったのです。

また、指のところの、腱・皮膚・骨が絡み合っている部分では、この三者を成分とする混合物は、からからに乾燥すると、この三つ全部の共通の形成物であるところの、一つの堅固な皮膚になりました。そして、その製作に用いられた「補助原因」のほうは、いま言った通りですが、しかし、最高の原因をなす「意図された目的」においては、それは、後に生まれるはずのもののためにつくられたのです。というのは、われわれを構成した神々 E は、男から、女や、またその他の獣がいつかは生まれて来るだろうことを知っていましたし、また、とりわけ、そうした畜類の多くのものが、いろいろの目的のために、「爪」の使用を必要とするだろうことも知っていましたから、そこで、人間が生まれると、その時にもうさっそく、爪の萌芽の印をつけておいたのでした。神々が、

皮膚、毛髪、また四肢の尖端に爪を生ぜしめた、理由、原因は、じっさい、以上の通りだったのです。

三四

77 ところで、死すべき定めの生きもの(人間)の部分となり肢体となるもののすべてが、結び合わさって一体化されてしまうと、その生きものにとっては、生命を、火と空気の中で保って行くのが「必然」の結果となったのですが、またそのために、それはこの火や空気によって、溶かされたり、空(から)にされたりして、衰弱して行きましたから、そこで神々は、このもののために、救助の策を講じました。すなわち神々は、人間の性と同族の性のものを、〔人間の場合とは異なる〕他の形態および他の感覚機能に混ぜ合わせ、別の生きものになるようにして、これを植えつけたのです。この生きものが、実は、現在、農耕によって養成されて、われわれに馴れるようにさせられているところの、栽培された木だとか、いろいろの植物だとか種子だとかにほかならないのです。――もっと

B も、以前には、ただ野生のものの種類しかなく、このほうが栽培された種類よりも古くからあるものなのですけれども。いや、このように「生きもの」と言ったのは、じっさい、およそ「生命」に与(あずか)っているものならどんなものでも、この上もなく正確に、「生きもの」と呼ばれる資格があるはずだからです。とは言っても、しかし、いま話題になっているもの(栽培植物としての生きもの)が備えている魂(生命力)は、「魂」のうちでも、第三の種類のもの、つまり、横隔膜と臍の間に座を占めていると言われた、あの種類のものなのです。[2] この種の魂とい

1 単数形。71Aと同様であろう(71A注2参照)。

2 69Eを参照。

うのは、およそ「思わく」にも「推理」にも「理性」にも、いっこうに与るところがなく、ただ「快―苦」の感覚と、「欲望」だけに与っているものなのです。というのは、この生きものは、終始ただ、どんな作用でもこれを

C 受けているばかりでして、次のような能力、つまり、外から来る動きを押しのけ、自分に固有の動きを行使して、自分で自分の内部で、自分のまわりを回転し、そのことによって、自分自身にかかわる事柄の性質を観察して何か勘考をするという、こうした能力は、これを、もともとその生まれにおいて賦与されなかったからです。[1] だからこそ、このものは、確かに生きていて、「生きもの」以外の何ものでもないのですが、しかし、それは自発的な動きを欠いているために、じっとしており、そして、根をおろして固着してしまったわけなのです。

三五

さて、神々は力すぐれたものとして、われわれ力弱きもののために、糧として、以上に述べたすべての種族を植えつけてしまうと、われわれの身体そのものに、いわば、庭に水を引くための溝のようなものを、切り開いて備えつけました。言ってみれば、流れが注いで来て、身体がそこから灌漑されるようにというわけです。そして、

D まず最初に、皮膚と肉とがくっついて一体をなしているところの下に、暗渠という形で、背中に沿って二本の血管を切り開きました。これは、身体が、たまたま、左右を備えた二重のものであるのに対応させられているのです。そして、これらの血管を、脊椎に沿って、〔この脊椎といっしょに〕生殖力のある髄をも間に挾むような恰好で、下へ垂らしたのでした。それは、一つには、この髄ができるだけ元気旺盛であるようにということと、また一つには、こうすれば下に向かって注ぐことになるのだから、ここから、それ以外の部分に向かっての流れが容

易になり、したがって、灌漑が万遍なく行なわれるようにというわけです。それから、神々は、頭のところで、
E これらの血管を裂き、編み合わせて、それらが互いに交叉して逆方向に出るようにしたのでして、つまり、身体の右から来たものは、左の方向へ、左から来たものは、右の方向へ傾斜させました。こうして、それが頭のために、これを身体に結びつける索の役目を、皮膚とともに果してくれると同時に――というのは、頭は、その天辺のところでは、まわりを腱で囲まれてはいなかったからですが、――それと同時にまた特に、左右どちらの部分からやって来る感覚の影響にしても、それらがともに身体全体に、はっきり知られるようにというわけなのです。

78 それからすぐに、神々は灌水の準備を整えました。そしてその方法は、何かこれから述べるようなものだったのですが、これは予め、次の点について同意しておけば、いっそう容易に理解することができるでしょう。――すなわち、小さい粒子を構成要素として成り立っているものはすべて、それよりも大きい粒子が通り抜けて漏るのを防いで遮断するものですが、その逆に、大きい粒子から成るもののほうは、それよりも小さい粒子の漏れるのを遮断することはできません。そしてまた、火があらゆる種類の中で一番小さい粒子から成り立っているのです。従って、火は、水をも土をも空気をも、またそれらを構成要素とするどんなものをも、すべてこれらを通り抜け、何ものも火を遮断することができないのです。そこで、これと同じことを、われわれの体腔(あるいは腹腔)についても考えなければなりません。つまり、食物や飲物であれば、これが、そこへ落ち込むような場合

---

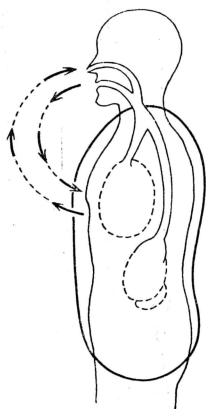
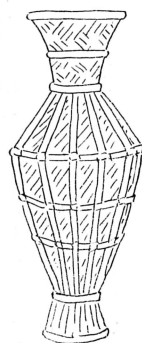
1 バーネットのテキストの φύσει (77C2) を φύσιν に変更する。

(78)
B

は、腹腔はその漏れるのを防いで保持しますが、息と火の場合は、その粒子が腹腔そのものの組織よりも小さいので、腹腔はこれを保持することができません。

さて、神は、(1)腹腔から血管へと灌漑するのに、これらのもの〔火と息〕を利用しました。つまり、空気と火を材料にして、これを編み合わせて、ちょうど「筌(うえ)」のような編細工をこしらえたわけなのです。ところで、この編細工は、入口のところに、二重になった「漏斗状の口」を持ったものなのでして、その一方を、神はさらにもう一度、二股に編みました。そして、これらの漏斗から、編細工の末端に向かって、端から端までまわり一円に、いわば葦 C の縄とでもいうようなものを張りわたしたのです。(2)さて、この編細工の内部はすべて、これを火で構成し、漏斗状の口と、外枠をなす胴体とは、これを空気製のものにしました。そして、これを取り上げて、先に形作られた生きもののまわりに取りつけたのですが、その取りつけ方は次に述べるようなものでした。すなわち、まず「漏斗状の口」の部分は、これを口腔へ導き入れました。ところがこの漏斗は二重になっていましたから、その一方は、これ

図 13

図 14

を「気管」に従って「肺」へと垂らし、他方は気管と並列させて、腹腔へと垂らしました。そして前者を〔さらにまた〕裂いて、裂かれた双方の部分がともに、鼻の通路を通って外へ抜けるようにしたわけだったのでして、

D

こうして、もう一方のほうが口腔を通らない場合にも、この通路の流れもすべて、先の〔鼻を通る〕ほうから補充されるようにしたのです。(3) また、筌の他の部分、つまり胴体のほうは、これをわれわれの身体の腔所全体のまわりに取りつけました。そして、その筌の胴体全体が、ある時には、漏斗状の口へとおだやかに――何しろそれらの漏斗は空気なのですから――合流して流れ込み、またある時には、漏斗のほうが逆流するようにしました。そして、なにぶんにも身体は目の疎(あら)いものなので、これを通りぬけて編細工が中へ滲み込んだり、また外へ滲み出

1　71A 注2を参照。

2　「筌(うえ)」と訳した原語は κύρτος. 下方に狭くなっている漏斗状の口を持ち、いったん誘い込まれた魚が逃げ出せなくなるという仕組になっている籠で、漁具として使われたものらしい。
　「漏斗状の口」と訳した ἐγκύρτιον が何を意味するかについては、古来いろいろ議論があったが、恐らく κύρτος の部分たる、漏斗状の口を意味するのであろう。
　「葦の縄」と訳した σχοῖνος は、rush とか、rush をより合わせた縄とか、reed とか訳されているが、κύρτος はしばしば reed で作られたというコンフォードの注に従って「葦の縄」とした(Cornford, *Pl. Cosm.* pp. 308 sqq. を参照)。
　いまの場合の、「『筌』のような編細工」とは、やがて見られるように、呼吸作用の主体となるもの。二重になった「漏斗状の口」とは、気管から肺に到るものと、食道から腹部に到るものの二つを意味するのであろうし(78C)、「その一方を……もう一度、二股に編みました」とは、気管から肺にいたるものの入口を、口と鼻の二つの通路に裂いたものと解したい。

3　「前者を〔さらにまた〕裂いて」の「前者」とは、気管から肺に到るものを指すのであろう。これはもともと二股に編まれていたが(78B、および78B～Cの注2を参照)、いまの箇所は、鼻を通るほうの入口が、二つの鼻孔に従って、二つに裂かれたものと解したい。従って、「もう一方のほう」(D)はとうぜん、口を通るほうである。

E

たりするようにし、そして、〔この空気製の外枠の〕内部にがんじがらめに縛りつけられている火の線が、空気の動きにつれて、内外どちらの方向へでもついて行くようにしました。(1) しかもまた、この過程には、とにかく死すべき定めの生きものがその構造を維持している限り、終熄の時というものがないようにしたのです。「吸気」及び「呼気」の名称を定めた人がこれらの名を付与したのは、まさにいま言ったような過程に対してなのだというのが、われわれの主張するところなのです。

79

ところで、われわれの身体が、すべてこうした働きをしたり、またこうした作用を受けたりすると、そのことから、身体は、潤されたり冷やされたりして、養われ、生命を維持することができるようになりました。というのは、息が入ったり出たりするにつれて、それと結びついている内部の火がこれに伴って動き、そしてこのようにして、火が絶えず腹腔を通りぬけて行ったり来たりしながら、腹腔へ入って行くさいに、食物や飲物を捉えるような時には、いつでも、火はそれらの食物や飲物を溶かし、そして、これを細分して、出口を通って自分の進む方向へと運んで行って、ちょうど、泉から水路へ掻い出すように、これを血管に向かって掻い出し、こうして、血管の流れが、ちょうど水路を通るように、身体を通って流れるようにするからです。

三六

しかし「呼吸」というもののあり方を、それがいったい、どんな原因のために、現にあるようなものになったのかという点について、もう一度見ることにしましょう。それは、次の通りなのです。

B

すなわち、およそ運動するどんなものにしても、それが入り込んで行くことのできるはずの空虚というものは

少しも存在せず、しかもまた、「息」は、われわれのところから外へと運動するのですから、その結果どうなるかということは、もう誰にも明らかでしょう。――つまり、息は、空虚に向かって出て行くのではなく、隣接するものを、その座から押し出すことになります。ところが、押されるものはその都度、それに隣接するものを追い出し、そして、この必然性に従って、全体はぐるぐるまわりに追われながら一順して、先に息が出て行ったそのもとの座へと入り込んでその座を埋め、先の息のすぐ後に続くことになるのです。そしてこのことは、まるで車輪が回転する場合のように、全部が同時に行なわれることになります。何しろ、空虚というものがまったく存在しないからです。

C

というわけで、胸部も肺も、息を外へ放つその間にも、身体のまわりの空気がぐるぐるまわりに追われて、目の疎い肉の組織を通って、中へと滲透して来るので、それによって再び充たされることになります。そして、今度はまた、空気が向きを転じて、身体を通って外へ向かう時には、この空気は、口腔と鼻孔の通路に従って、息を、〔身体の〕中へと、まわり押しに押し込めます。(2)

1　鼻や口を通じてだけでなく、身体全体を通じて呼吸が行なわれるということに言及している顕著な例として、エンペドクレスを挙げることができる。エンペドクレスの与えている説明は次の通り。――身体の肉には、血によって充たされていない管が沢山あって、それが身体の表面のいたるところに伸びており、それらの管の口のところで皮膚に無数の小孔が穿たれていて、血液はそこで遮断されるので漏れて出ることはないが、空気はその小孔を通じて自由に出入りする。従って、満ち干きして動揺する血液が、管の中を内部へと退いて行く時には、管の口から、小孔を通して空気が流入し、また血液が逆流して管の口へと溢れてくる時には、空気は押し出され、こうして、吸気―呼気が行なわれる――というのである(Fr. 100(DK))。

2　78C～D図14の矢印を参照。

ところで、このようなことの起こる、そもそもの出発点が何に由来するのかという、その原因は、次のような D ものだとしなければなりません。すなわち、生きものというものは、どれも、その内部の、血液や血管の周辺のところが一番熱いものなのでして、この熱は、いわば、生きもの自身のうちに内在している、火の泉とでも言うようなものなのです。そして、これはまた、われわれが「筌」の編細工になぞらえていたものにほかなりません。つまり、われわれは、そのものの中心部のところは、端から端まで全部、火で編まれているが、それ以外の外側の部分はすべて、空気で編まれているのだと言っていたのでした。さて、熱いものは、その自然の性に従って、自分自身の場所へと、自分の同族のものを目指して外へ出て行くものだという点に同意しなければなりません(1)。E ところが、出口は二つあったのです。一つは、身体〔全体〕を通って外に向うもの。いま一つは、口腔と鼻孔を通るものでした。ですから、熱いもの(内部の火)が、そのうちの一方の出口のところにあるもの〔=空気〕に向かって突進する場合にはいつでも、まわり押しに押して行って、もう一方の出口のところにある空気を押すことになります。そして、押された空気は火の中へ落ち込むわけですから、熱せられることになり、それに対して、出て行くほうの空気は冷やされることになります。ところが、熱さが変化して、一方の出口を通って〔身体内に入り込んで来る〕空気のほうがより熱くなって来ると、この熱くなって来た空気は、自分自身の性のものに向かって〔外へと〕動こうとして、そちらの方向(外方)へと再び向きを逆転する傾向がより強くなり、こうして、この空気は、もう一方の出口を通る空気を、まわり押しに押すことになります。そして後者がまた同じ作用を受け、その都度また同じ作用を返し、このようにして、それは、〔被作用・反作用の〕両者によって、あちら向きに動いたり、こちら向きに動いたりして揺れ動く円環運動を作り出して、吸気―呼気を生ぜしめるのです(2)。

80

三七

なおまた、医療用の「吸角」に起こる現象も、「嚥下」の現象も、また、空中に投げ出されたものも、地上を運動するものもすべてを含めた「発射物体」の現象も、その原因は、やはり以上のような方針で追究しなければなりません。(3) そしてまた「音」についても、高音と低音としてあらわれるところの、速い音と遅い音とが、時としては、運動の途上でわれわれのうちに不均等な運動を生み出すので、そのために不調和なものとなるのに、また時としては、均等な運動を生み出して、そのために協和音になることがあるのは何故かという、その原因を追究する場合も同様です。すなわち、〔協和音の場合は、〕より速くて、先に到着した音の運動に、より遅いほうの

---

1 「熱いもの」つまり「火」が集団をなしているところとは、宇宙の周辺部を指す。従って、個々の火は、地上のわれわれから見て、いわゆる「上方」に向かって動く(63B sqq. を参照)。

2 二つの出口からの空気の流入をそれぞれ、a_1、a_2とし、同じく二つの出口からの空気の脱出を、b_1、b_2とすると、呼吸は、$b_1 \rightarrow a_2 \rightarrow b_2 \rightarrow a_1$の過程を取ることになり、いわば半円を描きながら交互に向きを転じる車輪のような動き方をすることになる。

この箇所に対するガレノスの注(*Galeni in Platonis Timaeum Commentarii Fragmenta*, Schröder S. 23)によると、プラトンのこの「まわり押し」の説は、前三世紀のケオスの医師で、デモクリトスの説を基盤とした、エラシストラトスの「空虚の充塡(ἡ πρὸς τὸ κενούμενον ἀκολουθία)」説と同じだという。そしてまた、ガレノスは、エラシストラトスが、プラトンの説とアカデメイアの説の相違に言及していた旨を伝えているが(*ibid.*, S. 24)、こうした点については、補注K(一九九ページ)を参照。

3 「吸角(σικύα)」は、皮膚に吸着させて膿汁などを吸い取る器具で、邦語で「吸角」の他「吸い玉」「吸い瓢(ふくべ)」などと言われているものと同様の用途を持つもの。この「吸角」の作用や、「嚥下」「発射物体」の現象を「まわり押し」の説で説明する点については、プルタルコスが解釈を加えているが、この点については補注K(一九九ページ)を参照。

(80)
B　音が追いつく時には、前者の運動は休止しようとしていて、すでに、遅いほうの音そのものが後からこれに付加して与える運動と同質のものになってしまっているのです。そこで、遅い音が速い音に追いついても、べつだん、異なった運動を闖入させて、これを攪乱することにはならず、むしろ、遅いほうの運動の始めを、より速いけれども休止の途上にある運動とは同質のものとして、〔これを後者に〕結びつけることになり、こうして、高—低を混合して、一体化された感覚印象を生み出すのです。(1) そして、そうしたことから、愚か者には快楽をもたらしましたが、知力ある者には歓喜をもたらしたのです。——というのは、神的な調和の模像が、死すべき運動の中に生じたのですからね。

C　またそのほかにも、どの水の流れにしても、なおまた落雷にしても、琥珀や磁石がものを引きつけるというあの不思議な現象にしても、それらすべてのどれにも、けっして「吸引力」は存在しないのです。(2) むしろ、空虚が少しも存在しないということと、いま挙げた事物が自分たち同士で互いにまわり押しに押し合っているということと、各々のものが分解されたり結合されたりしては、そのすべてが自分自身の座を求めて、場所を変えて動いて行くということ、と言った、こうした事象が互いに絡み合って、そのために、いま言ったような事物は手品のような現象を呈しているのでして、それは、適切な探究を加えれば、明らかになるでしょう。

三八

D　そして、じっさい、「呼吸」もまた——いまの話はそこから始まったのでしたが——その「呼吸」もまた、前に言ったように、以上のような仕方で、また以上のような手段を通じて起こったのです。そしてその場合、火は、

食物を切るとともに、また他方では、息に伴って内部で行ったり来たりします。そして、このように〔空気とともに〕揺れ動くことによって、切られた切片をその場から汲み出すという仕方で、腹腔から血管を充たすのです。そして、まさにこの故に、どんな生きものの場合も、その身体の全体にわたって、養分の流れが、このようにして次から次へと流れ込むことになりました。ところで、これらの切片は切られたばかりの〔新鮮な〕ものです

E

し、またそれらの切片の、あるものは果実から、またあるものは野菜から、というように――果実や野菜は、神がまさにこの、「養分になる」ということを目的として、われわれのために植えたものだったのですが――とにかくこのように、それぞれの切片は自分と同種のものから切り取られたものなのです。だからそれらは、混り合うことによって、ありとあらゆる色を帯びてはいますが、しかし、そこでは「赤色」、つまり火が液を切って、そこに自分の印影を押捺するという作用の結果として、作り出された色が(3)一番よく行きわたっています。というわけで、身体中を流れるものの色彩は、いま述べたような外観を取ることになったのですが、これが「血液」と

1 聴覚がどうして起こるのかについては67B～Cで述べられたが、その時保留されていた「協和音」の現象についての説明がここで与えられたのである。しかし、プラトンがここで、「高音」と「低音」とを、「速く進行する音」と「遅く進行する音」として捉え、「まわり押し」の現象の一つとして、音の協和の現象を捉えているにしても、「先に到着した音が遅くなる」とはどういう事態を指しているのかなどについて、解釈者たちは多々解釈に苦心しなければならなかったが、これについては、補注K(一九九―二〇〇ページ)を参照。

2 「水の流れ」「落雷」「琥珀・磁石」の現象を「まわり押し」の理論でどのようにして説明しうるかについての、プルタルコスの解釈にかんしては、補注K(二〇〇ページ)を参照。

3 68Bの「赤色」についての説明を参照。

呼ばれているものなのでして、これは、肉にとってだけでなく、身体全体にとっても、その飼料となるものであ

81 り、そこから身体各部は灌漑されて、空（から）になった部分の根もとを充たすのです。ところで、「充たされること」と「失うこと」の仕方は、宇宙の中で、すべてのものの運動が起こった場合と同様の仕方で起こります。つまり、同種のもの同士が、どれも、自分自身の仲間のほうへと動いて行くという、あの運動がそれです。というのは、外部にあって、われわれを取り巻いているもののほうは、絶えずわれわれを溶かしては、それぞれの種類のものへと、その同族のものを送り出して分配するのですが、他方、血液の中に含まれているもののほうは、これはこ

B れで、われわれの内部で細かく砕かれるとともに、また、それが、構成された個々の生きものによって取り囲まれていることは、あたかも天球によって取り囲まれているようなものなのですから、どうしてもこれは、宇宙の運動を模倣せざるをえないのです。そこで、われわれの内部で分解された各〻のものは、各自自分と同種のもののほうへと動いて行って、ちょうどその時に、空になった部分を再び補充するわけなのです。

さて、流れ込んで来る分を上まわるだけのものが出て行く場合にはいつでも、ものはすべて減少しますが、出て行くもののほうが下まわる場合には、すべては増大します。そこで、生きもの全体の組織体がまだ若くて、それを構成する各種の粒子の三角形も、いわば、造船台から出て来たばかりのように、真新しい場合には、三角形

C 同士の接合は、しっかりしているのですが、ただ、その組織の塊全体は、何分にも、ついいまし方髄から生まれたばかりでもあり、また乳で養なわれて来たので、柔らかく出来ているわけなのです。だから、この若い組織の中に、何か食物や飲物を構成している三角形が外部から入り込んで来て、そこに取り込まれると、後者の、外部から入り込んで来た三角形は、若い組織自身の三角形よりも古びていて弱いわけですから、この組織は、新しい

三角形でもって侵入者の三角形を切って征服し、そして、〔当の生きものの三角形と〕同種の三角形多数で、この生きものを大きくするのです。しかし、これに対して、三角形が、長時間の間に、数々のものを相手として、多
D
多闘争を演じたために、その根が弛(ゆる)んで来るといったような場合には、それは、もはや、入って来る養分の三角形を切って、自分自身に同化することができなくなり、かえって、自分のほうが、外部からの侵入者によってたやすく分解されます。そこで、どんな生きものでも、ここに到っては、征服されて、衰えるのでして、このような状態が「老年」と呼ばれているのです。そして最後に、髄のところの三角形の絆が、労苦のために、それまで組み合わさっていたのが、もはや持ちこたえられなくなって切れると、それが今度は、魂の絆を解き、そして、
E
魂は自然に解放されて、快く飛び去ります。——というのは、自然に反したものは、どんなものでも、苦痛を与えるものですが、本来の自然のあり方で起こるものは、快いものだからです。そして、まさに「死」もまた同様、病気や傷害によって来るものは、苦しく、不自然なものですが、老いとともに、自然に終局に向かうものは、およそ、死の中でも、もっとも苦痛の少ないもの、いや、苦痛よりも、むしろ快楽を伴うものなのです。

三九

ところで、「病気」というものが、いったいどういうところから起こるのかということは、おそらく、誰にも
82
明らかなことでしょう。というのは、身体を組み立てているものには、四種のもの、つまり、土・火・水・空気があるのですから、それらが、不自然に過多になったり、不足したり、また、本来の自分自身の場所から、よそへ場所を移したり、さらに、——火にしても、その他のものにしても、そのそれぞれには一つより多くの種類が

あるという工合になっているのですから——身体各部が自分に不適当な種類のものを取り入れるとか、あるいはまた、すべてこれに類したことがあるとすると、こうしたことが、内部の不和や病気をもたらすのです。というのは、自然に反して、それぞれのものが生じたり、また場所を変えたりすると、以前には冷えていたものすべてが熱せられることになったり、乾いていたものが後には湿っぽくなったり、軽いものと重いものの場合も同様ですし、なお、ありとあらゆる仕方で、あらゆる変化を、これらのものが受けるからです。というのは、われわれの主張では、同じものが、同じものに、同じ仕方で、恒常不変に、また、一定の比率に従って、つけ加わったり、除去されたりする場合にのみ、ものは、自己同一を保ち、無事息災で健康なままでいられるのです。しかし、これに対して、入って来たり、出て行ったりする時に、この限度を越えて、調子を外すものが何かあるとすると、それは多種多様な変化を惹き起こし、数限りない病気と死をもたらすでしょう。

B さらにまた、自然に構成されて出来ている、第二次的な組織体がありますから、病気についても、これを理解しようとすれば、とうぜん、第二番目の考察が成立することになります。すなわち、「髄」や「骨」や「肉」や「腱」は、先に挙げた四種のものから〔第二次的に〕組み立てられているものですし、なおまた「血液」も、構成の仕方こそ違っていますが、やはり同じものを素材として成り立っているのです。だから、たしかに、他の大多数の病気はやはり前に述べたような仕方で起こるのには違いありませんが、しかし、病気の中でも最も重症なのは、次のようにして起こるのでして、これはなかなか厄介なものなのです。すなわち、いま言ったような、第二次的な組織の生成の順序が逆行すると、その時には、これらの組織が壊滅することになるのです。

C というのは、自然の順序では、まず「血液」から「肉」と「腱」が生じます。つまり、腱のほうは、「繊維素(1)」

D と同種のものなので、これを素材として成り立ち、肉のほうは、繊維素を除去された後の血液が固まって出来る凝固体から生じるのです。そして、腱と肉から、今度は、粘っこい、油ぎったものが分離して来て、肉を「骨」の類へ膠着させるとともに、自分自身もまた、髄のまわりの骨を養って生長させることになり、そしてさらに、骨の緻密な組織を通して漉されて来る、最も純粋で、最も滑らかで、つややかな種類の三角形が、骨から注ぎ出E し、滴り落ちて、髄を潤おすということになるのです。そして、それぞれのものが以上のような順序で生じるなら、大ていの場合には、その結果として健康が生じます。しかし、順序が逆になると、病気が生じるのです。すなわち、肉が溶けて、その溶けたもの(=腐敗物)を、血管の中へと、〔本来あるべき方向とは〕逆に、放出する時、血管の中には、息とともに、多量の、しかもあらゆる種類の血液が生じるのでして、これは、色においても苦さにおいても、なおまた酸っぱさや塩辛さにおいても、多種多様なものなのですが、この血液が、ありとあらゆる「胆汁」「漿液」「粘液」を孕んでいるわけなのです。つまり、こうしたものすべては「不当に返り咲いた」連中なのでして、腐り切っているのですから、まず第一に、血液そのものを破壊してしまいます。そしてまた、83 こうしたものは、自分では、もはやどんな養分をも身体にもたらさないままに、循環の自然な順序を保つことも

1 「繊維素」と訳したἶνεςについて。これを「血漿」と区別している点については83Cを、また、血液中での「繊維素」の働きについては85C sqq. を参照。ἶνεςを筋肉中の「筋繊維」の意味で用いていると思われる箇所がアリストテレスに見られ(『動物誌』第三巻 515b27)、プラトンもこの両者を区別していなかったのではないかとする解釈者もあるが(テイラー)、少なくとも本篇では、ἶνεςは血液中の「繊維素」を指していると思われる。なお 84A の注1を参照。

もはやなく、血管を通ってあらゆるところに進んで行くのですが、このさい、一方では、自分たち同士の間でも、お互いから利するところが少しもないために、相互に相手を憎み合うとともに、また他方では、身体の中で組織を形成して、自分の持ち場に止まっている部分に対しては、その敵となり、これを滅ぼし、溶かすのです。

さて、肉のうちでも非常に古いものが溶かされる場合には、そのようなものはすべて消化されにくいので、長く焼かれて来たわけですから、そのために黒くなるとともに、また、いたるところ腐蝕されつくしているために、苦くなって、身体のうちのまだ腐敗していない部分すべてに対して、危険な攻撃を加えます。そして、時として、その苦いものがもっと微細化されて、この黒い色が、苦さの代りに酸っぱさを取ることもありますし、また時として、その苦いものが血に浸(ひた)されて、前よりも赤味の増した色を取ることもあれば、また、この後者の色に黒色が混って、草色になることもあります。(1) なおまた、若い肉が災症の火で焼かれるような場合には、黄金色が苦さに結びつきます。そして、以上のすべてに対して、共通の名称「胆汁(コレ)」が与えられたのですが、このように名づけたのは、あるいは、誰か医者仲間の一部の人だったかも知れませんし、あるいはまた、それは、互いに似ていない多くのものを望見しながら、そのすべての中に、一つの名称に価する一つの類があるのを見分ける能力のある人だったのかも知れません。しかし、そのほかに、およそ「胆汁」に属すると言われている限りの種のほうはすべて、そのそれぞれが、色に応じて、固有の定義を与えられたのでした。

ところで、「漿液」については、血の上澄み(漿液)のほうは穏やかなものですが、黒くて酸っぱい胆汁の漿液のほうは、熱のために塩辛い性質と混り合う時には、劇(はげ)しいものになるのでして、このようなものは「酸っぱい粘液」と呼ばれています。さらにまた、若くて柔らかい肉から溶けて出来ているもので、空気を伴っているもの

D がありま す。ところで、これは、空気を孕み、水分によって包み込まれる形になるのでして、このような状態から、泡が形成されます。この泡は、個々単独では、小さいために眼に見えることはありませんが、全部がいっしょになると、何分にもそこに泡が生じているために、白く見える色を取ることになって、こうして、眼に見える塊をなすのです。そこで、われわれは、この、息と絡み合っているところの、柔らかい肉の溶けたものを、「白い粘液」と言っているのです。さらにまた、形成されたばかりの粘液の上澄みとして、「汗」や「涙」や、その E 他すべてそれに類した、日々、排泄して流し出される物体があります。そして、これらすべては、血が、自然に適(かな)った仕方で、食物や飲物から充たされるのではなく、自然の習わしに反して、逆なところからその嵩を増すような場合に、病気を惹き起こす道具となります。(2)

さて、病気のためにそれぞれの肉が分解されても、それらの基底が依然としてしっかりしているなら、災はまだ半ばしかその力を揮っていないのです。――何しろ、病んでいる肉は、まだ容易に回復しうるのですからね。

84 しかし、肉を骨に結びつけているものが病む場合があります。そして、これはもともと、それ自身が、かのもの

1 バーネットのテクストのまま「草色(χλοῶδες)」と読む。A、F、Y各写本は「胆汁色(χολῶδες)」と読んでいるが、68Cで、「火色」と「黒」が混って「韮色」になると言われていた点を参照。

2 以上、「胆汁(χολή)」や「粘液(φλέγμα)」は、病的な分泌物とされているようであるが、他方、コスの学派では、「血液」「粘液」「黄胆汁」「黒胆汁」が、基本的な四つの体液として挙げられ、これらの相互の均衡・不均衡によって健康が左右されるのだとされていた。プラトンの考えは、こうしたコスの学派と対立する、エンペドクレスの影響下にあった一群の人々の説と同様のものと考えられるが、これについては、補注L(b)(二〇二—四ページ)を参照。

〔肉〕と腱とから分離して来ては、[1]骨にとってはその養分となり、肉にとっては、これを骨に結びつける絆となっているものなのですが、これがもはや、こうした役目を果さなくなり、むしろ、それまでは油ぎって、滑らかで、粘っこかったのが、摂生の悪いために干からびて、ざらざらした塩辛いものになるといった、こうした場合には、このようなもの〔肉を骨に結びつけているもの〕は、以上のような変化のすべてを受けることによって、骨から離れて行っては、自分のほうが肉と腱の下へと崩れ去るという、逆方向の過程を取り、また肉も、それといっしょに根から離れ落ちて、あとには腱がむき出しのまま、塩水でいっぱいになって、残されることになります。そして肉そのものも、逆行して、血の運行の中へと落ち込んで、前に言われたいろいろの病気[2]をいっそう大きくします。

B

ところで、身体に起こる以上のような患いも、もちろん難病ではありますが、しかし、患いがこれよりも先〔深部〕へ進むと、なおもっと重症になるのでして、これは次のような場合に起こります。すなわち、肉の組織の目がつまっているために、骨が十分に呼吸できなくなり、黴びて、そのせいで熱くなり、壊疽にかかって、養分を受け入れることをしなくなるとともに、また、逆行して、自分のほうがかの養分の中へと、反対向きに、摩滅して入って行き、さらに養分は肉の中へ、肉は血の中へと落ち込んで、すべての病気を、前に言われたものよりもいっそう激しいものにする、といった場合がそれです。

C

しかし、すべての中で最もひどいのは、髄の実質が、何かの不足か過剰かによって病気になる時に起こるものなのでして、この時には、身体の実質全体が、必然的に逆流することになるので、およそ病気の中でも最も重症で、最も致命的なものを生み出すのです。

四〇

D ところで、今度はまた、病気の第三の種類ですが、これは三通りの仕方で起こるものと考えなければなりません。すなわち、「息」による場合と、「粘液」による場合と、「胆汁」による場合がそれです。つまり、まず、身体に息を配分する役の「肺」が「〔体内の〕流れ（レウマ）」によって塞がれて、きれいでさっぱりした通路を提供しなくなるような時には、息の入って行かない場所と、適量以上の息の入り込んで行く場所とができるのでして、こうして息は、風通しの得られなくなった（息の通らなくなった）部分については、これを腐敗させ、他の部分では、一部の血管の中を無理に押し進んで行って、これを捩じ曲げ、身体を溶かしながら、身体の中央の、障壁の E あるところへやって来て、その中へ閉じ込められることになります。そして、こうしたことから、しばしば多量の汗を伴うところの、無数の苦しい病気を生み出します。

また、身体の内部で肉が分解し、そのことによって体内に息が生じて、これが外へ出て行くことができないで、ちょうど外部から入り込んで来た息が与えるのと同じ苦痛をもたらすこともしばしばあります。就中、苦痛が最

---

1 バーネットのテクストの、ἐξ ἰνῶν † αἷμα（84A2）を、ἐξ ἐκείνων νᾶμα と読む。この箇所を ἐξ ἰνῶν ἅμα と読もうとする解釈者（アーチャー＝ハインド、リヴォーなど）は ἴς を「筋繊維」と解し、全体として「筋繊維と腱とから」と読もうとしている（82C注1参照）。しかしY写本では ἰνῶν の代りに、ἐκείνων となっているので、これを採用し、ἐκείνων は「肉」を指すものと解したい（82Dを参照）。コンフォードの νᾶμα は承服しがたい。

2 82E～83A で述べられた病気であろう。

大になるのは、息が、腱およびそこの小管のまわりを取り巻いて膨張し、このようにして、これら〔腱や小管〕でもって、「背中の腱」とこれに接続しているいくつかの腱を[1]、後向きに引っ張る場合です。事実、これらの病気はまた、その緊張の状態そのものから、「強直痙攣（テタノス）」とか「後弓反張（オピストトノス）」とか呼ばれているのです[2]。そして、その治療がまた困難なのです。というのは、このような病気は、それに併発する熱によって、一番よく解消されるのですからね。

85

ところで「白い粘液」のほうは、〔体内に〕遮断されると、泡に含まれている息のために、危険なものとなります。しかし、身体の外へ抜けるはけ口が得られると、さほど危険なものではなくなりますが、ただ「白皮病」とか、「白色癩」[3]とか、その他それと同種の病気を生み出して、身体を斑にするのです。そしてまた、この白い粘液が黒胆汁と混って、もっとも神的なものであるところの、かの「頭の中の循環運動」の上に撒き散らされ、これを混乱に陥れる場合は、それが睡眠中に起これば、比較的軽症ですが、覚醒時に襲うなら、もっと取り除きにくいものとなります。この病気は、何しろ、神聖なものを犯す病気なのですから、「神聖病（癲癇）[4]」と呼ばれるのが一番正しいわけです。

B

また、酸っぱくて塩辛い粘液は、カタル性の（分秘液が頭から下へ流れる）ものとして起こる限りの、すべての病気の源泉ですが、それの流れて行く先の場所が多種多様なので、さまざまの名を得ることになりました。

ところで、身体のうち、焼かれたり、燃やされたりすることから、「災症を起こしている」と言われている部分のすべては、「胆汁」に由来するものなのです。そこで、この胆汁が外へ出るはけ口を得ると、沸き立って、さまざまの腫瘍を吹き出しますが、内部に閉じ込められると、中に災症性の病気を多々つくり出します。とりわ

C

け、これが純粋な血液に混って、「繊維素」の類を、その本来の秩序からはずすような場合には、病気は一番重症になります。——もともと「繊維素」が血液の中へ撒布されたのは、血液が、「微細さと粗大さ」の点で、ちょうど釣り合いのとれた状態を保つようにというわけなのでして、つまり、そのようにすることによって、血液が熱のために液化してしまって、身体の疎(まば)らな目から流れ出るなどということもなければ、また逆に、粗大過ぎて

D 動きにくくなり、血管の中を容易に循環できないなどということもないようにしようというのです。じっさい、繊維素は、その本性の成り立ちからしてこの面でのちょうどよい釣り合いを保つ働きをしているのでして、血が死者のそれであって、冷えて行く過程にある場合でも、誰かがそれの繊維素だけを取り集めるようなことをすれ

---

1 「背中の腱」と訳したἐπίτονοι(複数)は、もともと帆柱の「後支索」の意の語。アリストテレス(『動物誌』第三巻$515^{b}6$ sqq.)では、肩から腕の腱もしくは筋を指す語として用いられていると思われる。従ってまた、すぐ前の「腱およびそこの小管」の「そこ」とは、「背中の腱」の近辺を指すと考えられる。コンフォードは、「腱およびそこの小管」とは77D〜Eの、頭部のまわりの血管や、75C〜Dの、頭部下端の腱を指すのであろうか、と推測している(*Pl. Cosm.* p. 341)。

2 「強直痙攣(τέτανος)」は、ヒポクラテス全書においては、しばしば「痙攣(σπασμός)」と並べて用いられている。「痙攣もしくは強直痙攣の患者が熱を併発すると、この熱が病気を解消する」という言葉が、『箴言』(IV. 57)に見えている。「後弓反張(ὀπισθότονος)」の語は、同じくヒポクラテス全書の「流行病」(V. 75–76)にも見えている。

3 「白皮病(λεύκη)」「白色癩(ἀλφός)」は、ヒポクラテス全書においても、「苔蘚(λειχήν)」や「癩(λέπρα)」と並んであらわれる語であって(*Prorrhetikon*, 2;『箴言』III. 20)、いずれも皮膚病として扱われているようである。

4 ヒポクラテス全書中の「神聖病について(περὶ ἱερῆς νούσου)」は、コス学派のものと考えられるが、それは、神聖病(癲癇)が特に他の病気と違っているために「神的」なものと考えた、当時の俗見に反駁して書かれたものであって、そこでは、癲癇は、粘液質の者に生じる、脳の病気だとされている(6 sqq.)。

ば、残りの血は全部、液化して流れてしまいますが、繊維素をもとのまま残しておくなら、それは、周囲を取り巻いている冷気と協同して、たちまち血を凝固させるのです。そこで、血液の中では、繊維素が以上のような働きをしているのですから、そこへ「胆汁」——つまり、本来、その生まれにおいて古くなった血液にほかならないもので、逆転した過程をとって、肉から再び血液へと溶けて来たものであるところの胆汁——の、温かくて液状をなしているのが、まず、少しずつ血液の中へ入り込んで来ますと、それは繊維素の働きによって凝固することになり、疑固しながら、無理に熱をさまされると、それは内部に、寒気(さむけ)と震えをもたらすことになります。しかし、胆汁がもっと大量に流れ込んで来ると、それは、自分の出す熱で繊維素を征服し、沸き立って、これを激しくゆすぶって無秩序に陥れるのです。そして、胆汁が、終始優勢を保つのに十分な場合は、それは髄の類のところまで貫いて行って、これを焼き、その場で、魂をつなぎとめている、いわば船の纜(ともづな)ともいうべきものを解いて、魂を自由に解放してやります。しかし入って来る量がもっと少なくて、身体が溶解作用に耐えられる場合は、今度は、胆汁自身のほうが征服されて、全身いたるところから追い出されるか、あるいは血管を通って、体腔の下部(腹部)か上部(いわゆる「胸部」)に押し込められた後、ちょうど内乱のあった国家から追放されるように、身体から追い出され、そのさい、「下痢」や「赤痢」[1]や、それに類したあらゆる病気をもたらすのです。

E

さてまた、身体が、主として火の過剰から病気になる場合は、それは、「持続する灼熱あるいは熱」をつくり出し、空気の過剰によるものは「毎日熱」を、また、水の過剰によるものは、「三日熱」をつくり出します。——水は、空気や火よりも緩慢なものですからね。そしてまた、土の過剰によるものは、土というものが、以上のものの中でもっとも遅くて、第四番目に位するのですから、浄められるにも四倍の期間を要し、「四日熱」を生み

86

出すのでして、なかなか取り除けないものです。

四一

B　そして、身体にかんする病気は、以上のようにして起ることになるわけですが、魂の病気のほうは、身体的条件を通じて、次のようにして起るのです。

そこで、まず「魂の病気」とは「理性を欠いていること（愚かさ）」であり、また、それには二つの種類があって、一つは「狂気」であり、一つは「無知」であることを承認してもらわなくてはなりません。だから、そのどちらかを人に背負い込ませるような状態があるなら、それは何であれすべて「病気」と呼ばれなければなりませんし、また、過度の「快」「苦」が、魂にとって、病の最大のものとしなければならないのです。何故なら、人C間というものは、喜びの度が過ぎたり、あるいはまた、苦しみによってその逆を経験したりすると、快を捉え、苦を避けるのに躍起となって、場合のよしあしを顧慮しなくなるので、そのために、何一つとして、正しく見ることも、聞くことも出来なくなり、狂乱状態に陥り、およそ勘考するというようなことは、こうした時にはまるで出来なくなるのですからね。

1　「下痢(διάρροια)」と「赤痢(δυσεντερία)」について。ヒポクラテス全書では、前者は、単なる下痢のみの場合を言い、後者は、発熱、血便を伴う重症のものを言うのだとされている(『養生法』LXXIV 他)。チフス、パラチフスなども、ギリシア世界にあったとすれば、δυσεντερία に含まれていたと考えられる(W. H. S. Jones, *Hippocrates*, Vol I. p. viii 参照)。

また、人によっては、種子が髄のところに多量に生じて流れるようになり、あたかも樹木が過度に実をつけた場合のようになっていることもありますが、このような人は、欲情と、こうしたもの（種子）を生むこと（欲情の満足）(1)との中にあって、それぞれの時に、多大の苦しみと多大の快楽を得るのでして、こうして、人生の大部分 D を、その強度の快苦のために、狂気じみた状態で過すことになるのです。そして、このような人は、身体のせいで、その魂が、病めるもの、思慮なきものとなっているのに、病んでいるとは見なされず、自分から求めて悪くなっているのだと見なされるのです。しかし、本当のところは、色事に耽ってしまりがないというのは、大ていの場合、ある一つの種類のもの〔髄〕の、特別なあり方――つまり、骨の組成が疎ら(まば)なために、そのものが体内に流れ出してこれを湿らせるというあり方――に由来する、魂の病気にほかなりません。そしてまた、一般に、「快楽に対する不摂生」と言われ、悪い人々は故意に悪いのででもあるかのように、かれらに対する非難として言われているすべてのことにしても、このように非難するのは当をえたことではありません。何故なら、誰にしても、E 好んで悪くなっているわけではなく、悪い人が悪くなるのは、身体が、ある有害なあり方をしているということと、無知蒙昧に育てられているということによるのでして、この両者は、誰にとってもいまわしく、こちらが求めもしないのにやって来るわけなのですからね。

さらにまた、ひるがえって、「苦痛」の場合を考えても、魂は、やはり同じようにして、身体のせいで多くの悪を背負い込むのです。すなわち、酸っぱい粘液や塩辛い粘液、あるいは、苦くて胆汁質である体液が、身体中 87 を彷徨(さまよ)った挙句、外へ出るはけ口が得られなくて、内部に閉じ込められ、自分の出す蒸気を魂の運行に混じらせることによって、自分がこの運行に混じる、というような場合には、いつでも、それは、魂のありとあらゆる病

気——重症なもの、軽症なもの、小範囲のもの、広範囲のもの——をその中につくり出すのです。そして、それは魂の、かの三つの場所に向かって行っては、その各々が攻撃を加える場所に応じて、ありとあらゆる種類の「気難かしさ」に「意気銷沈」、また「向う見ず」に「臆病」、なおまた同時に、「物忘れの早いこと」に「物おぼえの遅いこと」など、多種多様なものを生み出すのです。(2)

B また、これに加えて、人間の出来がこのように悪いところへ、その国政がまた悪く、悪しき言論が、国家で、公私ともに語られ、しかもなお、こうした害悪を癒す薬となるような学課が、若い時から少しも学ばれないのだとすると、そのような条件のもとにあっては、われわれが悪くなるにしても、誰しもそのように悪くなるのは、ひとえに、われわれの意志にまったく反した二つのもの(悪しき身体構造と、悪しき育ち)の故だということになります。だから、こう言ったことの責めは、常に、生まれる子供よりも、むしろ生む親たちに、また、養育されるものよりも、むしろ養育するものたちに求めなければなりません。しかしそれでも、可能な限りは、養育を通じ、また、日々の営みや学課を通じて、悪を避け、その逆を捉えるように心がけなければならないのです。——しかし、まあ、こう言った点については、話は別になります。

1 91A～B参照。
2 体液から出る「蒸気」のこと、およびそれと気質との関係については、補注L(二〇四—二〇五ページ)を参照。

四二

C　ここで今度は逆に、いまの話とちょうど表裏をなすもの、つまり、身体と精神が健全性を維持することのできる、その原因となるところの、この両者の世話についての説明を与えて、〔前の話に対する〕補いをつけるのが、当を得て適切だということになるでしょう。——何しろ、悪いものよりも、善いものを話題とするほうが、一そう正しいのですからね。

さて、善いものはすべて美しく、美しいもので均齊（あるいは釣り合い）のとれていないようなものはありません。だから生きものにしても、このような〔善美の〕性質を備えようとするなら、均齊のとれたものでなくてはなりません。ところが、およそ「均齊」というもののうちでは、些細なものについてなら、われわれは、これを識別し、算定しているわけですが、そのくせ、もっとも決定的で重要なものについては、算定して考えることをおよそしないものなのです。というのは、「健康と病気」、「徳と悪」を考える時には、それに対して、魂そのものと身体そのものとの間に成り立つ釣り合い・不釣り合いより以上に重大な意味を持つものはまったく存在しないというのに、われわれは、それらについて、何一つ考えてみようともしなければ、また、次のようなことに、気づきもしないのです。——すなわち、魂のほうは強力で、あらゆる面において偉大であるのに、これを乗せる体格のほうが、あまりにも、弱過ぎ、小さ過ぎるような場合とか、あるいはまた、この両者が、いまのとは逆な関係に結びついているような場合には、全体としての生きものは、何分にも、最も重要な意味を持った釣り合いにおいて均齊がとれていないのですから、これは、美しくはないのだということ、しかし、これとは反対の状態に

D

あるものは、とにかくそれを洞見し得るものにとって、あらゆる見もののうちでも、最も美しく、最も愛すべきものなのだということに、われわれは、気づかないわけなのです。そこで、たとえば、脚が長過ぎるとか、他のどこかが大き過ぎるとかして、それ自身で均齊のとれていないような身体は、単に醜いだけでなく、また同時に、その各部分が労働をともにする時には、多大の疲労や痙攣や、また、不器用さから来る転倒などを引き起こして、我が身に無数の害悪を招く原因となるわけですが、じっさい、これと同じことを、身体と魂の合成体——つまり、われわれが「生きもの」と呼んでいるところのもの——についても考えなければならないのです。すなわち、その生きものの内部において、魂のほうが身体の割りに強過ぎるような場合には、魂が激怒すると、それは身体全体をひどくゆり動かして、これを内から病気でいっぱいにし、また、何かの学課や研究に熱中する時には、魂は身体を溶かし(消耗し)、さらにまた、公私いずれにおいても、教えたり、論戦したりする場合には、そこに起こってくる競争や張り合いのために、魂は身体を灼熱させて、これをゆすぶり、そして、「〔体液の〕流れ(レウマ)」を引き起こして〔カタルを誘発して〕[2]、医者と呼ばれている人々の大部分を欺き、原因でもないものを原因だと申し立てるようにさせます。

そしてまた、今度は、魂の割には過ぎた大きな身体が、取るにも足りない、弱い精神と共生する場合には、何しろ、人間にあっては、本来的に、二重の欲望——つまり、身体の故に生じる、食物を求める欲望と、およそわ

E

88

B

1　「美しい」の原語 καλός は前に「宇宙」が立派だと言われた(29A他)場合の「立派」の原語と同じ。均齊のとれた「美しい」身体は「立派」な身体でもあり、また、完全性を備えた「立派」な宇宙が「美しい」ものでもある点に注意しておきたい。

2　カタルについては85Bを参照。

れわれの内部のもののうちでは最も神的であるような部分の故に生じるところの、知を求める欲望との二つ――があるわけですが、その強いほうのものの動きが優勢を占めて、自分自身の勢力を増大させるとともに、他方では、魂のほうを、鈍くて、もの覚えの悪い、忘れっぽいものにすることになるのでして、こうして、最大の病である「無知」を、内部につくり出すのです。

さて、この両方の病気に対して、安全を守る方法はただ一つです。すなわち身体を伴わないで魂だけを動かすことも、魂を伴わないで身体だけを動かすことも、どちらもしないということでして、それはつまり、双方が、〔互いに〕自分を防禦して、〔相互に〕均衡を保ち、健康なものになるようにというためなのです。そこで、数学者 C だとか、あるいは、何か他の、精神面の激しい訓練に従事する人は、体育にも親しんで、身体にもそれ相当の動きを与えてやらなければなりませんし、今度はまた、身体づくりに気を配っている人は、それに対抗するものとして、音楽(もしくは文芸)や、ひろく「哲学」全体にもたずさわって、魂にも、それに応じた運動を与えてやらなければなりません。――もしも、人が正しい意味で「美しくて、同時にまた善い人(=立派な人)」と呼ばれるに価するものであろうとするなら。そしてまた、〔身体の〕諸部分についてもやはり、これと同じ方針に従い、万有の姿を模写するという仕方で、その世話をしなければならないのです。というのは、身体というものは、入っ D て来るものによって、内部で焼かれたり冷やされたりするのですし、さらにまた今度は、外部のものによって、乾燥させられたり湿らされたりし、なおまた、それらに付随する作用を、この両方の動きによって受けるのですから、人がじっとしたままで、身体をそのような動きに委ねる場合にはいつでも、身体は、征服され滅ぼされることになるのです。しかし、もしも、人が、あの、万有の育ての親とか養い親とかいうように、われわれの呼ん

E でいたところのものを模倣し、身体を、できるだけどんな場合にも、じっとしたままにさせてはおかないで、むしろこれを動かし、そして、その中に絶えず一定の振動をつくり出すことによって、自然に適った仕方で、かの内外の動きから、終始、自分の身を守るなら、そしてまた、同族関係に従って彷徨っている、身体のいろいろな性質や部分を、適度にゆすぶることによって、あの、万有についてわれわれが語っていた、以前の話の通りに、相互に秩序づけて、一定の配置におくなら、そのような人にあっては、これらの性質や部分は、〔もはや〕敵同士が相並んで置かれて、身体の中に戦争や病気を生み出すがままに放置しておかれることはなくなるでしょうし、むしろ、親しい間柄のもの同士で隣り合わせになるように置かれて、健康をつくり出すようにさせられることになるでしょう。

89 ところで、今度はまた、およそ「動き」のうちでも、人が自分自身の中で、自分自身によって動かされるようなものが、もっともすぐれた動きであり、――というのは、それが、思考の動きや、万有の動きと、一番よく親近性を持っているからですが、――これに対して、他のものによって動かされるような動きは、前者よりも劣ったものなのです。そして、最も劣ったものはと言えば、それは身体が横になってじっとしたまま、他のものを通じて、部分的に動かされるというような場合の動きがそれなのです。だから、身体から不浄を取り除き、身体を引き締めるいろいろな方法のうちでは、体操によるものが一番すぐれていることになります。そして、第二番目によいのは、船に乗って行く場合とか、あるいはどんな仕方でもとにかく、乗りもので行くという、労を要しな

B い方法を取る場合の、振動を通じて与えられる動きがそれです。ところで第三の種類の動きは、極度に切羽つまった場合に役立つこともありますが、そうでもない限り、分別のある人は、けっしてこれを受け入れるべきでは

ありません。——とこう言われるものは、実は、医薬を用いて浄化する(下剤をかける)治療のことにほかなりません。というのは、大きな危険性のない限りのすべての病気は、医薬の使用によって刺戟されるべきではないからなのです。何故なら、およそ病気が形成される場合、それはある意味では、生きものの自然のあり方に似ているからです。というのは、生きものの場合の構成体も、それば、当の種族全体に定められている命数を持つとともに、また、個々の生きものを単独で取り上げる場合にも——否応なく、無理に割り込んで来る事故を勘定に入

C れなければ——やはり、各々、運命によって割り当てられただけの生命を持って生まれてくるものなのでして、それというのも、個々の生きものの三角形が、そもそもの最初においてすでに、ある一定の時間までは、十分に事足りるだけの能力は持つけれども、その限度を越えては、もはやけっして生きることができないというように構成されているからなのです。そこで、これと同じことが、病気の場合の形成体についても言えます。すなわち、それに定めとして与えられている期間を無視して、人が薬を用いて、これを壊滅させる時には、軽症な病気が重くなったり、また、病気の数の少なかったのが多くなったりし勝ちなのです。というわけで、すべてこの種のものについては、時間の余裕のある限り、これを養生法によって教導しなければならないのでして、投薬によって、

D 厄介な災いをかき立ててはならないわけなのです。

四三

そして、〔心身各部の〕共同体としての〔一個の〕生きもの〔全体〕と、それの身体面の部分について、人が、いったいどのようにして、これを教導し、またどのようにして自分自身によって教導されれば、最もよく理に適った生

き方ができるかという点は、以上語られた通りで十分だとしておきましょう。しかし、その教導するという任に当るはずの当のもの（魂）自身を、その教導の仕事に対して、可能な限り、最も立派な最もすぐれたものであるように用意することのほうが、おそらくは、もっと必要でもあり、またむしろこのほうをこそ先にしておかなければならないのでしょう。そこで、これについて詳細にわたって述べるとすれば、それだけでも、十分な一つの独立した仕事になるでしょう。しかし、これを付随的な問題として扱い、前に言われた議論の方針に従って、次のような考察を加え、これから述べるような結末を、この話に与えるとしても、けっして不都合ではないはずです。

E

われわれは、もうしばしば、魂の、三様にそれぞれ異なった三つの種類のものが、われわれの中に住んでいること、そしてその各〻が動きを持つようになっていることを話して来ました。そこで、いまもまた、同じ方針に従って、できるだけ簡単に、次のように言わなければなりません。すなわち、それらの種類のうち、無為に過し、自分自身の動きを停止しているものは、どうしても、甚だ弱いものにならないわけには行かないけれども、これに対して、鍛錬されるものは、大いに強くなるのが必然である――と。ですから、それらのものが互いに釣り合いのとれた動きを持つように、用心していなければならないわけです。

90

ところで、われわれのもとにある魂で、至上権を握っている種類のもの（理性）については、こう考えなければなりません。――すなわち、神が、これを神霊（ダイモーン）として、各人に与えたのである――と。そして、そのものはまさに、われわれの身体の天辺に居住し、われわれが、地上の、ではなく、天上の植物であるかのごとく、われわれを天の縁者に向かって、大地から持ち上げているものなのだと、わたしたちは敢て主張したいのですが、この主張は、至極正当なものだということになります。何故なら、〔われわれの〕神的なる部分は、魂が最

(90)
B 初にそこから生まれたそのところ〔天〕に、われわれの頭でもあり根でもあるものを吊して、身体全体を直立させているわけなのですからね。そこで、欲情や野心の満足にのみ汲々として、そのようなことのためにのみ労すること甚しい人にとって、その思いのすべてが、死すべき(地上的な)ものになってしまうこと、そしてまた〔その人自身も〕、およそ可能な限り、まったくの、死すべきものになり、その点で少しの不足も残さないことは、——何分にも、かれが、そのような性質のもの(死すべき部分)を増大させて来たのであってみれば、——これは、どうにも避けられないことなのです。しかし、これに反して、学への愛と、真の知に真剣に励んで来た人、自分の

C うちの何ものにもまして、これらのものを鍛錬して来た人が、もしも真実なるものに触れるなら、その思考の対象が、不死なるもの、神的なるものになるということは、おそらくはまったくの必然事なのでしょう。さらにまた、こうした人が〔かれ自身も〕、およそ人間の分際に許される限りの、最大限の不死性にあずかることになり、その点で欠けるところは少しも残さないということも、そしてまた、そのような人は、何分にも、常に神的なるものの世話を欠かさず、自ら、自分の同居者なる神霊を、よく整えられた状態で宿しているのだから、かれが特別に幸福(エウダイモーン、よき神霊(ダイモーン)を持てるもの)であるということも、おそらくは必然でしょう。

ところで、「世話」というものは、誰にとっても、何の世話でも、その方法はただ一つ、各〻に対して、それに固有の養分と動きを与えてやることです。ところが、われわれの中の神的なるものと同種の動きと言えば、そ

D れは、万有のなす思考と、その回転運動がそれです。そこで、各人は、これらの運動の跡を追いながら、生まれた時にすっかり損なわれてしまった、われわれの頭の中の循環運動を、万有の調和と回転運動に学んで矯正し、こうして、観察する側のものを、観察される側のものに似せて、前者を、その最初の本然の姿にかえさなければ

なりませんし、また、このようにして似せることによって、神々から人間に、現在に対しても未来に対しても課せられた、最もよき生をまっとうしなければならないのです。

四四

E そして、ここに、最初われわれに命じられた今日の課題、すなわち、万有について、人間の誕生にいたるまでの話をするということも、どうやら、ほぼまっとうされたように思われます。というのは、他の生きものが、これまたどのようにして生まれたかという点については、簡単に言及すべきでして、その話を長々と引き延ばす必要は毫もないからです。――何故なら、そうするほうが、このようなことについて話す場合には、むしろ節度があると、話す当人に思えるようですからね。

そこで、この類のことは、次のように述べられるものとしましょう。

男に生まれた者のうち、臆病で、その生涯を不正に送ったものはすべて、あの「ありそうな」言論に従えば、

91 第二の誕生で、「女」に生まれ変ったことになるのです。そして、このようなしだいですから、神々が、性交に対する欲望を考案したのも、ちょうどこの時になってのことなのです。つまり、神々はその時、魂を備えた生きものの一つをわれわれ(男)の中に、他の一つを女の中に組み立てたわけですが、この両者はまた、次のようにしてつくったのでした。すなわち、飲物の通路の、ちょうど次のような場所、つまり、飲物が肺を通り[1]、腎臓の下

1 70Dの注2を参照。

(91)

へと向かい、膀胱の中へ入った場合、この飲物を受け取って空気で圧縮して放出するという、そこの場所に神々

B は穴を穿って、それを、今度は、頭から、頸を通って下り、脊椎を貫いて、ひと続きにつながっている髄――これは、じっさい先ほどの話ではわれわれが「種子」と呼んでいたところのものにほかならないのですが――とにかく、その髄に通じるようにしたのでした。ところが、この髄は、何分にも、魂を備えた(生きた)もので、それがいまや、はけ口を得たのですから、それは、はけ口の得られる場所のある、その当のものの中に、流れ出ることを求める、生命的な欲望を生ぜしめ、こうして、この、はけ口のある当のものを、子を生もうとする「愛欲(エロース)」〔の具体化されたもの〕につくり上げたわけなのです。だから、男の場合、その隠しどころの不従順で我がままなことは、まるで言葉を聴き入れない動物のようなものでして、その狂暴な欲望のために、あらゆる

C ものを征服しようと試みるのです。また、女の場合も、やはり同じ理由で、その中の、母胎(メートラ)とか子宮(ヒュステラ)とか呼ばれているもの、すなわち、女の中にいる、子供をつくる欲望を持った生きものが、時機を過ぎて長い間、実を結ばずにいると、手のつけられないようないらだち方をして、身体中いたるところを彷徨し、息の通路を塞いで呼吸のできないようにして、極度の困難に陥れたり、また、その他にも、ありとあらゆる病気

D をもたらすのです。しかし、ついに、一方の性(女)の欲望と、他方の性(男)の愛欲とは、〔この両性を〕結びつけると、ちょうど樹木からそうするように、果実を捥ぎ取って、あたかも耕地へそうするように、母胎へと、小さくて目に見えない、まだ形をなしていない生きものを蒔き、そして、この蒔かれたものの諸部分を再び分明にして、これを内部で大きく育て、その後、これに日の目を見るようにさせて、こうして、生きものの誕生を完成するのです。

さて、女、もしくは一般に雌性のものはすべて、以上のようにして生まれたのでした。ところで「鳥」の類は、今度は、次のような男から、毛髪の代りに羽を生やすという工合に姿をかえてつくられたのでした。――つまり、その男たちというのは、罪はないけれども軽率で、天空のことには詳しくても、根が単純なので、それらについ E ての最も確実な証明は、目で見て得られるとのみ信じているような人々のことなのです。さらにまた、陸上を歩行する獣類は、もはや、頭の中の軌道を用いなくなってしまい、むしろ胸部にある魂の部分の指導するままに従っていたために、およそ哲学（知の探究）に親しむこともなければ、また、天を注視することもなかった男たちから生まれたのでした。だから、かれらは、日頃このような生き方をして来たことがもととなって、その前脚と頭とが、大地へと、類似関係によって引きつけられることになり、そこによりかかるようにさせられたわけなので 92 すし、また、その顱頂部は、何しろ、その各〻の回転運動がとんと働かないために圧しひしがれることになり、それがひしがれるひしがれ方に従って、細長くなったり、その他ありとあらゆる形をしているわけなのです。そしてまた、かれらの種族が、四つ足だったり、多足だったりして生まれて来たのも、この理由に由来するのでして、つまり、神が、愚かなものには、その愚かさの程度に比例して、それだけ余計に大地に引かれるようにと、より多くの支えを、〔身体の〕下にあてがってやったからにほかなりません。また、まさにこうしたかれらのうちでも、最も愚かで、全身をもうまったく地面の上に長々とのばしているものには、もはや足の必要は少しもない B ようなので、神々は、これを、無足で、地面を這うものとして生み出しました。ところで、四番目の水棲族は、知性にも学知にも、この上もなく、無縁な人々から生じたのです。変形してつくりかえる技術者である神々は、かれらの魂は、ありとあらゆる過誤によって、不純な状態にあるのだから、かれらはもはや純粋な呼吸には価し

ないのだと考え、微細で純粋な空気を呼吸させる代りに、水の濁った深みへと突き落として、それを呼吸するようにさせたのでした。魚類や貝類や、その他すべての水棲族が生じたのはこのようなところからです。極度な無

C

知に対する罰として、最果ての住居を割り当てられたわけなのです。

そして、このようにして、すべての生きものが、あの時も、また現在も、理性と無知を失うか得るかによって、その場所を変え、互いに変化し合っているのです。

そして、さあ、万有に関する、われわれの話も、いまはもう、終りに達したものとしようではありませんか。何故なら、死すべきもの、不死なるもの、どちらの生きものをも取り入れて、この宇宙はこうして満たされ、目に見える、もろもろの生きものを包括する、目に見える生きものとして、理性の対象の似像たる、感覚される神として、最大なるもの、最善なるもの、最美なるもの、最完全なるものとして、それは誕生したからです。そして、これこそ、ただ一つあるだけの、類なき、この宇宙にほかならないのです。

『ティマイオス』補注

A ナイル河の増水の原因（22D 6 λυόμενος の解釈）

22C sqq. で、大火による地上の事物の滅亡のことに言及がなされた後、ここで、エジプトでは「ナイル河……が、この時にも解放されて、われわれをこの危難から救ってくれる」と言われているが、その場合、「解放されて」と訳した λυόμενος（解く、解放する、弛（ゆる）める、溶かすなどの意の動詞 λύω の、中・受動相現在分詞。性・数・格は「ナイル河」に一致）の解釈については、古来、多々議論がある。

プロクロス（37 A sqq., Diehl, I. S. 119 sqq.）は、22E の「しかしこの土地では、そのような場合も……水はすべて下からあふれてくるというのが自然の構造になっているのだ……」の箇所の注として、ナイル河の水がどこから上ってくるのかについての、ポルピュリオス、エラトステネス、ヤンブリコス、テオプラストス、アリストテレスらの説を挙げている。こうした説の中には、ナイル河増水の原因として気候を挙げているものや、ナイル河の水源となる山が高くて、それによって阻まれた雲が雨を降らせるという説もあったらしいが、中でもポルピュリオスは、エジプトには古くから、ナイル河の増水時には水は下から噴出するという説があったこと、したがって、エジプト人はナイル河を「大地の汗」と呼んでいたことに言及し、本篇のいまの箇所の λυόμενος についても、次のように説明していたらしい。すなわち「解かれて（λυόμενος）……救ってくれるというのは、雪が解けて（λυομένη）水嵩を増させるということではなく、ナイル河がそれ自身の水源から解かれ（λύεται）、それまでは抑えられていたのが、表面に上ってくるということだ」というのである。

これに対して、プロクロス自身は、ナイル河の水源地となる南の地方に雪はありえないという理由で、雪解け説を批判するとともに、大地の目が疎（あら）くなって下から水が吹き出すというのも奇妙なことだとして、ポルピュリオス説を退け、λυόμενος を、受動相でなく中動相に解し、「ナイル河は、われわれをこの危難から解放してくれて」と読んでおり、シュタルバウムやマルタンも、この読みを採用している。

しかし、このように読むと、

（a） 原典は「ナイル河は、われわれをこの危難から解放して（λυόμενος）救ってくれる（σῴζει）」となり、λυόμενος と σῴζει とが事実上同義となることや、

（b） λύω は、中動相では、むしろ「身代金を払ってやる」ことを意味し、これはいまの文脈には不適当だ、

という、こうした理由から、プロクロス説も批判を受けることになった。

F 写本は λυόμενος の代りに ῥυόμενος（保護する、救うの意

の動詞 ἐρύομαι の現在分詞)と記しており、これは λυόμενος の解釈に苦しんだ人の訂正と見ることもできるが(Taylor, *A Commentary on Plato's Timaeus*, p. 53)これを採ったとしても、λυόμενος についての、右の(a)が問題となる限り、ここでも同じ問題が復活するであろうし、また、ῥυόμενος は、アッティカ方言の散文にはほとんど例を見ない詩的な語なので、信憑性はきわめて稀薄と言える。

アーチャー・ハインドは、F写本を退け、λυόμενος を採るが、右の(a)(b)の理由から、プロクロス説を酷評して、再びポルピュリオス説を支持している。これに対して、クック・ウィルソンは、アーチャー・ハインドの議論のずさんさを指摘し(*On the Interpretation of Plato's Timaeus*, pp. 135 sqq.)、そして、同義語の反復を問題にするくらいなら、λυόμενος 一語にポルピュリオスのように手のこんだ解釈を持ち込むことのほうが、よほど問題があるとしているが、ただ、ひょっとして λυόμενος は、αὐξανόμενος(増大して)の、こわれた形だということもありうる、としている。

他方、アーペルトは、ὑόμενος(雨に降られて)を提案。これに対して、テイラーは、エジプトは雨のきわめて少ない土地だとの理由で、アーペルト説を退け、また先の(a)(b)の理由から、λυόμενος にも疑問を持ち、むしろ、クック・ウィルソンの αὐξανόμενος 説に傾いている(*Comm.*, p. 53)。

しかし、λυόμενος を、プロクロスのように中動相に読むのはどうしても不都合かどうか、あるいは写本に問題があるなら、もともとどういう語があったと想定すべきかといった問題については、決定的な解決を得ることはきわめて困難なように思われる。

ところで、テイラーが αὐξανόμενος(増大して)説に傾くのは、ヘロドトスに「ナイル河は、夏至から始まって百日間水をたたえてあふれ、その日数の終る頃になると、この流れは水位が落ちて退いて行き、再び夏至が来るまで、冬の間ずっと減水している」(『歴史』第二巻一九)という言葉があって、夏期におけるナイルの増水に、当時のギリシア人が注目していたことがわかるからである。じっさい、ヘロドトスは、ナイル河のこうした現象は、他の河とは逆だとしており、本篇でも、他の河が減水して大火の起こりやすい時期に、ナイル河の増水によってエジプトは火災の危険から守られるのだと言われているとしても、少しも不思議ではない。

しかし、λυόμενος を αὐξανόμενος に変更してよいかどうかは別問題である。増水の現象ないし原因が、λυόμενος で表現されている可能性は、ポルピュリオス説が否定されても、なお残るからである。

コンフォード(*Plato's Cosmology*, pp. 365-366)は、σώζει αὐξανόμενος という hiatus(母音連続)は、本篇の文体から見て不自然として、αὐξανόμενος 説を退け、λυόμενος の解釈として、二つの可能性を挙げている。

(α) 雪解け説。——ポルピュリオスがこれを否定していることは前に挙げたが、ヘロドトス(同、二二)によると、じっさいに、一部のギリシア人は、ナイル河は解けた雪から(ἀπὸ τηκομένης χιόνος)流れ出ると主張していたらしい。へ

ロドトス自身はプロクロスと同様、ナイル河の水源は酷暑の地にあるので、雪などありえないとしているが、コンフォードはアナクサゴラスに、ナイル河は夏には解けた雪で増水するという言葉があることや(59 A 91(DK^{8}))、アイスキュロス(『救いを求める女たち』五五九行)、エウリピデス(『ヘレネ』三行)などの例を挙げ、「雪解け説」は広く流布していた、としている。

(β) 灌漑説。――コンフォードがいまの問題について意見を求めたグランヴィル教授は、即座に、ナイル河は人工の溜め池から、人間の手で「解放された」と解すべきだという示唆を与えたらしい。そして、コンフォードは、イソクラテス(『ブシリス』一三)に、エジプト人は旱魃をも洪水をも制御しうるという言葉がある点を挙げ、さらに、エジプトの灌漑システムは古くからあったのだとして、プラトンもいまの箇所を書いた時、『ブシリス』を念頭に置いていたのだろう、としている。

たしかに、ギリシア人の間に「雪解け説」があったことは否めないし、エジプトで古くから、ナイルの増水を利用した灌漑法があったのも事実であろうが、しかし、コンフォードの議論には若干の疑問がある。

(α)の「雪解け説」について。(1)原典では「雪が解けて(ἡ χιὼν λυομένη)」とはなっておらず、「解けて(λυόμενος)」は「ナイル河」にかかっているので、これだけの語から「雪解け説」を保証しうるかどうかは疑問。(2)コンフォードが「雪解け説」の可能性を考えた時、彼は、「(他の土地で大火がある時にも、エジプトでは)ナイル河が解かれて(λυόμενος)われわれを救ってくれる」という原典の言葉に対して、とくに大火の時にナイル河が解かれて増水すると言われている以上、ナイル河のこの現象の原因は大火の熱だとされていたのだと考え(the conflagration is the agent....)、その場合には、λυόμενος(解かれて、解けて)の意味としては、「(雪が)解けて」しかありえないと判断したのである。たしかに原典では、パエトンの神話に表現されているような稀に起こる大火への言及があった直後に、「しかし[エジプトでは]ナイル河……が、この時にも解かれて……」と言われているので、この「解かれて……」の原因を大火が発生しやすい気候条件だと解すべきなら、夏の暑さで雪が解けるという、アナクサゴラスらの、夏ごとのナイル河増水についての「雪解け説」を、この特殊な大火の時にも適用して考えることは可能であろう。しかし肝心の、コンフォードが前提としていたこと、つまり、ナイル河増水の原因を大火だとすることは、原典の文脈からどこまで保証されうるであろうか?

(β)の「灌漑説」について。(1)エジプトで古くから灌漑システムがあったことは知られているが、われわれに知らされているそのシステムとは次のようなものである。――夏のナイル河増水期に運河を通じて耕地に水を引いて、これらを溜め池化し、秋のナイル河減水期には排水運河を通じて、溜め池化していた耕地から水を還流する。この時期までに耕地は河水の沈澱物で肥沃となっているので、そこに種を播く。――他方、ナイル河の増水・減水の時期が他の河と逆で

ある点に、ヘロドトスが注目している点は前に述べた。従って、他の河川が減水している夏の乾燥期に(従って火災も起きやすいであろう)、ナイル河が増水するとしても、これは溜め池から水が放出されるせいではなく、「灌漑システム」は逆に、ナイル河の自然な増水を利用して作られているのである。それとも、コンフォード――もしくはグランヴィル――は、特殊な大火の時に、溜め池の水が放出されることを意味しているのであろうか？ しかしそれなら、原典では何故、「ナイル河が解かれて」と言われているのであろうか？

(2)コンフォードが「灌漑説」の可能性を挙げている時に採用しているものの一つとして、カルキディウスの、いまの箇所に対する訳(意訳)中の meatu irriguo という語がある(「ナイル河は……この時にも、こうした危険に対して、meatus irriguus によって、……破壊を防いでくれる」)。meatus irriguus は「irrigating channel」とも読める。しかし、もともと、動詞 irrigo には「灌漑する」のほかに「氾濫する」の意味もあり、カルキディウスのいまの語が「灌漑」を意味しているとは言い切れない。

B 宇宙の魂の組成(35A sqq.)

(a) 35A 注4に記した "αὖ πέρι," を省いている例としては、古くはキケロ(*De Natura Deorum*, 18)やセクストゥス・エンペイリコス(*Adversus Grammaticos*, 301)が挙げられ、近代ではシュタルバウムはその版で一応この語を保存しながら改訂を提案。マルタンもその版でこれを残しているが、訳は、これを省いた場合と事実上変らない。アーチャー・ハインド、バーネット、リヴォーは、その版ではっきり削除。

"αὖ πέρι," を省くと、35A の「さらにまた『同』と『異』についても」の傍線の部分が省かれることになるが、これを省いて読む一例として、テイラーの 35A～B に対する訳は左の通り(「有」と訳した οὐσία をテイラーは「being」と訳しているが、οὐσία のまま記す)。

「不可分で常に同一を保つ οὐσία と、物体の領域に生じる分割可能な οὐσία の中間に、第三の形態の οὐσία、つまり、『同』と『異』の二者の混合体を作った。[a] そして、同様に、[b] これを、それら(二種の οὐσία)のうちの不可分のものと、諸物体の中に分割されているものとの中間の、一つの混合体にしたわけである。そして彼は、この三つのものを取り上げ、そのすべてを混ぜ合わせて一つのものにしたが、その時『異』は混りにくかったが、これを力づくで『同』と結合させた。οὐσία の助けを借りてこれらを混合し、この三つのものから一つのものを作って……」。

すなわち傍線 a の部分は、οὐσία に並列する新たな「同」と「異」に言及したものではなく、この混合体はすぐ前に言われた「第三の形態の οὐσία」と同じものを指し、したがってまた傍線 b 以下の一文は、その前の文の反復と解されている(Taylor, *Comm.*, p. 109)。

図示すれば左の通り。

a　常に同一を保つ不可分の οὐσία＝「同」

a″　第三種の οὐσία

a′ 分割可能な οὐσία＝「異」

そして「三つのもの」とは、a、a′、a″を指す。

じっさい「不可分で常に同一を保つ οὐσία＝同」「分割可能な οὐσία＝異」の公式を大前提とする場合には、この二種の οὐσία の混合がまず話題となった後、新たに「同」と「異」がいま一つの話題となるのを示すような「さらにまた……についても(αὖ πέρι)」はテキストを読む上に障害になると思われる。

(b) 右のような公式を主張する解釈も含めて、いまの箇所についてこれまでに提出された多種多様な解釈の一端を概観すると左の通り。

1 アカデメイアのクセノクラテス、クラントルの解釈は、プルタルコス(*De animae procreatione in Timaeo*, 1012 D sqq.)の伝えているところによると、まず**クセノクラテス**のほうは、「魂」を「自己自身を動かす数」だとして、プラトンのいまの箇所の魂の組成に、数形成の要因と、運動の要因を見て取ろうとし、「不可分のもの」＝「一」＝「限定」、「分割可能なもの」＝「多」＝「無限定者」と解し、この前者が後者を限定することによって「数」が生じるが、これに「動」の始原たる「異」と、「静」の始原たる「同」が混入して「魂」が生じるのだとしたらしい。

しかし、**クラントル**のほうは、「魂」の働きは、「理性の対象」と「感覚対象」のどちらについても判断し、また、この各領域内の個々の間に、あるいは二領域に属するもの相互の間に成立する「相違」と「類似」を判断することとなのだと考え、したがって、判断する「魂」もまた、「理性の対象となり同一を保つもの」と、「感覚され、変化するもの」と、さらに「同」「異」とから混ぜ合わされているのでなければならないのだと解していたようである。

2 ストア派の**ポセイドニオス**は、これまたプルタルコス(*ibid.*, 1023 B～C)の伝えるところによると、「分割可能な οὐσία」は、「物体の限界の οὐσία」つまり「延長」を意味するのだと考え(Taylor, *Comm.*, p. 118 参照)、これと「理性の対象」との混合体である「魂」は、調和ある数に従って構成された、「延長体の形相」なのだとして、数学の対象の場合と同様、「魂」もまた、「理性の対象」と「感覚対象」の中間に位するものだと考えたらしい。

3 **プルタルコス**は以上のような諸説に批判を加え、特にポセイドニオスの説は唯物的な考えと大差はないとしているが、自説としては、宇宙生成以前に調子外れの「魂」があったとする立場から、「物体の領域に生じる、分割可能な οὐσία」は——数の多や、延長を意味するのではなく——「理性」に与る前の「魂」それ自体、つまり、無秩序で無限定なまま、動の源泉となっているものを指すのだとし、この無秩序な「魂」を、「必然(ἀνάγκη)」(47 E sqq. 参照)と一致させている(*ibid.*, 1014 D～E)。

4 **プロクロス**は、「魂」は、そこからすべてが導出される最高の実在者たる「一者」ではなく、「多」を含む存在であるから、プラトンがこれを分析するのは当然だとし(176 C sqq.)、プラトンのいまの箇所では、「魂」は、不可分の νοερά(知)と、

無限に分割可能な物体との中間の位置を占めるものとして、多へと分割されながら、その多なる部分から構成された一つの統一体とされているのだとする(186D～E)。そして、このような中間的な存在たる「魂」は、「理性の対象」も「感覚対象」も、すべてを認識するものであるが、そのためには、「理性の対象」の世界で最も普遍的なものだとして「ソピステス」で挙げられている「有もしくはある(οὐσία)」「同(ταὐτόν)」「異(θάτερον)」「動(κίνησις)」「静(στάσις)」が、「魂」の構成要素ともなっていなければならない、何故なら、さもなければ、「魂」はこうした類に従ってすべてを認識することができないであろうから、というように言っている(180C～181D)。なおプロクロスは、「同」と「不可分のもの」を対応させ、「異」を「分割可能なもの」に対応させるという、一部のプラトニストの解釈は誤りだとし、プラトン自身に従えば、「同」にも「異」にも、「不可分のもの」「分割可能なもの」「その両者の中間のもの」という三種があり、「魂」の場合は、その「有(οὐσία)」が中間的な種のものであると同様、「同」も「異」も、中間的な種のものだとしているのである(187D sqq., Cornford, *Pl. Cosm.*, pp. 60–61 参照。なお、以上のプロクロスの箇所は Diehl, II. S. 119 sqq.)。

5 近代の解釈では、**シュタルバウム**は、「魂」は、その知る対象たる「理性の対象」と「感覚対象」に応じて、自らもそれに類似した要素、すなわち「不可分で同一を保つもの」と「分割可能」なものから成るのだとして、単純に前者を「同」と、後者を「異」と一致させ、「魂」は、イデアと物体の素材(idearum et corporum materia)から成るのだとのみしている(S. 136)。

また**マルタン**は、「常に同一を保つ οὐσία と……」と言われる場合の οὐσία を「essence」と訳して、これは純粋に「理性の対象」として独立に存在するイデアでもなく、「感覚対象」でもなく、数学の対象のように、前二者の中間にあるものだとした後、「不可分の essence」と「分割可能な essence」については、次のように解釈する。すなわちまず、すべての essence はイデアの似像(image)であるが、アリストテレス(『形而上学』第一巻 987^b14 sqq.)その他の証言によると、イデアそのものも「無限定の多」を質量とし、「一」を形相としているので、従って「分割可能な essence」と「不可分の essence」はそれぞれ、何よりも、イデアの質料と形相の模像(imitation)だと考えてよいだろうとする。そして「同」と「異」については、やはり『ソピステス』を援用して、これらは οὐσία(existence)とともに、最も、普遍的なイデア(だとマルタンは言う)であるが、しかし、こうしたイデアないしその似像は、どんなものにも等分に行きわたっているわけではなく、「分割可能な essence」には、むしろ「異」のイデアの似像が、また「不可分の essence」には「同」のイデアの似像が支配的なので、「同」と「異」という両極端の間に、右の二つの互いにおおいに違っている essence を結びつけるべく、神は予め、「同」と「異」を等分に持つ中間的な混合体の essence をつくったのだ——というように、マルタンは、プラトンのいまの箇所を解釈している(I. Note, XXII. 349 sqq.)。

なお、**アーチャー・ハインド**は、「不可分のοὐσία」を「純粋思惟」と訳し、さらに「οὐσία」と言われているのは、純粋思惟と感官知覚が脳髄の別々の働きでなく、一つの主体に属するものであることを意味する、というような注を加えているが(p. 106)、この種の解釈はまた別の話題であろうから、後はテイラーとコンフォードの解釈のみ、簡単に挙げておく。

6 テイラーは、全体としてこの『ティマイオス』に、前五世紀のピュタゴラス派の説を見るという立場を取っているが、ここでも同様、世界の事物を数、もしくは数の似像としたピュタゴラス派の数形成の理論と、こうした事物を認識する「魂」の形成法としていまの箇所に叙述されているものとの間に、密接な関係が見られるとする。すなわち、ピュタゴラス派では、「無限定(ἄπειρον)」と「限定(πέρας)」から「一(もしくは単位)」が生じ、その「一」から数が生じると伝えられている(アリストテレス『形而上学』第一巻986ᵃ17)のに対し、「魂」の場合も左図のようにこれに対応するという。

ピュタゴラス派の数	本篇の「魂」
a 限定	a′ 不可分のοὐσία
c 「一」	c′ 第三のοὐσία
b 無限定	b′ 分割可能なοὐσία

(a, b → c ; a′, b′ → c′)

そしてテイラーは、いまの箇所で、最終的には「三つのもの」が取り上げられると言われているのに注目し、その「三つ」とは右のa′、b′、c′以外にはなく、従って「同」と「異」とは、それぞれa′、b′を指すのだとして、「常に同一を保つもの」(a′)と、「常に生成しているもの」(b′)とは、「同一性」と「相違性」が顕著にあらわれる最も目立った例なので、「同」、「異」と呼ばれているのだとする(この場合テイラーは、a′、b′それぞれ、27Dの「常にあるもの」(=理性の対象)と、「常に生成しているもの」(=感覚対象)に対応させているようであるが、自然界においては「理性の対象」と「感覚対象」が結合して第三のものを生むことにならないという点はテイラー自身も認めているところである)(以上*Comm.*, p. 128 sqq.)。

なおテイラーは、アリストテレスの断片的な証言などから、ピュタゴラス派の説を推測し、それと類似したものを、この『ティマイオス』に見て取るのであるが、しかしまた、ピュタゴラス派の説を推測する上に、『ティマイオス』にはピュタゴラス派の説が見られるのだということを大前提として、これを手がかりにしている場合も多々見られ、右の議論の展開途上でもそうした傾向が見られるのは否定できない。

7 コンフォードは、「不可分のοὐσία」=「同」、「分割可能なοὐσία」=「異」という図式を取らず、「οὐσία」と「同」と「異」を並列させ、このそれぞれに「不可分のもの」と「分割可能なもの」の二種があって、神はまず「οὐσία」「同」「異」のそれぞれについて、その「不可分のもの」と「分割可能なもの」との混合体をつくり、次にこの三つの混合体を一つにして「魂」を構成した、というように原典を読む(35B注1の図を参照。われわれの訳もこの読みに従った)。そして、この「οὐσία」「同」「異」は、『ソピステス』(254D sqq.)で、「Aはある」、「Aは自分自身と同じであるが他のものと

は異なっている」と言われる場合に、Aと結合するものとして考えられている「有(ある)」「同」「異」と、同様の意味に解されるべきだとするのである(従ってコンフォードは、οὐσία を Existence と訳す)。しかし、こうしたものとしての三者のそれぞれに「不可分のもの」と「分割可能なもの」があるということ、そして、この両種の混合体が「魂」の構成要素となっているというのは何を意味するのかについてのコンフォードの説明は、必ずしも明快ではない。「有」については、コンフォードは、「魂」のあり方が、イデアの不可分で同一を保つあり方と、感覚界の延長を持った変化するあり方の中間にあるので、「不可分の有」と「分割可能な有」の混合体が「魂」の構成要素に入っていなければならないとする。しかし「同」と「異」については、今度は**37A**を引用して、「魂」はイデアと感覚対象の両者にかかわって、「同じ」「異なる」を判断しなければならないから、「似たものが似たものを知る」という原則に従って、「同」の場合も「異」の場合も、そのイデア界に属するものと、感覚界に属するものの混合体が「魂」の構成要素となっていなければならないとするものの、たとえば「自分自身と同じ」を意味する「同」について、「不可分の同」だとか「分割可能な同」だとか言われるのはどういう意味であるのか、コンフォードの説明は、あまり判然としない(*Pl. Cosm.*, pp. 60 sqq.)。

（c） われわれとしては、いまの箇所を一応次のように解しておきたい。すなわち、魂は、不可分で同一を保つ理性対象と、分割可能で多性を備えて変化する感覚対象の双方にかかわるものとして、その「あり方」は、後二者の「あり方」のどちらにも与るものである(a a′の混合)。そして、このように、その「あり方」に両面を持つ魂は、確かにその単一で同一的な面で理性対象にかかわり、多性を備えて変化する面で感覚対象にかかわるが(37B～C参照)、しかし、このどちらの次元の対象についても、「同じ」「異なる」を判断しなければならないので、思考対象に見られるような厳密な「自己同一性」と、感覚対象に見られるような「自己同一性」の双方に与るものであり(b b′の混合)、「(他からの)相違性」にしても同様だ(c c′の混合)というのである。

C 宇宙の魂の構造、もしくは音階理論(35B sqq.)

（a） 36Bの注2に記した数列の全体は左の通り。

$\mathbf{1}\ \frac{9}{8}\ \frac{81}{64}\ \mathbf{\frac{4}{3}}\ \mathbf{\frac{3}{2}}\ \frac{27}{16}\ \frac{243}{128}\ \mathbf{2}\ \frac{9}{4}\ \frac{81}{32}\ \mathbf{\frac{8}{3}}\ \mathbf{3}$

$\frac{9}{8}\ \frac{9}{8}\ \frac{256}{243}\ \frac{9}{8}\ \frac{9}{8}\ \frac{9}{8}\ \frac{256}{243}\ \frac{9}{8}\ \frac{9}{8}\ \frac{256}{243}\ \frac{9}{8}$

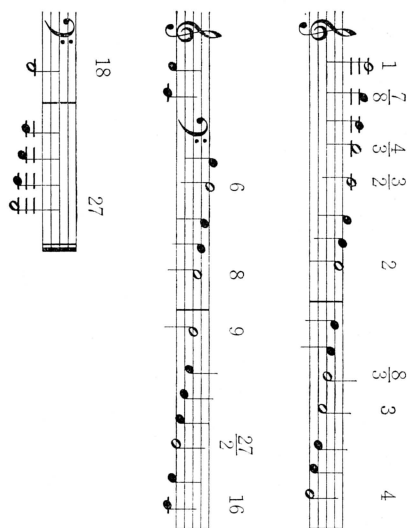
$\frac{27}{8}\ \frac{243}{64}\ \mathbf{4}\ \frac{9}{2}\ \frac{81}{16}\ \mathbf{\frac{16}{3}}\ \mathbf{6}\ \frac{27}{4}\ \frac{243}{32}\ \mathbf{8}\ \mathbf{9}$

$\frac{9}{8}\ \frac{9}{8}\ \frac{256}{243}\ \frac{9}{8}\ \frac{9}{8}\ \frac{256}{243}\ \frac{9}{8}\ \frac{9}{8}\ \frac{9}{8}\ \frac{256}{243}\ \frac{9}{8}$

$\frac{81}{8}\ \frac{32}{3}\ 12\ \mathbf{\frac{27}{2}}\ \frac{243}{16}\ 16\ \mathbf{18}\ \frac{81}{4}\ \frac{64}{3}\ 24\ \mathbf{27}$

$\frac{9}{8}\ \frac{256}{243}\ \frac{9}{8}\ \frac{9}{8}\ \frac{9}{8}\ \frac{256}{243}\ \frac{9}{8}\ \frac{9}{8}\ \frac{256}{243}\ \frac{9}{8}\ \frac{9}{8}$

魂の組成が以上のようなものとされている点について、次の二点を挙げたい。(1)宇宙の魂は、天球の単一な運動をあらわす「同」の円と、惑星の多様で相互に異なる運動をあらわす「異」の円で象徴されていること(36B sqq.)。(2)こうした宇宙の魂の働きとして、感覚対象・理性の対象の双方について「同じ」「異なる」を判断することが挙げられていること。しかし詳細については補注Bを参照。

(b) 36A以下で「合間」と訳した διάστημα, διάστασις は「音程」をもあらわす語であって、35B以下で構成された数列((a)を参照)は、実は「音階」を構成している。絃の長さの比と音程とは、もちろん以下のように対応する。

4/3—完全4度(2全音+半音)
3/2—完全5度(3全音+半音)
9/8—長2度(1全音)

数列の全体を五線紙で表わすと上図の通り。

D 「時間(χρόνος)」について(37D〜39E)

まず、次の諸点に注意したい。——(a)「時間」は「永遠(αἰών)」の、動く似像として神によって製作されたこと(37D)。(b)「時間」は数に即して円運動をすると言われていること(37D, 38A)。(c)惑星が「時間の数を区分し、これを見張るもの」として生じたこと(38C)。この場合、天球の日周運動による「昼と夜」も(37E)、「太陽が自分の円を廻り了える」期間たる「暦年」も、「月が自分の円を一巡して太陽に追いつく」期間たる「暦月」も(39C)、すべては「時間の部分」であって、これらは宇宙が生じるまでは存在しなかったこと(37C)——。

ところで、アリストテレスの時間論を、プラトンのそれと直ちに同一視することはできないが、時間と、天体の円運動とを、表裏をなすものとして考える、アリストテレスの議論を若干挙げておく(『自然学』第四巻より)。

(α) 時間は運動と同じではないが、変化なしには時間は存在しない(218b18–21)。

(β) 運動体は一から他へと動くが、その一と他の間の(空間的な)大きさというものは連続しているものであるから、そこを動く運動体の運動もまた、一続きの連続をなすものだ

ということになる。そして、どれほどの分量の運動がなされたかに応じて、いつでも、その分だけ時間が経過したと考えられるのであるから、運動が連続したものであれば、時間もまた連続したものである(219a10–14)。

(γ)「前」と「後」は、まず場所において成り立つ。そして、それに応じて、運動にも「前」と「後」とがあり、また、時間においても「前」と「後」とが成り立つ。われわれは、運動を「前―後」によって区切るという仕方で区切った場合に、時間を認識するのであって、われわれが「時間が経った」と言うのは、運動に「前―後」を感知した場合なのである(219a14–25)。

(δ)「時間」とは、「前―後」という観点で捉えられた、「運動の数」にほかならない。時間は、一種の(数える手段としての抽象的な数ではなく、数えられるものとしての)数である(219b1–9)。

(ε) しかし、時間がその運動の数だという、当の運動とはどのようなものであろうか。生成、消滅、増大、質の変化、場所の運動などが時間のうちにあり、時間は、運動である限りのどの運動についても、その数であるには違いないのであろう(223a29–33)。しかし、二つの運動が同時に行なわれた時、別々の相等しい二つの時間があるわけではなく、運動は多種多様でも、等しくて同時である時間というものは、どこにおいても同じ一つのものであり、総じて時間は一つの種をなしている(223b1–12)。そして、どんなものでも、自分と同種のものを単位として、それによって計られるが、時間も、何か一定の時間を単位として計られ、そして、時間は運動によって計られ、運動は時間によって計られる(運動の量も時間の量も、時間的に一定である運動によって計られるからである)。そこで、こうした尺度として一番よいのは、一様な円運動である。これに対して、質の変化も増大も生成も、一様なものではない。だからこそまた、時間というものは、天球の運動だと思われているのである。というのは、つまり、他のすべての運動も、この運動によって計られるのであり、時間もこれによって計られるからである(223b12–23)。

E　内惑星の運動(38D4、「太陽とは逆に向かう力」の解釈)

二つの内惑星、金星と水星とは、「速さにおいては太陽と歩調を揃えて回転しながら、しかし、太陽とは逆に向かう力を賦与されている軌道」に置かれた、とあるが、まず、この二惑星が「太陽と歩調を揃える」こと、つまり周期をほぼ等しくすることについては、『国家』X. 617A～B、『エピノミス』986Eを参照。しかし、これら二惑星の軌道について「太陽とは逆に向かう力(ἡ ἐναντία αὐτῷ (＝τῷ ἡλίῳ) δύναμις)……」が何を意味するかについては、いろいろと議論がある。たしかに、すぐ次の箇所で「だから太陽とヘルメスの星(水星)と暁の明星(金星)とは、同じように、互いに追いついたり追いつかれたりする」とあるので、少なくともこうした現象の説明となる要因が「太陽とは逆に向かう力」で示されていると考えられるが、後者の言葉もまた検討を要する。

カルキディウスが、この「反対の力(vis contraria)」についての古人の解釈としていくつか挙げている中に、周転円の回転方向で説明しようとしているものもあるが(*Timaeus*, CIX、なお、プロクロス *Comm.*, 221E～F, Diehl, II. S. 264を参照)、周転円説は、アレクサンドリア時代のアポロニウスに始まるとするのが定説なので、これは論外として、38D注1に挙げた三種類の説明について若干記す。なおこの場合36Dで、「異」の円が分割されて出来た七つの不等な円(惑星の軌道)について、それらの円が「互いに逆方向に動く」と言われていたことの意味も、併せ検討する。

(a) 二つの内惑星が太陽とは逆向きの年周運動をするという説。――前代未聞の説だとテイラーを顰蹙させた(*Comm.*, p. 200)この説をとっているマルタン(Note, XXXII. § II)が、その一つの論拠としているのは、右に挙げた36Dの「互いに逆方向……」の箇所であり、彼はこれを、水星と金星だけが他の諸惑星とは逆の年周運動(東→西)をするという意味に解している。そしていまの箇所(38D)についても同様に、太陽とこれら二惑星が「同じように、互いに追いついたり追いつかれたりする」というのは、一方に太陽が、他方に水星・金星のグループがあって、この両者が相互に逆方向に動くからこそ言えることなのであり、同一方向に動く諸惑星の場合は、より速いものが他のものに追いつくことはあっても、逆は成り立たないはずだ、と説明している。

ところで、こうしたマルタン説が『国家』や『エピノミス』と折り合うかどうかはさて置くとしても、この説に従えば、金星も水星も、太陽に対して、零度から一八〇度までのあらゆる角度をなす位置に来なければならない。しかし、プラトンの弟子ヘラクレイデスが金星について、その東方・西方どちらの最大離角としても、五〇度という数値(現在の知識では四八度、水星の場合は二八度)を与えていたことが、カルキディウス(*op. cit.*, CX)によって伝えられており、これら二惑星が常に太陽と一定の角度以内にあるというかなり明白な事実をプラトンが知らなかった、などは考え難いことであろう(Dreyer, *A History of Astronomy from Thales to Kepler*[2], Dover edition, 1953 p. 67 参照)。

(b) 水星・金星の速さにむらがあるとする説。――36Dの「互いに逆方向に動く」と言われていた箇所に対する注の中で、カルキディウス(*Timaeus*, XCVII)は、月と外惑星と内惑星の三者の相違についての一部の人の説を挙げているが、それは次のようなものである。――土星・火星・木星は、太陽よりも、西から東への年周運動が遅いので、太陽と合に達して見えなくなった後にはじめて姿を見せる時には、太陽の西に位する。したがって日没時にはすでに沈んでいるが、日の出前には東方に輝く。しかし、年周運動が太陽より速い月は、太陽と合に達した後、太陽の東に来るから、合の後はじめて姿を見せるのは、日没直後の西空においてである。しかし、水星と金星とは明け方にあらわれることもあれば、夕方にあらわれることもある――。そして、38Dの「太陽とは逆に向かう力」についても、カルキディウス(*Timaeus*, CIX)は、一部の人の説として、いま右に述べたような水星・金星

の特徴に言及しながらこれを解釈する説を挙げている。——すなわち、この二惑星が太陽との合の後にはじめて姿を見せるのが、日没後の西空においてである時には、それは太陽に追いついて追い越したのであり、日の出前の東の空の場合には、それは太陽によって追い越されたのであるから、このように太陽との関係で追いついたり追いつかれたりする」ことのために、これら二惑星には「太陽とは逆に向かう力」がある、というのである——。

たしかに、「追いついたり追いつかれたりする」(38D)という原典の言葉は、——マルタン説の場合のように、反対側から出会う現象についてよりもむしろ——カルキディウスの挙げている右のような現象に言及しているものと考えるほうが、より妥当と思われる。

しかしその場合には、こうした現象を呈する内惑星の軌道について、「太陽とは逆に向かう力」というのは、どのような意味に解すべきかの問題が残る。

この点にかんする限り、もちろん次のように考えるのも可能であろう。——すなわち、七惑星の軌道は「異」の円が分割されたものであり、後者は「同」の運動(東→西の、天球の日周運動)とは逆方向に回転すると言われているから(36C)、惑星の軌道はすべて、西から東への年周運動をする点では一致しているが、それぞれ速さ(周期)は異なる。月の軌道が一番速く、第二に速いのは、太陽・水星・金星の、互いに速さの等しい三軌道のグループであり、これに対して三つの外惑星の、それぞれ速さの異なる諸軌道は、いずれも太陽のグループより遅い(36Dを参照)。そして、水星と金星とは、全体としては太陽と周期を等しくするものの、時折、太陽に「追いついたり追いつかれたりする」という現象を見せるのであるが、このことは、これら二惑星が「太陽と歩調を揃え」ながらも、間歇(かんけつ)的にその前進運動に逆らっては、またその遅れを取り戻すように前進運動を速めるためだと考えられ、この意味でこれら二惑星の軌道は「太陽とは逆に向かう力を賦与されている軌道」と言われた——と、このように解釈することも可能であろう。

しかし、問題は、36Dの、七つの惑星軌道について言われた、「互いに逆方向に動く」という言葉である。もっとも、この点について、プロクロスは、この場合の「互いに」は「同」と「異」の間のことだと解し(*In Platonis Timaeum Commentaria*, 221E～F, Diehl, II. S. 264)、テイラーもこれに従っている(*Comm.*, p. 173)。しかし、こうした読み方は原典の語の配置から見て無理な読み方であろう。そこで、この「互いに」を、やはり惑星諸軌道の間のことだとすると、元来西→東の運動をすると言われた「異」の円が分割されて出来た諸軌道について、改めて「互いに逆方向に動く」と言われるのはどういう意味なのかが問題となる。

この点についてのコンフォード(*Pl. Cosm.*, pp. 80 sqq.)の解決策は次の通りである。——まず、惑星軌道がすべて「異」の運動に与っていることは確認されなければならない。したがってどの惑星も「同」の日周運動と「異」の年周運動双方の支配下にあることになるが(39A～B注3を参照)、若干の

惑星の運動は右の二つの運動には解消されえず、第三の運動を付加して説明される必要がある(われわれなら力の合成を考えるところを、プラトンは運動の合成を考えたのだと、コンフォードは言っている)。これをわかりやすくするために、「異」の運動を下降するエスカレーターに、「同」を周囲の壁になぞらえると、太陽・水星・金星がエスカレーターに立ち止まったままで下降して行くとすれば、月はそこを駆け降り、三つの外惑星はそれぞれ違った速さで、エスカレーターの進行方向とは「逆方向に」上って行く——というのである。すなわち、コンフォードに従えば、「互いに逆方向に動く」というのは、「異」の運動を代表するものとして考えられる太陽の運動と、その「異」の運動に支配されながらもこれに逆らって逆に向かう外惑星の運動との相互関係について言われた言葉だということになる。

ところが38Dのいまの箇所では、「太陽とは逆に向かう力」は、むしろ水星・金星について言われていた。しかしコンフォードは(*op. cit.*, pp. 108 sqq.)、水星・金星の場合は「逆に向かう力」は間歇的にしかあらわれないが、外惑星の場合は常にこの力を見せているはずでありこれは暗に了解されているけれどもただ言及されていないだけであろうとしている。

じっさい、原典のいまの箇所(39D〜E)では、月・太陽・水星・金星以外の惑星についての詳述は厄介な仕事になるだろうとして、その説明は省略されている。さらにまた、40Cでは惑星の円(軌道)について、その「相対的な逆行(ἐπανακυκλήσεις)と前進(προχωρήσεις)」ということが言われているので、このἐπανακυκλήσεις(『国家』X. 617Bのἐπανακυκλούμενονについては、その箇所の注でアダムはこれを、宇宙全体の運動に対する逆行だとしているが)を、コンフォードのように解すれば(40C注3はこの解釈に従ったもの)、惑星の運動は、太陽を基準とする「異」の運動と、それに支配されながらもこれに逆らう運動を原則として説明されたことになる。

(c) 「太陽とは逆に向かう力」を「留(りゅう)」や「逆行」の現象と結びつける解釈。——(b)で述べたコンフォードの説は、いわば、36Dと38Dを整合的に解釈しようとした苦心の産物と言える。しかし36Dの「[惑星諸軌道が]互いに逆方向に動く」という言葉さえなければ、そして外惑星の運動としてはただ太陽から次第に遅れて行く点のみを考慮してよいとすれば、太陽と外惑星の運動の相違はただ、年周運動における遅速の違いだけで十分説明しえたであろうし、この場合にはただ、水星・金星の不規則な運動だけが「太陽とは逆に向かう力……」で説明されたと解しうるであろう。そして事実、36Dの「互いに」を、「同」と「異」の間のことだとしているプロクロス(前出)には、「水星と金星とは順行(προποδισμοί)、留(στηριγμοί)、逆行(ὑποποδισμοί)を行なうので、見かけの上で太陽とは逆に向かう力を持っているのだと言えるかも知れない」(*Comm.*, 259B, Diehl, III. S. 66)という言葉があり、36Dの解釈でプロクロスに従っているテイラー(前出)もまた、「逆に向かう力」をプロクロスと同様の意味にとっている(*Comm.*, p. 201)。もちろん、「留」や「逆行」の現象は他の惑星についても十分に見られるが、常に太陽と近い距離を保

ってこれに「追いついたり追いつかれたり」する水星・金星だけが目立ち、他の惑星の同様の現象は気づかれなかったのだろうとテイラーは推測している(*loc. cit.*)。そしてコンフォードもまた、外惑星は、太陽とは逆に向かう運動(counter-revolution)のために常に太陽から遅れて行くが、その過程の中でまた別に留や逆行(retrogradation)をするということも暗に了解されていたのだろうとしている(*op. cit.*, pp. 110 sqq.)。

ところで、原典に語られているのは、38Dの、水星・金星についての「太陽とは逆に向かう力」と、36Dの惑星軌道相互の「互いに逆方向に動く」ということだけである(40Cの「逆行」はどのようにも解しうる)。36Dを無視すればテイラーのような解釈が妥当と思われるが、しかし36Dを無視しえないなら、太陽から常に遅れて行く外惑星の運動を「太陽の運動とは逆に向かう運動」とするコンフォード説も一つの可能な解釈と思われ、ほかに解決策も見当らないので、われわれもコンフォードに従った。しかし、外惑星の留や逆行の現象を想定しなければならない必然性も、またその傍証となるものも、少なくとも本篇には見当たらないようである。

なお、「逆に向かう力」が何によるものかについて、プロクロスは、惑星は神的な生きもので、知的な魂(ψυχὴ νοερά)を持ち、神的な理性(νοῦς θεῖος)を持っているので、その欲するところ(βούλησις)に従って速く運動したり、遅く運動したりする、と言っており(*Comm.*, 275B, 284D, Diehl, Ⅲ. S. 117, 147)、コンフォードもこれを支持して、この「逆に向かう力」は個々の惑星の魂に宿っている力であろうと言っている(*Pl. Cosm.*, p. 108)。しかし次の二点は注意されるべきである。(*α*)「逆に向かう力」は、惑星についてではなく、その軌道について言われていること。(*β*)その軌道とは宇宙の魂の部分であるが、宇宙の魂は理性を備えたものであろうし(30B, 37A参照)、そうした宇宙の魂の一面をあらわす惑星軌道の運動(「異」の運動)はいかに多様をきわめても数比に従っており(39C～D)、総じて知的要素は、「意のままに」ということより、むしろ秩序・比率と結びつくものであること(「解説」二八三ページ参照)。

F　地球は動いているか、静止しているか(40B8 ἰλλομένην の解釈)。

大地(地球)について「万有を貫いて延びている軸のまわりを旋回しながら」と言われている場合の、「旋回しながら」と訳した ἰλλομένην は、古来、解釈者の間に多大の議論を沸騰させた。まずこの語は、写本によって εἰλλομένην(A写本)、εἱλλομένην(P写本)となっており、これら中・受動相分詞の、もとの動詞の能動形としては εἴλω, εἰλέω, εἱλέω, εἴλλω, εἵλλω, ἴλλω の形があり、これらすべては同じ語の違った形のようであるが、語形によっては必ずしも同義とは言えず、一つの語根には帰着されえないようである。オクスフォードの「希英大辞典」が、εἴλω の項でまとめて記しているこの語の意味の概略は次の通り。(1)「閉じ込める」。「妨げる」。(2)(オリーヴや葡萄を)「圧搾する」。(単に)「集める」。(3)(εἰλέω

(εἰλ-), ἴλλω の形においてのみ) .i (曲りくねった道などを)「うねって行く」。「回転させる」。受動形では「回転する」。「行ったり来たりする」。ii「しっかり巻きつける」。

そしてこの辞典は、意味に疑義の残る例の一つとして、まさに本篇のいまの箇所を挙げ、この ἰλλομένην は、アリストテレス(『天体論』第二巻 293ᵇ31)では、「回転する」の意味に解されているが、プロクロス(*Comm.*, 281D, Diehl, III. S. 137)は「……のまわりにしっかり固められている(packed tightly about. . . .)」と解していることを挙げている。

そこで、まずアリストテレスの証言について検討しよう。

右に挙げた、アリストテレスの『天体論』中の箇所は、地球の位置や運動についての諸説を挙げ、地球もまた他の惑星と同様に中心(中心火)のまわりをまわるという、ピュタゴラス派の説に言及した後で、次のように言っているものである。——「ある人々は、地球は〔宇宙の〕中心にあって、宇宙を貫いて延びている軸のまわりを ἴλλεσθαι (ἴλλω の不定法)し、動いている(κινεῖσθαι)と言っている。ちょうど『ティマイオス』に書かれているように」。もっとも、この場合にも、写本によっては ἴλλεσθαι の代りに εἰλεῖσθαι となっているものや、「動いている」語の入っていないものもある。

そこで、右のアリストテレスの箇所は、(i) ἴλλεσθαι し、動いている、と言われている以上、ἴλλεσθαι はやはりある種の運動を意味するものとされているか、(ii)「動いている」は、後から誰かが插入したもので、アリストテレスの原文にはなく、アリストテレスは本篇のプラトンの言葉を正確に伝えているかの、どちらかであろう。

(ii)の場合には、本篇の ἰλλομένην 解釈の上に新しい手がかりが得られることにはならないが、(i)の場合、それなら、アリストテレスは ἴλλεσθαι で、どういう運動を考えていたのであろうか。

同じ『天体論』の別の箇所(第二巻 296ᵃ26)で、アリストテレスはやはりこの「ἴλλεσθαι し、動いている」という言葉を、『ティマイオス』の名を挙げずに、次のような文脈で語っている。——地球を星の一つだとする説も、地球を宇宙の中心にあるとし、その軸のまわりで ἴλλεσθαι し、動いているとする説も、どちらも正しくない。土の自然な運動としては中心に向かうものしかありえないからである。さらにまた、円運動をするものとしては、天球は別として、惑星の場合は二つの運動(天の赤道に従った日周運動と、これと斜めに交差する、黄道上の年周運動を指すのであろう)に支配されているが、もしも地球もまたこれらの運動に支配されているとすると、今度は地球から見た恒星のほうが、黄緯に沿ってずれたり、回帰したりするように見えるはずだが、実際にはそういう現象は見られないので、地球にこうした運動を与えるのも誤りである。——というように言っている。

従って、右の二箇所を関連させ、いずれも本篇のいまの箇所への言及だと考えると、アリストテレスが、プラトンの説として、地球に宇宙の中心の位置を与えながら、それに何らかの運動を与えるという説を考えていたらしいとは言える。

しかしひるがえって、本篇ではどうか。まず地球の位置で

あるが、プルタルコス(*Platonis Quaestiones*, 1006C)によると、テオプラストスは、プラトンが、大地に宇宙の中心という場所を与えたのを、年とってから後悔したというように言ったらしいが、少なくとも本篇の天体論は、地球を中心とすることを前提としないでは考えられない。しかし宇宙の中心にある地球にどういう運動が考えられるであろうか。アリストテレスを保留し、他の解釈をごく大雑把に概観する。

1　地球自転説。――グルッペ(Gruppe, *Die kosmischen Systeme der Griechen*)がこの説をとっているが、この場合天球の日周運動はどうなるのか説明がつかないであろう。

2　地球が宇宙の軸にくっついてまわるのだとする説。――これを主張するグロート(Grote, *Minor Works*)は、εἰλέω は密集するとか、しばりつけられるとかの意味であり、従って地球は宇宙の軸に固着しているが、しかしアリストテレスの証言もこれと矛盾しない。何故なら軸に固着している故に、宇宙全体といっしょに動いてしまうからだと言う。しかし、これでは、地球に対して恒星はすべて不動となってしまう。

3　地球は宇宙全体の日周運動に絶えず逆らっているとする説。――ベック(Boeckh, *Untersuchungen über das kosmische System des Platons*)は、一つには恒星天が回転している以上、地球は静止していなければならないということと、また一つには ἴλλεσθαι は「回転する」には用いられないからとして、これを「球をなして……のまわりを囲んでいる」の意味に解し、地球は周囲の日周運動に対して「受身の抵抗」をしているのだとする。ベック自身、これをマルタン説から受け継いだとしているが、マルタン(Note, XXXVII)の説もこの受身抵抗説で、日周運動をさせようとする外部からの圧力に対して地球はそれと同じだけの反対に向かう力で抵抗し、静止している、とする。

4　地球の上―下動説。――この説を取るバーネット(*Early Greek Philosophy*)は、前記アリストテレスの証言を重視して、これらの証言は『ティマイオス』に、地球運動説があったことの証拠だとし、しかし回転運動は取らず「宇宙の軸上を行ったり来たりする運動」を考えている。傍証としては、『パイドン』(111D～112B)で地下の流れが上―下動を行なうと言われている点を挙げている。テイラー(*Comm.*, pp. 226 sqq.)もバーネットとほぼ同様。なお、この両者が『ティマイオス』をプラトン自身の説とはせず、前五世紀のピュタゴラス派の説だとしている点については、「解説」二五六ページを参照。

5　地球は天球に対して相対的に自転するという解釈。――このコンフォードの説(*Pl. Cosm.*, pp. 120 sqq.)は、マルタンやベックに近いが、しかし後二者が、地球は日周運動に引きずられないために、受身の抵抗の力を見せて静止していなければならないとしたのに対し、コンフォードは、「天球に対して自転する」としている点が異なる。なおコンフォードは、アリストテレスの証言に対しても次のように解釈している。――アリストテレスもまた、プラトンが地球に対して、「同」の日周運動を帳消しにするための逆向きの運動を与えたことは理解していた。しかしアリストテレスはこの第二の

運動を「異」の運動だと勘違いしたので批判した――。

さて、アリストテレスの証言が、コンフォードの言うような意味に解しうるものか、それとも、アリストテレスが故意にプラトンの説を歪曲したものと解すべきか(Heath, *Aristarchus of Samos*, p. 178)、これはむしろ、アリストテレス解釈の問題である。

しかしいずれにしても、宇宙の軸を固定したものと考え、それに対して天球が「同」の日周運動をすることを前提とした上で、なおまたその軸に対して地球が回転するなどという考えは、本篇の宇宙像全体を無意味にしてしまうものであり、また、バーネット＝テイラーの「上—下動説」も奇妙な発想としか言えないように思える。以上挙げた諸説は ἰλλομένην が何らかの運動を示すものだと見る考えから提出された説であり、しかし本篇の天体論は事実上地球を静止したものとする前提に成り立っているはずなので、以上の諸説は矛盾を来たしたり、苦肉の策になったりするのである。

これに対して、プロクロス(前出)のように ἰλλομένην を「固められている」とか「凝集している」とかに解釈できれば、問題は起こらない。しかしそれなら、この語が何故アリストテレスの誤解(?)を生ぜしめることになったのかは、やはり問題であろう。

われわれの、40Cに対する注2は、一応コンフォードに従ったものであるが、これが唯一の決定的な解釈だとはとうてい言えない。

G　視覚について(45B)

45Bの注1で挙げた、(1)、(2)二つの解釈のうち、(1)を採る、たとえばアーチャー・ハインドが、(2)に見る困難は次のようなものである。すなわち、(2)に従えば「火のうちでも……を一つの身体(もしくは物体 σῶμα)になるように」となるが、火はもともと「物体」であるから(28B注3を参照)、これを改めて「物体」にするなどは無意味だというのである。そして、同じく(1)を取るコンフォード(*Pl. Cosm.*, p. 152)は、「日ごとの昼間に特有な身体(もしくは物体)」に強調を置く、すなわち、それぞれの昼間は、それ自身に固有の σῶμα(body)を持っていて、それは空中に散乱している光から成っており、視覚を生ぜしめるにふさわしい種類の火から、日中の光を、作ったというところに、まさに神々の工夫した点があるのだ、としている。

しかし、いまの箇所は、死すべき種族(人間)の身体の製作を神から委ねられている神々(天体)の業を話題としており、またすぐ次の45C～Dでは、眼から出る光と、昼間の光が融合して、具体的な「視線」ともいうべき一つの「身体」が形成される。従って、これを「一時的ではあるが、本当のわれわれの身体の部分」(Taylor, *Comm.*, p. 278)だと考えるなら、先の(2)のほうを取って、その、σῶμα を、人間の身体の部分と考えることも十分に可能であろう。

もっとも、このような「視線」の図は、蝸牛の眼を想像させて奇怪な印象を与えるかも知れないし、この解釈を取るテイラーに対してコンフォードは「感覚というものは、一〇マ

イルも離れた山の表面で起こるものか」というように反駁しているが(*op. cit.*, p. 153)、しかしいま右に挙げた45C〜Dの叙述や、また、視線は切られても焼かれても痛くないと言われている64D〜Eの言葉を参照。

H 「必然(ἀνάγκη)」について(47E sqq.)。

ἀνάγκη は近代訳では "necessity," "nécessité," "Notwendigkeit," などと訳されているが、これを、近代のニュートン物理学の描く世界に見られるような、厳密な法則に従った因果系列の「必然性」の意に解すると(たとえばアーチャー・ハインドの解釈はその典型と言える)、困難な問題が生じる。厳重な「必然」性に隅々まで支配されて閉じた系をなす自然世界の因果関係の連鎖に、それとは別に目的的に働く「理性」がどのようにして介入しうるかという問題がそれである。

しかし「厳密な法則に従った因果関係の閉じた系列」は近代的な観念であり、原子論者のいう「必然」も「法則」と結びつくものではない。われわれはむしろ、ἀνάγκη の語の意味について、若干の点に注意しておきたい。

(a) この語は「強制」もしくは「どうしても……でなければならない」の意での「必然」を意味し、たとえばパルメニデスでは、「あるもの」が「大いなる縛め(いまし)に限られて……その場に確固ととどまる」のは、「力つよき必然(アナンケー)の女神が、限界の縛めの中にそれを保持する」(Fr. 11. 26 sqq.)からだと言われている。しかしまた以上の意味と重なって、この語は「どうしても……を欠かすことができない」の意の「不可欠」「必要」といった意味をも持つ。本篇では、熱したり冷やしたりする作用力を持つ物体的な次元のものは、神の意図の実現に「役立つ」ところの「補助原因者」と言われているが(46C〜D)、また『パイドン』で、物体的な事物ないし作用力はけっして真の原因者ではなく、単に「それがなくては真の原因も原因として働くことのできないもの」つまり必要条件でしかないと言われている点(99A〜B)を参照。なお本篇68E〜69Aの言葉をも参照。パルメニデスで、すべてを縛している至上の存在のように位置づけられた「Ἀνάγκη(必然の女神)」は、プラトンでは、補助原因者もしくは必要条件の位置に置かれたと言えるであろう。

(b) 他方また原子論者レウキッポスの言葉として、「何ものも理由なくして起こることはなく、すべては理由があって、必然によって起こる」(Fr. 2)という断片があるが、アリストテレスは原子論者のこの「必然によって」を、「ひとりでに」と表現している(『自然学』第二巻196a2)。そしてまた、プラトンにおいても、「必然的に」は、「技術によって」に対立する「偶然的に」と同義に用いられている例(『法律』X. 888E sqq.)もあり(なお、アリストテレス『自然学』第二巻198b10 sqq. 参照)、こうした場合の「必然」は、たとえば火は他のものを焼くという作用力を持っているために、何が隣りに置かれようと、「ひとりでに」あるいは「必然的に」「不可避的に」これを焼くことになってしまう、という意味に解される。こうした意味での「必然的な」もしくは「必然性に支配された」物体的な事物が、宇宙全体を統合する真の原因

別し、後者を前者に従属させる宇宙論を展開したと言える。目指して目的的に働く真の原因者と「必然」とをはっきり区ン』(97C sqq.)に見られるが、プラトンは本篇において、善をこそ、宇宙万有の真の原因者のはずだとする言葉が『パイド特に現在あるような配置づけを善しとして選んだ「善なる力」者ではとうていありえず、他にも可能な宇宙の構造の中で、

I 「理性対象の模像」と、「受容者」(49D〜50B)

(a) 49Dの注2に挙げた訳の孕む文法上の問題は別としても、そうした訳に従った場合のこの箇所の解釈について、次のような点を指摘しておきたい。まず、後の箇所でも、「火」「水」などの名称は問題とはされていないという点がある。むしろ、日常「火」「水」などと呼ばれている対象もしくは現象そのものの実態の分析がこれから展開されるが、その場合、理性の対象たるたとえば「火そのもの」の模像を、「受容者」もしくは「場」(52A)が受け入れると、その都度、「場」のその部分が火としてあらわれ、空気、水、土についても同様だとされている(51B, 53A)。従って49D〜Eのいまの箇所も、「いまここにあらわれている、いわゆる火なら火を、それ(τοῦτο)——この場合は「火」——とは呼ばないで、これこれの(τοιοῦτον)——「火のような」——と呼ぶべきだ……」というように読むよりも、むしろ、「いつも同じようなものとしてあらわれるところの(49D)これこれのもの(τὸ τοιοῦτον、一定の特性、様態)をこそ、火と呼ぶべきだ……」というように読むほうが、より妥当であろう。そして

また、49D〜53Bの議論全体は、感覚にあらわれる火や水などの流動的な面を強調するというよりも、むしろ、それらのそれぞれの感覚的特性(一定の様態)を空間的・幾何学的な形態と関連づけるために、空間内にあらわれる火・水などそれぞれの特定の様態に注目する努力がなされているものと解したい。なお、「これこれであるもの(τὸ τοιοῦτον)」とは、その一例として挙げられている「白い」(50A)を例に取ると、これは何かの属性として考えられているのではなく、むしろ「白い」が「場」の中にあらわれると、いわゆる「白い事物」が現出するという、こうした関係で捉えられる「白い」などを一般化した語であろう。そしてこの点では、「火」も「白い」と同次元のものであって、「火」が実体で「白い」が質だというわけではないのである。

(b) なお、「その他、およそわれわれが『これ』とか『それ』とか……」の箇所については、まず「その他、およそ……どんなものにしても(μηδὲ ἄλλο.... μηδὲν....., ὅσα.....)(49D7〜E2)は、「火なら火を」の「火」や、すぐ次の「水」と並列するものと解したい。ところで「火」については、「いまここにあらわれている火なら火を(直接目的語)、火とは(補語)呼ばないで」というように言われたが、水の場合も同様のことが意味されているはずであり(D6の「水、ὕδωρ」は直接目的語と解したい。しかし補語としてこれまたὕδωρを補って考えるのは容易である)、いまの「その他……どんなものにしても……」の箇所も同様の構文のものとして解しうるであろう。すなわち「(火や水のほか)その他およそわれわれが、

『これは空気だ』とか『これは土だ』とか、一般に『これはXだ』と言って指しながら、それでもって何かXなる一定のものを指しているつもりでいるどんな対象にしても、それが、いまここにあらわれている現象である限り、それは本来、『これ』とか『それ』とか指示される暇もなく変化して行くものなので(すぐ次の箇所を参照)、こうした現象はとうてい、Xなる一定のものとしては呼ばれえない」というのである。

J 宇宙の数は「一」か「五」か(55C～D)

宇宙の数について挙げられている「五」という数字は、この箇所が五つの正多面体を論じた箇所の直後なので、それと関係させて考える向きもあり、古くはプルタルコス(*De E apud Delphos*, xi)が、プラトンは第五の正多面体を第五元素たるアイテールに割り当てたのだと指摘している。しかし、確かに『エピノミス』(981B～C)には、第五の正多面体をアイテールに対応させている言葉が見られるが、本篇では、少なくとも「アイテール」という名称は、空気の一種として挙げられているに過ぎない(58D)。しかもまた、仮に「万有のために、そこにいろいろの絵を描くにさいして」用いられた(55C)と言われた、第五の正多面体を、アイテールの形態として対応させるにしても、その場合には、せいぜい、宇宙に五つの領域ないし層が考えられるだけであろうし(Cornford, *Pl. Cosm.*, pp. 220–221参照)、またもし「宇宙の層」を問題とする場合には、「われわれの側の見解が明らかにするところは……宇宙は一つの神であるのが本来のあり方だ」という55Dの言葉は見当違いになる。

しかし、いまの箇所が「宇宙は無限多のものか、有限箇のものか」という問題から始まっている点を考えると、われわれはここでまた(「解説」二八一ページを参照)、プラトンが原子論ないしそれと軌を一にする自然学説を意識していたと考えることも可能ではないかと思われる。原子論者は物質粒子の形態を無限に多様なものと考えたが、それは原子の形が、特にこの形であってあの形でないという理由は少しもないからだとされていたらしく(Kirk & Raven, *The Presocratic Philosophers*, p. 409を参照)、また同様に、宇宙の数を原子論者が「無限箇」と考えた理由にしても、この無限の虚空間の中に、ただ一箇の宇宙だけが存在していると考えなければならない必然性はないというところにあったと言われている(Kirk & Raven, *op. cit.*, p. 414参照)。

これに対して、プラトンは、善なる製作者の存在を大前提として、宇宙を秩序ある一つの統一体と考え、製作者の知的な意図を仮説的に推測するという形で宇宙論を展開している。従って、こうしたプラトンの立場からすると、物質粒子の形態についても、仮説的に有限箇数の正多面体をこれに対応させるという試みが可能でもあり当然でもあると同様、宇宙の数についても、原子論者のように、最初からこれを、相互に何の脈絡もない「無限箇」のものとして放置するくらいなら、まだしも、一かそれとも(正多面体のヒントから)五かを問題にするほうがはるかに当を得ていることになるであろう？この点が55C～Dで強調されたと考えることも可能と思わ

れる。

K 「まわり押し(περίωσις)」の理論——呼吸・吸角・発射物体・磁石などの現象の説明(79B sqq.)

(a) 79E注2で、本篇での「呼吸」の過程は、半円を描きながら交互に向きを転じる車輪のような動き方をする、と言ったが、ガレノスの注によると、エラシストラトスは、プラトンの説と、アカデメイアの説が相違している点に言及し、後者の説によると、呼吸は完全な円を描くものとされていたらしい。しかし、完全な円と言っても、常に一方向に円が動くとすると、われわれは鼻や口から、常に呼気(もしくは吸気)だけを行なっていなければならないことになるが、これは明白な事実に反するので、たとえばテイラー(*Comm.*, p. 565)は、完全な円を描きながら交互に逆転する動きを、アカデメイアの人々は考えたのだろうと推測している。しかしその詳細はガレノスには記されていない。ところで、プラトンの「呼吸」の説明は、これを全くの受動的・機械的な現象とするものであるが、ガレノス(*De Placitis Hippocratis et Platonis*, VIII, 712, Müller, S. 719)がやはりこうした考えに批判を加えている点に注意しておきたい。

(b) 80A注3で言及した、「吸角」などについての本篇の箇所にかんする、プルタルコスの説明は次の通り。まず「吸角」については、プルタルコス(*Platonis Quaestiones*, 1004F～1005A)によると、吸角内の空気は熱で火化し、微細になって、吸角の金属の孔から脱出するが、外部に空虚はなく、吸角を取り巻いている空気を押すことになり、まわり押しの現象が生じて、空気は、吸角内の空虚化した場所に入り込もうとして肉を押し、吸角内の肉は脹れ上って水分を押し出す、というのである。「嚥下」については、プルタルコス(*ibid.*, 1005A)の説明によると、口や喉の腔所には空気が満ちており、食物が舌によって中へ押し込められ、同時に扁桃腺が緊張して張ると、空気は口蓋のほうへ押し出され、下降する空気に接続して、食物を圧し下げるのに与って力を加える、という。さらに「発射物体」についても、こうした物体は空気を押し分けて進むことになるが、押し分けられて物体の後方に流れた空気は、空虚になった場所を満たそうとして、今度は物体の後からまわって、物体の後につき従い、これを押し進め、速めるのに与って力を及ぼす、というのが、プルタルコスの説明(*loc. cit.*)である(速めるということはどういうことなのか、落体の場合を考えたのであろうか、とテイラー(*Comm.*, p. 572)は推測しているが、もちろん、速めるという言葉は、プラトンの原典になく、プルタルコスの解釈でしかない)。

(c) 80B注1で挙げた「協和音」についての解釈であるが、まずプルタルコス(*Plat. Quaest.*, 1006A～B)によると、音源となる物体から強い打撃を受けた空気は、弱い打撃を受けた空気よりも先に、聴覚の器官に達するが、前者が聴覚器官に達してから向きを転じて、遅れて到達した後者を捉え、これとともに感覚を惹き起こす時、前者が消えようとして後者と同質になっていると、両者の混合体は快感を与える、と

いうのである。
しかし、もしも完全に同質のものとなるなら、一つの音しか聞こえないはずで、「協和音」とは言えないではないか、とか、また、たとえば調律された二本の弦(2:3とか3:5とかの長さの比率になっている弦)が同時に弾かれる場合、両者は最初から調和しているはずで、ことさら音源から聴覚器官に到るまでの変化を考慮する必要はないではないか、とかいった疑問のために、出来るだけ妥当な意味を、いまの箇所から読み取ろうとして、解釈者たちは腐心しなければならなかった。たとえばテイラー(*Comm.*, pp. 575 sqq.)は、低音=遅い音が鼓膜に到着するまでの間に、高音の振動がこれまた遅くなり、従って、高音が低音によって追いつかれても、波動の干渉を生じることにはならず、合成された一様な波動となって、協和音が聞かれるのだ、と説明しているが、「波動」の概念をプラトンに持ち込むことは勿論許されないであろう。コンフォードは(*Pl. Cosm.*, pp. 320 sqq.)、弦が弾かれてから完全に静止状態に到るまでの間に、いくつもの空気の塊が「発射体」として放出されるのだと考え、元来の調律された二つの弦から放出される別々の系の発射体のうち、遅いほうは、運動の途中でますます速度が鈍るが、先に脳と血液に打撃を与えた、速いほうの音(67B参照)が、頭から肝臓に到る第二の運動(同)で速度を落とした時に、遅い運動がこれに追いついて、最初の比率が回復される、と説明しているが、プラトンの原文から、果してこれだけのものが読み取れるかどうかは疑問と言えはしないだろうか。

(d) 80C注2に挙げた「水の流れ」「落雷」「琥珀・磁石」の場合についての、プルタルコスの説明は次の通り。たとえば、川が絶え間なく流れるのは、水が空気を押し、押された空気が逆に水の後方に流れてあとから水を押すからであり(*Plat. Quaest.*, 1005F)、落雷の場合は、雲の中に起る打撃によって、火が空気中に跳び出すと、空気は裂けるが、再び火の上方で元の通りに合わさるので、火を無理に下方へ押しやることになるのである(*ibid.*, 1005B)。さらに、「磁石」は、空気の流出物を送り出しており、これが周辺の空気を押し、ここにまわり押しが生じて、空気は空虚になった、もとの磁石内の場所に入り込もうとして、鉄をもいっしょに引っ張るのである。そして、鉄は、木のように疎でもなく、黄金のように密でもなく、ちょうど空気の粒子と度の合った孔や溝を持っているので、鉄だけが空気によって押しやられるというのである(*ibid.*, 1005B～D)。なお、琥珀は、炎か息のような微細なものを持っていて、表面をこするとこれを放出し、磁石の場合と同様の現象を起こすのだと、プルタルコスは説明している(*ibid.*, 1005C)。

L 病気について(81E～86A)。および気質について(86E～87A)

(a) この箇所での病気の分類は次の通り。——
(α) 身体を構成している四種のもの(土・火・水・空気)の過多・不足もしくは各〻の本来あるべき場所からの移動、あるいは以上四種各〻に属する下位の種のうちの不適当なも

のが身体各部に取り入れられた場合に起こる病気(82A～B)。

(β) 第二次的な組織体(髄・骨・肉・腱・血液――これらは先の四種のものから成る)の生成の順序が逆行する場合に起こる病気。この場合には、肉の腐敗物が血液中に逆流すると、血管の中にさまざまの胆汁・粘液・漿液が生じ、これが毒素となって病気を惹き起こす(胆汁には黒いもの、赤味を帯びたもの、草色のもの、黄金色のものがある。粘液としては、黒胆汁の漿液たる酸っぱい粘液と、柔らかい肉の腐敗物たる白い粘液がある)。この種の病気は、組織の崩壊が深部へ進むにつれて重症になるのであって、右の諸病は肉が病む場合の病気であるが、肉を骨に結びつけているものが病む場合には、病気はもっと重症になり、骨が壊疽にかかるといっそう重症になり、髄の実質が病む場合には致命的な病気が惹き起こされる(82B～84C)。

(γ) (1)肺の異常によって息の入らない部分と適量以上の息の入り込む部分が生じる場合――しばしば多量の汗を伴う諸病。また、肉の分解で体内に息が生じた場合――「強直痙攣(テタノス)」とか「後弓反張(オピストトノス)」とか呼ばれている病気。(2)白い粘液によるもの――身体の表面では「白皮病」ないし「白色癩」。この粘液が黒胆汁と混って脳を犯す場合の「癲癇」。酸っぱくて塩辛い粘液によるもの――カタル性の諸病。(3)胆汁によるもの。胆汁が表面に吹き出た場合――「腫瘍」。内部に閉じ込められた場合――炎症性の諸病。後者の場合、とりわけ胆汁が血液中の繊維素に作用する場合には、寒気と震えを伴う致命的な病気を惹き起こし、胆汁が出て行く時には下痢症状を伴う病気となる(84D～86A)。

なお、以上のほかに(恐らく(α)に属するものとすべきであろうが)、火の過剰による「持続する灼熱あるいは熱」、空気の過剰による「毎日熱」、水の過剰による「三日熱」(隔日に起こるもの)、土の過剰による「四日熱」(二日おきに起こるもの)がある(86A)。

以上のうち(β)において、肉を骨に結びつけているものが病んで、「肉が根から離れ落ちて、腱がむき出しのまま残される……」と言われている病気(84A～B)は、関節付近の筋肉萎縮を伴うリウマチ様関節炎の症状を記述したものであろうか。また、この病気がさらに深部へ進行したものとして考えられている、骨の壊疽(84B～C)だとか、髄の実質の病気(84C)だとかは、骨髄炎に当たるものであろうか。(γ)で、肺の異常による、しばしば汗を伴う諸病(84D)と言われているものとしては、肺結核、肺炎、肺壊疽などが考えられるであろうし、「強直痙攣(テタノス)」(84E)は破傷風(tetanus)であろう。破傷風の強直痙攣においては、全身が後方弓形にそりかえるが、いまの箇所で「後弓反張」と訳した ὀπισθότονος は、文字通り、後方に緊張する状態を意味する(84E注2を参照)。「白皮病」と訳した λεύκη(85A)は「白い(λευκός)」から来た病名。「白色癩」と訳した ἀλφός(同)については、ラテン語の albus(白い)を参照。オクスフォードの希英大辞典は、前者に対しては a kind of leprosy or elephantiasis を、後者に対しては dull-white leprosy を語義として記してい

るが、ヒポクラテス全書でこれらの病名と並んであらわれる「癩病(λέπρα)」(85A注3を参照)にしても、現代医学でいうレプラ以外の皮膚疾患をも含んでいたらしく、これらの皮膚疾患は現代医学の分類には対応しないようである(大橋博司訳『ヒッポクラテスの医学』――中央公論社『世界の名著9ギリシアの科学』所収、p. 225を参照)。「神聖病(癲癇)」(85B)については当該箇所の注4、及び前記大橋訳『ヒッポクラテスの医学』pp. 194 sqq. を参照。また「カタル性の」と訳したκαταρροϊκά(85B)はκατά(下へ)、ῥέω(流れる)に由来する語で、一般に粘膜の滲出性の炎症を意味する、現代医学でいうところの「カタル」の症状が考えられていたのであろう。因みにヒポクラテス全書には「雪や氷のように冷たいものは胸に害を及ぼし、咳、出血、カタルを惹き起こす」という言葉があり(『箴言』V. 24)、また「急速に死にいたるカタル」の語も見えている(同Ⅲ. 12)。「下痢」「赤痢」(86A)については当該箇所の注1を参照。なお85D～86Aにおいて、胆汁が血液中に入り込んで繊維素に作用すると致命的な病気を招くが、胆汁が身体から追い出される時に「下痢」や「赤痢」などをもたらすと言われている点については、因みにヒポクラテス全書での、赤痢様症状の記述を挙げると、発病時に高熱、不眠、季肋部の腫脹が認められ、第三一日頃に赤痢症然を伴う下痢があり、第四〇日目に回復という症例が記されている(「流行病」I症例一〇)。また「持続する熱」と訳したσυνεχεῖς πυρετοίと、毎日熱、三日熱、四日熱(86A)は、本篇では、それぞれ火、空気、水、土の過剰によるものとして並列されているが、ヒポクラテス全書の「流行病」では、持続性の熱(πυρετοὶ συνεχέες)に属するものとして、昼間熱、夜間熱、準三日熱、真性三日熱、四日熱、不規則熱や(I. 5)、また、五日熱、七日熱、九日熱(I. 24, 26)も挙げられており、こうした熱型はほとんどがマラリア性のものと考えられる(前記、大橋訳『ヒッポクラテスの医学』p. 161を参照)。

(b) 四体液説と四元素説。――(a)に挙げた(α)、(β)、(γ)の分類によると、病気はまず身体を構成する四種の基本物体、火・空気・水・土の過多・不足に帰着され、次いで、これら四物体から成る第二次的な組織体の生成の逆行による病的な分泌物たる胆汁や粘液が毒素となって惹き起こす病気が挙げられ、第三に、以上の二群どちらにも属さないところの、肺疾患や破傷風や、粘液による皮膚病や癲癇や、胆汁による腫瘍や下痢性の病気が挙げられており、つまり四元素の異常による病気と、病的分泌物たる体液による病気とが並列させられている。ところがたとえばガレノスは、本篇のいまの箇所で、まず身体が四種の物体から構成されていて、それらの過多・不足や場所の移動によって病気が生じると言われているところ(82A)を挙げ、ヒポクラテスの場合と対比して、プラトンを批判しているのである(*De Placitis Hippocratis et Platonis*, VIII, Müller, pp. 665 sqq.)。ガレノスがヒポクラテスの説として挙げている『人間の本性について』の一節(この著作はアリストテレスの言葉から、ヒポクラテスの婿のポリュボスのものとされているが、ガレノスは、少なくともその著作の前半はヒポクラテス自身のものと考えており、この第

四節は前半に属する。――前記大橋訳『ヒッポクラテスの医学』p. 208を参照)は次の通り。――「人体はその中に血液、粘液、黄胆汁および黒胆汁を有し、これらが身体の本性であり、これらによって人間は痛みを感じ、健康にもなる。人がもっとも健康であるのは、これらの要素が適当に混合され、力も量も均衡がとれており、しかも完全に混合している場合であり、疼痛を感じるのは、これらの要素の一つが欠乏したり過剰であったり、体内で分離してほかの全体と混合しない場合である。さらに、ある要素が過剰なため、必要以上に身体の外に流出する場合には、この放出が痛みの原因となる。また、もし放出と転移とほかの要素からの分離が内部に向かうならば、さきに述べたように、患者には二重の苦痛が生じることになる。すなわち、その体液が欠如する部分と充満する部分とに」(以上は大橋訳)。ガレノスによると、プラトンはまさにヒポクラテスの以上の叙述に従おうとしながら、四元素(τέτταρα στοιχεῖα)説に引きずられたために誤りを犯して、本来なら四体液を身体構成の要素とすべきところを四元素にしてしまったというのである(詳細については、Taylor, *Comm.*, pp. 608 sqq. を参照)。

ガレノスは体液説の擁護者であり、ヒポクラテスに代表されるコス学派の四体液説と、エンペドクレスの系統の四元素説が対立していたことは、右に挙げた『人間の本性について』の著者が、火や水を人体の構成要素とする説を誤った空理空論として非難しているところにも見て取れるが(一)、その著作に見られるコスの四体液説というのはあらまし次の通り。――粘液はもっとも冷たく、体内で冬に増加するが、それは冷たくて雨の多い冬と粘液の性質が類似しているからである。血液は湿潤・温暖で、同種の性質を持つ春に増加する。乾燥して暑い夏には胆汁が身体を支配して秋に及び、乾燥していて冷える秋には黒胆汁が豊富になる(七)――。この著者は臨床例を挙げ、患者の吐瀉物などの所見によって、以上の説を裏づけながら、四季に応じての熱、冷、乾、湿の交代と、四体液各〻の増加・減少を対応させている(五―八)。

もっとも、四元素説の場合も、火は、体液説での熱・乾の黄胆汁に、土は冷・乾の黒胆汁に、水は冷・湿の粘液に対応しうるであろう(Galenus, *op. cit.*, pp. 679-680を参照。ただしこの場合、ガレノスは、空気は血液には対応し難いとしている)。

ところが、本篇でのプラトンの説は、四元素説に基づきながら、これとは別に体液を導入し、しかも血液と、胆汁・粘液とを別次元のものとし、後二者を病的分泌物としている点で特異なものと言える。プラトンの説がこうした形を取るにいたったのは彼の誤りによるのだとする、ガレノスの批判の一端は前に述べた。しかし、医学には素人であったはずのプラトンのこうした説の背景には、その原形となる説が別にあるとも推測される。テイラーはもともと、本篇にはプラトン自身の説ではなく、前五世紀のピュタゴラス派の説が見られるとする立場を取っているが、いまの箇所についても、クロトンのピロラオス(前四六〇年頃生)の生理・病理の説が、コスの体液説と大幅に違っていた点を指摘し(*Comm.*, p. 592)、

その文献がもっとよく知られれば、それと本篇のいまの説との一致点がもっと確認されるのではないかとしている(*ibid.*, p. 588)。ピロラオスのものとされている断片の真正性については種々疑義があるが、全体的にピュタゴラス派的色彩が強いと思われ、病理面では、病気は胆汁と血液と粘液によって起こると考えていたらしいことが伝えられている(Menon, *Iatrica*, XVIII. I 406(DK))。しかしテイラーはまた、プラトンと同世代のロクリスの医師ピリスティオン(「第二書簡」314Eを参照)を挙げ、彼を通じてプラトンがロクリスの医学説を知っていたであろうし、それはまたピロラオスの説に従うものであったろう、とつけ加えている(*Comm.*, p. 599 n.)。そして、Jonesもまた、同じピリスティオンの名を挙げ、それがまさに本篇でのプラトンの説の原形となったものだとしているが(*Hippocrates*, "Loeb". Vol. I p. xlix)、ピリスティオンの説は、身体を四元素から成るとするものだったらしく(Menon, *op. cit.*, XX)、Jonesはこれをエンペドクレスの影響下にあるものとして、ピロラオスの前記の説も、同じ系統に属する一つの形態だとして位置づけている。さらにコンフォードもまたピリスティオンに注目して、その病気の分類(1)身体を構成する四元素の過剰・不足によるもの。(2)外的な原因によるもの。(3)身体の条件によるもの、たとえば呼吸障害によるもの。——Wellmann, *Fragmente der Griechischen Ärzte* 110, Cornford, *Pl. Cosm.*, p. 333)が、プラトンのいまの分類と類似している点を指摘しているが、彼はまた主としてWellmannの示唆によって、エウボイアのカリュストスの医師ディオクレスの説とプラトンの説の類似性に注目している(*op. cit.*, pp. 334 sqq.)。ディオクレスは「第二のヒポクラテス」とも言われた人で、アテナイで活躍した。その年代は確定しないが、コンフォードはその盛期を前四世紀前半に位置づけ、プラトンとディオクレスの類似性は両者ともにピリスティオンの影響下にあったためであろうとし、本篇での「第二次的な組織体」の生成過程についての記述(82C sqq.)と、ディオクレスの胎児形成過程についての所見(Fr. 175, Wellmann)との共通性などを指摘している。しかし、本篇で、胆汁と粘液とは肉の腐敗による病的な産物だとされている点については、コンフォードはそこに、むしろ、ヒポクラテスの弟子、コスのデクシッポスとの若干の類似点を認め、これに対してヴェルマンは、プラトンのこの説はやはりピリスティオンとディオクレスに由来するものであろうと見ているらしいが、総じて、プラトンのいまの生理・病理説、とりわけ、身体組織の生成が逆行し、肉の腐敗物たる胆汁・粘液によって病気が生じるとする説に対して、その原形となる医学説を、文献の上で確認することは、いまのところ困難なように思われる。

(c) 気質について。——86E～87Aでは、粘液や胆汁が体内に閉じ込められて、その蒸気(ἀτμίς)が魂の運行に混じると、「気難かしさ」「意気銷沈」など、多種多様なものを生み出すと言われている。

ところで「多血質(sanguineus)」「胆汁質(cholericus)」「憂うつ質または黒胆汁質(メランコリー、melancholicus)」

「粘液質(phlegmaticus)」の分類は周知の通りであるが、これらはもちろん、各々「血液」「(黄)胆汁」「黒胆汁」「粘液」に対応するのであって、これは体液説を基盤とする説である。ところで、たとえば「黒胆汁」が他の体液と独立して捉えられている例は、前記「人間の本性について」の箇所にも見られると思われるが、その場合でも「黒胆汁」は患者の吐瀉物ないし排泄物の色と関係づけて考えられており、一般に古くは、「黒胆汁」は「胆汁が黒変した」病的なものと考えられていたようであって、「黒胆汁病(メランコリア)」は種々の精神障害を含む病気として考えられていたらしい(ヒポクラテス『箴言』III.14,20他を参照)。そして、これに伴う病的な精神状態を一つの「気質」として捉えたのは、体液説を完成したガレノス以後のことである。

他方、プラトンがコスの系統の「体液説」とは別系統の生理・病理説を取っている点は前に述べたのであって、「意気銷沈」なども、病的な分泌物たる粘液・胆汁が「魂の運行」に混じることによって生じる、不健全な精神状態としているわけであるが、ヒポクラテス全書中、コス学派のものと考えられる「神聖病」においても、「癲癇」は粘液が脳を犯す場合に生じるとされている(85B注4を参照)。下って、デカルトの「情念論」においても、情念は「動物精気(esprits animaux)」によるものとされており、デカルトの場合の動物精気は、気体化した血液のようなものであろうし、この考え方の伝統を遡ると、再びガレノスに帰着する。ガレノスのπνεῦμα(息、精気)は、肺を通じて空中から摂取されて血液に加わる生命物質であって、中でも「精神精気」は動脈血が脳に上ると加えられる精気であり、これは心的作用を生む(野田又夫訳『情念論』——中央公論社『世界の名著22 デカルト』所収。p. 419を参照)。他方またヴェルマンは「体液からの蒸気説」については、やはりこれも、ピリスティオンとディオクレスが考えていた説ではないかと推測し、また「物忘れの早いこと」が粘液によるものであることは一般に行き渡っていた説だとしているのであって、(Cornford, *Pl. Cosm.*, p. 345を参照)、われわれは、もっとよく調べれば四体液説とは別に、「蒸気による心理状態の変化もしくは情念」の説の長い歴史を跡づけることができるかも知れない。

M ソクラテス以前の自然哲学者の系譜

本篇の宇宙論に、ピュタゴラス派、エレア派、エンペドクレス、原子論者などの影響が見られることや、そうした人々の説が本篇の宇宙論にどのように組み込まれているかといった点については、「解説」(二五六―二五七、二七〇―二七三、二八〇―二八一ページ)に触れたが、ここでは、右に挙げた学派や思想家も含めて、一般に「ソクラテス以前の(自然)哲学者たち」と呼ばれている人々の系譜を、かいつまんで辿ることにし、主として、本篇の宇宙論で重要な役割を果たしている、「魂(プシューケー)」「あるもの」、「秩序」「火・水などのような素材」に焦点を置き、これらの問題が自然哲学の流れの中でどう扱われたかについて、試論的に若干触れておく。

学派や思想家の区分としては、(a)エレア派以前(これをさらにイオニアの人々とイタリアの人々に区分する)、(b)エレア派以後、に大別する。

(a) エレア派以前

(α) イオニアの人々

1 ミレトス学派

ミレトスのタレス(前五八五年に「盛期(アクメー)」、つまり四〇歳頃)やアナクシマンドロス(前五七一/七〇年に「盛期」)、アナクシメネス(前五四六/五年に「盛期」)を、哲学史の出発点に置くのは、アリストテレス以来の伝統であるが、こうした初期の哲学者たちは、アリストテレスの語法によると、「万物が最初にそこから生じ、最後にそこへと滅び去って行くところの当のもの……を、およそ存在するものの要素(ストイケイオン)であり、始原(アルケー)だと主張している」のであり、この「始原」をタレスは「水」だとした、というのである(アリストテレス『形而上学』第一巻983^{b}6 sqq.)(なお本篇48Bを参照されたい)。

しかしアナクシマンドロスはこの「始原」となるものを「限りもしくは限定(ペラス)のないもの(ト・アペイロン)」だと考えた。一般に自然哲学者たちは、火や水などいわゆるストイケイアを「無限のもの」と考えたとアリストテレスは伝えており(『自然学』第三巻203^{b}15 sqq.)、この場合の「無限」は量的・空間的なものであろうし、アナクシマンドロスの「ト・アペイロン」をも、このような意味での「無限者」と考えることも可能であろうが、また、アリストテレスは、火や水のように、「熱」とか「湿」とかいう特定の性質を持ったもののほかに、「ト・アペイロン」を想定し、火や水などがそこから生じるとした論者に言及しているので(『自然学』第三巻204^{b}24 sqq.)、アナクシマンドロスの「ト・アペイロン」は「無限定者」の意味も持っていたと考えることができるだろう。「無限定者」を火や水などの根底に想定した論者は、もしも火や水など特定の性質を持つもののうちのどれか一つが「無限」だとすると、それ以外のものは滅ぼされてしまうはずだと考えたのだとアリストテレスは伝えている(同)。しかし、次のアナクシメネスは「始原」として「空気」を想定した(『形而上学』第一巻984^{a}5)。空気が稀薄化すると火になり、逆に濃縮化すると空気が風に、さらに雲に、水に、土に、石にと変化するのだと考えたらしい(シンプリキオス『自然学注解』二四、二六参照)。(本篇49C〜D注1を参照)。

ところで、これらの人々は、自然の事物もしくは「始原」となるものを「魂を持てるもの」(もしくは生きるもの)だと考えた。たとえばタレスは、磁石にしても、鉄を動かすのだから、これは「魂(プシューケー)を持っているものだと考え、万物は神々に満ちているのだと考えたらしい(アリストテレス『霊魂論』第一巻405^{a}19 sqq., 411^{a}8参照)。(本篇80Cで琥珀や磁石の現象が、いわゆる機械論的に処理されているのと対比されたい。) アナクシマンドロスはまた「ト・アペイロン」を神的なもの・不死不滅のものとし(アリストテレス『自然学』第三巻203^{b}7 sqq.)、アナクシメネスも空気を神

であると考えた(アイティオス、一の七の一三、DK, 13A10)。

2　クセノパネス(前五七〇年頃—前四七五年頃)

コロポンの出身で青年時代に祖国を離れて主として南イタリア地方を漂泊した放浪詩人。ここでは特に、その鋭い、擬人的神観への批評に注意しておきたい。

「神はただ一つ……その姿においても、死すべき者に少しも似ていない」(Fr. 23(DK))、「(神は)全体として見、全体として思惟し、全体として聞く」(Fr. 24(DK))、——神は不動のものであり(Fr. 26(DK))、個々の感覚器官を用いて見聞きするものではないのである(本篇33B〜34Aの、〈可視的な神たる宇宙の身体〉についての叙述と対比されたい)。

3　ヘラクレイトス(前五〇四/五〇一年頃「盛期」)

「謎をかける男」とも呼ばれる、エペソスのこの哲人の思想を語るなどは差し控えたいが、少なくともプラトンが、ヘラクレイトス説として、すべては流動して止まることがないという説を取りあげてこれを批判しているのは、『クラテュロス』(402A〜C)や『テアイテトス』(152E, 160D, 179D)などに見られる通りである(『クラテュロス』解説、『テアイテトス』解説四四〇—四四六ページを参照)。そして『テアイテトス』(156A〜157C)では、万有が動(キネーシス)だとすると、そこでは何ものもあるのではなく、常になりゆくのであって、「何か」とか「何かの」とか、「これ」とかいった言葉はそこでは許容できないとあるが、本篇49D〜Eで、感覚対象である限りにおける火、空気などの、感覚にあらわれているがままの現象の叙述を、『テアイテトス』のその箇所と対比されたい。

(β)　イタリアの人々

1　ピュタゴラスと初期ピュタゴラス派

サモス島の生まれで、盛期の頃(前五三二/五三一年)まで生地で過し、その後南イタリアのクロトンに移ったピュタゴラスは、やがてその周辺にピュタゴラスの徒を集めて、政治面でも大きな勢力を持つに到った、ということが伝えられている(Diog. L. VIII. 3)。

ピュタゴラスのことを「嘘つきの元祖」だとか、ピュタゴラスの博学を軽蔑的に言っている言葉がヘラクレイトスの断片(81, 40)に見られるが、プラトンが、ピュタゴラスその人の名を挙げているのは、ただ一度に過ぎない(『国家』X. 600B)。種々の戒律を持っていたと伝えられる、一種の宗教団体のような初期ピュタゴラス派についても、その中心に位したピュタゴラスその人についても、ディオゲネス・ラエルティオスや、ポルピュリオスや、ヘロドトスに記載があるが、その個々にわたって信憑性を検討しながら挙げるなど不可能でもあり不必要でもあることは避け、ここではただ、伝説めいたものも含めて、一般に、ピュタゴラスとその徒について言い伝えられて来たものの若干を、一応カーク・レイヴン(『ソクラテス以前の哲学者たち』二二二ページ以下)に従って挙げておく。——彼らは魂の輪廻転生を信じ、この輪廻から離脱すべく魂の浄化(カタルシス)を願った。宇宙を「コスモス(秩序)」と呼んだのはピュタゴラスであったという言い伝えもあるが(本篇28B注2を参照)、宇宙に見られる秩序、とり

わけ天体の規則正しい運動を観察して、自らの魂を整え、こうして魂を浄化しようとした。天体それぞれの速さの比が、協和音を奏でる絃の長さの比に対応するのだとし、諸天体が全体として協和音を奏でるのだとする、「天体の音楽」の観念は、恐らく前五世紀に入ってからのピュタゴラス派の産物なのであろうが、数学への関心とともに音楽への関心は初期の頃からのピュタゴラス派に十分に見られたと思われるのであって、協和音を奏でる絃の長さの比が単純な数比をなすのを発見したのは、ピュタゴラスその人であったとも伝えられている。ピュタゴラスの死後、この学派は音楽に集中する派と、数学に専心する派に別れたと伝えられているが、音楽も数学も、互いに内的に関連しながら、魂の浄化の手段となったものなのである(本篇35B sqq. で天球や黄道上の惑星の運動としてあらわれる「宇宙の魂」が数比に従って構成されている点と対比されたい。なお47A〜E, 90C〜Dを参照)。ところでまた、音階と絃の長さの関係であるが、これは、無限定的な高—低の連続をなす系列に、一定の比率に従った「限定」を加える時に音階が成立すると考えられ(この考えは『ピレボス』23C〜26Dによくあらわれている)、じっさい、「限(定)—無限(定)」で世界を考えるというのが、ピュタゴラス派の思想の、基本的なものとなって行く。

2　アルクマイオン

多分前五世紀初頭がその「盛期」であったと思われるアルクマイオンは、クロトンの生まれであって、「ピュタゴラスの話を聞いた」(Diog. L. VIII. 83)と伝えられているが、ピュタゴラス派であったというわけではなく、彼の主要な関心はむしろ医学、生理学面にあったと言える。彼は「湿—乾、冷—熱、苦—甘などの均衡が、健康を保持するものと考えたらしいが(コス学派その他の医学説全般については補注Lの(b)を参照)、彼が魂の運動を、天体の連続運動(円環運動)になぞらえたことや、この考えの、本篇におけるプラトンへの影響については、34A注1を参照されたい。

3　エレア派以前の前五世紀のピュタゴラス派

アリストテレスが個人名や時代区分にはほとんど触れずにピュタゴラスの徒と呼ばれている人々(οἱ καλούμενοι Πυθαγόρειοι)」と呼んでいるのは、初期のピュタゴラス派ではなく、前五世紀以降のピュタゴラス派であろう。前五世紀にはピュタゴラス派もエレア派の批判にあって変貌するなどし、多々発展したのであろうが、しかし、単に「ピュタゴラス派」として概括しているアリストテレスの記述からは、この学派の時代的変遷その他の詳細は知りえない。ただわれわれはここでも、一応カーク・レイヴンに従って、エレア派以前と以後のピュタゴラス派を区別し、明らかにエレア派以後のピュタゴラス派に属するピロラオスを後で述べることにし、ここでは、アリストテレスが伝えているピュタゴラス派の説で、エレア派の批判にあう前のものと思われる要素や、その批判とは無関係と思われるものを若干挙げておく(アリストテレス『形而上学』第一巻985b23 sqq.、第十三巻1080b16 sqq. 他を参照)。——

彼らは「数」をすべての万物の出発点もしくは始原(アル

ケー)となるものだと考えた。音階は数で表現され、天全体は調和と数であり(β)の1を参照)、数「一〇」を完全数と考えたために、「反地球」を想定して、天体の数を一〇箇とした。

彼らは数の要素(ストイケイオン)を、偶と奇と考え、前者を「無限(定)者(アペイロン)」、後者を「限定されたもの」とした。そして彼らは、「限—無限」「奇—偶」「一—多」など一〇の対立を連ねた対立表をつくった。

ところで彼らは数というものを、たとえば、3は三つの点で表現するような工合に、点で表現したが、それは抽象的な点ではなく、空間的な大きさを持つもので、そうした大きさを持つ単位の集積が、現実の事物を構成するのだと考えた。そして、数の単位と一致させられる、大きさを持った単位と単位の間は空虚で区切られるのだと、彼らは考えた(アリストテレス『自然学』第四巻 $213^{b}22$ sqq. を参照)。

4　エレア派

パルメニデス(前五一五/五一〇年頃生)とゼノン(前四九〇/四八五年頃生)が、アテナイを訪問して若きソクラテスに会った時の模様は『パルメニデス』127B sqq. に記されているが、パルメニデスの断片のうち第一部の「真理の道」(Fr. 1-7)については、「解説」(二七一ページ)に、その要点を記した。あらぬものは知ることも語ることもできない以上、あらぬを受け入れることは許されるべきではなく(Fr. 2)、従ってまた、あるとあらぬを混同することも許されるべきではないとする(Fr. 6, 7)パルメニデスの断言は、自然哲学の流れに一大転機を画する、大きな波紋を投じた。生成、消滅が、無→有、有→無の変化を意味する以上、「生成」「消滅」を考えるのは許されず、また「あらぬもの」(空虚)」を考えることが許されない以上「あるものは分つことができず……全体が連続的である」(Fr. 8)。さらにまた、こうした連続体・充実体においては、その内部においての何らかの部分の場所的運動も考えられない(同)。

こうしたパルメニデスの「あるもの」についての言明をプラトンが『国家』や本篇で踏襲し、「あるもの」を理性の対象だとしたことは、「解説」(二七〇—二七三ページ)で述べたが、プラトンが本篇の宇宙論で、「あるもの」とは言えない、「生成するもの」たる感覚的な宇宙を述べるに当たって、こうした対象についての言論は「ありそうな言論」(29C〜D)だと断わっているのに対し、パルメニデスもまた、その詩の第二部で、天体や人体を述べるに当たってこうした世界の、「ありそうな構造を語ろう」(Fr. 8, l. 60)と言っている点に注意しておきたい。

ところで、「あるもの」を不動の連続体とするパルメニデスの主張は、この世界を、空虚によって区切られた単位の集積と見るピュタゴラス派に対しても、痛烈な批判となった。

ゼノンは、パルメニデスの説を擁護し、これに反する説を、逆理を用いて論駁するという形の議論を展開した。その逆理は、たとえば、運動体は無限の点を通過しなければならないが、それには無限の時間を要する、として「運動」の否定の形を取っているが、それはまた、線の無限分割の可能を認め

ながら、分割点に大きさを認め、一定の大きさを持つ点の集積として線を考えたピュタゴラス派への反論となっているのである。

なお、エレア派の思想を受けついだ、サモスのメリッソス(前四四一／四四〇年頃「盛期」)については、ここでは名前だけを挙げるに止めておく。

(b) エレア派以後

1 エンペドクレス

シケリアのアクラガスの生まれ「(前四四四／四四一年頃「盛期」)。その医学説については補注Lの(b)で若干触れた。エレア派の批判の後に位する彼の説は、火、水、土、空気を万物の四つの根(ῥιζώματα)(Fr. 6, Fr. 17をも参照)とするものである。彼はパルメニデス同様、生成・消滅を否定し(Fr. 12)、空虚も否定するが(Fr. 13, 14)、それぞれ不生不滅の四つの根を想定することによって、それらの結合と分離で、事物の生成・消滅を説明する(Fr. 17)。

ところでここで注意しておきたいのは次の三点である。まず第一に、四根を結合する「愛」と、四根を分離させる「争い」とが、四根とは別に導入されていることである(Fr. 17-22)。この両者は純然たる力とは言えない(「長さも幅も等しい愛」の語がFr. 17に見えている)。しかしとにかく、結合ないし分離させる要因と、そうさせられる四根とが区別されたのである(こうした外的な作用者を全く排除すれば原子論者の世界が現出するであろうが(3を参照)、他方本篇で、他動的にしか動かない物体的な火・空気・水・土と対立させられている。自発的・能動的な運動をなす魂(プシューケー)が、不可視のものとして、可視的な延長体から截然と区別されている点については、36E～37A, 46D～Eを参照)。

第二には、エンペドクレスの球形の世界では、「愛」と「争い」が交互に真ん中に来たり、端に退いたりし、それに応じて、四根が互いに混合したり、種類別に分離したりして、この過程を反復する(Fr. 26, 35)(ところで、似たものが似たものと集まるということは、「争い」なる外的な作用者を導入しない原子論者も、物体的な原子の見せる傾向として認めており((b)の3を参照)、本篇でも、宇宙生成以前の素材だけの世界では、火・水・土・空気はそれぞれが種類別に集まっている、とされている(52E～53B)。プラトンが本篇で腐心しているのはむしろ、異質的なもの同士の結合の問題であり、種類別に分離して動きを停止することのない世界像を描くことなのである(31B～32C, 53E, 57D～58Cを参照)。

第三に、エンペドクレスの人体や一般に生物体形成の説明は、部分部分の偶然的な結合を原理としている(Fr. 57-61を参照。なお、本篇44D注1、74A注2を参照)。(しかし、人体が知的製作者によって、最初から合目的的に製作されたということこそ、まさに本篇の宇宙論の主要な論点である。)

2 アナクサゴラス

小アジアのクラゾメナイの出身である彼は、前五〇〇年頃の生まれ。二〇歳頃アテナイに来て活動。太陽は灼熱した石だと主張したために、不敬罪に問われ、ペリクレスが弁護の演説をし、罰金を払って追放された。のち、ランプサコスで

死んだ(前四二八／七年)。——これが、ディオゲネス・ラエルティオスの伝える、アナクサゴラスの生涯の輪郭である(Diog. L. II. 7. なお、『ソクラテスの弁明』26D～Eを参照)。

ゼノンの逆理が、数学的な点を大きさのある単位のように考えたピュタゴラス派への反論となっていることは(a)(β)の4で述べたが、アナクサゴラスは「最小の単位」なるものは存在せず、どこまで行っても「もっと小さいもの」があるのだとした(Fr. 5)。そして、エンペドクレスが事物の構成要素として、最終的に四根を想定したのに対し、アナクサゴラスの場合は、たとえば髪はどこまでも髪から成り、肉はどこまでも肉から成るのであるが(Fr. 10)、しかしまた、どんなものの中にも、あらゆる種類のものが共在しているのであって(Fr. 4)、事物の生成は、——たとえば四根の結合によるのでなく——、すでにいわば種子(同)の中に共在していたあらゆる要素が分化し展開する、という形で生成すると考える。また、この宇宙は、濃密で湿って冷たいものと稀薄で熱くて乾いたものが分離するなどして、形成されるのであるが(Fr. 12, 15, 16)、この分離は、回転もしくは渦動運動から起こる(Fr. 12)。そして、このような運動を最初に起こさせるのは「知性もしくは理性(ヌゥス)」であり、「ヌゥス」は他のものと混ることなく、すべてを支配し、すべてを知っている(Fr. 12)。

万物を秩序づけ、万物の原因となるものをヌゥスだとしたアナクサゴラスに、ソクラテスが期待を抱き、しかしその本を読み進むうちにすっかり失望したということが『パイドン』(97B～98C)に記されている。「ヌゥス」つまり知性が万物を秩序づける原因である以上、それがこの宇宙を最善であるようにと、それを目指して、現にあるような配置に宇宙を秩序づけたのだという説明がなされなければならないはずだのに、アナクサゴラスはその説明を少しもしていない、というのである。そしてまさに、善を目指して宇宙を配置づけた、善なる知的原因者を真の原因とする宇宙論が、プラトンによって本篇で実現されたのである。

3　原子論者

原子論者と言えば、レウキッポスとデモクリトスが並んで挙げられる。アブデラのデモクリトスには残存している断片も多く、その年代もかなりはっきりしているが(前四六〇／四五七年生)、ミレトスのレウキッポスの場合は、断片もほとんど残存しておらず、年代も、デモクリトスよりいくらか年長であったらしいが、ほとんどなにもわかっていない。それでも、レウキッポスはゼノンの弟子だったと言われており、原子論は明らかに、エレア派の批判に応えるものとして成立したと言える。

原子論は、ごく簡単に言えば、「あるもの」は不生不滅だとするパルメニデスの言を受け入れ、しかし運動を可能にするために、意識的に「あらぬもの」たる「空虚」を導入したものである。そして空虚の中に、「あるもの」たる「不可分体(アトマ、原子)」が無数に散在しているとし、その結合・分離によって、事物の変化を説明しようと試みた(アリストテレス『生成消滅論』第一巻325a2 sqq. を参照)。デモクリト

スの感覚・知識論なども興味深いが、ここではただ、次の二点にのみ注意しておきたい。

まず第一に、パルメニデスの「あるもの」が不可分の連続体で、どんな質的な多様さも見せないものであるのに対応して原子論者の原子も、ただ大きさと形においてのみ、それぞれが区別されるのであるが(アイティオス、一の三の一八、DK, 68A47)、その大きさも形も無限であって、その理由は、テオプラストスの伝えるところによると、どの原子の形にしても「あの形よりもむしろこの形でなくてはならない理由は何もないからだ」というのである(シンプリキオス『自然学注解』二八、二九を参照)。原子の集団が形成する「宇宙」にしても同様、太陽や月のない宇宙など無数に存在する(ヒッポリュトス一の一三の二、*Refutatio*, DK, 68A40)。(デモクリトスの弟子メトロドロスは、広大な野に一本の穀物しか生えないのが奇妙であると同様、無限の空虚の中に一つの宇宙しかないとするのも奇妙なことだと言ったという。)以上を、本篇で宇宙が一つであるとされている論拠(31A〜B、その箇所の注1、2を参照)と対比されたい。

第二に、原子論においては、原子は「必然」的に動くのであり、何ものもでたらめには生起しない(Diog. L. IX. 45. およびレウキッポス Fr. 2を参照)。そしてこの「必然」というのは、物体の抵抗と運動と衝突を意味したと考えられる(アイティオス、一の二六の二、DK, 68A66)。そして、無生物である物体的なものも、似たものが似たものと集まる傾向のあることは、篩でゆすぶられる穀粒や、海岸の小石に見られる通りだという言葉がデモクリトス(Fr. 164)に見られ、物体的な原子の示すこの傾向が、原子論の宇宙生成の原理として重要な役割を果している。また、似たもの同士が集まるということは、裏返しに言えば、似ていないもの・不均等なものが共在して置かれると、そこに動揺が生じることを意味するが、デモクリトスが、原子は相互の不均等の故に空虚の中で運動するとしていた旨を、アリストテレスは伝えている(「デモクリトスについて」。シンプリキオス『天体論注解』295.9に収録)。(物体的な事物の世界では似たもの同士が集まること、不均等の中に動きが生じることは、本篇でも受け入れられている(53A〜B、57D〜58A)。しかしこれだけでは秩序ある宇宙全体や人体の形成は説明できないとするのが、プラトンの立場であろう。)

4　ピロラオス

クロトンの生まれ。前五世紀中葉の生まれと思われる。プラトンがピロラオスの著作を剽窃して、それが『ティマイオス』として公刊された——と、ディオゲネス・ラエルティオスは伝えている(Diog. L. VIII. 84)。これはもちろん、プラトンに対する悪意にみちたうわさ話をディオゲネス・ラエルティオスが伝えたのであろうが、ティマイオスなる人物を前五世紀のピュタゴラス派と見なし、本篇の宇宙論に、プラトン自身の説でなく、前五世紀のピュタゴラス派の説が見られるのだとするテイラーは、本篇の説とピロラオスの説の親近性に、しきりに注目しようとしている(「解説」二五六—二五七ページを参照)。ピロラオスの断片として保存されているも

のには、数を成立させる要素として偶と奇があるとするもの(Fr. 5)などがあるが、全体としてその断片の信憑性も疑わしいので、これ以上述べるのは差し控える。

N 『国家』と本篇の関係

本篇はまず、ソクラステが、ティマイオス、ヘルモクラテス、クリティアスの三人に向かって、自分が前日彼らに語ったという、国家についての話を、改めて要約して繰り返すという場面(17A～19B)から始まっており、その国家についての話の要約の内容は、『国家』の第二巻から第五巻のあたりで述べられていることとほぼ一致している。他方、『国家』は、ソクラテスが、トラキアの女神ベンディスの祭りの日に、ペイライエウスでケパロスやグラウコン、トラシュマコスらと対話した模様を、「昨日」のこととして、ソクラテスがモノローグの形で語るという形式で叙述されている。そこで、本篇を書き始めた時のプラトンが、『国家』はたしかにソクラテスのモノローグの形で叙述されてはいたが、実はそれは、ティマイオス、ヘルモクラテス、クリティアスおよび他の一人(17A参照)を相手に語っていたのだという情況を改めて設定し直すことによって、本篇を『国家』の続篇として接続させようとしたのだと解釈することも可能なように思われる。

しかし、本篇と『国家』の関係を以上のように位置づけようとする場合には、かなりの抵抗があることも否めない。

まず第一に、両対話篇の対話があったとして設定されている時日の問題がある。というのは、ベンディス祭はタルゲリオン(大体いまの五月)に行なわれたらしいのに、本篇の対話はアテナ神の祭礼、つまりパンアテナイアに行なわれたとされており(21A)、このパンアテナイアはヘカトンバイオン(大体いまの七月)に行なわれたらしいからである。すなわち、本篇を『国家』の直接の続篇として考える場合には、五月頃のベンディス祭の対話の模様を「昨日」の話だとして、ソクラテスがティマイオスらに語った『国家』の話を、本篇では七月頃のパンアテナイアで、これまた「昨日のわたしの話」だとして語っていることになるのである。

もっとも、パンアテナイアと言っても、大パンアテナイアと、小パンアテナイアがあったことは知られており、したがって、本篇の対話があった日とされている「アテナ神の祭礼」は、実は小パンアテナイアであって、これはベンディス祭のすぐ後に行なわれたのだろうとして、両対話篇の時日の設定を、首尾一貫したものとして見ようとする解釈も提出された(たとえばプロクロス *Comm.*, 26E～27A, Diehl, I. S. 84–85)。しかしこのような解釈は、予め本篇と『国家』とが、矛盾のない連作だということを大前提にした上で、そこから逆に、小パンアテナイアの時日を推測したものと考えられるのであって、たしかにパンアテナイアには、大と小の二つがあって、小のほうは毎年、大のほうは四年に一度行なわれたらしいが、どちらもヘカトンバイオンに行なわれたというのが、今日の定説のようである。したがって、『国家』と本篇とでは、それぞれの対話があったとして設定されている時日に齟齬があるのは否めない。

第二に、本篇で「昨日のわたしの話」としてソクラテスが要約しているのは、『国家』の第二巻から第五巻のあたりに対応するわけであるが、『国家』ではそのほかに、魂三分説だとか、真に知を愛する者(=哲学者)が、政治の最高の位置に就くべきだとか、そうした、政治の枢要の位置を占めるべき人はどのような教育を受けなければならないかといった議論が展開されている。そして、とりわけ、真に知を愛する者は、その知の対象として何を目指すべきかの問題をめぐって、真にあると言えるものは何であり、それと「善」とがどう関係するかについての議論が展開されていたのであって、ある意味では、そうした話題こそが『国家』の中心部をなすと言えるのである。

ところが本篇では、ソクラテスは、『国家』のⅡからⅤのあたりに述べられていた、国家制度のあり方についての話題だけに言及した後、これで昨日の話をすっかり話してしまったのではないかと、ティマイオスに尋ね、ティマイオスはまた、それをはっきりと肯定しているのである(19A～B)。

従って、本篇を『国家』の続篇として見ようとする解釈者でも、この点に注目し、プラトンが本篇を書いた時に、これを『国家』の続篇としながらも、『国家』のある部分については、意識的にこれを無視したのだと考えないわけには行かなかった。たとえばアーチャー・ハインドは、本篇のソクラテスの「昨日のわたしの話」の要約の中では、『国家』で扱われていた「存在論」が省かれている点に注目し、その「存在論」が本篇の宇宙論に置き換えられたのだとして、『国家』と本篇とでは、真にあるものは何かという問題や、自然世界なるものについてのプラトンの考えが相違しているのだとし、そして、プラトンのこのような考え方の変化にもかかわらず、『国家』の政治理念が本篇でもなお踏襲されているという点に、むしろ意味を見ている(*The Timaeus of Plato*, pp. 56–57)。

しかしまた、たとえばテイラーは、これも本篇を、『国家』の続篇として書かれたものとしながら、今度は、本篇のソクラテスが、「昨日の話」の要約で、『国家』のいわゆる「哲人王」の話題を故意に無視しているという点に注目し『国家』から本篇までの間に、プラトンの政治観が変化したのであろうという見解を取っている(*A Commentary on Plato's Timaeus*, pp. 33–34)。

こうして、本篇を『国家』の続篇として見ようとした人々でも、この両対話篇が完全に首尾一貫した連作の形を取ったものと考えるには、抵抗を感じないわけには行かなかったのであるが、こうした内容上の齟齬のほかに、先の、対話の時日設定の問題を考え合わせ、本篇は『国家』の続篇として書かれたわけではないと主張する解釈者(Rivaud, *Platon, Œuvres Complètes*, X. pp. 20–21, Cornford, *Plato's Cosmology*, pp. 4–5)もある。

われわれとしても、以上のような諸点から、本篇は『国家』の、少なくとも完全に首尾一貫した続篇として書かれたとは考えられないと思うのであるが、しかし、『国家』の、少なくとも政治制度の理念が原則的にここでも踏襲されているという点は認めなければならないと考えるものである。しかし

また、アーチャー・ハインドのように、中期の『国家』の、「善」を頂点とするイデア論に対してプラトン自身が消極的になった(*The Timaeus of Plato*, p. 48)とするのはどうかと思う。むしろ、本来あるべき国家の「天上のモデル」(『国家』IX. 592B)を『国家』で構想したプラトンは、地上で実現さるべき理想的な国家の問題と取り組もうとした時、その前段階として、自然世界を主題とする宇宙論を本篇で展開しようとするにさいして、たとえば『国家』で、「真にあるもの」とされたイデアについても、これと感覚的な自然世界とを関連づけるという基礎的な作業を、本篇で改めて最初から試みなければならなかったのだと考えたい。従って、本篇を書き始めた時のプラトンは、読者に『国家』を思い起こさせようとして、作中のソクラテスをして「昨日の話」として、『国家』の一部分の要約を語らせたのであろうが、「真にあるもの」の問題や、魂三分説の問題は、本篇で改めて別の角度から論じられる以上、あえてこれに言及しなかったのだと解したい。しかしこのことは、プラトンが本篇で、「善」を頂点とするイデア論を放棄したことを意味するものではないであろう。むしろ、「善」のイデアを頂点とするイデア界をモデルとするものとして自然世界の構造を出来るだけ把握するのが、本篇でのプラトンの課題であったと考えたい(この点については解説二七五ページ、および二七八ページを参照)。なおまた本篇の執筆年代については、解説(二六九ページ)を参照。

クリティアス

——アトランティスの物語——

田之頭　安彦訳

登場人物

ティマイオス
クリティアス
ソクラテス
ヘルモクラテス

106 **ティマイオス**　やれやれ、ほっとしたよ、ソクラテス、長い長い旅路を終えて一息ついている旅人のように、いまやっと〈言論の旅路〉から解放されたのだもの(1)。

一

ではここで、実際にはずっとむかしからおわしますのだが、われわれの話のなかではたったいまお生まれになったばかりの神さまに(2)、祈るとしよう。「神よ、わたしどもの話のなかで、筋道のとおった部分につきましては、どうかその平穏無事をいつまでも保証してくださいますよう。だが、心ならずも、わたしどもがなにか筋道にはずれたことを話しておりましたら、それにふさわしい罰をおあたえください」とね。ところで、正しい罰というのは、間違っている者をきちんとした筋道にもどすことなのです。だから、これからも神々のご誕生にまつわる物語を正しく話していけますように、「神よ、薬のなかでも最善・最良の妙薬〈知性〉をわれらにあたえたまえ」と祈るとしよう。そして祈りがすんだら、さきの申し合わせどおり(3)、つぎの話はクリティアスにゆだねるとしよう。

C **クリティアス**　むろん、ティマイオス、話は引き受けた。けれどもきみは話の初めに、これから大きな問題について話をするのだから、こころを大きくもって聞いてほしいと、みなさんにお願いしたね。ぼくも、いまここで、きみと同じことをお願いしよう。いや、これから話されることについては、きみのときより、もっともっと大きなこころで聞いてくださるよう、お願いしよう。もっとも、こうは言っても、ぼくにはよくわかっているん

だよ。ぼくがこれからお願いしようとしていることが、まったく厚かましい、失礼きわまることなんだということはね。けれどもやはり言わねばならないんだ。
だって、きみの話が立派なものだということは、思慮分別のある者なら、誰が否定しようとするだろう？　だが、それに対して、ぼくがこれから話そうとしていることは、きみのばあいに比べて、あまりにもむずかしすぎるんだよ。だから、それだけ大きな気持でお聞きいただかねばならないことになるわけだが、いまからなんとかしてこの点を、みなさんにわかってもらえるよう努力しなければならないんだ。つまり、ティマイオス、神々のことを話題に取りあげて、人びとを相手にあれこれしゃべりまくるほうが、死すべきものどものことを取りあげて、われわれを相手にしゃべるより、「もっともな話だ」と思われやすいんだなあ。話の内容について聞き手がまったく無知、無経験の状態にあるというのは、それについてなにか話をしようとする者にとってはまったく好都合なことだし、それにまた、神々に関する自分たちの知識がどの程度のものか、われわれにはよくわかってもいることだしねえ。
B
ところで、つぎの点に注意しながら、ぼくにしっかりとついてきてくれたまえ。そうすれば、ぼくの言おうと

1　これは、話の一番手をひきうけたティマイオスが、無事に宇宙創造の物語を語り終えた喜びと安堵の気持をあらわしたことばである。〈言論の旅路〉というのは、その物語を指す。この対話篇が『ティマイオス』の続篇であることが、ここにはっきりと表現されている。

2　この対話篇の姉妹篇である『ティマイオス』(27C, 34B, 92Cなど)のなかで、ティマイオスが説明した〈宇宙〉という神のこと。なお、これからはじまるティマイオス、クリティアス、ソクラテス、ヘルモクラテスの対話は、『ティマイオス』から『クリティアス』へと、話が移る過程をあらわしている。

3　『ティマイオス』27A～Bを参照せよ。

していることが、もっとはっきりするだろう。われわれの話というものは、じつのところ、どれもみな、何かの模倣（ミメシス）であり描写（アペイカシア）でなければならない。(1) そこでひとつ、同じ模倣の術である絵画に例をとって、考えてみよう。画家たちの描いた神画や人物画があるとして、これが観覧者たちに、立派に模倣されて C いるとすぐにわかるか、それとも、なかなかわからないかという点に注目しながら、その絵を眺めてみることにしようではないか。そうすると、大地、山川草木、それに全天界とそこにあって巡行している諸天体などのばあい〔神画のばあい〕には、まず、つぎのことに気づくだろう。つまり、そのどれかをほんの少しでも似ているように模倣できていると、それでもう、われわれは満足してしまうものだということにね。のみならず、そのようなものについて確かな知識などなんらもちあわせていないとなると、そこに描かれているものをくわしく確かめた D り吟味したりすることなく、ただばくぜんとしたまやかしの仮象をあてはめてみて、ことたれりとするものだということにもね。ところが、誰かが人体描写を手がけるとなると、話は違ってくる。いつも自分の身近にあって、じゅうぶんな知識をもちあわせているものだから、たちまち欠点が目につき、すみずみまで完全に似せて描きだしていない者に対しては、気むずかしい批評家の態度で臨むということになる。

たしかに、物語のばあいも、これと同じことが起こると考えねばなるまい。天界や神々に縁（ゆかり）のあることだと、ほんの少しでもそれらに似せた話を聞かされれば、それでもう、われわれは満足してしまう。だが、死すべきものども、人間たちのこととなると話は別で、くわしく吟味しようとするわけだ。だから、いまここで、なんの下 E 準備もなしに話されることが、たとえ適切な表現を欠き、じゅうぶんに描与されていなくても、こころを大きくもって、お許しいただかねばならないのだ。死すべきものどもの似像（にすがた）を人びとの思いなしどおりに描きだすのは、

容易な業(わざ)ではなく、なかなかむずかしいことなのだと、そのようにお考えいただいてだね。

ぼくがこういう話をしたのは、ソクラテス、ほかでもない、それはみな、諸君に以上の事実に注意してもらって、これから話されることについてはかくべつに大きなこころでせっしてもらいたいという願いを聞き入れていただきたく思えばこそなのだ。だから、ぼくの願いがもっともと思われたなら、こころよく承知してくれたまえ。(2)

二

ソクラテス もちろんですとも、クリティアス、なんでためらいましょう? 大きな気持でお話をうかがうということについてはね。それにまた、わたしどもは第三の語り手ヘルモクラテスにも、同じように寛大な気持でせっしなければなりますまい。(3) 遠からずかれに話の番がまわってきたときには、かれもまたあなた方と同じ申し

B

出をするにちがいありませんからね。そこで、かれが別の前口上で話をはじめ、あなた方と同じことを言う羽目

1 『国家』X. 597 A sqq. を参照されたい。

2 ティマイオスの話は宇宙の創造とか天界の事象に関するもので、われわれはそれらのことについて確かな知識をもっていないから、話すほうも、それだけ楽な気持で話せる。だが、わたし(クリティアス)がこれから話すことは現実的な問題で、それだけ諸君の批判もきびしいものとなろうが、わたしの取り上げている問題のほうがティマイオスのそれよりも話しづらいのだから、どうかその点を考えて、少しぐらいまずいところがあってもご容赦願いたい、というほどの意味。

3 ここの会話から察して、『ティマイオス』と『クリティアス』のつぎには、『ヘルモクラテス』とでも称すべき作品が予定されていたのだろうと推定される。

にならないよう、かれの番がきたときには、自分にもすでに寛大な気持でせっしてくれることになっているのだと考え、そういうつもりになって話せるようにしておきましょう。しかしクリティアス、あなたにはまえもって聞き手の考えをお伝えしておきます。あなたのまえに話をされた詩人はそれでかくべつの賞讃を博したわけですから、もしそれに匹敵するほどの賞讃を得ようとなさっておられるのでしたら、あなたは、それはそれはとてつもなく大きなこころなるものを、わたしどもに要求することになるでしょう、とね。

C　**ヘルモクラテス**　おや、ソクラテス、あなたのご忠告は、この人にばかりか、きっとわたしにも向けられているのですね。でも、クリティアス、いままでに臆病な男が勝利の記念碑を建てたためしなど一度だってないのです。だから勇気を出して話をすすめなさい。パイオン(1)やムゥサ(2)のご加護のもと、むかしの町の人びとのすぐれた姿を明らかにして、讃えてください。

クリティアス　親愛なるヘルモクラテス、きみは、自分の番があとのほうだし、前には他の語り手が控えているものだから、まだまだ強がりを言っておられるのだ。これがどんなにたいへんなことか、まもなくきみにもわかるときがくるだろうよ。だがとにかく、きみはぼくを励まし力づけてくれているのだから、きみのそのことば
D　は信じるけれどもね。それに、ぼくとしては、きみのあげた神々に加えて、他の神々、とりわけムネモシュネ(3)のご加護も求める必要がある。ぼくたちの話のいちばん大切なところはすべてこの女神の御手にゆだねられていると言っても、けっして言いすぎではないのでね。だって、ぼくにはだいたいわかっているんだよ、そのむかし[エジプトの]神官たちによって語られ、ソロンの手をへてこの地に伝えられた物語をよくおもいいだして、これをお伝えするなら、それでもう、話を聞いてくださるみなさん方に自分のつとめを立派にはたしたと思われるだろ

う、ということぐらいはね。さて、こうなった以上は、自分のつとめを忠実にやりとげるほかはあるまい。もう、ぐずぐず引き延ばしているわけにはいくまいて。

三

E では、なによりもまず、〈ヘラクレスの柱〉(4)の彼方(かなた)に住む人びとと、こちらに住むすべての人びとのあいだに戦(いくさ)がおきたと語り伝えられてから、まる九千年もの歳月がたっているということをお忘れなく。(5)この戦の様子を、これからくわしくお話ししなければなるまい。

109 さて、話によると、この国〔アテナイ〕は一方の側の軍勢の指揮をとり、しまいまで、この戦争を立派に戦いぬいたのだった。これに対して、相手方の軍勢はアトランティス島の王たちの配下にあったという。このアトランティスは、すでにお話ししたように、(6)いまは地震のために海に没し、泥土と化して、これがこの国から彼方の海へ(7)と船出する人びとの航路をさまたげ、それいじょうの前進をはばむ障害となっているけれども、かつてはリビュア(8)やアシア(9)よりも大きな島だった。

---

1 勝利の神、たとえばアポロンのこと。
2 あるいはムゥサイ(ムゥサの複数)。詩歌文芸を司る、いわゆる「ミューズ」の女神たち。
3 記憶を司る女神。
4 ジブラルタル海峡のこと。
5 『ティマイオス』23E参照。
6 『ティマイオス』25D参照。
7 ビュアリの読み方にしたがう。
8 アフリカのこと。
9 アジアのこと。

なお、数多(あまた)の異民族や当時のギリシア族(1)のことについては、話の筋道がいわば巻物でもひろげるように展開していくにつれて、ひとつひとつ、そのつどおこったことを明らかにしていくとして、まず第一の話題として初めに取りあげ、くわしく述べておかねばならないのは、当時のアテナイの人びとのこととこれに敵対して戦った者たちのこと、つまり双方の国力や国の仕組についてである。このうちでも、まずアテナイのことを優先的に述べなければなるまい。

B

そのむかし、神々は全大地を地域別に分配しあった。べつに争い奪いあったわけではない(2)。神々がそれぞれ自分にふさわしい土地をご存じなかったとか、むしろ他の神々にこそふさわしい土地を、そうと知りながら自分の利益のために争って手に入れようとなさったなどと考えるのは、ともに理屈に合わぬことだからである。こうして、土地の配分が正しくおこなわれて、自分の気に入った土地を手にお入れになると、神々はそれぞれの国土を建設された。それをすまされると、こんどは牧童たちが群れなす羊を育てるように、われわれ人間を神々自身の所有物、飼育物として育てたもうた。だが、このばあい、牧童たちが羊の群れを鞭打って牧草地へ駆(か)りたてるように、腕ずくで人間どもの身体を拘束しながら育てられたわけではない。人間がもっとも馭(ぎょ)しやすい生き物となるような仕方で、つまり船乗りが艫(とも)のほうから舵(かじ)をとりながら船を導いていくように、神々ご自身のお考えにもとづき説得という舵をおとりになるという仕方で、人間の魂をしっかりとおつかみになり、そのようにして、死すべきものども〔人間〕のすべてを導いていかれたのである。

C

さて、それぞれの神はそれぞれの土地を自分の配分としてお受けになると、そこに山川草木などの飾りつけをなさっていったが、ヘパイストスとアテナ(3)は同じ父神からお生まれになったご兄妹(きょうだい)で、同じように知恵を愛し技

術を愛されるなど、たがいに通じあう性格の持主でもありましたから、二柱の神でこの地方を自分たちに割りあてられた一つの土地として受け取られたのであった。この地方はもともと徳や知恵をはぐくむにふさわしい場所だったからである。それからこの二柱の神は、ここにすぐれた善き人びとを土着の民として入植させたまい、彼らの胸深く〈国制のあり方〉を教えこまれたもうた。この人びとの名前は現在に伝えられているが、業績のほうは、後継者が絶えてしまったり長い歳月がたってしまったりしているために、さだかに知ることはできない。まえにも言われたように[4]、〔この地方が大洪水などに襲われて、たくさんの人びとが死ぬようなことがあっても〕かれらの血筋だけはいつもあとに残ったのだが、残った者はいつも山岳に住む無学の者たちばかりで、かつてのこの国の統治者たちの名前だけはどうにか聞き知ってはいたものの、そのうえさらに業績までも知っているということは、まずなかったからである。だからかれらは先祖の名前を子孫に伝えることだけで満足し、その徳性や習わしについては、いくらかのことをばくぜんと聞き知っているくらいで、くわしくは知らなかったわけだが、そのうえかれらもその子どもたちも、何代にもわたって生活に必要なものをこと欠くありさまだったので、その話題や関心はすべて生活に必要なものにしか向けられず、古いむかしにおこったことがらなどには注意しようともしないありさまだった。〈むかし話〉とか〈古事の探究〉などというものは、人びとのあいだに生活に必要なものが

D

E

110

1　直訳すれば、「ギリシア民族のうち、その頃存在していたもの」の意。

2　『メネクセノス』では、アッティカの所有をめぐって、神々(ポセイドンとアテナ)のあいだに争いがあったと述べられている。

3　この二柱の神については、『プロタゴラス』320D 以下の有名なプロメテウスの神話を参照せよ。

4　『ティマイオス』23A を参照せよ。

すっかりととのっているのを見とどけて、はじめて〈閑暇〉(スコレー)といっしょに町を訪れるものなのだからね。

むかしの人びとの業績は知られず、その名前だけが現在に伝えられているというのは、じつにこういう事情によるわけだが、この点の証拠としては、「あの〔エジプトの〕神官たちは、そのときの戦の模様を述べるにあたって、ケクロプス[1]、エレクテウス[2]、エリクトニオス[3]、エリュシクトン[4]、等々の名前――ここには、テセウス[5]以前の

B 古い英雄として伝えられている者たちのほとんどが含まれているが――を数多く挙げ、また同じように、むかしの婦人たちの名前も挙げた」というソロンのことばを引合いに出しておこう。それからまた、当時は男も女も同じように戦に関するいろいろなつとめをはたしていったので、そのころのアテナイ人たちは、当時の慣習にしたがって、武具をつけた女神の像を奉納したものだが、この絵画や彫刻の女神像も、〈群れをなして生きるものは、

C 雌雄の別を問わず、すべて同じように、それぞれの種族にふさわしい卓越性を実践面に移しうる能力を生まれながらそなえている〉ということの証拠としてあげておこう[6]。

四

さて、当時、アテナイにはさまざまな階層の市民たちがいて、それぞれ手仕事に従事したり、大地からの食糧生産に従事したりしながら、それぞれの暮らしをたてていたが、軍人階層のほうは、はじめから神々に縁のある人びとの手で〔他の市民から〕分け離され、栄養をとったり教養を深めたりするのに必要なもののすべてを〔他の市民から〕手に入れつつ、かれらだけで独自の生活を営んでいた。そして誰ひとりとして、いかなる財も私有する

D ことなく、すべてを全員の共有物と見なすとともに、食糧なども適量以上に要求して他の市民から調達するようなことはしなかった。(7) このようにしてかれらは、昨日の会合で話された仕事、つまりわれわれの提案した〈国守(くにもり)〉の問題をめぐって述べられたことがらを、(8) あますところなく忠実に実践していたのである。

E なお、われわれの国土について、あのエジプトの神官たちは、まず「当時のアッティカの境界線は、端(はし)をイストモス(9)に接し、内陸ではキタイロンやパルネス(10)の山頂におよんでいた」と述べ、つづけて「この境界線は、そこから下って海に面し、右手にオロピア(11)を含み、左手にアソポス(12)と境を接し」、また「この境界線に囲まれた地域

1 伝説上のアテナイの王で、大地から生まれ、下半身は蛇の形をしていたと言われる。

2 やはり伝説上のアテナイの王で、大地から生まれ、アテナによって育てられたと言われる。ポセイドンの別名であるという説もある。

3 伝説上のアテナイの王で、ケクロプスと同じように、下半身が蛇の形をしていたとも言われる。ヘパイストスとアッティスの子、もしくはヘパイストスとアテナの子で、ケクロプスの後を継いで、アテナイの王となったと言われる。

4 テッサリアの王。彼は神々を軽んじ、デメテルの社の森の木を切り倒したため、食べれば食べるほどひもじさを覚えるという「飢餓」の刑に処せられ、最後には、自分自身をも食いつくして、みじめな死をとげたと言われる。

5 アテナイ王アイゲウスの子で、いろいろな冒険で知られているが、特にクレテのミノタウロスをたおし、アテナイの人びとを悲しみと不安から解放した話は有名である。父の死後、アテナイの王となり、国政を改革して民主制をしいたり、パンアテナイアの祭りを催したりしたと伝えられている。

6 『国家』V. 451～457を参照されたい。

7 『国家』III. 416D～Eを参照されたい。

8 『国家』II. 376C sqq. を指す(?)。なお、『ティマイオス』17Cも参照されたい。

9 アッティカとペロポネソスをむすぶ細長い陸地帯。

10 二つともボイオティアとアッティカの国境近くにそびえている山。

11 アッティカとの国境にあるボイオティアの町(オロポス)と、その周辺の地域。

12 ボイオティアを流れる川。

(110)

は他のどの地域よりも肥沃だったので、だからこそあの時代に、農耕作業を免除された大軍勢を養うことができたのだ」と述べているが、これは信頼しうる正しい話だと考えてよい。この土地が肥沃だったということについては、つぎのような有力な証拠がある。すなわち、今日われわれに残されている国土でさえ、あらゆる作物をすぐれた品質に実らせ、どんな家畜の放牧にも適した牧草地をもっている点で、他のどの地域にもけっしてひけをとるものではない。だが、当時は、この国土が今日に劣らずうるわしく、そのうえ産出されるものの量もひじょうに豊富だったのである。

111

では、いったいなにを根拠として、わたしはこう信ずるのか。して、当時の国土のどの部分が残されていると言えば、正しいのか。

われわれの国土は、全体が大陸から長く突き出て、岬のように海に横たわっており、これを三方から器のように囲む海は、たまたまどこもたいへん深い。それで九千年のあいだに——あの当時から今日までには、すでにそれほど歳月がたっているわけだ——いくたびも大洪水に襲われたが、そのあいだに起こったたびかさなる災害に

B

よって高地から流れ出た土砂は、他の地域でのように語るにたるような沈泥とはならず、いつも渦を巻いて流れていき、海底の奥深く消えさったのであった。そこで、今をむかしに比べると、小さな島々でよく見かけることだが、病人の身体が骨ばかりになっているように、肥沃で柔らかな土壌はことごとく流失し、痩せおとろえた土地だけが残されたのである。

C

だが当時の国土はまだ災害にあっていなかったから、山々は土におおわれた小高い丘をなし、今日〈石の荒野〉と呼ばれているところには肥沃な土壌に満ちた平野がひろがっていたし、山々には木々の豊かに茂る森があった。

この点については、いまでも確かな証拠が残っている。すなわち、アッティカの山々のなかには、いまでは蜂に餌を提供するにすぎないものもあるが、つい先だってまでは、それらの山々から大建築物の屋根を葺けるほどの樹木が数多く伐り出されていたし、これらの樹木でつくられた垂木がいまでも傷まずに残っているのみならず、ほかに、数多くの栽培果樹も空高く茂り、家畜の飼料を無尽蔵に実らせていたのである。そのうえ当時の国土は、D 毎年、ゼウスからの実りの雨を享受し、現在のように、地肌をむきだしている大地から海へたちまち雨水を流しさってしまうようなことはなかった。この国土は豊かな土壌におおわれていて、その中に雨水を受けいれ、水持ちのよい粘土質の地層にたくわえてから、高地で浸透した雨水を窪地へと流し、いたるところに泉や川の豊かな流れを提供していたわけであるが、むかしあった数々の泉のほとりにはいまでもそれらの流れに捧げられた社が残っており、これがこの国土に関するいまの話の正しさを証明している。

五

E とにかく、この国土はこのように自然に恵まれており、それは畑仕事にのみ専念するまことの農夫たちの手で——美しきもの・善きものを愛でるすぐれた素質の農夫たち、どこにもまして肥沃な土地と豊かな水を持ち、地上では四季を通じてもっとも温暖な気候に恵まれていた農夫たちの手で——しかるべく立派に耕されていたのである。

ところで、そのころの町〔アテナイ市〕は、つぎのようなぐあいになっていた。まずアクロポリスの状況について 112 であるが、当時と今とではかなり様子が違っている。というのは、ある夜、ものすごい大雨がアクロポリスを

襲って土砂を洗い流すとともに、地震とデウカリオン(1)の大災害から逆算して三つ目にあたる大洪水とがいちどに起こって、一夜にして現在のような荒涼たるありさまにしてしまったからである。だが、それまでは、アクロポリスの大きさはエリダノス川やイリソス川(2)におよび、内側にピニクスの丘を擁し、その向い側にリュカベトスの丘(3)をいただいて境をなし、全体が豊かな土壌に恵まれていて、わずかな箇所を除いては高原状の台地になっていたのである。

B　アクロポリスの外側は坂になっていて、ちょうどその下のところには手職人や近辺に畑をもつ農夫が住んでいたが、頂きのほうには、軍人階層の者たちが、かれらだけで独自にアテナやヘパイストスの社を囲んで居住区を構成し、そのまわりを、ちょうど一戸建住宅の庭を囲むように、一筋の囲いで囲んでいた。すなわちかれらは、その北側地域に共同住宅をもち、冬期会食堂を建て、自分たちや神官たち(4)が屋内での公共活動を営むのに必要な諸施設をも完備していたが、それらを金銀で飾りたてるようなことはしなかった(5)。

C　かれらはどこにも金銀を用いることなく、豪奢ではないが貧弱でもない、ほどほどの飾りつけを求めながら住まいを建て、その中でかれら自身もその孫たちも齢(よわい)を重ねていき、そしてそれらの建物を、いつももとのままの姿で、かれらと同じような考えをもったあとつぎたちに譲っていったのである。しかし夏になって中庭や体育館、会食堂などを使用しなくなると、南側の地域が体育に励んだり会食をとったりすることに利用された。なお、いまのアクロポリスのあたりに

D　一つの泉があったが、これはたびかさなる地震のために涸(か)れはてて、いまはそのあたりに小さな流れが残されているだけである。だが当時は、冬には温かく夏には冷たい水をたたえ、その豊かな流れをすべての人びとに提供していたのだった。

かれらは、じつに、このような暮らしのもとで、祖国アテナイの市民たちの守護者として、また、ほかのギリシア人の、かれら自身の望みによって権限をゆだねられた指導者として、戦闘能力のある青壮年男女を構成員とする自分たち軍人階層の数がつねにできるだけ同数を保ちうるよう気をくばりながら——その数はおよそ二万だった——生活していたのである。

E

六

さて、以上が、かつてのアテナイ人の姿で、かれらはつねにこういった仕方で自分たちの祖国アテナイとギリシアを正しく統治していたのである。かれらは、その肉体の美しさと精神のあらゆる面でのすばらしさゆえに、エウロペ(6)やアシアのすみずみにまで知れわたり、その当時の人びとのなかでもっとも名のとおった者たちなのであった。

では、つぎに、かれらと敵対して戦った者たちについて、その様子とか起こりといったことを、友人諸君の前

---

1 プロメテウスの子で、エピメテウスとパンドラの娘ピュラの夫。有名な洪水伝説によって、新しい人類の祖となった。堕落した人類を滅ぼすためにゼウスが起こした大洪水によって、ほとんどの人間は溺れ死んでしまったが、デウカリオンとピュラは、箱船に乗って難をのがれ、やがてギリシア人の祖となったヘレンを生んだという。

2 エリダノスはアクロポリスの北側を、イリソスは南側を流れる川。

3 ピニクスはアクロポリスの西、リュカベトスは北東にあった。

4 ヘルマンの読み方にしたがう。

5 『国家』416Dを参照せよ。

6 ヨーロッパのこと。

につつまずお示ししましょう。もっとも、これはぼくがまだ子どものころ聞いた話だから、(1)記憶に残っておればのことだが……。だが話に入るまえに、まだ少し説明しておかねばならないことがある。諸君は、これから何度か耳にするでしょうが、異国の者たちがギリシア名で呼ばれているのを聞いても、驚いてはいけません。で、その理由は、まあ聞いてくれたまえ。

B

ソロンはこの物語を自分の詩作に利用しようと思って、そこに出てくるいろいろな名前の意味を調べているうちに、はじめにこれらの名前を文字に書きとめたあのエジプト人たちが、それらをいちど自分の国のことばになおしてから書いているのに気づいた。そこでソロンは、もういちど〔エジプトのことばで書かれた〕名前の一つ一つを、その意味に注目しながら、わが国のことばになおして書きとめた。ぼくの祖父の手もとにあったのはじつはこの記録で、これはいまでもぼくの手もとにあるが、ぼくは子どものころ、これをすっかりおぼえてしまったというわけだ。(2)

こういう次第だから、異国の人びとがこの国の人びとと同じような名前で呼ばれているのを耳にしても、どうか驚かないでくれたまえ。諸君はもう、その理由を聞いたわけだからね。では、はじめることにしよう。物語は長いが、その初めは、こんなふうだった。

七

C

さきほどぼくは神々の国土分配について、「神々は全大地を大小さまざまの地域に分配され、自分のために社と生贄(いけにえ)を準備された」とお話ししたが、(3)ポセイドンもまた同じようにして(4)アトランティス島を受け取りたまい、

人間の女に生ませた自分の子どもたちを、この島のつぎのようなところに住まわせたもうた。すなわち、海岸から島の中央部にかけて平野があって、それは世界中のどの平野よりも美しく、たいへん地味の肥えたところだったという。さらに〔海岸から〕島の中央に寄っておよそ五〇スタディオン[5]の距離をへだてた平野のなかには、どこ D もそれほど高くない山があった。で、この山に、大地から生まれた原住民の一人、エウエノルという名の男が、妻のレウキッペといっしょに住んでいた。この夫婦には、クレイトオというひとり娘があった。両親が世を去ったとき、この娘はもう婿(むこ)をとる年ごろになっていた。そこでポセイドンは彼女への欲望に駆られ、いっしょになりたもうて、彼女の住む丘のまわりの大地を砕きとられ、海水と陸地からなる大小の環状帯を交互にめぐらして丘のまわりをお囲みになった。つまりポセイドンは、島の中央を軸として、二つの陸地環状帯と三つの海水環状帯とを、いわば轆轤(ろくろ)づくりの輪のようにぐるりとめぐらされたわけだが、これらの環状帯はどこも等しい幅とな E るようにつくられていたから、人間どもは真ん中にある島〔クレイトオの住まい〕へは渡って行けなかったのである。なにしろ、その当時は船もなかったし、航海術も知られていなかったのでね。次にポセイドンは、神だから当然のことではあるけれども、地下から二つの泉――その一方は源より温水が、他方は冷水が湧きでるものだが――をもちだしてこられたり、大地にありとあらゆる作物を豊富に実らせたりして、この中央の島をいとも容易に飾られたのであった。

1 『ティマイオス』21A sqq. を参照されたい。
2 『ティマイオス』25E sqq. を参照されたい。
3 109Bを参照せよ。
4 ゼウスの兄弟神で、海の神。
5 一スタディオンは、約一七七・六メートル。

(*113*)

114

ポセイドンはまた五組のふたごの男の子を生み、育てられた。そしてアトランティス島全体を一〇の地域に分けたまい、最年長のふたごのうち、さきに生まれた子に、母の住まいと、その周辺のいちばん広いもっとも地味の肥えた地域を分け前として与えて、かれを他の子どもたちの王となしたまい、他の子どもたちには、それぞれに多くの人間どもを支配する権限と広い地域からなる領土を与えて、その領主とした。なお、かれは子どもたち全員に名前をおつけになったが、そのさい、初代の王となった最年長の子におつけになった名前が「アトラス」だったので、この名前にあやかって、島全体も、その周辺の海も、「アトランティコス……[1]」と呼ばれるようになった

B のである。[2] これに対して、アトラスのすぐあとに生まれたもう一人の子には――この子は〈ヘラクレスの柱〉寄りの島端で今日「ガデイラ」と呼ばれている地方に面した地域を分け前として与えられたが――ギリシア名で「エウメロス」、土語名で「ガデイロス」という名前をおつけになった。このような事情からして、その地方にはかれの呼び名が冠せられたのではなかろうか。[3] それからポセイドンは、二番目に生まれたふたごのうち、一人を「アンペレス」、他を「エウアイモン」とお呼びになり、三番目に生まれたふたごには、さきに生まれた子に「ムネセ

C ウス」、あとに生まれた子に「アウトクトン」という名前をおつけになった。そして四番目のふたごは、さきの子を「エラシッポス」、あとの子を「メストル」と名づけられ、五番目のふたごには、さきに生まれた子に「アザエス」、あとに生まれた子に「ディアプレペス」という名前をおつけになった。こうしてこれらの兄弟とその子孫たちは、みな、何代にもわたってこの島に住みつき、大海原に浮かぶたくさんの島々を支配するとともに、さきにも述べたとおり、[4] エジプトやテュレニアにおよぶ地中海世界の人びとをもその支配下に収めていたのである。

D さて、アトラスの一族には数多くのすぐれた人物が出たが、つねに最年長の者が王として君臨し、いつのばあ

いにも最年長の子に王位を譲りながら、何代にもわたって王権を維持していた。そしてかれらは、かつていかなる王の権力をもってしても集められたことがないほどの、またこれからもなかなか集められそうもないほどの莫(ばく)大(だい)な富を所有し、およそ都市その他の地域で必要とされる施設はこれをことごとくそなえつけていたのであった。

E このようにかれらが莫大な富を所有し諸施設を完備しえたのは、かれらの支配権のゆえに海外諸国からかれらのもとに多量の物資が寄せられたからであるが、しかし生活に必要な諸物資の大部分をこの島でじかに産出しえたからでもある。なによりもまず、この島では硬・軟両質の地下資源がことごとく採掘された。いまはただ名のみとなっているが、当時は実際に採掘されていたオレイカルコス(5)の類(たぐ)いは、そのころ金につぐひじょうに貴重な金属であって、島内のいたるところに分布していた。木工材としての森林資源についても、あらゆる種類のものが豊富にあったし、家畜や野生動物も多数生息していた。そしてさらに、この島には、象のようなものも、ひじょうにたくさん生息していた。他の動物、たとえば沼や湖や川のほとりにすむ動物とか山地や平地にすむ動物に115 とって豊富な餌があったばかりでなく、生まれながらにして巨大かつ大食のこの動物にとっても、同様に豊富な餌があったからである。のみならず、この島にはまた今日地上に産する香料ならなんでも、つまり根、草、木か

---

1 「アトラスの……」という意味。

2 この文章は直訳すると、「最年長で王である子には、その名にちなんで島全体もその週辺の海も『アトランティコス』と呼ばれるところの名をつけた。なぜなら、その時、初代の王として支配した人の名はアトラスだったからである」となる。日本語としては、ぎこちないので、本文のように意訳した。

3 ビュアリの読み方にしたがう。

4 『ティマイオス』25A～Bを参照せよ。

5 真鍮もしくは白金のような金属(?)、正確なことは不明。

ら香料を採取する植物であれ、花や果実の汁を蒸溜して香料を採取する植物であれ、なんでも見事に繁茂していたし、葡萄も、主食としての穀物や食卓に添えるいろいろな食物——総じてわれわれが「青もの」と呼んでいる類いのもの——も、飲食用、搾油用の木の実や、(1) 遊戯娯楽用の貯蔵のきかぬ果実の類いも、(2) そして食べすぎの苦しみをやわらげるのに効果のあるおいしい食後の果物なども、(3) これらはすべて、当時、さんさんと照り輝く太陽のもとにあったこの神に捧げられた島がかぎりなく豊かに実らせた、世にも見事な作物なのであった。

B

そこで、かれらはこれらすべての恵みを大地から受け取って神社、宮殿、港、造船所その他、それぞれの地域で必要とされる施設のすべてを建設していったのであるが、これらはつぎのように秩序正しく配置されていたのである。

C

八

はじめに、かれらはむかしの中央都市(メトロポリス)を囲む海水環状帯に橋をかけ、王宮に出入りする道をつくった。それから、はじめはポセイドンとかれらの先祖が居所と定められたちょうどその場所に宮殿を建てたのだが、これは、代々の王が先王からこれを承け継ぐたびに、先王をしのごうと力を尽していろいろな付属施設を整備したので、しまいにはその規模の大きさといい出来ばえのすばらしさといい、驚くほど見事な住まいに仕上げられていったのであった。すなわち……

D

かれらは、外海を起点として幅三プレトロン、深さ一〇〇プースで長さ五〇スタディオンの水路を掘り、(4) これをいちばん外側の海水環状帯に連絡させた。そしてどんな巨船でもらくに入れるほどの広さに水路口をきり開い

E て、外海からその海水環状帯へと向かう船舶のいわば港のような役割をはたさせた。(5) さらにまた、海水環状帯のあいだを走る〔二本の〕陸地環状帯には、橋のつけねのところで、三段櫂船が一隻航行できるほどの水路を掘って、海水環状帯がたがいに連絡するようにし、その上をおおって、このトンネル内を船が通るようにした。なぜなら、陸地環状帯のふちが、海面よりかなり高かったからである。なお、水路によって外海へ連絡している最大の海水環状帯は幅三スタディオン、(6) すぐ次の陸地環状帯の幅もこれに等しかったが、その内側をはしる二番目の環状帯のほうは、海水帯の幅が二スタディオン、(7) 陸地帯のそれも、その前にある海水帯の幅と同じ二スタディオンで、

116 中央島をじかに囲んでいる環状帯は幅一スタディオンであった。(8) そしてこの中央島は——ここに宮殿があったのだが——直径五スタディオンであった。(9)

さて、以上の工事を終えると、かれらはこの中央島と陸地環状帯と一プレトロン(10)の幅をもった連絡橋の両側を石塀でぐるりと取り囲み、各連絡橋の外海へ向かう出口の両側には櫓を建て、門をつくった。これらの石塀に使用した、白、黒、赤など、色とりどりの石材は、中央島の周辺や内外の環状帯から切り出されたが、かれらはこ

1 オリーヴや椰子の実。
2 りんごやざくろ。
3 レモン(?)。
4 幅が約八八・八メートル、深さが約二九・六メートル、長さが約八八八〇メートルの水路。
5 この文章は直訳すると、「このようにして外海からいちばん外側の海水環状帯への遡航を、いわば港へ入っていくようにおこなわしめた」となる。
6 約五三二・八メートル。
7 約三五五・二メートル。
8 約一七七・六メートル。
9 約八八八メートル。
10 約二九・六メートル。

(116) B れらの石材を切り出すと同時に、そこにできた洞穴(ほらあな)の中に岩石をじかに天井とする二つのドックをつくった。なお、それらの建築物には一色(ひといろ)の石材を用いて建てたものもあり、美しく見せるために各種の石材を混ぜて色どりを工夫し、建物におのずと魅力がそなわるように配慮したものもあった。それにまた、かれらはいちばん外側の陸地環状帯を囲む石塀のまわりを塗料でぬりつぶしたようにびっしりと銅板でおおい、内側の陸地環状帯の C 石塀のまわりには錫板を、アクロポリスをじかに囲む石塀には炎のようにさんぜんと輝くオレイカルコスをかぶせたのである。

九

つぎに、アクロポリスのうちにある宮殿についてであるが、これは以下のような配置になっていた。アクロポリスのちょうど真ん中にはクレイトオとポセイドンに捧げられた社があり、そこは人の立入りを許さない神聖な場所として、黄金の柵がめぐらされていた。建国当初、まさにこの場所でポセイドンとクレイトオが出産の営みをおこないたまい、一〇の王統の祖となった子どもたちをお生みになったのである。そしてここは、王たちが、毎年、一〇の領地から季節の初ものを持参し、自分たちの祖神たる一〇王のそれぞれ〔の霊〕に供物(くもつ)として捧げた D ところでもあった。これに対してポセイドン御自身を祀(まつ)る神殿は縦一スタディオン、横三プレトロン(1)で、その高さはこれらと調和がとれて見えるように気が配られていて、どこか異国風の感じのする建物であった。で、王たちはこの神殿の外側をすっかり銀板でおおったが、破風は別で、そこには黄金の板をかぶせた。そして内側の天井には一面に象牙をかぶせ、金や銀やオレイカルコスの飾りつけをして変化をもたせるとともに、その他、壁や

柱や床にはびっしりとオレイカルコスを敷きつめていた。

E なお、この神殿のなかにはたくさんの黄金像が安置されていたが、その一つに、戦車の上に立って翼をもつ六頭の馬を馭(ぎょ)しておられるポセイドンの、天井の棟にとどくほど巨大な神像があり、そのまわりには海豚(いるか)にまたがった一〇〇体のネレイデス像(2)が安置されていた。当時、ネレイデスの数は一〇〇と考えられていたからである。ここにはまた、ほかに、一般の人びとの奉納した数多くの聖像も安置されていた。神殿の外のまわりには、王統の祖となった一〇王の血をひく歴代の王とその妻の、すべての黄金像が安置され、また、この国の王や市民のみならず、その配下にあった海外諸国の王や市民から奉納された数多くの巨大な神像がたくさん立ち並んでいた。

117 それに祭壇は、大きさといい、つくりといい、こうした周囲の状況とじつによくつりあいがとれていたし、宮殿もまた同様に、この国の偉大な権力をあらわすにふさわしく、神に捧げられた聖殿の壮麗な雰囲気にふさわしいものであった。

つぎに、二つの泉について見ていこう(3)。この冷泉と温泉はともに豊かな水を湧出(ゆうしゅつ)し、その湧き水の快い舌ざわりとすぐれた水質ゆえに、じつによく利用されていた。すなわち、かれらはそのほとりに建物をつくり、その水

B 質に合った樹木を植えこんだばかりでなく、野外プールや冬期温水浴場としての屋内プールも設けたのであるが、

1 縦が約一七七・六メートル、横が約八八・八メートル。

2 ポントス(海)とゲー(大地)のあいだに生まれた海人ネーレウスの娘たち。やさしく美しい娘たちで、海底の洞窟でネーレウスとともに住むと言われ、通常は五〇人と考えられていた。単数で考えられている時には「ネレイス」と言う。

3 113Eを参照せよ。

(117) これらには王〔室〕用、一般用のほか、婦人用、馬その他の役畜用の区別をつけ、それぞれにふさわしい設備をほどこしていた。

また、それらの泉から流れた水は、ポセイドンの聖林――そこは土地が肥沃で多種多様の樹木がふしぎなほど立派に育ち、空高く茂っていた――へ導かれたほか、橋沿いに設けられた水道をとおして外側の陸地環状帯へも送られたりしたが、(C) この陸地環状帯をとおる水道の近くには、多くの神々を祀る社とか庭や修練場などが、たくさんつくられていた。そして修練場には、人びとの体育に用いるものと調馬に用いるものとが区別され、大小二つの陸地環状帯のそれぞれに設置されていた。また、ほかに、大きな陸地環状帯の中ほどのところには戦車競技場もあったが、これは幅一スタディオンで、この環状帯をぐるりとひとまわりするほどの長さがあり、騎馬競技の役にたてられていた。

そしてこの戦車競技場のまわりには、その両側に親衛隊員の宿舎があって、大部分の隊員がそこに住んでいたが、(D) 比較的信頼のある隊員はアクロポリスに近い小さな陸地環状帯に宿舎を与えられ、とくに信頼の篤い隊員たちは、アクロポリスのなかで、じかに王たちに接しながら住むことを許されていた。なお、ドックには三段橈の軍船が満ち、それに要する船具も、すべて準備万端ととのっていた。

以上が王宮周辺の配置状況であるが、ここから外へ向かうと港が三つあり、さらにそれを越えていくと、外海を起点とする(E) 環状壁があって、これはどこも、いちばん大きな環状帯ないしは港から五〇スタディオンの間隔[1]を保つようにして町を囲み、水路の外海に開くところで両端が一つになっていた。そしてこの環状壁の内側には、家々がところ狭しと建ち並び、外海へ向かう水路や町一番の港は、世界各地からやって来た船舶や商人で満ち溢

れ、昼も夜もかれらの話声や多種多様の騒音、雑音で、たいへんな賑い(にぎわ)を見せていた。

一〇

118 さて、以上で、アトランティスの町やむかしの住まいの様子については、だいたいのところ、あのときソロンの話したとおりに、お話ししたわけだ。で、これからは、そのほかの地域について、それがどのような自然条件のもとで、どのようにして治め斉(ととの)えられていたかということを、記憶の糸をたどりながらお話ししていかねばなるまい。

では、はじめよう。まず、話によるとこのアトランティスは全体がひじょうに高い山岳状の島となって海面から聳えたっていたが、町の周辺には一面に平野がひろがっていたそうである。つまり、平野が町を囲み、麓(ふもと)を海に接する山々が平野を囲むという地形になっていたわけであるが、この町のまわりに坦々としてひろがっている平野は、全体として見ると長方形で、〔東西の〕一辺は三〇〇〇スタディオン、中央をとおって海から内陸へ向かう〔南北の〕一辺は二〇〇〇スタディオンであった(2)。なお、この平野は島全体の南側に位置を占めていて、北から B 吹きよせる寒風をまともに受けるようなことはなかった。そしてこの平野を囲む山々は、その数や大きさといい、美しさといい、現在の山々のいずれをも凌駕(りょうが)し、当時の人の賞讃のまとになっていた。そこには土民たちの豊か

---

1 約八八八〇メートル。

2 東西の一辺が約五三二・八キロメートル、南北の一辺が約三五五・二キロメートルの長方形。

な村がたくさんあり、また川や湖やどんな家畜や野生動物にも豊富な餌を提供する草原もあり、それに、あらゆる仕事のどんな需要にも応じうるいろいろな種類と大きさの木材もあったからである。

C ところでこの平野は、自然のままの地勢と歴代の王たちの長年にわたる努力とがあいまって、つぎのような状態になっていた。もともとこの平野は、だいたいのところは四方を直線で囲まれた長方形になっていたが、そのようになっていないところには四方に濠(ほり)をめぐらして、まっすぐになるように形がととのえられた。なお、この濠の深さ・幅・長さについてであるが、ほかにもいろいろな仕事をなしとげたかれらが、さらにまたこれほどの規模のものをもつくりあげたと聞かされると、これはとても人間業(わざ)とは思えないが、しかしとにかく、聞いたことはお話しせねばなるまい。

D この濠は一プレトロンの深さで一様に一スタディオンの幅をもつように掘られ、これが平野のまわりにぐるりと掘りめぐらされて、その長さは一万スタディオンにもおよんだ。(1) そして山間(やまあい)から落ちる谷川の流れは、この濠に達して平野をめぐり、濠の導くままに流れながら東西より町(ポリス)に流れついて、そこで向きをかえて海へ注いだ。また、平野の北側をはしる濠からは、およそ一〇〇プースの幅をもつ多数の運河が、(2) 海へ向かう濠へ連結するように平野を縦断してまっすぐに掘られており、運河と運河のあいだはそれぞれ一〇〇スタディオンの間隔を保つようになっていたが、(3) かれらはさらに、運河と運河のあいだに横断水路を掘って、運河相互の連絡や町

E との連絡を可能にしたうえで、これらの運河を利用して木材を山から町へおろしたり、そのほか、季節の産物を船で運んだりしたのであった。それにまた、冬にはゼウスの恵みたもうた雨水を用い、夏には大地のもたらす湧き水の流れを運河からひいて、じつに年に二度も収穫をあげていたのである。

つぎに民衆についてであるが、各地区は戦闘能力のある平野部住民男子のなかから一名の男子を指導者として
119 たてるように定められていたが、一地区の面積はおよそ一〇スタディオン平方で、地区の総数は六万だった。山岳部やその他の住民数は数えきれぬほどだったと言われているが、かれらはみな居住地域や村落を単位として右の各地区に割り当てられ、その地区の指導者のもとにおかれた。そして、このような体制のもとに、各地区の指導者は、戦が起こったとき全地区の部品を集めると一万台の戦車ができるよう、一台の戦車に必要な六個の部品のうちの一つ(4)と馬二頭、騎手二名を戦場に差し出し、そのうえさらに台座なしの二頭連馬を一組と、それに乗っ
B て敵陣に迫り敵中では馬を降りて小楯で戦う兵士と、そのそばで連馬の手綱をとる馭者を一名ずつ、そして重甲兵を二名、弓兵、投石兵もそれぞれ二名、軽装投石兵と投槍兵をそれぞれ三名、それに一二〇〇隻の船舶の乗組員にあてる水夫四名を戦場に差し出すように定められていた。

さて、とにかくこの王国は以上のような体制のもとで軍備をととのえていたわけであるが、ほかの九つの国は、それぞれにまた別の体制をとっていたわけで、そこまで話をすすめるとなると長い時間がかかるだろう。

一一

C 国家統治の名誉ある職に関することがらは、建国当初より、つぎのように定められていた。一〇人の王は、そ

---

1 この濠は、メートル法に換算すると、深さが約二九・六メートル、幅は約一七七・六メートル、全長が約一七七六キロメートルという大規模なものとなる。

2 約二九・六メートル。

3 約一七・七六キロメートル。

4 直訳すれば「一台の戦車の六分の一」という意味。

れぞれ自分の領内や町では住民の上に絶対権力をふるい、ほとんどの法を支配し、意のままに人を罰し処刑していた。とはいえかれら相互の支配関係や交わりについてはポセイドンの〈戒め〉にしたがっていたのであって、これは一つの掟(おきて)としてかれらに伝えられた。そしてそれは初代の王たちの手でオレイカルコスの柱に刻まれたので D あるが、この柱は島の中央のポセイドンの社に安置されていた。ここでかれらは、五年目と、その次には六年目に会合をもち、偶数年の会合も奇数年の会合もともに重視し、この会合で国事公共の問題を相談したり、なにか罪を犯した者がいるかどうかを調べて、裁きを下していたのである。

そして、これから裁きを下そうとするときには、かれらはそのまえに、たがいにつぎのような誓いをかわしたのだった。ポセイドンの社には牡牛が放されていたのであるが、一〇王は他の者が去って自分たちだけになると、E 神の思し召し(おぼしめ)にかなう生贄をとらえることができるように祈って、鉄の道具は用いず、棒と輪綱だけで、その牡牛のあとを追った。そしてそのなかの一頭をとらえると、掟の刻まれている柱のそばに連れていって、その柱の先端で牡牛の喉を切り、流れ落ちる血潮で掟の文字を染めた。この柱には掟のほかに、掟にしたがわぬ者がいればその者におそろしい呪いがかかるようにと祈る誓願のことばが刻まれていたのである。さて、王たちは自分た 120 ちの掟にしたがって生贄を屠り、牡牛の四肢のすべてを火に投ずると、混酒器(クラテール)に酒を満たし、各自の無事を祈りながら、そのなかに血粒を注いだ。そして柱のまわりを浄(きよ)め、残りの血を火に投じてから、混酒器から黄金の盃に酒を汲み、火に注ぎながら、もし以前に何か罪を犯した者がいれば柱に刻まれた掟にしたがって B 裁き懲(こ)らしめ、また、これからはいかなる掟もけっして故意には破らず、父なるポセイドンの掟を無視して統治することも、そのような統治者にしたがうこともけっしてしない、と誓ったのである。

各王は自分とその子孫のために以上の誓いをたててから血酒を飲み、その盃をポセイドンの社に献じた。そして食事その他の必要事に時をついやしたのち、あたりも暗くなって生贄の火が燃えつきると、みんな、世にも見事な瑠璃(るり)色の大礼服を身にまとい、社周辺の燈火をすっかり消して、誓いの証(あか)しに捧げた生贄の、灰となった遺骸のそばの大地に坐って夜をすごし、かれらのなかのある者がほかの誰かにたいして掟違反の責めを問うようなことがあれば、責めを問われた者は裁かれ、他の者はかれを裁いた。そして裁きも終り、夜も明けてくると、かれらは判決事項を黄金の板に記し、大礼服をそえて記念に奉納したのである。

C

なお、ほかに各王個人の権限に関してはいろいろと特別な法律があったが、なかでもとくに重要なのは、「どのようなときにも、おまえたちはけっして、たがいに武器をとって争ってはならぬ。もし誰かがある町で王家転覆の謀(はかりごと)をめぐらすようなことがあれば、おまえたちは先王を範とし、ともに相寄り携えて戦術その他を協議し、アトラス一門に指揮をゆだねて、みんなで助けあわねばならぬ」という掟と、「王たる者は、一〇王の過半数の同意がなければ、兄弟王の誰といえども、これを処刑する権限はない」という掟であった。

D

三

当時のアトランティスの国々は量質ともにかくもすぐれた力をもっていたのだが、神はその力を一つにまとめられ、こんどは、このわれわれの住むアッティカへお移しになったのである。それは話によると、なにか次のような理由からであった。

E

何代もの長い歳月にわたって、かれらのなかで神の性(さが)が指導的な地位を占めているあいだは、かれらはもろも

ろの掟にしたがい、神に縁のあるものにたいしては鄭重な態度をとってきた。すなわち、かれらは日々偶然にめぐり合う出来事にたいしてもたがいの交わりに対しても思慮深い穏やかな態度で接するほど、非のうちどころのない高邁な精神の持主だったので、徳以外のものはすべて軽視し、自分たちの所有物〔すなわち諸財〕にこだわる121ようなことはせず、莫大な黄金その他の財産のいわば重荷のようなものにも容易に耐えて、富ゆえの贅沢に酔って自制心を失い、われとわが身を滅ぼしてしまうというようなことなど、なかったのである。自己を律するにきびしいかれらは、これらはすべてたがいに友愛を分ちあい徳をもって交わることによって殖えるものであり、あまりにも熱をあげてこれらを追い求め大切にしすぎると、かえって財そのものを減らし、同時に徳までも滅ぼしてしまうことになるということを、鋭く見ぬいていたのである。

　かれらはじつにこのような考えの持主であり、神に縁のある性をとどめてもいたから、その所有する富はどれも、さきに説明したとおり、莫大なものとなって殖えていった。しかしかれらに宿る神の性が、多くの死すべきものども〔人間〕とのたびかさなる混合によって、その割合を減じ、人間の性が優位を占めてくると、とうとう財B の重荷に耐えかねて、見苦しい振舞いをするようになり、人を見る目のある者には、「破廉恥な奴らよ」と思われるようになってしまった。それは、かれらが数ある貴重なもののなかからもっとも大切なものを失ってしまったからである。だが、真実の幸多き生を見ることのできぬ者たちにとっては、この時代こそかれら〔王たち〕がいつの時代にもましてすばらしく、祝福に満ちた生をおくっているように思われたのであった。それは、かれらがよこしまな欲望を満足させ、その力をほしいままにしていたからである。

　神々の神、掟を司る神ゼウスは、このようなありさまをさだかに観る力をもっておられたので、このすぐれた

血をひく者たちが世にも哀れな姿となっているのにみ心をとめたまい、かれらが懲らしめを受けてもっとましな

c 姿になるように、罰をあたえようとお考えになった。そこでゼウスは、神々のもっとも尊敬する住い、すなわち全宇宙の中心に位置を占め、世に生ずるすべてのことを照覧したもうあの住まいへと神々を残らずお集めになり、神々が集まって来られると、申された……。〔以下、中断〕

『ティマイオス』解説

種山恭子

一 総説、登場人物、執筆の意図

本篇は一言で言えば、この宇宙が善なる製作者(デーミウゥルゴス)たる神によって、秩序ある善きものとして製作された、その過程を描いている作品だと言うことができる。西洋の古代から中世を通じて、本篇がどれほど熱心に読まれ、引用され、論議されたか。そしてまた、ルネッサンス期に勃発したプラトン熱の旋風のもとに、本篇に見られるようなプラトンの自然観が、当時の新しい自然観形成に対してどれほど大きな原動力となったか。さらに前世期から今世期にかけても、一方では、本篇の全体的な構想の問題や個々の箇所の解釈の問題が、古典学者たちの間にどれほどの論議を巻き起こし、また他方では、たとえばホワイトヘッドのような人に対して本篇がどれほど多大の影響を及ぼしたか。——こうした問題については、ここではとうてい触れることができないが、とにかくこの作品が西洋の思想の歴史できわめて大きな意味を持ったということを念頭に置き、この解説ではただ本篇を書いたプラトンの意図と、内容分析とのみにしぼって述べることにする。

そこで、まず登場人物を概観し、何故プラトンがこのような人々を登場させたのだろうかという問題から、本篇におけるプラトンの意図の問題へ入って行きたい。

登場人物

本篇はまず、ソクラテスが、目下アテナイに滞在している二人の異邦人、ティマイオス、ヘルモクラテスと、この二人に自邸を宿舎として提供しているアテナイ人クリティアスの三人に向かって話しかける場面から始まる。便宜上、ソクラテスに続いてヘルモクラテス、クリティアス、ティマイオスの順序で述べる。

ソクラテス(Socrates)

ヘルモクラテス(Hermocrates)　シケリア(シシリー)の都市シュラクサイの政治家、将軍。シュラクサイはドーリア系のコリントス市によって前七三四年頃に建設された植民市。前八世紀中葉から前七世紀末にかけて、ギリシア人はイタリア、シケリア方面に盛んに植民したのである。ところが、その時代にはまだこの植民運動に参加していなかったアテナイも、後に経済面でこの地域に進出し、商業上でのアテナイの競争者コリントスがシュラクサイを西方での経済活動の有力な拠点としたのに対抗して、アテナイのほうはイオニア系植民諸都市に多大の影響力を持つに到った。前四三一年にペロポネソス戦争が起こって、シケリアでもドーリア系植民諸都市とイオニア系植民諸都市の抗争が激化し、イオニア系植民市でアテナイと同盟を結んでいたレオンティノイがシュラクサイに圧迫されて、アテナイに救援を求めて来た時(前四二七年、『ゴルギアス』の解説、三四一ページを参照)、アテナイはシケリアに艦隊を出して、対シュラクサイ攻撃に、シケリアの他の諸都市の参加を求めて呼びかけた。しかしこの時、全シケリアの都市代表がゲラに集まって会議を開き(前四二四年)、シケリアは一体となってアテナイはじめ他のいかなる外部からの干渉をも排するという態度を打ち出したために、アテナイの反シュラクサイ攻勢は挫折したのであるが、このゲラの会議でこうしたモンロー主義にも比すべき「汎シケリア同盟」を提唱したのが、ヘルモクラテスだったのである。その後前四一五年にも、アテナイは再度シケリア遠征を試み、この時は遠征軍はシュラクサイを包囲した。しかし、シュラクサイにはスパルタから援軍が到着。ヘルモクラテスはこの援軍の指揮官ギュリッポスと力を合わせて、前四一三年、アテナイの遠征軍に惨敗を喫せしめた。アテナイはこの後、デロス同盟内でも離反者が相次い

だ中に例外であったサモス島を海軍の拠点とし、他方スパルタはペルシアからの資金を頼んで艦隊を東方に進め、両軍は小アジア海岸で海戦を繰り返したが、前四一〇年、スパルタ軍は、ヘレスポントスの彼方のキュジコスで、アルキビアデスら麾下のアテナイ軍に大敗した(『アルキビアデスⅡ』解説、二二六ページを参照)。この時、かつてのモンロー主義的な主張にもかかわらずスパルタの東方遠征に参加していたヘルモクラテスも艦隊を失い、こうした責任を問われて彼は祖国から追放された。それでも彼はスパルタ側に立って戦っていたが、前四〇八年、シケリアに帰った。しかし祖国シュラクサイでは、彼の政敵、民主派のディオクレスが勢力をふるっていて入国不能。ヘルモクラテスはヒメラで、ディオクレスが放置していたシュラクサイの兵士の遺骨を集めて祖国に送り、ディオクレスがどんな人物であるかを民衆に知らせようとした。この結果、ディオクレスは追放されることになったが、しかし、だからと言って、民衆はヘルモクラテスを受け入れようとはせず、力づくで入国を強行しようとした彼を殺した(前四〇七年)。当時のシュラクサイの民衆は独裁者の出現を恐れていたらしい。そして事実、ここにはやがて独裁君主が出現するが、それはヘルモクラテスその人ではなく、彼の娘婿で当時はまだ彼の追随者に過ぎなかったディオニュシオス(一世。『書簡集』解説、二二七ページ以下を参照)であった。

クリティアス(Critias)　これはどのクリティアスであろうか。この名で有名なのは、ペロポネソス戦争でアテナイがついに降伏した前四〇四年に、亡命先から帰国して、三〇人独裁政権の恐怖政治を現出せしめた、寡党派のクリティアスであろうし、プラトンの母のいとこであったこの人物は「カルミデス」にも登場している(『カルミデス』解説、二四〇ページ以下を参照)。しかし、本篇のクリティアスは、ソロンの親族で親友であったドロピデスの曾孫にあたり(20E)、同名の祖父クリティアス(ドロピデスの子)とは八〇年ばかり年が隔って(へだた)おり、彼の子供の頃にはまだ「ソロンの詩が新しかった」と言われている(21B)。ソロンがアルコン(政務長官)に選ばれて、権力と富を手中にする少数貴族と人身抵当による借財に苦しむ貧農との軋轢(あつれき)の調停に乗り出したのが前五九四年。その生年は前六四〇年頃と推定されており、ドロピデスも前五九三/四年にアルコンであったと伝えられているから、これもソロンとほぼ同世代に位置づけられうる。すると、その子である「祖父クリティアス」の生年は前六〇〇年前後、語り手のクリティアスの生年は前五二〇年前後ということになるだろう。しかし他方、寡党派のクリティアスは、プラトンの母のいとこであるところから、プラトンよりほぼ一世代溯った、前四六〇年

頃の生まれと推定されており、前四〇四年におけるその活動(前記)から見ても、それよりもっと溯ったところに生年を置くことはできない。従って、本篇のクリティアスは、寡党派のクリティアスではなく、その祖父にあたる別のクリティアスだとするのが、今日の定説になっている(前記『カルミデス』解説、二四一ページの、プラトンの家系図において、本篇のクリティアスはクリティアスⅢ、作中の「祖父クリティアス」は同Ⅱ、寡党派のクリティアスは同Ⅳ)。

バーネット(*Greek Philosophy*, p. 351)は、『カルミデス』解説中にあるような、プラトンの家系図を挙げ、すでにアプロディシアスのアレクサンドロス(三世紀)がクリティアスⅢと同Ⅳを区別していた点を指摘しているが、しかしまた、少なくともディオゲネス・ラエルティオス(三世紀? Ⅲ. 1)やプロクロス(五世紀。*Tim. Comm.*, 25 E, Diehl, I. S. 82)以来、マルタン(Note, I)や、アーチャー・ハインド、アーペルトらにいたるまで、本篇のクリティアスを寡党派のクリティアスだと信じて疑わない向きもあったことをつけ加えるとともに、寡党派のクリティアスについても若干記しておく。——この寡党派のクリティアスは、ペロポネソス戦争中に、一時、アテナイに四〇〇人支配(『アルキビアデスⅡ』解説、二二五ページを参照)が成立した時には目立った活動はしていないが、やがてキュジコスでの戦勝(前記ヘルモクラテスの項を参照)の後、アテナイに民主制が完全に回復された時には、テッサリアに亡命。前四〇四年、すでに敗北の色濃いアテナイから、寡党派の中でも穏健派のテラメネスが和議のためにスパルタに派遣されて、やがて和議成立。アテナイの降伏によってペロポネソス戦争が終結した時、クリティアスら亡命していた寡党派は帰国して、テラメネスらと合流。彼らは新憲法制定を標榜して、スパルタのリュサンドロスの力を背景に、民会をして三〇人の起草委員を選出せしめ、クリティアス、テラメネスら「三〇人の委員」は忽ち覇権を握って民主派掃討に乗り出した。しかし間もなく、過激派のクリティアスと穏健派のテラメネスは決裂。クリティアスはテラメネスをも死刑に処した。しかし、多数者の死刑・追放・財産没収の挙に出たクリティアスの恐怖政治は長続きせず、彼らのために亡命していた民主派のトラシュブロスらによって、前四〇三年、クリティアスはその仲間とともに、ペイライエウス港のムニュキアで殺された——。

ティマイオス(Timaios)　本篇の語り手であるこのティマイオスは、作中のソクラテスの言葉によると、これはロクリスの人で、財産・家柄でも第一級、政治面でも重鎮、学問の上でも「全体の頂上をきわめた人」と言われ(20A)、特

に天文学に通じていて、宇宙・自然の研究に携って来た人と言われている(27A)。しかし、不思議にも、本篇とは独立に、この人物について言及している文献がない。従って、これはプラトンが創作した架空の人物ではないかという推測も成り立つ(Cornford, *Pl. Cosm.*, pp. 2–3を参照)。しかしとにかく、プラトンが作中でこの人物を、ロクリスのすぐれた政治家・学者としている以上、われわれはロクリスという都市のことと、ロクリスを含むイタリア、シケリア方面の、前五世紀頃の知的風土について若干記しておく。

ロクリスは、イタリア半島南端に近い東海岸にあった都市で「ゼピュリオンのロクリス」とも呼ばれる。ギリシア本土には東西二つに分かれているロクリスがあるが、エウボイアの対岸に位する東ロクリスの、「百の王家」の後裔という千人の貴族たちが前六七三年頃にイタリアに建設したのが、ゼピュリオンのロクリスで、ここでも貴族の協議による寡頭政治が敷かれていた。前六六〇年頃にザレウコスによって法が制定された。これはヨーロッパ最初の成文法と言われ、あらゆる罪に罰を課する厳格なものだったらしいが、イタリア、シケリアの、他の多くの都市もこれを採用したらしい。寡頭政治によるこのロクリスの治世は有名で、これをたたえる言葉は、本篇のソクラテスの言葉(20A)のほか、『法律』(I. 638B)や、またピンダロス(「オリュンピア勝利歌」10, *l*, 13)にも見られる。もともと、このロクリスの建設にあたってはシュラクサイが援助したと言われ、ペロポネソス戦争初期の頃に、シケリアで、シュラクサイを中心とするドーリア系植民諸都市と、レオンティノイを含むイオニア系植民諸都市の抗争が激化した時も(前記ヘルモクラテスの項を参照)、海峡を隔てて、ロクリスはシュラクサイの側に立っていた。ゲラの会議でヘルモクラテスの提唱した「汎シケリア同盟」の気運のために、アテナイの反シュラクサイ攻勢が挫折した後、間もなくレオンティノイで政変が起こって民主派が追放され、シュラクサイの干渉に助けられた寡頭派がレオンティノイの一部を占拠するという事件が起こった。アテナイは直ちに、再び反シュラクサイ勢力結集の機を窺って、パイアクスらを使節としてイタリア、シケリア方面へ派遣したが(前四二二年)、大した成果は得られなかった。ただこの時、アテナイの使節団はロクリス他若干の都市でいくらか友好的に迎えられたらしいが、それは、これらの都市が、レオンティノイの件から、シュラクサイに疑惑を抱きはじめていたためと思われる。後に、シュラクサイのディオニュシオス一世が、南イタリアへの勢力拡張を狙って、ロクリス懐柔のために、その都市のドリスと結婚しているが、これは

前四世紀になってからのことである。

ところで他方、知的風土についてであるが、エーゲ海の彼方の小アジア地方で、すでに前六世紀初頭の頃から、万物がそこから生じそこへと滅び去って行くところのものは何かをめぐって議論を沸騰させたミレトス学派の、新しい思想活動が始まっていたのに対し、この西方の、イタリア、シケリア方面で起こった思想活動としては、まず第一に、前六世紀後半のピュタゴラスおよびピュタゴラス派のそれを挙げることができる。感覚を離れて純粋に魂によって把握される数学の世界に憧れ、魂の浄化を願う、この一派の団体が結成されたのは、イタリアのクロトンにおいてであった。その後、イタリアのエレアには、パルメニデス、ゼノンが生まれ、シケリアのアクラガスにはエンペドクレスが生まれ、彼らはいずれも、前五世紀に活動している(こうした点については補注Mを参照)。

そして事実、イタリアの人ティマイオスの口を通じて語られる本篇の宇宙論は、パルメニデスと同様の立場を大原則としながら、自然の事物を構成するものとして、火・空気・水・土の四種の物体を想定している点や、粒子説による医学・生理学説においては、エンペドクレスの影響が明らかなように思われ、しかしまた、エンペドクレスとは異なり、火・空気など四種の物体の粒子に幾何学的な正多面体の形を与えている点や、その他自然の事物のあらゆるところに数的比率に従った秩序を見ようとしている点は、ピュタゴラス派の伝統に立つもののように思われるのである。じっさい、こうした点を枚挙すれば、本篇は、ピュタゴラス派・エレア派・エンペドクレス、その他ありとあらゆる立場の説を、折衷し融合した、一種のアマルガムのような様相を呈して見える。——そして事実また、ティマイオスはピュタゴラス派の人で、本篇の宇宙論には、プラトン自身の説が見られるのではなく、むしろ、エレア派やエンペドクレスの影響を受けた後の、前五世紀のピュタゴラス派の説が見られるのだと極論する解釈者すらある(Burnet, *Gr. Phil.* p. 339. Taylor, *A Commentary on Plato's Timaeus*, pp. 10 sqq.)。しかしこうした論者は、本篇とは独立に「前五世紀のピュタゴラス派の説」なるものを確認していたわけではなく(テイラーが本篇と親近性のある説を立てた人として注目している、前五世紀のピュタゴラス派の人ピロラオスにしても、その断片の真正性には疑義なしと言えず、本篇との類似性も漠たるものである)、むしろ、本篇を手がかりとして「前五世紀のピュタゴラス派の説」なるものを推測し(Burnet, *Early Greek Philosophy*, pp. 279 sqq.)、そして、その説が本篇に見ら

れるとしているのであるから、こうした議論は、「論点先取の誤謬」としか言いようがない。ティマイオスなる人物の実在が不明であることは前に述べたところであり、また本篇で彼が「ピュタゴラス派」とされているわけでもないことは確認しておきたい――。

なお、**対話設定年代**についてであるが、たとえばテイラー（*Comm.*, pp. 14-17）は、ヘルモクラテスの経歴からして、前四二一年のニキアスの和平より遅くない、何かそのあたりの時期を考えているが、大体、ヘルモクラテスがアテナイへ来たかどうか、ティマイオスなる人物の実在性も不明であり、全体として、プラトンが、本篇の対話を現実にあったものとして想定するのに、さほど配慮したかどうかは疑問であり、われわれは、この対話の年代設定の問題には深入りしないでおくことにする。

執筆の意図

プラトンはどういう意図で、以上のような人々を登場させたか。本篇の宇宙論の語り手ティマイオスにしても、ロクリスの人として想定されているこの人物の口から語られる宇宙論に、ピュタゴラス派の色彩が濃厚であること、エレア派の立場が踏襲されていること、エンペドクレスその他の影響が多大であることは事実であろう。しかし、まさにこうした宇宙論を必要としたプラトンの意図は何であったか。われわれは冒頭で、本篇には、この宇宙が善なる製作者によって、善きものとして製作された過程が描かれていると言った。そして、そのような宇宙像を描くのがプラトンの目的であったのには相違ない。しかし、そのような宇宙像を描くのをプラトンが目的としたのがそもそも、どういう背景のもとに、どういう意味においてであったのか、製作者や宇宙が「善きもの」とされる場合の「善い」とはどういう意味を持つのかということ自体が、本篇の分析を通じて検討されなければならないのである。

さらにまた、政治家でもあるティマイオスが、ヘルモクラテス、クリティアスと並んで登場している点にも注意しなければならない。確かに、本篇冒頭の導入部(17A～27B)からも明らかなように、この『ティマイオス』の宇宙論は、最初から、『クリティアス』のアトランティス物語に引き継がれるものとして書かれ、なおその続篇として、ヘルモクラテスを語り手とする作品が予定されていた(『クリティアス』108Aをも参照)。『クリティアス』は未完に終り、『ヘルモクラテス』はついに書かれずに終ったが、『クリティアス』では、過去の歴史のうちに現実に実現された理想的な国家としての、九千年前のアテナイの物語が描かれるはずであったし(23E, 27B)、これら一連の作品が全体として、現実に実現され、肉づけされた、理想的な国家を描く目的で構想されたのは疑いない(19B～20C)。そして、本篇の宇宙論が、国家制度を考える前段階として、現実の人間の本性がどういうものであるかを、宇宙・自然全体の構造の中で捉えようとしているものであることは、本篇の導入部で、この連作全体の構想を語っている言葉(27A～B)から明らかであろう。しかし、本篇に接続する続篇でプラトンが記すつもりで構想していたはずの、まさにその「現実に実現された理想的な国家」とは、どのようなものであったか。少なくとも『クリティアス』は、ほぼ『国家』で描かれたような制度を持つ往時のアテナイの活動を描こうとしたものであった(17C～19A, 25Eの言葉を参照。また『クリティアス』110C～Dを参照)。その続篇『ヘルモクラテス』で、プラトンが何を書くつもりであったかは知る由もないが、この連作全体の構想からすれば、これらの作品が、やがて『法律』へと結集して行く線上にあっただろうことは十分に推察できる(じっさい、コンフォードは、『ヘルモクラテス』は結局『法律』に置き代わったのだと見ている。*Pl. Cosm.*, pp. 7－8)。しかし、こうした国制論に対して、本篇の宇宙論で描かれる人間像はどのような役割を果しているのか、あるいは逆に、本篇に描かれているような、自然的人間の像からすると、どのような国家・社会が本来あるべきものとして予想されるか。この問題もまた、本篇の分析から、なおよく検討されなければならない。

そこでわれわれは、次の章で、本篇とその続篇を通じてプラトンが展開しようとした主題が何であったかを、大まかに確認するとともに、その中で本篇の宇宙論の占める位置を展望し、それから第三章で、そうした大きな主題を指標としながらプラトンが展開した、本篇の宇宙論の構造を、重要と思われる若干の問題点に即して、いくらか検討することにしよう。じっさい、先にわれわれは、本篇にはピュタゴラス派・エレア派・エンペドクレスらの、さまざまの要素が見られると言った。しかし、これらの学派もしくは思想家の提出している説は、互いに相手に対する批判ともなっているものであり、それぞれ、根本的に立脚している立場において、互いに相容れないものとさえ言える(補注Mを参照)。そこで、こうしたそれぞれの立場が、本篇の宇宙論の中で、各とどのように調整され位置づけられているのか、そして、これらが本篇で統合されている場合の、その統合点はどこにあり、全体として、本篇の宇宙論の構造はどのようなものであるのか――こうした問題を、われわれは本篇の構成に従って、若干の具体例を挙げながら検討したいのである。そしてその際、以上のような検討を通じて捉えられる本篇の宇宙論が、宇宙を「善きもの」だとする場合の、「善い」とはどういうことを意味するのか、またそのような宇宙に根ざす自然的人間の正常なあり方はどういうものであるのかを確認し、そして、そうした人間像に基づく限り、「善き国家・社会」とはどういうものとして考えられるであろうかを、いくらかでも展望したい。もちろん、本篇の解釈をめぐって古代から現代まで繰り返されて来た、多大の論議のことを考えると、われわれの把握の仕方も、きわめて一面的な一解釈でしかないのでもあろうが、さりとて、解釈を混えずに解説するなどは、少なくとも本篇にかんする限り、とうてい不可能と思われるので、右に述べたような手続きをもって、試論的に解説を進めて行きたい。

二 「国家」論と「宇宙」論

(1)『国家』『クリティアス』と本篇の関係

本篇の冒頭で、ソクラテスは、ティマイオス、ヘルモクラテス、クリティアスの三人に向かって(補注Nを参照)、自分が前日彼らに語ったという、最上の国制についての自分の構想を、ここで要約して繰り返している。そしてその内容は、『国家』の少なくともⅡからⅤのあたりで述べられた内容と、ほぼ一致している(17C注1を参照)。したがってプラトンはここで、『国家』の少なくとも右に挙げた部分を、読者に思い起こさせようとしているのであろうが、『国家』そのものの首尾一貫した続篇として本篇を接続させようとしたかどうかは、疑わしい(『国家』Ⅵ以降についてはここでは全く言及されておらず、また、この両対話篇で描かれている対話に対して設定されている時日から見ても、両者は首尾一貫しない。補注Nを参照)。しかし、少なくとも『国家』で構想された、分業制度や、守備者に対する、私有財産禁止・男女共職・配偶者や子供の私有禁止、あるいはまた素質の悪い子供を守備者の階層からはずすことなどは、ここでも理想的な制度として踏襲されている(17Cでティマイオスが表明している満足の言葉を参照)。そして、この後を受けて、本篇とその続篇が展開すべき主要なテーマは、ソクラテスが構想した、いわば「絵に描いた動物」とも言うべき国家が、現実に生きて活動する状況なのである(19B～C)。しかし、それを十分に描くことはソクラテスには力に余ることであって、それを描きうる人は、現実に政治に携って来た人でなければならない(19E)。ソクラテスはこうした主題の語り手として、詩人・作家や、ソフィストの類いをまったく信用していない。ホメロスはじめ、詩人・作家は、要するに「模倣者」でしかない。『国家』によると、作家の種族なるものは、自分の眼に映じたままに事物を歪曲して見るものであり、彼らは森羅万象を映す鏡のように、何でも映すけれども、そこには実体的なものは何一つ存在しないので、真実把握の点で、職人よりも低い位置にあ

る(19D注1を参照)。そしてまた、民主政治というより衆愚政治華やかであった頃のアテナイにおいて、弁論の教師として、青年たちから熱狂的に歓迎された、他都市出身のソフィストたちにしても、責任をもって国事を処した経験がない以上、彼らに、国家が現実に活動する状況の叙述は期待しえない(19E、なお、ソフィストもまた詩人同様、映像製作者であり模倣者であるとされている点については『ソピステス』235Aを参照。また、ソフィストの教える「弁論」なるものは、大衆に迎合しながら、その無知につけ込む説得術だとされている点については『ゴルギアス』452E sqq. を参照。なお本篇19E注2を参照)。

したがって、ソクラテスが構想したような理想の国家が現実に活動する状況を描きうる人としては、実地に、責任をもって政治に携って来た人以外にはないわけなのであるが、そうした資格を備えた人としての、ヘルモクラテス、ティマイオス、クリティアスにかける、ソクラテスの期待は大きい(19E～20A)(なお、ソクラテスの構想した国家が一種の寡頭政体であるということと、ヘルモクラテスの政治的立場やティマイオスの祖国ロクリスの政体を比較されたい)。逆に言えば、ヘルモクラテスら第一級の政治家を登場させて、本篇とその続篇を構想した時のプラトンは、並々ならぬ課題、つまり、現実に肉づけされたものとしての理想的な国家とはどういうものであるかを、政治家の眼で把握するという課題と取り組もうとしていたのだと言える。

「理想の国家が現実に活動する状況」――その話を聞きたいと熱望するソクラテスの要求を、さし当たって満たすものとしては、「アトランティス物語」(20D～25D)がある。ソロンがエジプトの神官から聞いたものとされているこの物語は、九千年前のアテナイの偉業を語っているものだ(アトランティス大陸なるものがじっさいに存在したかどうか、地質学にもかかわるこの問題には、ここではとうてい立入ることができない)。ジブラルタル海峡の外のアトランティス島から巨大な勢力が侵入して来て、内海周辺の国々を隷属させようとした時、当時のアテナイが危険に曝されながら先頭に立ってこれを撃退して、海峡内に住む人々全員の自由を外圧から守ったというこの物

語は、ペルシア戦争のイメージを、はるかな過去へ投射したものであろうか（なおまた、古きアテナイのこの偉業をたたえるクリティアスと同席して、次の話の語り手として予定されているヘルモクラテスが、ペロポネソス戦争中に、シケリアに対するアテナイの干渉を排した人であるという点も興味深い）。内には民衆煽動家が横行し、煽動された民衆の多数決によって無謀なシケリア遠征などを企てて外へ覇権を要求する、しまりのない大国と化し、そしてやがてスパルタの前に降伏したアテナイは、守護神アテナが建設したままの本来のアテナイ（23 E sqq.）ではないであろう。本篇の対話は、アテナ神の祭礼（パンアテナイア）に行なわれたと設定されているが、アテナ神を真にたたえるには、この女神が建設したままの古きアテナイの偉業を語るのが一番正しいのであろう（21 A, 26 E）。しかしまた、この偉業を伝える「アトランティス物語」がソクラテスの要求に応える重要な点は、当時のアテナイの政体がソクラテスの構想した制度と驚くばかりに一致していると言われていることと（25 E）、その国家が現実に存在したとされていること（26 E）である。

残念ながら、この物語は本篇で予告されただけで、これを主題とする『クリティアス』は中断され、『ヘルモクラテス』はついに日の目を見ず、本篇とその続篇でプラトンが試みようとした壮大な企画はついに果されずに終ったのであるが、ここで注目しなければならないのは、本篇の宇宙論が「アトランティス物語」に先立つ位置を与えられ、この全体的な企画の一環として組み込まれている点である。アテナの神に帰着されるにふさわしい、本来あるべき法制度を備えた国家を語る前段階として、この宇宙論は、神によって生み出されたままの、つまり、人為的に歪曲されてはいないような、その意味で自然本来に即した人間像を描くためのものと言えるだろう。しかし、このようにして、「現実に動く理想的な国家」を語る前段階で、プラトンがことさら宇宙論を書かなければならなかったのは、やはり、彼が『国家』では処理されなかった問題を、ここで扱わなければならなかったためと推察される。そして事実、自然的人間の像を描こうとした時、彼はとうぜん、その頃の「自然学説」の抵抗に会わないわけ

には行かなかったし、じっさい、本篇には、そうした自然学説を批判しながら、『国家』の理念を支えるような宇宙論を展開しているのが見てとれる。しかしまた、この宇宙論は、もちろん、『国家』の理念に合わせて、自然学説を捩じ曲げるというようなものではなく、むしろ、こうした屈折を経ながら、「現実の国家」のあり方に対して、プラトンは新しい展望を得なければならなかったはずである。そこでわれわれはまず、『国家』のどういう理念が本篇で受け継がれて、新しく検討されなければならなかったかという問題と、第二に、本篇の宇宙論が、「現実に動く理想的な国家」のあり方に対して、どういう展望を開くものであろうかという、この二点を、以下、(2)と(3)で——ごく限られた観点からであるが——若干述べたい。この問題は、本篇全体の構成にもかかわる問題なのである。

(2)「魂三分説」と「宇宙の魂」

ここではまず、『国家』のどういう理念が本篇で受け継がれているかという問題について、次のような点に注目したい。われわれは先に、本篇は「人間の本性」を自然世界の中で位置づけるために書かれたと言ったが、『国家』においても、国家全体のあり方と、個々の人間の本性とが相互に関連づけられていたのである。ところで、『国家』は「正義」の問題から出発している。およそ「正義」なるものについて——それは、支配権を握る当局が自分の利害関係に従って民衆に押しつけるものだから、「正義」を守れば損をするとか(『国家』I. 336 B sqq. を参照)、あるいはそれは、弱者が結束して強者の足を引っぱるために捏造した人為的な法律の規定するところのものだから、そういう「正義」に従うのは臆病者のすることだとか(『ゴルギアス』482 E sqq. を参照)考えるのでなく——ちょうど身体の正常なあり方として健康というものが病気と区別されて厳然とあるように、魂の場合も、正しいあり方とそうでないあり方の区別が厳然として存在するというのが、ソクラテス—プラトンの持論であるのは言うまでもないが、

たいていた『国家』では、魂の正常なあり方と、国家の正常なあり方とがパラレルに置かれて、次のように論じられていた(『国家』IV. 434D sqq. VIII. 543A〜576B)。――個々一人一人の人間にも、理性、激情、欲望の三種類の魂が宿っており、それに応じて、国家の成員にも、理性的人間、激情的人間、欲望的人間が存在する。その三種のどれが主導権を握るかによって、個人のあり方も、国家のあり方も左右される。「激情の種族」が主導権を握るなら、個人の場合は闘争心・名誉心の強い人間になるだろうし、国家の場合は権力政治の形態を取るだろう。また「欲望の種族」が主導権を握るなら、個人は貪欲な守銭奴めいた存在になり、国家は金権政治の支配下に置かれることになる。他人の生殺与奪の権を握ることや、自分の欲望の無際限な拡張と充足とに、無上の生甲斐を感じる手合い(『ゴルギアス』中のカリクレスが代弁しているような連中。同篇491E〜492C参照)が、政界をまかり通る時に生じる破綻は、アテナイの現実からも十分見て取れるところであったろうが、プラトンがまた、「権力政治」から「金権政治」へ、そこから「民主政治もしくは衆愚政治」へ、そしてついに、最悪の形態たる、個人の恣意にすべてが委ねられる「専制政治」への必然的な雪崩現象を予測していたこともつけ加えておこう。「激情の種族」も「欲望の種族」もたしかに、個人においても国家においても、主導権を握る資格のない存在である。国家で政治の枢要の位置を占める資格のあるものは、「名誉心に憑かれた者(ピロティモス)」でもないし、「金銭に執着する者(ピロクレーマトス)」でもなく、ただ「知を愛する者(ピロソポス=哲学者)」――つまり、冷静に推理し、全員にとって何が真に善いかを追究し、それを最大の関心事とする者――だけであろうし、個人においても、衝動的・盲目的な「激情」や「欲望」でなく、「理性」が主導権を握る状態が、もっとも正常なのである。ソクラテスが構想した理想の寡頭政体においては、「知を愛する者」だけが統治者の位置に置かれ、彼ら並びにこれを補佐する守備者たちに対しては、私有財産は禁止され、結婚も子供も公共のものとするよう義務づけられているのだ。

ひるがえって、本篇の宇宙論であるが、ここで描かれている人間像においても、『国家』の「魂三分説」が踏襲さ

れている点に、われわれはまず注目したい。――城砦(アクロポリス)たる頭には「理性」が宿っている(44D, 69C, 70A)。野性の獣とも言うべき「欲望」の種族は、秣桶(胃袋)のあたりに繫がれて、ひたすら食っている(70E)。しかしこの「欲望」の種族が、城砦からの指令に従おうとしない時には、「激情」もしくは「怒り」が、番兵詰所たる心臓のあたりに配置されていて、「理性」を助けて、力づくで「欲望」の種族を抑えてくれる(70A～B)――。これは、ずいぶんふざけた言い方のようであるし、じっさいプラトンはこの宇宙論で、半分くらい、遊戯を楽しんでいるのであるが(59C～Dを参照)、こうした三種の魂のうち、「理性」と他の二者との間に根本的な区別が立てられている点は、この宇宙論の基本的な立場にもかかわる重要な点である。本来、「魂」と呼ばれるのにふさわしいものは「理性」だけであって(41D sqq. の「魂」は明らかに「理性」の部分。44Dを参照)、後の二つは、この「理性」たる「魂」が、地上に蒔かれて身体に植えつけられた時に、身体的存在にとって――たとえば食欲の例で明らかなように――止むを得ないものとしてつけ加えられたのである(69C～D, 70D～E)。これに対して「理性」のほうは、宇宙全体を動かしている壮大な「宇宙の魂」と同種のものであり(41D)、不死性に与(あずか)っている(41C, 42E～43A)。逆に言うと、人間の「理性」と同質の、しかしもっと純粋で(41Dを参照)もっと強大な「宇宙の魂」が万有を動かしているのだ。われわれは先に、『国家』では、個々の人間の構造と、国家全体の構造がパラレルに置かれて、どちらにおいても、理性の種族が主導権を握るべきだと言った。本篇では、人間の構造が、宇宙全体の構造とパラレルに置かれており、しかも、宇宙においては、じっさいに、理性を宿す宇宙の魂(30Bを参照)がすべてを動かしているのである。「天にある理性の循環運動」は、われわれの「思考の回転運動」を矯正するモデルとなるものなのである(47B～C)。

ところで、われわれは先に『国家』の魂三分説が本篇でも踏襲されていると言ったが、問題は、アクロポリスに「理性」が宿り、番兵詰所に「激情」が配置され、秣桶に「欲望」が繫がれているというような人間像を描くこと

によって、『国家』の魂三分説が再確認されているという点にあるのではないであろう。こうした人間像は別段、魂三分説の根拠となるものではないし、第一こうした人間の像(イメージ)は、プラトンが予め、「ありそうな物語」(29D)——真実を把握する厳密な言論とは区別されるものとしての——だとして断わった上で述べている、多分に比喩的・象徴的な物語の一環でしかない。しかし、われわれの理性と同質の、もっと純粋で強力な知的存在が宇宙全体を支配しているという点は、これはもはや「ありそうな物語」の中で語られているものではなく、まさにそうした「ありそうな物語」の形式を通じて述べられるこの宇宙論全体の、大前提をなしているものなのだ(28C～29D)。そしてこの、「知的存在が宇宙全体を支配している」という主張が、ソクラテスの時代からプラトンの時代を通じて、すでに自然学説の上での大きな潮流となっていた、無神論的・自然主義的な説——つまり、自然の中で働くものとしての知的原理をあらん限り排除しようとする説(後出、二七二ページ)——に対する、プラトンの根本的なアンチ・テーゼであったのは言うまでもない(『パイドン』99C、『法律』X. 892A sqq. を参照)。寝ぼけた貪欲な魂よりも、醒めた知的な魂こそ優位に立つべきだとする『国家』の主張を、自然実在との関係で根拠づけるには、プラトンは当時のさまざまの自然学説と対決しなければならなかったのである。そして事実、その対決点が本篇いたるところに見られるが、それは後に述べることにして、次には、本章(1)の終りで挙げた、第二の問題に移る。

(3) 宇宙を配置づけるものとしての「宇宙の魂」——『パイドン』と本篇の関係

本篇の宇宙論は、「現実に動く理想的な国家」の構想に対して、どういう展望を開くものであるか——『クリティアス』は未完、『ヘルモクラテス』はついに書かれなかったから、プラトンが本篇の宇宙論を経た後で『クリティアス』に取りかかった時、どういう国家像を念頭に置いていたかは知る由もない。たしかに『法律』X. 894E sqq. では、宇宙の導き手なる知的な魂の存在が、ある証明をもって語られている。しかしわれわれはいまは『法律』の

問題には触れず、むしろ、本篇の分析から、最初に挙げた問題を検討することにしよう。そしてこの問題はまた、本篇の宇宙論の構造の問題にもかかわっている。

便宜上、先の「魂三分説」を取り挙げ、本篇で、「激情もしくは怒り」と「欲望」とが、身体的存在として生きて行かなければならない人間にとって、止むをえずつけ加えられなければならない魂の種類だとされていた点(前出、二六五ページ)にまず注目したい。つまり、こうした種族は、それ自体としてはけっして望ましいものではないが、身体的存在として生きることを運命づけられている人間にとって、不可避的なもの、必然的なもの、そして身体的存在にとって必要なものとしてつけ加わったのである。そして、人間を製作した知的な作り主は、こうした種族の魂を、止むをえないものとして人間につけ加えた後、その配置づけに腐心している(69D sqq.)。そして、このように、止むをえないもの・必然的なものを、知的存在が合目的的に配置づけるという図式は、身体構造の説明の場合にも、首尾一貫して用いられている説明法なのであり、さらに、必然的な素材を、知的な製作者が合目的的に秩序づけるという、この図式こそ、本篇の宇宙論全体を通じての、基本的な図式なのである。

従って、この宇宙論は一見、きわめて独断的で空想的なもののように見える。――たとえば、宇宙は何故球形であるか。それは球という形がすべての形の中で最も完結した形だからである(33B)とか、また、身体においても、前のほうが後よりも、いっそう尊いから、人間が前向きに歩けるように、顔が前に取りつけてある(45A～B)とか――こうしたことをプラトンが、どこまで本気で言ったのかと疑う人もあろうし、じっさい、プラトンはこうした説を「ありそうな物語」として述べているに過ぎず、また、本篇の中で、プラトンが同じことを説明しながら、矛盾した説明を与えているところも、一、二の箇所には止まらない。

しかし、個々の説明はさておき、自然のあらゆる事物について、それが現にそうあるのは、知的な製作者がある目的に従って、それを配置づけたためだということを大前提とした上で、それなら、その目的は何であり、またそ

の目的に対して、素材がそのように配置されているのがどうして最も合目的か——それをできるだけ推測するという形式で(たとえば53D以下で最も美しい立体を仮説的に推測している点を参照)、自然の事物を説明しようとしている点では、本篇は首尾一貫している。

しかし、こうした形式で宇宙論を述べようとしたプラトンの意図は何であったか。われわれはここでまず、最初に言ったことを思い出したい。つまり、本篇の宇宙論は、現実の理想的な国家を描くための前段階であり、そして『国家』では、「知を愛する者」が統治者の位置に着くべきものであったが、本篇の宇宙論では、「知を愛する者」ならぬ、すでに「知者」たる神が宇宙全体を配置づけ統合しているのだとわれわれは言った。そこで、本篇についてはわれわれは何よりも、この宇宙を配置づけている知者たる神もしくは「理性」と、配置づけられる対象となる素材が基本的にどう関連づけられているかに注目したい。素材は火や水であり、これは「思考を欠いてただ出まかせのものを無秩序に作り出す原因」(46E)と言われ、総称して「必然」と呼ばれるが、「理性」と「必然」とは次のように関係づけられているのだ——この宇宙の生成は「必然」と「理性」の結合から生み出された。そのさい、「理性」が「必然」を説き伏せて、生成するものの大部分を最善へ導くように指導した(48A)——と。そして、この「必然」がまた「補助原因者」(46D)と言われている点にも注意したい。

理屈を弁えない種族を説得し、その特性に応じて配置づけ、全体を可能な限り最善のものとする——これはそのまま、国家の統治者のなすべきことと一致する。

しかしこうした宇宙論は、プラトンが国家論のために、自然学説とは別に案じ出したものであろうか。それは明らかに否である。

万有を統合する善なる力——それはすでに『パイドン』のソクラテスが、それを発見できたら、と渇望していたものであるが、それは次のような意味においてであった。「自然研究」の説なるものは、たとえば、大地が天空に止

まっているということの原因として、大地の下に渦巻を想定し、それが大地を支えているのだとしてと説明する。しかし、仮に大地の下に渦巻があって、それが大地の落下を防いでいるとしても、渦巻が、大地をこの位置にあらしめる原因ではない。むしろ、渦巻のメカニズムを利用して、大地をそこへ配置させた存在こそ真の原因なのである――。渦巻は単なる「必要条件」でしかない。真の原因者は、万物が現にある、そのような配置を最善として、そこへ配置づけた「善なる力」でなくてはならない、というのである(『パイドン』99A～C)。

国家の統治者とパラレルに置かれうるような、「最善を目指して配置づける知的な力」を原因者とする宇宙論こそ、正当な自然学説だとする考えが、『パイドン』から本篇に引き継がれているのは否めない。

しかし、『パイドン』ではソクラテスをして、その発見は困難だと言わしめていた「善なる力」が、本篇では最初から前提されている(28C～29Dで、宇宙を生み出した父なる存在が突如として導入され、それがすぐに善きものとされている点に注意)。だからここでもまた、プラトンは独断的に語っているように見えるし、また、「善なる力」を最初から前提しているとすると、その前提を認めない立場に対して、プラトンの議論は無効だということになるだろう。しかし、「善なる力」を前提にする宇宙論こそ正当な自然学説だとされている点については、次章(1)で述べることにしよう。そして、「善なる力」を認めない立場の人に対して、この宇宙論が無効かどうかという点については、ここでは予め、プラトンはその「善なる力」を大前提とした上で、それを認めないとどういう不都合が生じるかを暗に示すという形で、相手を反撃しているのだという点を確認しておくことにし、内容については、やはり次章(2)で述べることにする。

三　『ティマイオス』の宇宙論の構造

あらかじめ、本篇の**執筆年代**について断わっておくと、大体、本篇をプラトンの後期(第三回のシケリア旅行っ

まり前三六一／三六〇年以降)の作品とするのが伝統的解釈である(Raeder, Ritter, Wilamowitz, Ross)。そしてその場合には『パルメニデス』『テアイテトス』はもちろん、『ソピステス』や『ポリティコス(政治家)』よりも後に置かれることになる、従ってわれわれは本篇の解釈に『テアイテトス』や『ソピステス』を援用する。(1953年に、G. E. L. Owen が、本篇を中期に位置づけようとする論文を提出した(The Place of the *Timaeus* in Plato's Dialog ues—*Studies in Plato's Metaphysics*, Edited by R. E. Allen, 1965 に収録)。本篇に見られる説が、後期のプラトンの説と異なっているというのが、彼の重要な論拠である。しかしそれは、本篇の若干の箇所についてのオーウェン特有の解釈に基づいているものであり、その解釈には必ずしも承服できないので、本篇の中期説は取らない。)

そこで、前章に述べたこと、つまり宇宙が知的存在によって動かされているということ、および、その知的存在が「善なる力」として、この宇宙全体を配置づけているというのが、本篇の宇宙論の主要なテーマであろうということを念頭に置いた上で、それがこの宇宙論でどのようにして確認されているかを主要な関心としながら、以下、本篇の構成に従って、この宇宙論の構造を辿ることにする。

(1) 宇宙論のあり方(27D～29D)

宇宙論の本論に入る前に、「宇宙論」とはどういう性格のものでなければならないかが述べられる。そしてそのためには「宇宙」というものがどういうものであるかがまず確認され、次にそうした対象を扱う言論の性質が述べられる。以下、段階に分けて検討する。

(1) 大前提となるのは、「常にあるもの、生成しないもの」と、「常に生成していて、あるということのないもの」との区別である。そしてすぐに、前者は「理性の対象」と、後者は「感覚の対象」と一致させられる。「感覚の対象」とは厳密に言えば「思わく(ドクサ)によって、言論ぬきの感覚の助けを借りて思いなされるもの」である(27

D～28A)――。

注として、エレア派の立場と、『国家』の立場を挙げておく。

パルメニデス(Fr. 2-8(DK))によると、「あるもの」が無から生じるとか、無へと消滅するということは考えられもせず、考えてはならない。「生成する」とか「消滅する」とかは、あるとあらぬを混同する、死すべき人間の迷妄であり、感覚に惑わされる人間の思わく(ドクサ)に過ぎない。真にあるものは、不生・不滅・不動でなければならない(補注Mを参照)。

『国家』VI. 509D sqq. でも、このパルメニデスの立場が踏襲されていると言えるが、この場合の議論の強調点は次のようなものと解したい。――厳密な言論によって把握されたのでないようなものは、「あるもの」とは言えず、根拠もなく思いなされ、「ある(もしくは……である)」とも「ない(もしくは……でない)」とも確定しがたいようなものは、あるとあらぬの中間に位するものでしかない。そして不生・不滅・不動の真実在(たとえば、美しくあるようにも思われ、そうでないようにも思われるものでなく、これこそ美だと、明確に把握されるもの)に到るには、自らの考えの前提を反省し、前提から前提へと溯るという多大の努力を要する――。

さて、本篇においても、真にあると言えるものは、厳密な言論によって、厳重な反省を経た上ではじめて把握されるものであり、これに対して、生成・消滅しているように思われている対象は、そう思われている限り、真にあるとは言えないものだという、パルメニデスの言明が踏襲されているのだと解したい(51D～Eを参照)。(なお、プラトンがここで、たとえば、ある固定的な、つまり、ある特定の前提の上に成り立っている論理学上の命題で定義されているものを、不変という意味で、あるものだとしてこれを一方に置き、他方に、動的なこの現実の自然世界を、感覚対象としておいて、二つを分裂させ、後者とは無関係に、前者のようないわゆる観念の世界に閉じこもったのだとか、後者のような自然実在の世界の実在性をある意味では認めながら、あえて二つを区別したのだとか

考えるとすれば、これは大きな誤りであろう。自然実在なるものも、とにかくそれが実在の名に価するものなら、これは厳密な言論によってついには把握されうる可能性のあるものであろう。またそのようにして把握されうる限りにおいて、それは実在性を備えているのだと言えるであろうし、事実、プラトンは本篇でそれを試みる方法を提示しようとしているのだと解したい。後出、二七九—二八〇ページを参照。)

(2) 先に区分された二者のうち、「生成するもの」は、その生成の原因者を必要とする。この原因者、つまり製作者は、モデルに従って製作するものである(28A前半)——。

まず、この「生成するもの」は、すぐ後の箇所(28B〜C)からわかるように、宇宙全体を含むいわゆる自然の感覚的な事物であることをまず確認した上で、次の二つの問題の観点から、若干解釈を加えておく。問題の一つは、プラトンが本篇で意識していると思われる、エンペドクレスやデモクリトスならば、いまのプラトンの言明をとうてい受け入れなかったであろうし、事実、プラトンはこうした自然哲学者に意識的にアンチ・テーゼを提出していると思われるが、その対立点はどこにあるかということ、そして第二は、いまの(2)の言明が、先の(1)の大前提とどう関係するかということである。

第一の問題について。——たとえばデモクリトス(補注Mを参照)によると、この自然の事物は原子(アトマ、不可分体)から成り立っており、その原子の運動・衝突・絡み合いによって、すべての事物は、結合して生じたり、解体して消滅したりする(エンペドクレスの四根説も原則的にこれと同じ)。そして原子のこの運動は、物体的な必然性に支配され、合目的的に反するという意味で偶然的である。こうした世界には、意図的に製作する工匠のような、秩序づける原因者なるものの介入する余地はまったくない。

他方たしかにプラトンも、本論に入ってからの宇宙論で、火や水と言った物体的な粒子(不可分体ではない)の運動や相互作用のメカニズムを叙述している場合には、右に述べたような、原子説というより粒子説の図式を完全に

採用している(57D sqq., 79B sqq. の叙述を参照。なお二八九、二九三ページを参照)。ただ、プラトンの場合は、こうした物体的なメカニズムだけからは、人体のように合目的としか言えないような組織体は形成されえないというところから(46Dを参照)、そうした物体のメカニズムを利用し、これを材料にして、まるで人形でも作るようにして(74C)人体を製作した、知的な製作者を想定しているのだと言える。

しかし、たとえば人体の形成をも、あらん限り物体的・非合目的的な原理から説明しようとしたエンペドクレス(44D注1、74A注2を参照)などからすれば、プラトンの考えはまさしく deus ex machina 以外の何ものでもないように思えたであろう。そして事実また、たとえばデモクリトスに従えば、知的な製作者が自然世界に介入する余地はまったくないことも先に述べた。――しかしそれがまた何故か。デモクリトスによると、「あるもの」つまり実在者は、延長を本質とする原子以外には何もなかったのである。パルメニデスの言う不生・不滅の「あるもの」は、それぞれが不生・不滅で不可分であり、不可侵で可触的な無数の、延長を持つ原子(時折、石ころになぞらえられる)の形で、デモクリトスに受け継がれた(補注Mを参照)。不生・不滅のこうしたものが唯一の実在である時、そこへ「製作者」が入り込みうる余地などないのである。

しかし、プラトンの場合、「あるもの」は「理性の対象」にほかならない(延長体なるものは、プラトンの場合は、理性の対象の部類には入らない。後出、二七七、二八八ページ)。しかし、「あるもの」を「理性の対象」だとし、自然界を「感覚対象」だとし、そして、後者を「生成するもの」だと考えると、何故に、そうしたものとしての自然界に、「製作者」が入り込む余地が可能になるのか。そこで先に挙げた第二の問題に移る。

第二の問題、つまり、先の大前提(1)と、この(2)との関係についてであるが、(1)では、「生成するもの」とは、「思わく(ドクサ)によって、……感覚の助けを借りて思いなされるもの」だと言われていた。パルメニデスに従えば、それは死すべき人間の思わくが描き出す、きわめて矛盾した像でしかない。そしてわれわれは、本篇でもこのパル

メニデスの立場が踏襲されているのだと言った。しかしそうだとすると、そのような意味での「生成するもの」に、生成させる原因者があるとはどういうことか。

われわれは補いとして、「感覚対象」なるものが、プラトンでどう捉えられているのかについて、『テアイテトス』で、感覚界が描かれている箇所156A〜Cにまず注意したい。その論点はほぼ次の通りであろう。――直接感覚にあらわれている世界は、色・音などの流動そのものであって、そこには、「これが変化する」というように、「これ」として定点となるものも存在せず、総じて「これ」という指示を受け入れるべく止まっているものは何もない。すべては「ある（もしくは何々である）」のではなく、「生成しつつある（もしくは何々になり行く）」のである。

本篇においても、火や空気について、たとえばわれわれが「これは火だ」と指示しているつもりのものも、たちまち空気になり行くのだとして、右の『テアイテトス』の箇所と同様の議論が述べられている（49B sqq. 参照）。

ところで、「生成するもの」は「思わく（ドクサ）」によって、……感覚の助けを借りて思いなされるもの」と言われていたわけであるが、右の『テアイテトス』などの議論を念頭に置いて、次の二点に注意したい。第一は、われわれが「宇宙」とか「自然の事物」とか呼んで、ある構造を持つひとまとまりのものとして捉えているものは、感覚にあらわれる流動そのもの――そこには、いかなる定点も脈絡も存在しない――ではなく、むしろ、そうした感覚与件を手がかりとして、われわれの側で思いなしているものであること。第二に、少なくとも、「宇宙」とか「自然の事物」とか言われる存在が、本質的に流動的・映像的な、従って厳密な言論の対象にはとうていなりえないような、つまり感覚的要素を抜きにしては考えられない存在だとすると、そうした存在を語るには、どうしても感覚に訴える仕方を排除することはできず、そのような説明は「思いなし」の段階を越えることができないこと。

さて、「宇宙」とか「自然の事物」とか言われているものが「感覚の助けを借りて思いなされるもの」だと言われていることの意味を以上のように解すると、そうした宇宙の生成に「原因」となるものがなくてはならないとさ

れていた点はどうなるか。まず第一に確認しておきたいのは「宇宙」なるものについて、「人間の迷妄・思わくがまずあって、それが主体となって、生成界なる矛盾した幻像を描き出し、それが宇宙と呼ばれる」というような意味は、とうてい本篇のいまの箇所には読み込めないということである。そういう生成界の原因として、神と一致させられる製作者が求められるはずがないのである。むしろ逆に、この「生成界」とその原因者との関係について、われわれは次のように考えたい。――まず、この身体的存在の人間(これは本篇の重要なテーマであったはずである。前出、二六二ページ)を含む自然世界を考えようとする時、直接的にわれわれに与えられているものとして、流動する感覚の如何ともなし難い事実がある。しかし感覚にあらわれているがままのものは、生じ滅びしているように見えており、こうしたものはとうてい自存の実在とは言えない(52Cを参照)。従って、その背後に、このような感覚の現象を惹き起こす原因者があるはずだ――と(『ソピステス』248 A sqq. で、こうした感覚の現象を惹き起こすものを含めて、すべての作用者が、不動の理性の対象に劣らず「あるもの」だとして認められている点に注意したい)。

しかしそれでは、この原因者が、モデルに従って製作する工匠のように想定されていた点はどうか。ここでわれわれは再び、プラトンにとって、「あるもの」とは理性の対象であったことを思い起こしたい。われわれは右に、生じ滅びしているように見える感覚の現象の背後に、それを惹き起こす原因者があるはずだとプラトンが考えたと言ったが、それだけのことなら、エンペドクレスにせよ、デモクリトスにせよ、今日の科学者でも、ひいては一般の素人でも、誰でもが考えていることである。ただしかし、たとえばデモクリトスの場合には、その都度生起しては消滅するように見える色、味、熱さなどの感覚的現象のすべてを、原子から成る感覚器官へ、外界から来る原子のおよぼす作用に帰着させた。そしてそれがすべてであったと言える。本篇の感覚論(61C sqq.)でも、感覚的諸性質が粒子説で説明されている。しかしこの「粒子」は幾何学的正多面体であり、しかも「正多面体状の固形の粒子」

とはとうてい言えない(後出二八九ページ)。むしろ、「三角形」という奇怪なものが本篇の宇宙論では主役を占め、これは幾何学的な立体の構成要素として仮説的に選び出されたものである(53C sqq.)。この「粒子」については後で述べるが(二八九ページ)、プラトンがここでも、直接的な感覚現象の彼方に、この具体的な世界に働いている「知的な原因者」を想定し、理性によって把握される秩序・比率と言った非延長的なものを、その原因者が延長を持つ現実の具体的な世界に投射したとすると、どういう形を取るかを推測し、そうすることによって、無限定的な感覚的現象をも、できるだけ数学的な比率に対応させながら整理しようとした努力が十分見て取れる(55E以下で火・空気・水・土の感覚的性質にそれぞれの正多面体を対応させている点を参照)。プラトンにとって「あるもの」が「理性の対象」だったとすると、厳重な反省を加えて次第に把握されて行く、この「理性の対象」へと、自然現象を帰着させなければならないわけであるが(理性の対象へ帰着させるということは、理解するということと同義である)、これが自然世界の把握として正当性を持ちうるには、――つまり、(実証主義者のように)思考対象(もしくは論理学の対象)の観点で感覚与件を整理するのは、どこまでもわれわれの側のことだと考えるのでないとすればば――、当然、われわれの理性と同種の、はるかに純粋で強力な知的存在が、この宇宙を秩序づけているとしなければならないし、プラトンがそれを大前提としているのは言うまでもないであろう。しかし他方、「理性の対象」は非延長的なものである。これを物体的な三次元の世界に投射するものとして、「製作者」なる言葉が用いられた点も理解できると思う。しかしその「モデル」については、次の項で述べよう。

(3) 製作者が「常に同一を保つもの」をモデルとする場合は、製作物は立派なものとなるが、製作者が生成したものをモデルとする場合には、製作物は立派なものとはならない。宇宙は可視的・可触的で物体性を備えたものであって、これは感覚対象であるが、感覚対象は生成するものである。したがって宇宙は、何らの出発点もなく、常にあったのではなく、ある出発点から始まった。しかるに、生成したものは、何か原因となるものによって生成し

たのでなくてはならない。宇宙の作り主を見出すことは困難でもあり、見出したとしても皆の人に語るのは不可能であるが、宇宙の構成者は、最初に挙げた二つのモデルのどちらに従って宇宙を構成したのかを考えなければならない。ところが、最初に述べたように、「同一を保つもの」をモデルにする場合には、製作物は立派なものとなるわけであるが、たしかに、この宇宙は生成物のうちでも最も立派なものであり、製作者はおよそ原因となるもののうちでも最善のものであるから、宇宙は、同一を保つもの、理性の対象となるものをモデルとして製作されたのである（28A後半～29B）——。

ここでは次の四点について注意しておきたい。

第一には、二種のモデルについてであるがモデルと言えばそれと相関的に考えられるのは「似像（エイコン）」である（4)を参照）。『国家』（V. 509 D sqq.）においては、「理性の対象」から下降して、実在性の最も稀薄なものとして、鏡や水に映った映像が挙げられ、それに応じて認識能力の側でも「理性の対象」を把握する能力から次第に下降して、たとえば洞窟の壁の影絵を本物と誤る精神性は、真実把握の点で最下位に置かれていた。現実の実物＝生成界の事物をモデルとしてこれを模倣する詩人や画家の作品は劣ったものであろう（前出、二六〇ページ）。しかしこの自然の実物そのものは、永遠不動の「理性の対象」をモデルとしたはずだという点については(2)を参照。なお、プラトンが模倣者たる詩人の眼でこの宇宙論を展開しようとしたのでない点は、いまのことからも明らかと思われる。

第二には、「物体性を備えたもの」が感覚対象だとされている点について。可視的な世界は、後に（49A sqq.）、生成・消滅する感覚的諸性質もしくは形状と、それがその中で生じる三次元の延長体たる「場」とに分析される（後出、二八六ページを参照）。そしてさらに、感覚的諸性質は結局、三次元の延長体たる幾何学的立体の粒子の作用に帰着される（55E～56B, 61D sqq.）。ところで、感覚的現象の彼方に、三次元のひろがりを洞見する能力をデカルトならば「理性」だと考えたし、また、「延長」を本質とする原子を、デモクリトスは「あるもの」だと考えた。しか

し、プラトンの場合、「場」を洞見する能力は「擬(まが)いの推理」(52B)であり、総じて数学的対象は、多なるものであり、また延長体としてある限り、厳密な意味での「理性の対象」ではなく、それを把握する能力も、「善」を把握する能力より一段階下位に置かれる。

第三には、「生成するもの」が「生成した」と言われている点であるが、「生成するもの」が、感覚対象と等値に置かれる場合、生成・消滅して活動する感覚の流動が「生成するもの」と言われているのだと考えると、その意味での「生成するもの」が「生成した」などはほとんど考えられないというところから、この箇所は古来、解釈者を悩ませて来た。しかし前にも述べたように、「宇宙」をはじめ「自然の事物」は、永遠存在でない以上、生じ滅びる次元のものではあるが(二七五ページ)、「宇宙」なり自然の事物なりが何らかのまとまりを持つ構成体として考えられる以上、それは直接感覚にあらわれているまったく不定的な流動そのものではない。そこには統合の原理が働いていなければならない。事実、「理性」が素材に秩序を与えることによって、この「宇宙」が生成したというのがプラトンの図式である(30A, 48A)。ではいつ生成したか——それは愚問である。「時間」自体が、「宇宙」とともに生じたのであるから(37D)。また、こうして生成した「宇宙」は、たしかにまた滅びる可能性のあるものだ。しかし、天体も「宇宙」全体も、神の意志によって永久の生を約束されている(41A〜B)。

第四には、「宇宙」のモデルとしての「理性の対象」について、自然の現象をプラトンが、「あるもの」たる「理性の対象」に帰着させようとしている点は前に述べた(2)の項)。しかしここでは、「宇宙」の製作者が「理性の対象」をモデルにしたと考えられる理由として、宇宙はいかなる生成物よりも立派なものであり、製作者はあらゆる原因者のうちでも最善のものだから、ということが理由とされている点に注目したい。ここにも、プラトンが、ある固定的な前提から導出される論理体系を予め定めて、それを尺度にして自然現象を整理したのでなく、逆に、「宇宙」を最も立派なものだとして、そこに善なる製作者の働きを読み取る態度を取ったことが示されていると思える

が、ここに「宇宙」が立派だということの重要な意味として、それが完結した一つの統合体であるという点に注意したい(30C～31A)。ところで『国家』(V. 511B～C sqq.)においても、数学的認識の上位に置かれる、真に理性の対象と言えるイデアの世界では、前提から前提を溯って最後にもはやいかなる前提にも基づかない「善」のイデアを頂点として、「正義」や「美」のイデアが相互に緊密に連関して一つの統一体をなしていた。他方『パイドン』では、ある現象なり事物なりの成立のための必要条件と、その必要条件を利用して、万物を意図的に配置づけ統合する「善なる力」こそ、宇宙・自然界の真の原因者だとされていた(前出、二六八―二六九ページ)。いまの場合も、「宇宙」のモデルたる「理性の対象」は「善」のイデアを頂点として相互に緊密に関連している統合体だとして考えられているのであろうし、そのことは、「理性の対象」の似像たる「宇宙」が、善なる製作者によって配置づけられている一つの統合体だということからも明らかであろう。

(4) さて、言論とその対象とについて、次のような区別が必要である。言論の対象が、永遠性のある、確固とした「理性の対象」である場合には、それを扱う言論も不変のものであるが、言論の対象が「理性の対象」の似像でしかない場合には、言論も「ありそうな(真実らしい)」言論でしかない。したがって宇宙の生成などについての言論は、完全に整合的で高度に厳密に仕上げられた言論たりえない。しかし、これを語るわれわれは人間でしかないのであるから、ありそうな物語もしくは言論を受け入れるのに甘んじなければならない(29B～D)――。

「宇宙」は「理性の対象」の似像(エイコン)だから、それを語る言論は「ありそうな言論(エイコース・ロゴス)」だとするこの言明を、宇宙なるものは映像でしかないのであるから、詩人のように語ればよいという意味だと解するとすれば(Cornford, *Pl. Cosm.*, p. 31)、「われわれは人間でしかないのだから……」の言明は解し難いものとなるであろう。われわれは前に述べた理由(二六二ページ)から、この宇宙なる現実存在が(われわれの描く宇宙像は虚妄かも知れないが)、知的な力によって配置づけられているということが、プラトンにとって大前提となっているの

だと考えて、この言葉の意味を次のように解したい。――「理性の対象」をモデルとしてこの宇宙を製作した神ならば、この宇宙の構造についての真実を語りうるだろう。しかしわれわれは人間でしかなく、どのような理性の対象がどのような意図でモデルとされ、それがどのように現実の世界に投射されているのか、その真相を十全に把握することはできない。しかもまた、「宇宙」として捉えられているこの存在は、どこまでも、感覚を通じ、ひろがりを持つものとしてしか捉えられない。従って、多分に形象的な語を用いないわけには行かず、宇宙のモデルとなる「理性の対象」をできるだけ推測するとしても、他方の極にある感覚的素材をも話に加えなければならないので、とうてい、純粋に「理性の対象」を対象とする言論のような、厳密で整合的で不変のものを与えることはできない――。

さて、以上、(1)―(4)で述べたことを足場として、本論でじっさいに展開されている議論の脈絡を、ごく簡単に記しながら、若干の注を記すという形式で、解説を進める。

（2）　宇宙の統合と秩序（29D～47E）

本論に入ると、冒頭で、この宇宙がそもそも構成された原因として、次のような点が挙げられている点に注意したい。――構築者は善きものであったから、すべてのものができるだけ構築者自身によく似たものになることを望んだ（29E）――。これが決定的な始めである。そこで、この「善い」ということが具体的にどういう形で実現されているものと言われているかという点に注目したい。

(1)　宇宙は「理性」を賦与される。しかし「理性」は魂を離れては何ものにも宿りえないので魂が宇宙に与えられた（30B）――。

注として、『パイドロス』（245C～246A）や『法律』（X. 892A sqq.）では魂はむしろ「動き」の始原のように言われ

ているようであるが、ここではむしろ、魂は理性の媒体として導入されていると言えることを挙げておく。

(2) 宇宙は完結した統一体である(30C～31A)。

これに関連して、宇宙は一か多か無限かという問題が提起されている(31A～B)——。

宇宙の数を無限箇(アペイロイ)とする考えは、心得のない者(アペイロス)の言うことだとする言葉が55Dにあるが、たとえばデモクリトスの場合のように、自然界の秩序の原理となる知的要素を極力排除しようとする考えからすると、原子の数も形も一定数のものでなくてはならない理由もなく、無限の虚空間にただ一個の宇宙が存在していなくてはならない理由もない(補注Mを参照)。しかしプラトンの場合には、「理性の対象」の領域においても、より普遍的なものほど(より抽象的なのではなく)、より包括的・豊富である(31B注2を参照)。一領域について得られた把握は、視野が拡大されて、反省され、より広い領域に及ぶ形で次第に豊富になって行くからである(『饗宴』210A～211Cを参照)。従って、仮に原子論者の言うような、太陽も月もない宇宙などが事実、発見されたとしても、プラトンの場合は、それをも含む全体的な統合体が「宇宙」の名に価することになるであろう。こうした意味で、宇宙が一つだとされているのは明らかである。

(3) 物体的な宇宙を構成する四種の物体、火・空気・水・土は、数学的な比例を通じて結合される(31B～32A)——。

これら四種の物体を「根」として想定したエンペドクレス(32C注4を参照)は、これら四根を相互に結合させるものとして「親和力」を想定しなければならなかったが、これは純粋な「力」とも言えないものであって、四根とどういう関係に置かれうるのか判然としない(補注Mを参照)。プラトンの場合は、まずこれら四物体を、三次元の延長を持つ立体だという点で、すべてに共通点を求め、後は、純粋に数学的関係で処理することで、これら立体を相互に関係づけようとしている点が注目される(なお、53C注4、および55E sqq. を参照)。

(4)　宇宙の形体は球形である(33B～34A)——。

宇宙を球形とする考えそのものは、プラトン以外にも多々見られるが、ここではむしろ、パルメニデスが「あるもの」について考えた発想が見られるようだ(33B注1を参照)。プラトンの「あるもの」は、「理性の対象」であって非延長的なものであるが、パルメニデスが「完結したもの」として、その「あるもの」について考えた形態を、「理性の対象の統合体」(30C, 31B注2を参照)をモデルとする似像たる、延長体の宇宙の形態に投射して考えたのではないかと思われる。なお擬人的宇宙観は極力排除されている(補注M、クセノパネスの項を参照)。

(5)　宇宙の魂(1)を参照)は、「有」と「同」と「異」から構成され、比率に従って区分されている(35A～37C)——。

「有」「同」「異」が何であるかについての議論にかんしては補注Bを参照。ここではただ、「Aがある」「AはBと同じ」「AはBと異なる」という判断が、『テアイテトス』(185A sqq.)でも『ソピステス』(254B sqq.)でも、判断のうちでも重要なものとして取り上げられており、とりわけ後者では、こうした「ある(有)」「同」「異」が、「静」と「動」とともにわれわれが思考で捉えている領域(AもBもそのうちに入る)の、いたるところに行きわたっているものとして重視されていた点を挙げておきたい。

また「比率に従って分割されている」という点であるが、この比率は事実上、音階をなす絃の長さの比に対応し、さらにまたこれは惑星の軌道に対応する(もっとも、1, 2, 3, 4, 8, 9…の数列が、惑星軌道の何に対応するのかは不明としか言いようがないし、プラトンがそうした点について詳細に論じているとは思えない)。重要なのはむしろ、人間の魂も宇宙の魂と同種のものであり(41Dで〔人間の〕魂が、宇宙の魂と同じ材料で同じ仕方で構成されたと言われている点を参照)、整然たる天体の運動を学び、「数」の観念を獲得し(万有の本性の探究や、すべて哲学と名のつくものの基礎として、こうした天体運動から得られた数の観念が重視されている点については47Aを参照)、

われわれが「自然本来に即した正しい推理計算の仕方を身につけなければならない」(47C)とされている点であろう。

(6)　「永遠」の似像としての「時間」と、時間表示の機関としての惑星(37D～39E)――。

生成物としての宇宙は永遠存在ではない(前出、二七一、二七八ページを参照)。「一のうちに静止している永遠を写して、数に即して動きながら永遠らしさを保つ、その似像」(37D)として「時間」が作られた。「時間」というものが天球や天体の円運動と密接に結びつけられている点については、補注Dを参照。魂の不死性と、無限に反復する回転運動の類似性とを結びつけて考える、この考え方に、アルクマイオンの影響が見られるのではないかという点については34A注1を参照。夜・昼の繰り返しや、太陽が黄道上の年周運動を反復して、1、2、3……と無限に到るという、これが「永遠」の似像である。こうした回転運動なしには、「永遠の似像」としての「時間」は存在しえず、この天球や天体の回転運動そのものが、神によって製作された「宇宙の魂」の運動とされているのである。そして、太陽の日周運動や年周運動を観察することによってはじめてわれわれは「数」の観念を獲得したのであるが(5)を参照)、こうした宇宙に見られる回転運動も、善なる製作者によって秩序を持ち統合されたものとして製作された宇宙の全体的な像の一環であることに注意したい。なお、一見不規則に見える惑星の運動も、十分に探究すれば数比をあらわしているはずだという確信が39C～Dに見られる。

(7)　宇宙を満たす四種の生きもの(39E～40B)――。

宇宙は四種の生きもので満たされなければならない。天の種族(主として火から成る)、空中を飛翔する鳥の種族、水棲族、陸棲動物、がそれである(これは火、空気、水、土という四種の物体が宇宙の四つの領域を占めていることに対応する)。恒星は、「天の種族」であり、天球にちりばめられた、宇宙の「飾り」である。そしてこの「天の種族」のみが、神によって製作され、他の地上の生きものは、天体(惑星)によって生み出される(なお、人間以外の

動物が、人間の生まれ代りとされている点については90E sqq. を参照)。

(8) 大地(40C)——。

人間の養い手である大地が他の星々の中でも「最年長」だとして、優先的な位置を与えられているが、大地が宇宙の中心に静止しているという表現は取られていない。全体の宇宙構造の図式から見て、おそらく事実上、中心に静止しているとしてしか考えられないが、大地が「〔宇宙の〕軸のまわりを旋回する」という不思議な表現については、補注Fを参照。(宇宙の中の絶対的な静止点をまず想定した上で、そのまわりを天球が回転しているという考えよりも、むしろ、動的に回転する宇宙全体の像が先にあり、それに抗うことによってはじめて、地上から見ての天球の日周運動が可能になることが、旋回するの語で表現されているのであろうか。)

(9) 神(製作者)からの、神々(天体)への命令(41A~C)。人間の魂(理性の部分)の製作(41D)——。

永遠存在でない神々(天体)も、神によって不死を約束される。(7)で挙げた四種の生きもののうち、天の種族たる恒星以外の「死すべき定めの種族」の製作は、神々に委ねられる。しかし、人間の魂のうちでも理性の部分は、不死なる部分として、まさしく神によって製作され、宇宙の魂と同種のものとして製作されたのである。ただし純度においては、前者は後者よりはるかに劣る。『国家』における人間の「魂三分説」は本篇でも踏襲されているが、「理性」以外の二つの部分(「激情」と「欲望」)は、不死なる魂が地上で身体に植えつけられてから、神々によって、「止むを得ないもの」としてつけ加えられたのである(69C sqq. なお前出、二六五ページを参照)。

(10) 神による、魂への掟の宣告と、魂の播種(41E~42E)——。

神は魂のうちの不死なる部分を構成した後、まずそれらを星(恒星)と同じ数に分割し、それぞれの魂を星に乗せる。魂の故郷はそれぞれに伴侶として割当てられた星なのである。それから神はこれらの魂に掟を告げるが、これは『国家』のエールの神話(42D注2を参照)と酷似している。どんな人間の魂も、その本性は神によって製作され

た神聖なものであり、星を故郷とするものであるが、地上での身体的な生に必然的に伴って生じる、感覚の激動や、快苦を伴う情欲などを克服するかどうかによって、死後、天上の生が約束されるか、他の劣った生きものに生まれ変って再び地上に縛りつけられるかが決まるのである。そして、神から掟を宣告された後、それぞれの魂は、諸惑星へと蒔かれる(42D注3を参照)。

⑾ 神々(惑星)による人体構成、および「原因」と「補助原因」(42E～47E)——。

まず「不死なる魂(理性)」が身体に結びつけられる。

幼児特有の「出放題に」動く身体の動きや、その愚かさは、突然、外界の火や空気から襲って来る激動や、生長期の激しい養分の流れによって、魂の循環運動がすっかり攪乱された状態として語られている(43A～44B)。宇宙の魂と同様、「同」の円と「異」の円から構成されている魂であるが、身体に植えつけられて間もない頃は、それらの円は捩じ曲げられ、「同じ」ものを「異なる」と呼んだり、「異なる」ものを「同じ」と呼んだりするという、愚かなものになるのである(⑸を参照)。しかしやがて生長とともに、魂の循環運動は正され、正しい判断をするようになる(44B)。生まれた時に忘れていた知識を後から思い出すという『パイドン』(72E sqq.)や『メノン』(81C sqq.)の「想起説」を参照。

ところで、この「神的な循環運動」が身体に結びつけられたと言ったが、この「身体」とは実は「頭」のことであり(44D)、手足その他は、「頭」に奉仕するものとしてつけ加えられたのである。いくらか滑稽な表現で、身体各部がどういう目的で神によって製作されたかを語っているこの部分は、人体というものが、ばらばらに地上に生えた手や足が偶然にくっついて、環境に適応するものだけが生き残ったとするエンペドクレスの説(44D注1を参照)に、意識的に対抗して言われたものであろう。

この箇所の最後で、「眼」が話題となり、視覚の構造が論じられるが、その時、「視覚」を成立させるための「補

助原因者」——視覚のメカニズムを成立させている物体的次元のもの——と、そうしたメカニズムを利用して「視覚」を案じ出して人間に賦与した、真の「原因者」の区別が語られ（『パイドン』でのこの区別については二六八—二六九ページを参照）、何を目的として人間に視覚が賦与されたか、そしてそれに加えて、「聴覚」についても、それがどういう目的に寄与するものかが語られた後、「補助原因者」のほうへと話題は移る。

（3） 宇宙の素材（47E～69A）

前にも述べたように（二六七ページ）、本篇の構成はもともと、宇宙がどのようにして知的な原因者によって秩序づけられるかを述べるという構成を取っている。そしてその場合、原因者は知的なものであるから、「理性の対象」をモデルとしてこの宇宙が形成されたはずだという観点から、この宇宙論も、できるだけ「理性の対象」に注目しながら、この宇宙の構造を探るという形で進められて来た。ところが、「理性の対象」は、言論によって把握される非延長的なものであって、これが視覚的・映像的な感覚界へどう投射されていると考えるべきか——そこに大きな問題がある。

第一部では、「物体」なるものは、三次元のひろがりを持つものという観点で捉えられ、幾何学的形態や数の比率などに見られる秩序へと、「理性の対象」の世界が、いわば翻訳されていたと考えてもよいであろう（（2）の(2)—(4)、(6)を参照）。しかし「感覚対象」なるものは、単に静的な色で満たされた三次元のひろがりというわけではなく、色彩も熱さも味も、すべては、機能・力を持ち、作用を与えるものであって（dynamis は、性質・機能・力のすべてをこめた意味を持つ語である。52E を参照）、この作用力が、無限定的な多様性を示しながら、われわれに流動的に生起して消滅する感覚の現象を惹き起こし、他方では物体特有のメカニズムを見せながら、事物の「必然的」な動きとなってあらわれているように思われる。従って、物質的でない「魂」の問題や、宇宙全体の形を考え

る場合には、こうした要素を除外することができたが、現実の自然の事物を考える時には、こうした感覚的な素材の要素を無視することはできない。こうした素材の制約を受けながら、そこへ「理性対象」のモデルを投射しようとするのが、「製作者」の仕事だと言える。

そこでまず、純粋に感覚にあらわれているがままの世界とはどういうものであるかの分析が試みられ、第二に、直接的には無限定的・浮動的に生起する感覚の現象を、いくらかでも「理性の対象」の観点から把握しようとする努力がなされている。これは裏返して言えば、それぞれ、製作者が秩序づける前の素材の世界と、秩序を与えてからの物体的な事物の世界とに対応する。

(1) 「場」と「生成」と「モデル」(47E~52D)——。

まず、この宇宙は「理性」と「必然」の結合から生じたと言われた後、火、空気、水、土は、それ自体としては何であるかという議論からはじまる。これらを万有の構成要素だと考える説(48B注4を参照)に対して、それを受け入れられないとした後、プラトンは、現象としてあらわれているがままの、火、空気などの叙述に入る——いま火が見えているとして、「これは火だ」と指示するとしても、「これ」とはそもそも何を指すのか。たとえば、水と呼ばれているものが絶え間なく蒸発して空気になって行くのが常に見られているではないか。その場合、何を指して「これは水だ」と言いうるのか。そう名づける暇もなく変化して行くのに——というのが、プラトンの議論である(49B~D。これが、『テアイテトス』で述べられている、純粋に感覚にあらわれているがままの世界と酷似している点については、前出、二七三—二七四ページを参照)。

その次の49D~50Bの箇所の読みについてはいろいろ問題があるが(49D注2、補注Iを参照)、チャーニスに従ったわれわれの読み方では、「火」と呼ばれてよいのは、「これは火だ」と指示されているその瞬間に生じているその現象そのものではなく(これは火だのこれとはそもそも何を指しているのであろうか?)、むしろ、生起するご

とに、これこれとしてそれなりに一定の特性を示す様態が「火」と呼ばれうる。しかしそれは単なる様態であるから、自存の実体的なものではなく、何かの中に生起し、またそこから消滅するものなのだ。「これ」と指示されうるのは、むしろそうした様態が、その中であらわれるところのもの――たとえて言えば、映像に対する鏡の立場にあるもの――である。こうして、「場」と「生成」とが位置づけられるのであり、「生成」が、何らかの様態として捉えられており、あらわれる度にこれこれようのという一定の特性を示すものだとすると、何らかの意味で「理性の対象」の模像と言えるであろうが、こうした映像的・感覚的なものと、言論によって把握される「理性の対象」とが具体的にどういう関係を持ちうるか――それは明示されていないどころか、プラトンは言明を避けている(49C。なお、理性の対象のイデアそのものと、われわれの世界に入り込む「熱」「冷」などの形相の相違については『パイドン』(103E)を参照)。

以上のようにして「生成するもの」と「生成するものが、それの中で生成するところの、当のもの」と「生成するもののモデル」――つまり、「生成」と「場」とモデルもしくは「理性の対象」――の三者が区別されたが、ただしこの場合、非延長的・非感覚的な「理性の対象」と、感覚的・映像的であることを本質とする「模像」との関係づけが困難なので、プラトンは「理性の対象」がそれでも厳然として存在することを別の観点から根拠づけ(51C sqq.)、また「映像」のほうは、いかにしても自存の存在でないことを強調している(52C)。

ところで、「場」というものは――デカルトならば、それは理性によって把握されると考えたであろうが――、プラトンの場合は、それが延長体である限り、言論によって把握される非延長的な理性の対象とは区別され、どこまでも「擬い(まがい)の推理」によって捉えられるものだとしている。ただし、ここに、「延長体」たる場が母胎となって、すべての感覚現象も、その場の一部分を占めて生起する限り、三次元のひろがりを持つという点で共通したものとして捉えられ、ここに少なくとも数学的に処理される足場をうることになる。

(2) 宇宙生成前の素材の動揺(52D～53A)――。

直接感覚に与えられている世界は、以上のようにして、「場」と、その中にその都度生起する映像のような「生成」とに分析されたわけであるが、感覚的なものである、「場」の内容物は、とうぜんその感覚的性質・機能・力(前出、二八六ページを参照)のために、静的なものとしてでなく動的なものとして、「場を動揺させ、ゆすぶる」(52E)ものとして叙述される。

興味深いのは、これらの素材は、それだけで、ある特定の傾向を示す。――似たもの同志が集まるのである(52E～53B)。ところで、「似たものが似たものと集まる」ということは物質的な事物自体がおのずから示す傾向として、一般にひろく行きわたっていた考えらしい(補注M)。そして、原子論でもこの図式が採用され、エンペドクレスが四根を結合・分離させる作用者を想定しなければならなかった時も、分離させる作用者よりもむしろ「結合」の作用者を想定する場合に、意識的にそうしたとも考えられるのである。そして本篇のプラトン自身も、こうした世界においては、事物は、種類別に分離して動きを停止してしまうであろうが、現実の宇宙でそうならないのは何故かの説明に苦心している(57E～58C。なお、『パイドロス』247Eの表現を参照されたい)。

素材だけの世界では、やがて動きは停止してしまうではないか――というのが、エンペドクレスやデモクリトスへの、プラトンの反論であったと考えられる。

(3) 粒子の形態(53C～55C)――。

感覚的諸性質・力が「場」を満たしているという図式で、感覚界が分析された後、延長体としての共通性を持ち、同じ一つの母胎たる「場」にあらわれる点で共通しているところの感覚的事物は、今度は、幾何学的形体の粒子の形を与えられることによって処理される。

ところが、この粒子はけっして固体のものとは言えない。

仮説的に、「知的な製作者ならば、粒子の形態として、しかじかの形態を与えたであろう」として推測する形で(53E)選び出されたものは、完全に幾何学的な正多面体であって、しかも、たとえば、正四面体と正八面体とが、同じ正三角形を側面として、したがって、同一の面から構成されうる、として、相互変換をする粒子の形として選ばれたのである(三角形を、延長的立体の最小の構成要素としたことについては53C注4を参照)。——じっさい、ここでは「火」の粒子とされる正四面体が、二箇あわさって、「空気」の粒子とされる正八面体になると言われているが、固形の正四面体が二個くっついても、けっして正八面体にはならない(プラトンがここで誤っているのだろうとか、正四面体の固形の粒子二箇が溶けて、今度は一箇の正八面体の形をとるのだとか、解釈者はいろいろ推測しているが、もともと、固形の実体的な粒子をプラトンが考えたなどは、全体の文脈にも反する。われわれとしては、ここで、三次元の延長体として捉えられた物体的次元の事物の、火→空気などの相互変換に対して、これを幾何学的・数学的な図形の相互変換に対応させる、一つの可能性を、プラトンが示したに過ぎないと考えておきたい)。

こうして、正四面体、正八面体、正二十面体、正六面体、というようにして、四物体の粒子の形態が想定されたが、これはこのように想定すると、たとえば、火の示す鋭くて激しい作用力に対して、最も鋭角的な正四面体の形態がちょうどふさわしいのだろうという意味で、「ありそうな言論」が成立するのである(55E sqq. を参照)。

(4) 宇宙は無限箇か有限箇か、一か五か(55C～D)——。

火などに正多面体の粒子の形が想定された後、突如としてこの問題が、間に割り込んでいる。これが何を意味するかについて、いろいろ解釈はあるが、これについては補注Jを参照(なお二八一ページを参照)。

(5) 四物体に対する、四種の幾何学的正多面体の配分(55D～56C)——。

先の四種の正多面体は、火―正四面体、空気―正八面体、水―正二十面体、土―正六面体というように配分され

るが、このようにして配分するのが、最も「ありそうだ」として、仮説的に述べられている点と、56C後半の語に注意したいと思う。

(6) 四種の粒子の相互作用と相互変換(56D～57C)――。

各種粒子について、異種族同士の戦争のイメージを思わせる叙述で、それらの相互作用と解体・結合の状況が述べられているが、これら粒子は原則的に「三角形」に従って解体され、また「三角形」に従って構成される。

(7) 「動」と「静」について(57D～58C)――。

(2)を参照。なお補注Mの原子論者の項を参照。

(8) 火、空気、水、土に属する下位の種(58C～61C)――。

ここでは具体的な事物の、たとえば融解の現象だとか、緑青が銅にあらわれる有様だとかが、先の相互変換の図式で巧妙に説明されているが、どこまでもこれは「ありそうな話」だとして、プラトンが、発想を楽しんでいるように見える点については59Cを参照。

(9) 感覚的性質(61C～68D)――。

ここでは「熱い」「冷たい」などが、すべて先に想定された粒子の作用として説明されているが、いまは次の二点に注意しておきたい。

まず、「重い」「軽い」が、似たものが似たものに向かうという原理で説明されており、土塊が重いというのは、大地という同種のものに向かうその傾向に対して、われわれが抗う形で持ち上げようとする時に、重いと感じられるのだとし、上―下という二つの領域が最初から宇宙に存在するのだとする説を鋭く批判していること(62C～63A)。

第二に、快―苦は相関的な感覚で、苦は、身体が自然な状態から一気に疎外させられる場合、快は、そうした疎

外された状態から一気に回復される場合だとしていること(快―苦を相対的なものとしている点については、『ピレボス』(31B sqq.)を参照)。

以上によって、最初には無限定的な感覚的現象と、それを支える「場」とに分析された後、仮説的に、その感覚を惹き起こす粒子が想定され、「火」「空気」「水」「土」が、一応、製作者の秩序づけによって、相互変換しうる幾何学的形態を与えられた後、次には、どのようにして合目的的な身体が構成されたかの話がなされる。

（4） 「理性」と「必然」の共同作品(69 A sqq.)

(1) 「心臓」「肺」「胃」「肝臓」「脾臓」「腸」(69B～73A)――。

ここでは、こうした器官は、「死すべき種類の魂」(前出二六四―二六五ページ参照)のために構成されたものである。たとえば「心臓」は、守備隊本部のようなものであって、「欲望」が反乱を起こしたり、外敵が侵入したりする場合、守備隊本部に配置されている「怒り」の種族が司令部たる「理性」の命令を受けて、国家とも言うべき身体全体に、通信網たる血管を通じて「警戒警報」を発令するのである。また「肝臓」については、言論を解さない「欲望」の種族を、理性が威嚇によって制御したり、なだめすかしたりする時に、言葉のわからないこの連中には、「映像」でその命を伝える以外にないので、「肝臓」をまるで映写幕のように使って、そこへ威嚇の渋い映像を描いたり、にこやかな様子を映し出したりするという、そうしたことのために肝臓が備えつけられている。――そして、こうした「欲望」の種族にさえ、人体製作者の配慮が見られるのだと、プラトンが強調している点に注意したい。

(2) 「骨」「髄」など(73A～76E)――。

これらはすべて、火・空気・水・土から成るが、たとえば「肉」の構成は、まるでパンを作る時のように描かれている。しかし注意したいことは、たとえば74Eにも見られるように、こうした素材の必然性に制約されながら、

最大限に、「善」を目指して構成する、製作者の意図が語られていることである。

(3) 食物としての植物(77A～C)――。

植物は、人間の食物として神々の配慮によって生み出された。

(4) 身体の灌漑(77C～79E)――。

身体に養分を灌漑する仕組については、今日のわれわれには不可解と思える図式で描かれている。もちろん、食物を消化するという原理で考えられているのは、今日でも異ならないが、それは呼吸作用と関連して考えられており、その呼吸作用はまた、われわれの身体の周囲に縛りつけられた空気袋が、身体の表面を浸透して、外へ出たり内へしみ込んだりし、それに応じて、空気袋の内側の火の部分が動揺し、火の粒子が体内の食物を切るという図式である。しかし、この呼吸作用は全くの自動的なメカニズムに従っており、これとの関係で次には「まわり押しの理論」が述べられる。

(5) 「まわり押し」の理論(80A～C)――。

これが明らかに、デモクリトスの説に基づくような「空虚の充塡」の説とも言えるべきことについては79E注2を参照。なお「吸引力」なるものを認めず、物体界に関する限り、プラトンが徹底的なメカニズムの説を用いている点に注意したい。なお、補注K参照。

(6) 生長と老衰(80D～81E)――。

ここでは、養分がどうして身体に配分され、空(から)になった部分がみたされるかが、宇宙全体の中での火や水などの動きとパラレルに論じられている。

(7) 身体の「病気」について(81E～86A)――。

この病気の説は、体液説と四元素説が奇妙に折衷されているもののように見えるが、これについては補注Lを参

照。

(8)　身体と精神の世話（87C～89D）——。

この箇所と、次の(9)とが、ある意味では本篇の宇宙論の結論とも言える。すなわち、これまでの宇宙論によって裏づけられたような構造を持つ生きた身体的な人間が、本来どうあるべきものであり、そのためにはどのような世話をわれわれ自らがしなければならないか、ということが語られているからである。次の二点が要点であろう。

まず第一に、身体と魂の均衡が重要だということであって、魂の訓練と、身体の訓練の双方を重視している点が注目される。

第二に身体の世話であるが、これには「動き」を与えてやらなければならないとされている。その理由としてこの箇所で挙げられている、宇宙全体の動きや、思考の動きのような自発運動こそ、最もすぐれたものであり、身体を横にしたまま単に受動的に他の作用に身体を委ねるのが最も劣った生活法だというプラトンの言葉（89A）と、宇宙の動きが絶えず維持されているのは何故かについての58A～Cの言葉を比較されたい。

なお、病気にも病気の命数というものがあるので、医薬によって攪乱すると、かえって病気が悪化するという89B～Cの言葉も注目される。

(9)　「魂」の世話（89D～90D）——。

身体と魂の共同体たる一個の生きものを、どのように教導すべきかが(8)で語られたが、そのように教導する主体そのものが「魂」であって、それがまず確認される。しかも、「魂」のうちでも頭に宿っている「理性」の部分こそ、至上権を握っているものであるが（90A）、これを世話すること、つまり養分と動きを与えることを怠ると、その部分が衰え、胸部や腹部に居住する「死すべき魂」のほうが増大し、次第に天上にでなく地上に惹かれるようになり、生まれ代る時には、四足獣になったり、ついには、水中に棲息する生きものになるのだという。

(10) 人間の生まれ変りについて(90E～92C)――。

形式としては、ここで人間以外の(女も含めて)生きものの誕生が語られ、これで天体から水棲動物にいたるまでのあらゆる生きもので宇宙が満たされたことになるとして、この宇宙論は終るわけであるが、しかしこの箇所は内的にはむしろ、神によって与えられた「理性」の世話を怠ると、どういう劣悪な存在になるかを、神話的・比喩的に語ったものと言えるであろう。

主な使用文献

J. Burnet, *Platonis Opera*, Vol. IV, 1902.

G. Stallbaum, *Platonis Opera Omnia*, Vol. VII, 1838.

Th. H. Martin, *Études sur le Timée de Platon*, Paris, 1841.

R. D. Archer-Hind, *The Timaeus of Plato*, (Macmillan), 1881.

O. Apelt, *Platon, Sämtliche Dialoge*, VI, (Felix Meiner), 1919.

R. G. Bury, *Plato*, VII, (Heinemann), 1929.

A. Rivaud, *Platon, Œuvres Complètes*, Tome X, Paris, 1949.

F. M. Cornford, *Plato's Cosmology*, (Routledge & Kegan Paul), 1952.

J. Warrington, *Plato, Timaeus*, London, 1965.

H. D. Lee, *Plato, Timaeus and Critias*, (Penguin-Books), 1965.

Plutarchus, *Moralia*, recognovit Gregorius N. Bernardakis, Vol VI, Lipsiae, 1895.

Galenus, *De Placitis Hippocratis et Platonis*, recensuit et explanavit I. Müller, Lipsiae, 1874.

Calcidius, *Timaeus* (*A Calcidio translatus commentarique instructus*, edidit J. H. Waszink.—*Plato Latinus*, IV edidit R. Klibansky, London, 1962).

Proclus, *In Platonis Timaeum Commentaria*, edidit E. Diehl, Lipsiae, 1903.

A. E. Taylor, *A Commentary on Plato's Timaeus*, Oxford, 1927.

J. Cook Wilson, *On the Interpretation of Plato's Timaeus*, London, 1889.

G. S. Kirk & J. E. Raven, *The Presocratic Philosophers*, Cambridge, 1957.

『クリティアス』解説

田之頭　安彦

一　総　論

プラトンの作品のなかでは、この『クリティアス』ほど一般読者の関心をあつめているものはないであろう。この作品は「アトランティスの物語」という副題がつけられていることからもわかるように、〈アトランティス大陸〉、すなわち、かつては〈ヘラクレスの柱〉〔ジブラルタル海峡〕の彼方(かなた)にその壮大な姿を浮かべていたが大地震のために海底に没してしまったと言われている大陸、その名にあやかって周辺の海が'the Atlantic Ocean'と呼ばれるようになった幻の大陸の物語をおもな内容としているからである。

しかしながら、たとえ読者の関心がどうあろうと、プラトンの真の目的は、アトランティス大陸の気候風土とかその王国の政治その他の仕組をこまかに紹介し、そこに一般読者の興味をひくことにあったのではない。この対話篇はアリストパネスやトラシュロスのプラトン作品分類にもみられるように、(1)古くから内容や形式の面で『国家』や『ティマイオス』と密接な関連をもったものとみなされ、また『ティマイオス』『クリティアス』両篇の冒頭の対話からもわかるように、(2)プラトン自身も『ティマイオス』に形式のうえでは『国家』の続篇のような色合いをもたせつつ、(3)ある明確な目的意識のもとに、『ティマイオス』を第一として、これに『クリティアス』と『ヘルモク

ラテス』の両篇がつづく三部作を計画していたのである。

しかし残念なことには、完成したのは『ティマイオス』のみで、『ヘルモクラテス』などはまったく手がつけられた形跡もないし、[4]『クリティアス』も中断したままの、いわば未完の作品として、われわれの手元に残されているにすぎないのである。つまり本対話篇は、古き善きアテナイと対照させながらアトランティスの繁栄と頽廃を説き、やがて本題にはいっていこうとするところで中断されているのであって、結果的にみれば、副題が示すように、「アトランティスの物語」を語るのに終始しているような感じを受けるけれども、これは決してプラトンの意図するところではなかったのである。換言すれば、この対話篇は、主人公のクリティアスが同名の祖父クリティアスから聞いたアトランティスの物語――これを祖父のクリティアスはソロンから聞き、ソロンはエジプトの神官から聞いたことになっている――をソクラテスその他の友人に話すという形で始まっているけれども、[5]この物語はジョウェットその他のプラトン研究家が指摘しているように、[6]プラトンのすぐれた創造力(もしくは想像力)の産物なのであって、エジプトの神官やソロンを登場させたのも、この物語に一種の「真実らしさ」をもたせ、読者の関心をそのまま彼の意図するところにもっていこうとする手段であると考えることもできるのである。

では、『クリティアス』の真の目的はどこにあったのだろうか。もしこの対話篇が完成していたとすれば、話はどのように発展していったのだろうか。なぜ、プラトンはこの作品を中断してしまったのだろうか。以下、これらの点に注目しながら、本対話篇の内容を吟味していくことにしたい。なお、本対話篇は『ティマイオス』の続篇で、**対話設定年代**も場所も**登場人物**もまったく『ティマイオス』と同じであり、また文体や用語法の面からみて、[7]**執筆年代**も『ティマイオス』につづくものとみなすことができる。したがって、重複を避けるためにも、これらの問題すなわち登場人物の紹介や対話設定年代とか執筆年代の検討などは『ティマイオス』解説の方にゆだね、ここでは触れないことにしたい。

(1) cf. Diog. L., III. 60-62.
(2) 『ティマイオス』17A〜19Aのソクラテスとティマイオスとの対話、および『クリティアス』106A〜108Dのティマイオス、クリティアス、ソクラテス、ヘルモクラテスの対話を参照されたい。
(3) 『ティマイオス』の会合は、『国家』の会合——と推定されるが断定はできない——がもたれた二日後に開かれたことになっており、まずソクラテスが『国家』(第二巻—第五巻)の対話の内容を要約したあとで(17C〜19A)、話はクリティアスにゆだねられている。
(4) cf. P. Friedländer, *Platon*, 3, translated from German by H. Meyerhoff. Princeton Univ. Press, 1969, p. 383.
(5) cf. *Timaeus*, 20D sqq., *Critias*, 108D〜E, 113A〜B.
(6) cf. B. Jowett, M. A., *The Dialogues of Plato*, Vol. III, Oxford, 1953, p. 781. J. A. Stewart, *The Myth of Plato*, Hertford, 1970(repr.), p. 417. P. Friedländer, *op. cit.*, p. 384.
(7) cf. C. Ritter, *Untersuchungen über Plato*, Stuttgart, 1888, pp. 58-59. A. Rivaud, *Critias* (*Platon Œuvres complètes*, Tom. X), 1956, p. 231.

二 本対話篇の内容について

本対話篇は、三つの部分からなっている。すなわち、序論(106A〜108D. 訳書の章わけでは一—二章)、第一部(108E〜113B. 三—六章)、第二部(113C sqq. 七章以下)がそれである。以下、各部門別に概観し、簡単な検討を加えることにしたい。

序論(一—二章)　作者プラトンは、この一—二章で、本篇の対話が『ティマイオス』の対話の後を受けて同じ日に同じ場所でおこなわれたものであること、および、クリティアスの後には三番目の語り手としてヘルモクラテスが控えていることを明らかにしている。ティマイオス、クリティアス、ソクラテス、ヘルモクラテスの四名の間で対話がかわされるのはこの一—二章だけであるが、われわれはかれらの対話を通して、(1)本篇がいわば『ティ

マイオス』の続篇であり、その目的はすでに『ティマイオス』の中に示されていること、つまりティマイオスの「宇宙の創造と人間の本性に関する物語」の後を受けて、建国当初のアテナイの理想的な市民が戦時・平時を問わず、どのような点ですぐれていたかを明らかにすることが本篇の目的であること、および、(2)この四名の会合でおこなわれている対話は次に予定されている『ヘルモクラテス』篇においてもつづくこと、つまり作者プラトンは『ティマイオス』『クリティアス』『ヘルモクラテス』の三篇をたがいに密接な関連をもった三部作として考えていたということを知ることができる。

第一部(三―六章)　クリティアスは祖父から聞いた話として、建国当初のアテナイの理想的な姿を市民生活・国土・国制・諸施設などの多方面にわたって説明する。このうちの国制に関する説明は、すでに『国家』の第二巻から第五巻にかけて詳細に説明されたものと大綱において一致するものである。しかし『国家』で討論された望ましい国制があくまでも言論を通して設定された架空の理想像であるのにたいし、本対話篇のそれは古き善きアテナイに現実に存在していた制度として語られているという違いはあるが、本篇では男女共通の仕事に関する問題に触れながら、婦人・子供の共有の問題にはまったく触れていないし、愛知者(哲学者)の支配としての哲人王の理想にもまったく触れていない。これは興味ある問題点として、今後に検討の余地を残しているであろう[1]。

なお、

「われわれの国土は、全体が大陸から長く突き出て、岬のように海に横たわっており、これを三方から器のように囲む海は、たまたまどこもたいへん深い。そこで九千年のあいだに……いくたびも大洪水に襲われたが、そのあいだに起こったたびかさなる災害によって高地から流れ出た土砂は、他の地域でのように語るにたるような沈泥とはならず、いつも渦を巻いて流れていき、海底の奥深く消えさったのであった。こうして今をむかしに比べると、……肥沃で柔らかな土壌はことごとく流失し、痩せおとろえた土地だけが残された」(111A〜

B)

とか、

「当時の国土は、毎年、ゼウスからの実りの雨を享受し、現在のように地肌をむきだしている大地から海へたちまち雨水を流しさってしまうようなことはなかった。この国土は豊かな土壌におおわれていて、その中に雨水を受けいれ、水持ちのよい粘土質の地層に貯わえてから、高地で浸透した雨水を窪地へと流し、いたるところに泉や川の豊かな流れを提供していた」(111D)

という、現代のわれわれでも納得できるような説明の仕方は、地質学的な分野でも深い知識をもっていたプラトンの一面を知るうえで興味深いものがある。(2)

第二部(七章以下)　七章から、クリティアスの話は、九千年前にアテナイおよび全ギリシアと戦ったと言われるアトランティスの国制、自然風土、産物、都市、神社その他の施設の詳細な説明へと移っていく。一般読者の関心はこのアトランティスの状況を知ることにあると思われるので、以下、P・フリートレンダーの図解を借用して、アトランティスの状況を説明していくことにしたい。

(1)　「アトランティス島の所在地」(『ティマイオス』24E～25B.『クリティアス』108E～109A. なお、図1を参照されたい)。われわれの住んでいるヨーロッパとアジアは〈ほんとうの大洋〉と呼ばれる海に囲まれ、この海は〈ほんとうの大陸〉と呼ばれる広大な陸地によって囲まれている。つまりこの広大な陸地が地球の全域にひろがっているのであって、〈ほんとうの大洋〉と呼ばれる海もいわば内海、いや、ため池のようなものにすぎないのである。そして、この大洋にはいくつかの大きな島や小さな島があり、われわれの住むヨーロッパとアジアも、またアトランティスも、その中の一つの島にすぎないとみなされていた。

アトランティス島は大地震のために海に没し、泥土と化して浅瀬を形成し、地中海からジブラルタル海峡をこえ

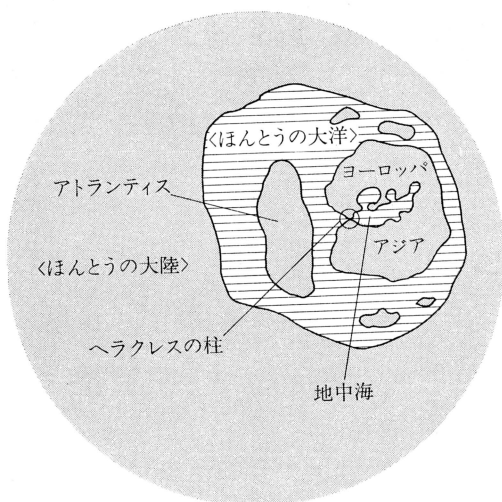
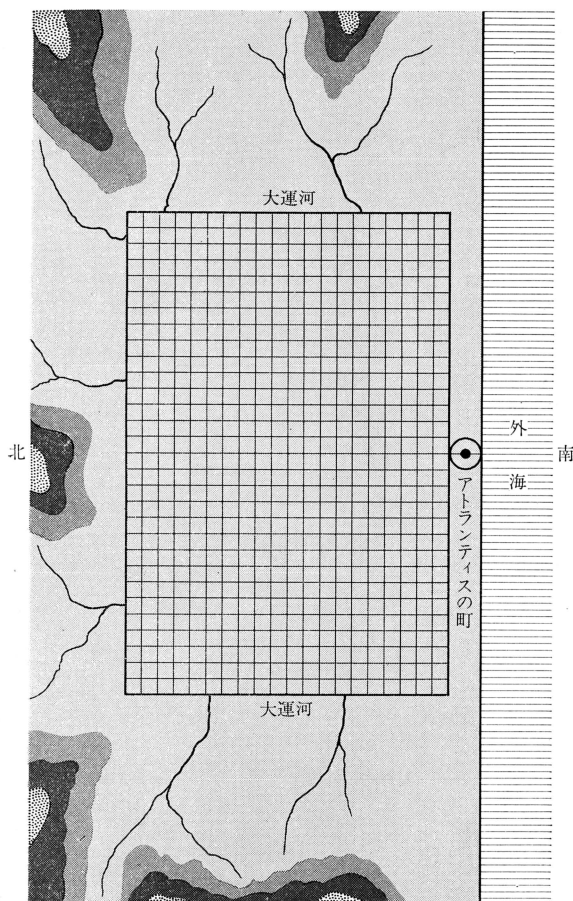



図1　アトランティス島の所在地

て〈ほんとうの大洋〉へと船出する人びとの航路を妨げているけれども、かつては人びとがこの島からヨーロッパとアジアへ、また〈ほんとうの大陸〉へと往来し、交易がおこなわれていた。しかも強大な権力をもった王たちがこの島を支配し、ヨーロッパやアジアの一部にまで、その支配権をおよぼしていたのである。

なお、〈ほんとうの大洋〉とは小さな地中海との対照で用いられた表現であり、〈ほんとうの大陸〉とはヨーロッパ・アジアとの対照で用いられた表現である。[3]

(2)　「アトランティスの平野」(117E～118E. 図2を参照されたい)。この平野は全体としてみると、東西の一辺が三〇〇〇スタディオン(約五三二・八キロメートル)、南北の一辺が二〇〇〇スタディオン(約三五五・二キロメートル)の長方形をなしていて、まわりを大運河によって囲まれていた。したがって、この大運河の全長は一万スタディオン(約一七七六キロメートル)にもおよび、山間(やまあい)から落ちる谷川の流れは、この大運河に達して平野をめぐり、東西から町(ポリス)に流れついて、そこで向きを変えて海へ注いだ。

そして、平野の北側を東西に走る大運河から、およそ一〇〇プース(約二九・六メートル)の幅をもつ二九本の用水路が、それぞれ一〇〇スタディオン(約一七・七六キロメートル)の間隔を保つように平野を縦断して掘られており、さらにこれらの用水路と用水路の連絡を可能にするために、横断用水路も掘られていた。この横断用水路の数

については何も述べられていないが、おそらく幅は縦断用水路と同じ一〇〇プースで、全部で一九本掘られていたのではないかと思われる。アトランティスの人びとは、これらの大運河や用水路を利用して木材を山から町へおろしたり、季節のものを船で運んだりしたのである。

なお、もし横断用水路の数が一九本だったとすると、平野全体は縦と横の用水路によって六〇〇の正方形に分けられていたことになる。そして119Aによれば平野全体が六万の地区に分けられていたのだから、この正方形をな

図2　アトランティスの平野

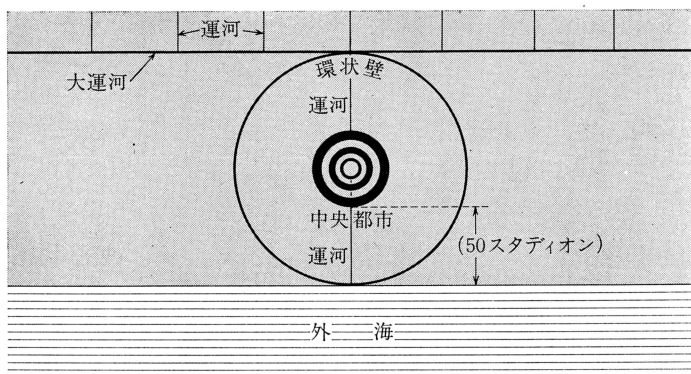
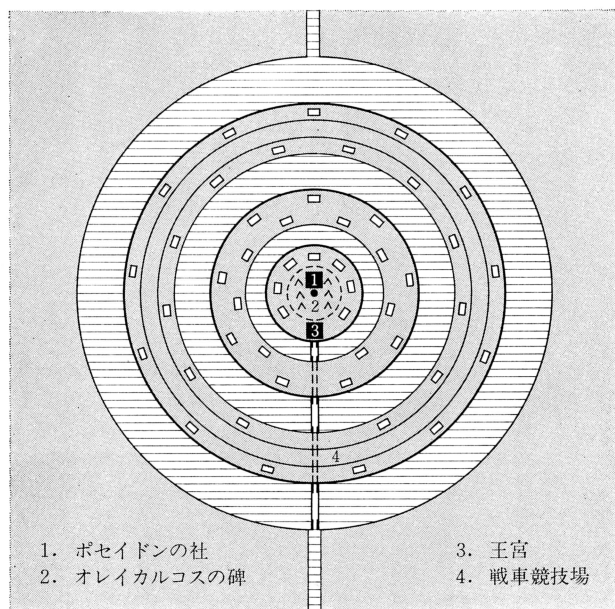



図3　アトランティスの町(ポリス)

しているそれぞれの区域が、さらに一〇〇の地域に分割されていたことになる。(4)

(3)「アトランティスの町(ポリス)」(113C～117E. 図3を参照されたい)。後に中央島となった小高い丘は海から島の中央に寄っておよそ五〇スタディオンの距離をへだてた平野の中にあった(113C)と述べられているが、いちばん外側の海水環状帯と外海を結ぶ水路――これは幅が三プレトロン(約八八・八メートル)、深さが一〇〇プースあった――の長さは五〇スタディオン(八・八八キロメートル)あり(115D)、最大の海水環状帯とそれに接する陸地環状帯の幅はそれぞれ三スタディオン、二番めの海水環状帯とそれに接する陸地環状帯の幅はそれぞれ二スタディオン、中央島をじかに囲んでいる海水環状帯の幅は一スタディオン(約一七七・六メートル)だったのだから(115E～116A)、フリートレンダーの指摘のとおり、外海から中央島にいたる距離は正確には五〇スタディオンではなくて、六一スタディオンだったことになる。また、中央島は直径が五スタディオンであるから(116A)、全体が直径一二七スタディオン(約二二・五キロメートル)の円形をしていたことになる。

そして、外海を起点とする環状壁が、いちばん大きな海水環状帯から五〇スタディオンの間隔を保つようにして町を囲み、町を縦断する

水路が外海に達するところで、両端が一緒になるようになっていた。つまり環状壁は外海に接していたことになるのであって、その接点のところに通路があけられ、用水路の水はそこを通って外海に注ぐようになっていたと思われる。

なお、この環状壁の内側には家々がぎっしりと建ち並び、外海へ向かう水路は世界の各地からやってきた船舶や商人で満ち溢れ、たいへんな賑(にぎ)わいを見せていた。(5)

1. ポセイドンの社
2. オレイカルコスの碑
3. 王宮
4. 戦車競技場

図4　中央都市(メトロポリス)

(4) 「中央都市(メトロポリス)」(115C〜117D. 図4を参照されたい)。すでに述べたとおり、ポセイドンとクレイトオの住まいのあった中央島は三本の海水環状帯と二本の陸地環状帯によって囲まれており、いちばん外側の海水環状帯とそれに接する陸地環状帯の幅は三スタディオン(約五三二・八メートル)、二番めの海水環状帯とそれに接する陸地環状帯の幅は二スタディオン、中央島をじかに囲む海水環状帯の幅は一スタディオンで、外海から幅三プレトロン、深さ一〇〇プース、長さ五〇スタディオンの水路が掘られ、いちばん外側の海水環状帯と外海との連絡を可能にしていた。なお、それぞれの

海水環状帯には王宮への出入りを可能にするために橋がかけられていたが、これは三本で一組となっている。何組の橋がかけられていたのか、テクストからはわからないが、フリートレンダーは、数組の橋がかけられていて、全体が完全な円環状ではなく、星形をしていたのではないかと推測している。

また、これらの橋の下には橋にそって陸地環状帯を貫通するトンネルが掘られ、その中を一隻の三段橈船が航行できるようになっていた。そして、それぞれの橋の出口と入口には門が設けられ、入口の両側には櫓が建てられていた。また、橋と中央島と陸地環状帯のまわりには壁がめぐらされていた。この壁は町全体を囲む外側のものを別にすると四つあり、そのうちの二つは陸地環状帯を囲み、一つはアクロポリスを、四番めのものはいちばん内側にあって聖域を囲んでいた。そして、外側から順次に、銅、錫、オレイカルコス、金でおおわれていた。

いちばん内側にある黄金の壁(もしくは柵)で囲まれた境内の中には、縦一スタディオン(約一七七・六メートル)横三プレトロン(約八八・八メートル)のポセイドンの社があり、その前には壮大な祭壇があった。また、この神域には国家の神聖な掟(法)が刻まれたオレイカルコスの碑が安置されていた。なお、王宮は黄金の柵をめぐらした聖域とオレイカルコスの環状壁との間に建てられていたと思われる。

なお、この中央島には温泉と冷泉があり、そのまわりには樹木が植えられ、王〔室〕用、一般用、婦人用、役畜用等のさまざまな設備を施した浴場とか建物がたてられていた。そして、これらの泉から流れ出た水はポセイドンの聖林におくられ、橋沿いに設けられた水道をとおして外側の陸地環状帯におくられた。この陸地環状帯を通る水道の近くには神社や体育修練場などが設けられていたが、大きな陸地環状帯の方はさらに三つの輪にわけられ、真ん中の幅一スタディオンの輪は戦車競技場となっていた。そして、その外側の二つの輪には親衛隊員の宿舎があり、大部分の隊員はそこに住んでいたが、比較的信用のある隊員の宿舎は内側の小さな陸地環状帯にあり、とくに信頼のあつい隊員はアクロポリスで宮殿の近くに住むことを許されていた(6)。

(1) B. Jowett, M. A., *op. cit.*, p. 787. G. Vlastos, *Platonic Studies*, Princeton Univ. Press, 1973, p. 213, n. 20.
(2) J. A. Stewart, *op. cit.*, pp. 416–417. A. E. Taylor, *Plato*, 7th ed., London, 1963 (repr.), p. 461.
(3) P. Friedländer, *op. cit.*, 1. p. 274.
(4) P. Friedländer, *op. cit.*, 1. pp. 314–315.
(5) P. Friedländer, *op. cit.*, 1. p. 316.
(6) P. Friedländer, *op. cit.*, 1. pp. 315–317.

三　本対話篇の意図と未完の理由

さて、クリティアスの話は、アトランティスの王たちによってなしとげられた〈素晴らしい技術上の成果〉の説明から〈政治・法律の問題〉へと発展し、王たちの〈権力と富ゆえの堕落〉へと移行したところで、突然中断されている。いったい、これはどうしたことなのだろうか。プラトンの死が本篇の完成を妨げることになったのだろうか[1]。しかし、ディオゲネス・ラエルティオスやプロクロスらの証言を手がかりとして[2]、今日では『法律』をプラトンの絶筆とする見解が一般的となっているとみてよいだろうし、これに反論する有力な証拠もあらわれていないように思われる。もしそうだとすれば、プラトンの死をもってこの対話篇の中断の理由とすることは誤りだということになるだろう。では、本対話篇は昔は完成された作品だったのだが、何らかの事故でその大部分が失われ、現在のような形でわれわれの手元に残されているのだろうか。しかし、もしそうだとすると、その失われた部分の内容について、古人が何らかの形で言及しているはずである。だが、そのような断片は何ひとつとして残されていない[3]。したがって、本対話篇は昔から未完の作品であったと考えた方がよいだろう。とすると、プラトンは何らかの理由で本対話篇の完成を断念せざるをえなかったという見解が残されることになる。では、その理由は何だろうか。しかし、その理由を詮索する前に、しばらく別の観点から本対話篇を眺めていくことにしよう。

本対話篇を読んでまず気づくことは、クリティアスの語った古き善きアテナイの賛美が、実質的にも形式的にもソクラテスが『メネクセノス』の追悼演説の中で戦没者に捧げたエンコーミオン(称賛の辞)とたいへんよく似ているということである。すなわち——

「国土と住民の称賛」について。

『メネクセノス』237B〜238Bでは、戦没者を含むアテナイ人一般のよさを彼らの祖先が移住民ではなく土着の民(アウトクトーン)であったということに求め、この地が神々の愛でたもうところであり肥沃であるということに国土のよさを求めている。さらに土地が肥沃であるということについてはその証拠があげられるが、われわれはこれと同じ論法を本対話篇109B〜111Dに見ることができる。(4)

「国制の称賛」について。

『メネクセノス』238C〜239Aでは、「国制は人間の養育者であり、立派な国制は善き人々をはぐくむが、劣った国制は悪しき人々をはぐくむ」(5)という考えのもとに、アテナイの国制のよさが強調される。本対話篇111E〜112Dでは、プラトン自身の理想的な国制が想定されているために、『メネクセノス』の国制の賛美とはやや趣を異にするが、守護者(軍人)階層の者たちの質実剛健さや、かれらにゆだねられた権限は他の階層の者たちやほかのギリシア人の自由意志にもとづいていることが強調されている。これは、徳を重視し自由と平等を大切にして独裁制に反対する『メネクセノス』の国制のあり方にたいする考えと基本的には共通するものであり、とくに「立派な国制が善き人々をはぐくむ」という考えは両対話篇にまったく共通するものである。

「武勲の称賛」について。

『メネクセノス』では239A〜246Aというかなりの行数をこれにあてて、マラトン、サラミス、プラタイアその他の戦いにおけるアテナイ軍とその戦没者たちの武勇をたたえている。『クリティアス』の話はアトランティス

帝国との戦いが始まる前で中断されているのであるから、むろん、そこに〈武勲の称賛の部〉がはいる余地はない。しかし、『メネクセノス』におけるもっとも重要な敵国がペルシア帝国であるのにたいし、『クリティアス』における唯一の敵国はアトランティス帝国であり、しかも、「ペルシア人がアジアを征覇し、ヨーロッパを隷属せしめんとしたとき、彼らを阻んだのはほかならぬこの国土の子どもたち、すなわちわれわれの祖先たちであった。その人びとに思いをいたし、彼らの武勇をたたえることは、まことに正当なことであり、また第一になさねばならぬことなのである」(239D)(6)という考えのもとに『メネクセノス』のいわゆる〈武勲の称賛〉が始まっているのであるから、〈ヨーロッパとアジアを征覇し、そこの人びとを隷属せしめようとして押し寄せてきたアトランティス軍と戦い、その勇敢さと戦いのうまさでこれを撃退し、ギリシア人の自由をまもった〉のが『クリティアス』のアテナイ軍であれば、当然、その未完の部分には〈アトランティス軍とギリシア軍の戦いのありさま〉と、〈ギリシア軍の指揮をとってどんな苦しい戦いでも立派に戦いぬいて、ギリシア軍を勝利に導いたアテナイ軍の武勇〉にたいする〈称賛の部〉がつづかなければならないことになる。(7)

以上、『メネクセノス』と本対話篇との類似を指摘してきたが、この点に注目するならば、もし本対話篇が完成していたら話はどのような方向に発展していったかということも、おのずから明らかとなるであろう。『メネクセノス』はプラトンの作品としては一風変わった小篇であるが、その大部分を占める追悼演説は、〈国土と住民の称賛〉から〈国制の称賛〉へ、そして〈国制の称賛〉から〈武勲の称賛〉へと発展する《称賛の部》と、戦没者の遺族に向けられた《慰めと励ましの部》からなっている。(8)この形式はプラトンが考えだしたものというより、むしろ、アテナイの伝統的な形式にもとづいているのである。そして、われわれは本対話篇においても、プラトンが意識的にこれと同じ形式で話を発展させているのを見てきた。また本対話篇では、話が〈国土と住民の称賛〉から〈国制の称賛〉へと移行

し、〈武勲の称賛〉にはいろうとするところで中断されていることも知った。とすれば、クリティアスの演説の方向も、おのずと明らかになってくる。すなわち、本対話篇の未完の部分では、すでに述べたように、アトランティスの大軍を相手にして戦った古き善き時代のアテナイの人びとのすぐれた姿が、戦いの模様をからませながらくわしく説明されたであろうし、話はさらに発展して、彼らの子孫である現在の——プラトンの時代の——アテナイ人にたいする励ましのことばが徳の重要性との関連で述べられ、大洪水による破局の物語に移って終りとなったか、あるいは、その後でふたたびクリティアス、ヘルモクラテス、ソクラテス、ティマイオスの簡単な対話がおこなわれ、そこで終りとなったかであろう。そして、いわゆる〈武勲の称賛の部〉が本対話篇の主要な部分を占め、そこにかなりの行数があてられることになったであろう。もしそうであれば、本対話篇の意図もしくは目的も明らかである。すなわち、プラトンは『ティマイオス』で〈宇宙〉の本性をその創造の物語に関連させて明らかにしたのち、本対話篇では自分たちの祖先である古き善きアテナイの人びとを取りあげ、これとの関連で理想的なポリス的人間の倫理性について説こうとしたのである。

　しかし、これは至難の業であると言わなければならない。なぜなら、右に述べたような意図を実現しようとすれば、題材の選定が問題となってくるからである。本対話篇の中心となるべきものは、すでに述べたとおり、ギリシア軍とアトランティス軍との血なまぐさい戦いであった。しかしこれを通してすぐれた昔のアテナイ人の姿を浮き彫りにしようとしても、そこにあらわれるのは、せいぜい、いわゆる〈市民的な徳〉を備えたよき市民の姿であって、それを越えたポリス的人間の理想像ではないだろう。つまり本対話篇は、たとえ完成したとしても、次元の低いたんなる追悼演説もしくは称賛演説の類にすぎないようなものとなってしまう危険が多分にあるのである。しかし創造力の豊かなプラトンのことであるから、われわれの想像できないような方法で、この対話篇を自分の意図する方向に導くことができたかもしれない。だが、それには、なお多くの労力と時間を必要としたであろう。本対話篇の

属する後期の作品群は、彼がもっとも波瀾に富んだ人生をおくった六〇歳から八〇歳の間に書かれたものであるが、その中でも、本対話篇は『法律』を除けば、もっとも後の方に属する作品なのである——ただし後期の作品群の中で『ピレボス』をどこに位置づけるかによって、本対話篇の位置づけも変わってくる。もし『ピレボス』を『ソフィスト』『政治家』の後、『ティマイオス』の前におけば、本対話篇の後に『法律』が書かれたことになる。今日では『ピレボス』を本対話篇と『法律』の間におく見解も有力であるが、筆者は『ティマイオス』の前におく見解をとる——おそらくプラトンは『ティマイオス』『クリティアス』『ヘルモクラテス』の三部作を想定したとき、宇宙の創造から先史・歴史時代をへて未来に及ぶ流れの中で現実に樹立されるべき「理想国家」の構図をえがいていたにちがいない。しかし『クリティアス』の題材の選定に難点があることを知って三部作の計画を断念し、自分のえがいた構図を『法律』によって実現しようとしたのではなかろうか。現実にこの地上に樹立されるべき理想国、望ましい法律が支配し法律が権威をもつ国、すなわち〈法律の国〉の理想、これは、われわれがいま問題としている三部作の理想でもあるのである。(9)

（1） トマス・テイラーは、プラトンは死のために本対話篇を完成することができなかったという立場をとっている。cf. *Plato, the Timaeus and the Critias*, the Thomas Taylor Translation, Pantheon Books, 1952 (repr.), p. 228.
（2） Diog. L., III. 37. Olympiodorus, *Prol. in Plat.*, 25.
（3） cf. A. Rivaud, *op. cit.*, p. 233.
（4） 『メネクセノス』(237D)では、アッティカの所有をめぐって神々の間に争いがあったと述べられている。これを重視する研究者もいるが(P. Friedländer, *op. cit.*, 3, p. 385)、この対話篇と『クリティアス』との間には二〇年以上もの年月が流れていることを考えれば、両対話篇にみられる「神々の土地配分」に関する矛盾した見解は、それほど重要ではないと思われる。
（5）（6） 『メネクセノス』からの抜萃文は、ともに本全集第一〇巻に収録された津村寛二氏の訳による。

(7) *Timaeus*, 24E sqq., *Critias*, 108E.

(8) なお、津村寛二氏訳の前掲書、「解説」の項を参照されたい。

(9) F. M. Cornford, *Plato's Cosmology*, London, 1956, pp. 6–7. R. G. Bury, *Plato, Critias*, (Loeb Classical Library), London, 1961 (repr.), p. 256. A. Rivaud, *op. cit.*, pp. 233–234.

使用文献

テクスト(底本のほかに)

F. Ast, *Platonis quae extant opera*, Tom. V, Leipzig, 1822.〔羅文対訳つき〕

A. Rivaud, *Platon, Œuvres complètes*, Tom. X, *Critias*, (L'edition Budé), Paris, 1956.〔仏文対訳つき〕

R. G. Bury, *Plato, Critias*, (Loeb Classical Library), London, 1961 (repr.).〔英文対訳つき〕

翻訳書

O. Apelt, *Platon, Sämtliche Dialoge*, Bd. VI, *Kritias*, Leipzig, 1922.

B. Jowett, M. A., *The Dialogues of Plato*, Vol. III, *Critias*, Oxford, 1953.

Th. Taylor, *Plato, the Timaeus and the Critias*, Washington, 1952 (repr.).

副島民雄訳『クリティアス』(プラトン全集6)(角川書店)。

参考書(各注釈の項に書名を示しているので、ここでは省略する。)

追記 この訳は、中央公論社版「世界の名著」(第七巻『プラトンII』)に収録された旧訳に手を加えたものである。しかし大幅な改訳はおこなわれていない。なお、日本語として読めるように、ある程度、意訳されているところがある。

ヤ 行

ラ 行

ワ 行

ナ 行

ハ 行

マ 行

タ行

サ 行

『クリティアス』索引

数字とABCDEは，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字とBCDE(Aは数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行

カ 行

ワ 行

マ 行

ヤ 行

ラ 行

ハ 行

タ 行

ナ 行

サ 行

カ 行

『ティマイオス』索引

数字とABCDEは，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字とBCDE(Aは数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行